

農 工 通 信



No. 82

Tokyo University of Agriculture and Technology



KATSUKI

小金井キャンパス新1号館

東京農工大学同窓会

<http://tuat-dousoukai.jp.org/>



目次

■ 同窓会長の挨拶	3	平成東日本大地震	
■ 理事長の挨拶	4	鹿熊 俊明 (登志) (獣医 S 34)	38
■ 学長に就任して	5	農工大学の思い出	
■ 理事・副学長就任の挨拶	6	西村 寿 (農工 S 50)	39
■ 同窓会第48回理事会・通常総会開催さる	7	遍 歴	
■ 「同窓会創立50周年記念事業」の募金活動終了に伴うお礼と報告	12	星野 徹也 (農化 S 47)	40
■ 同窓会創立50周年記念事業の寄附者一覧	12	忘れ得ぬ人生の記憶	
■ 「東日本大震災」の救援募金活動終了に伴うお礼と報告	17	河野 真人 (林 S 45)	42
■ 被災地 (南相馬市・原発25km地点) にいて思うこと 三森 裕 (生産 H13)	19	りんごと私の関係	
■ 救援金を受け取られた同窓生からのお礼の言葉	22	葛西 智 (生産 H13)	43
■ 叙勲受章にあたり	24	見知らぬ地に住むということ	
叙勲受章の榮に浴して		金山 武史 (農化 S 62)	43
本多 正二 (製糸 S 32)	24	第二の人生を歩む	
府中の学生生活が原点		柴里 道男 (農化 S 49)	44
真柴 孝司 (林 S 38)	25	母校での学びが生き続ける日々	
■ 同窓生からの寄稿	26	横林 和徳 (農 S 43)	45
同窓会の森 (分収林) で樹木学実習		学生時代よ！再び	
渡辺 直明 (林 S 51)	26	渡邊 直人 (林 S 50)	46
33年ぶりの母校		在職中のガン宣告と放射線による高度先進医療治療	
岩本 隼人 (農 S 54)	26	安田 勝年 (製糸 S 42)	47
北海道支部講演会の開催報告		人生って不思議なものですね！	
宇野沢正美 (農工 S 46)	27	杉山 満丸 (蚕糸 S 55)	48
同窓会東京支部から楽しいサロンへのお誘い		木の仏を彫る	
「けやきクラブ」創設22周年にあたって		神原 輝洋 (林 S 43)	49
山本 賢 (農工 S 43)	28	ドイツ	
獣医師と戦争 ―ビルマ戦線のインタビューに同席して		堂本 晶子 (生産 H18)	50
対馬美香子 (獣医 H 2)	28	「砂川闘争の記―ある農学徒の青春―」を出版して	
林科 S 41入・S 45卒同期会		武藤軍一郎 (農 S 34)	51
一島 正三 (林 S 45)	29	歌曲「東京農工大学 わが母校」について	
自治活動を担った者たちの還暦		池田 澄雄 (獣医 S 32)	51
桂川 雅信 (農工 S 47)	30	国枝栄氏とアバパネの活躍	
西出照雄同窓会前副会長を偲ぶ		田谷 一善 (獣医 S 46)	52
羽田 有輝 (製糸 S 43)	31	■ 退職にあたり	53
海の中にも森があったことへの驚き		淵野雄二郎 (農 S 43) (生物生産学科)	53
馬場 繁幸 (林学院 S 52)	32	松岡 正邦 (化工 S 43) (化学システム工学科)	53
土の基本原理解 ―2009年12月札幌SRU講演より―		■ 同窓会50年史座談会＝同窓会の将来を語る＝	54
川辺 泰幸 (エリック) (農 S 37)	33	■ 平成22年度同窓会学生援助事業報告	60
絹糸紡績業と鶴見良憲 (岡山県出身)		■ 同窓会役員等体制・支部長及び連絡員表	69
田中 浩明 (製糸 S 33)	35	■ 平成22年度卒業生・修了生	70
植物防疫とともに		■ 部会・支部・クラス会だより	77
林 宣夫 (植防 S 48)	37	■ 掲示板	82
朱鷺舞う佐渡に向けて		■ 事務局だより	89
高橋 紀男 (農工 S 60)	37	■ 編集後記	
農政雑感			
池田哲二郎 (農 S 43)	38		

同窓会長の挨拶

同窓会長 藤森 明彦 (工化S42)



東日本大震災で被災された方々には心からのお悔やみを申し上げるとともに、一日も早く穏やかな日々が訪れることを心からお祈り申し上げます。

とは申しますものの、あれから数多の月日が流れておりながら、現地の方々のご満足には程遠い復旧・復興の実態に、いらだちすら覚える毎日です。

5月の同窓会通常総会において、被災された同窓の方々に対し救援金を募ると言うことに対し、満場一致のご賛同を得、過日被災された方々にお届けさせていただきました。ご協力いただいた方々にはこの場をお借りして厚く御礼を申し上げますと同時に、趣旨の徹底などに不満足な点もあり、参加できなかった方も多数おられたことを、この場をお借りしてお詫びを申し上げる次第です。

さて、わが母校の基本理念は「20世紀の社会と科学技術が顕在化させた『持続発展可能な社会の実現』の課題を正面から受け止め、農学、工学およびその融合領域における自由な発想に基づく教育研究を通して、社会や自然環境と

調和した科学技術の発展に貢献するとともに、その課題を担う人材を育成することを基本理念とする。すなわち、東京農工大学は、この理念を『使命志向型教育研究—美しい地球持続のための全学的努力』として—(MORE SENSE)と称し、21世紀の人類が直面している課題の解決に真摯に取り組んでいく。」ことであります。

21世紀を迎えた今、この基本理念を改めて読み返してみると、今次の大災害を乗り越え、明るい日本を築いていく上で、東京農工大学に寄せる期待が益々大きくなっていくような気がします。同様に今後の同窓会にも期待と課題が寄せられていると思います。社会に貢献する人材育成はもとより、卒業後もずっと続く大学とのつながり。同窓生が誇りに思える母校であり続けるために何が必要か。大学と同窓会との連携強化、ともに手を取り合い、各々の今後の発展のために同窓会としてどのような貢献ができるか考えて参りたいと思います。(平成23年8月記)

理事長の挨拶

理事長 高橋 幸資（農化S45）

会員の皆様には、日頃より同窓会の活動にご理解とご協力をいただきまして、誠に有難うございます。

3月11日に東日本大震災と原子力発電所の甚大な事故があり、未だ復旧・復興がままならない状況に接し心を痛める日々です。同窓会では、直ちにホームページでお見舞いを申し上げ、関係支部長にはお見舞いをお送りして会員の音信情報をお願いしましたが、混乱が大きく具体的状況把握はできませんでした。そこで、Webを通じて現地情報を収集するとともに、被災地域に在住する1,277人の同窓会員に本会から往復ハガキにてお見舞いと被災状況の音信をお願いしました。その結果多くの被災が判明し、同窓会総会の承認を得て緊急募金をEメールや口伝で2ヶ月間行いました。皆様からいただいた298万円余の温かいご支援を基に、逝去、自宅・実家全半壊、自営被害の会員にお見舞い申し上げます。重ねて一日も早い復興をお祈りしています。

また、かねてから行っている同窓会創立50周年記念事業では、皆様のご理解で4,755万円余の拠金をいただきました。誠に有難うございました。大学創基140周年記念事業で建設する小金井産学交流会館内に同窓会記念ホールの設置、大学本部地区の50周年記念ホールの拡充に使用しました。明年同窓会創立50周年を迎えますので、記念式典・祝賀会を総会時（H24.5.26）に予定しています。同窓会50年史は、本年度内の刊行を目途として鋭意進めています。

さて、本誌81号の理事長就任のご挨拶の中で、本会の運営や会務執行の現状に多くの改善が必要で、将来に亘る大事な課題として取組みたいと記しました。常務理事会で鋭意検討し、会長のご理解をいただきながら次期総会にはその多くをお諮りしたいと思っています。本会総会は、代議員制をとって意思決定していますが、一般会員から遠いとの指摘を受けています。そこで、役員、代議員、支部長の現構成員のほかに、会員が直接参画できるよう60人以内の一般正会員を構成員に加える改正を行いたいと考えています。本会会計は、基本金、一般会計および特別会計に区

分されています。しかし、基本金は、終身会費や賛助会費を財源とする一方、一般会計の財源不足や特別会計に繰出し、常に会計が流動しています。そこで、流動のない本会固定の基本財産、通常事業経費を賄う運用財産、他の特定の目的を遂行するための特定目的事業財産（現特別会計に匹敵）に区分し、運用財産にはもろもろの会費、基本財産の利息等を充てて規模を拡充して、新財務システムに改めたいと考えています。本会は、法人格のない任意団体として活動していますが、将来的にこの整備を考えるべきとの意見もあります。それには法人の定款に当たる会則の整備が必要なので、これも踏まえて以上の点から会則の改正を考えています。これに伴い関係諸規則の階層的整備も進めています。また、現行部会・支部組織体制に加え、職域や同好活動、海外在住会員の支援の道を開いて本会を活性化する工夫を考え、本会と全会員を直接つなぐ農工通信の年2回発行を実現し、ホームページもリニューアルして充実したいと考えています。多年に亘り育成してきた八王子分収林は、H32年契約延長の満期を迎えることから、検討専門委員会を設けて計画案を含む基本方針を検討しています。

以上多くの課題と取組んでいます。同窓会の明日の飛躍のために今後とも皆様の倍旧のご理解とご支援、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。



学長に就任して

東京農工大学学長 松永 是



平成23年度より国立大学法人東京農工大学の第12代学長に就任致しました。本学は、産業の基幹である農学と工学及びその融合分野も含めた教育研究分野を備えた特色ある大学として、創基137年という長い歴史と伝統を引き継ぎ、日本の近代化・国際化に貢献する科学者を輩出すべく進化し続けてまいりました。現在に至る同窓生の方々の皆様のご活躍は本学の誇りでありますが、そこには歴代学長をはじめ教職員各位の不断の努力がある事を思うと、そして法人化後の大学の自由な競争と更なる活性化が求められている現状を鑑みると、学長という職務に課される重責に身の引き締まる思いと同時に、この意義ある挑戦に大きな意欲を感じております。そこで就任にあたり、現在の本学の状況とこれからの展望について申し述べたいと思います。

大学という機関の根本は、先人たちの『知』を継承する事、それらを積み重ねて応用し更に先にある高みを目指して独創的な『知』へ進化・深化させる事、つまり教育と研究ですが、その両輪に加えて、本学は『持続発展可能な社会づくり』のための将来設計を提唱する事も重要な使命としています。現在我々が直面している地球上の生物の存続に係わる様々な難問—環境・エネルギー・食糧等の諸問題—を解決するため、本学が『美しい地球持続のための全学的努力』として取り組んでいるのが『グリーンイノベーション』です。具体的には、バイオエタノールやバイオディーゼル等のバイオエネルギー、植物工場、電気自動車等のエコカーの安全や快適化、より効率の良いLED、高性能リチウムイオン電池やキャパシタの研究などの推進、アグロイノベーションのための人材育成、口蹄疫や鳥インフルエンザに対応する動物感染症研究のためのセンター創設等の成果をあげています。

イノベーションとは『全く新たな価値観の創造』であり、そのためには分野や業種の枠を超えた積極的な連携が必要となります。本学は多くのプロジェクトに参画するとともに、早くから産学連携の重要性に着目して力を入れており、教員一人当たりの共同研究数や金額は他の大規模大学と肩を並べて常に日本のトップクラスを維持、外部資金獲得の比率も常にトップ10に入っています。

人材活用という意味でも他機関との連携は重要です。民間企業や独立行政法人、研究所等での勤務経験を持つ研究者を積極的に受け入れる事によって、研究者のバックグラウンドが更に多様になり、研究推進や学生への教育という面のみならず、大学運営の機動性や柔軟性に対しても良い刺激となっています。今後も更に多種多様な機関や企業との連携を柔軟に進め、研究力や成果発信力を高めていきたいと思っています。

若手研究者や女性研究者の活躍も大学活性化の大きな牽引力です。テニュアトラック制度や女性未来育成機構の機能充実はもちろん、本年は学内に保育所を設けました。今後も更に若手研究者や女性研究者が安心して自由な発想でのびのびと研究に専念し広い視野からの新たな知の創造ができる環境を整備すべく、あらゆる側面からの支援を進めていきたいと考えています。

また、国際社会で指導的な役割を担えるような質の高い優れた人材を育成する事も本学の大切な役割です。現在世界88の大学と学術交流協定を結んでいる他、海外拠点を増やして海外の有力大学や企業との連携を進め、優れた人材の受入・派遣をする等、積極的に国際交流に努めています。また『アジア・アフリカ現場立脚型環境リーダー育成プログラム』を昨年4月に開講し、英語による講義や海外でのフィールドワークを取り入れた環境保全に関する国際的オピニオンリーダーの育成を全国に先駆けて行っています。

近年地球が抱える複雑な諸問題に積極的に取り組み、『世界の平和と社会や自然環境と調和した科学技術の進展に貢献するとともに、課題解決とその実現を担う人材の育成と知の創造に邁進する』という本学の基本理念の追求のためには、こうした教育支援、学生支援、研究支援、国際交流支援の強化をはじめ、大学全体としての確固たる戦略がなければなりません。本学の更なる発展—国際的なリーダーシップを取れる大学づくり、社会から頼りにされる大学づくり、同窓生の皆様が誇れるような、そして次世代を担う若者たちにとって魅力ある大学づくり—に全力を尽くす所存ですので、今後ご支援下さいますようお願い申し上げます。

理事・副学長就任の挨拶

理事・副学長（教育担当） 瀨瀬 明伯

このたび、4月1日付けで松永新学長の元、教育担当副学長・理事を拝命することになりました。同時に、3月31日付けで工学研究院長および工学府長・工学部長の職を辞させていただきました。農工通信を通じて同窓生の皆様に挨拶をさせていただきます。

3. 11大震災への対応およびそれに源を發した本学の省電力化への対応に、本学は全学を上げて頑張っております。本学在籍学生の被災状況ですが、実家などの全壊3名および半壊5名と幸いなことに人数も比較的少なく安堵しております。被災学生には入学料、授業料の返納および本学教職員か

らの義援金の贈呈を行い、また、同時に東京農工大学教育研究財団からも本学被害者に対して義援金の贈呈が行われました。ご寄附に賛同して頂きました多くの同窓生の皆様に感謝申し上げます。

強い日本の復活のためにも、何と言っても社会で活躍できる人材の輩出であることは言うまでもありません。これまで以上に、幅広い知識と応用力を持ち本学の基本理念にかなった多くの優秀な人材を育成していく所存でございます。皆様のご協力とご支援をお願い申し上げます。

理事・副学長（学術・研究担当） 普後 一

今般の東日本大震災及びそれに伴う大津波により、ご逝去されました同窓生のご冥福をお祈りいたします。また、震災、津波及び東京電力福島原子力発電所の事故によって被災された同窓生やご家族の方々にお見舞い申し上げます。

松永 是新学長の元、学術・研究担当副学長・理事の重責を担うこととなりました普後 一です。私は、昭和46年農学部養蚕学科を卒業し、52年に本学に奉職いたしました。本学に着任してからすでに33年を経過しておりますが、この間の本学の目覚ましい発展は目を見張るものがございます。本学は農学及び工学そして両学問の融合領域を包含し、社会的ニーズを的確にかつ積極的に取り入れながら、絶え間ない挑戦を踏ま

えて、多くの優秀な人材を社会に送り出してきたと思っております。

私は今般の震災や津波、加えて原発事故等で、国家全体が活力を失いかけていることを危惧しております。大学には、教育、研究、及び社会貢献が課せられておりますが、社会全体の活力を向上させることが特に大学に求められております。本学には、農業や工業の復興や新展開に対してビジョンや展望及び具体策を提示する必要があります。本学の学生や教職員が一丸となって、今般の不幸な事態を乗り越えることは、本学の方向性として捉えておりますので、同窓会の皆様のご協力とご支援を賜りたく、お願い申し上げます。

理事・副学長（広報・国際担当） 百鬼 史訓

平成23年4月1日より松永 是新学長の元、理事・副学長（広報・国際担当）に就任いたしました。歴史と伝統ある東京農工大学のさらなる発展のために微力ながら“一所懸命”の覚悟で重責を担ってまいりたいと存じます。同窓会の皆様方の温かいご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

私の担当である広報事業部門においては、本学の優れた教育・研究活動等の成果を国内・外に正しく情報発信し、本学の知名度を高めることに努め、国際事業部門にあつては、「広い国際感覚を具備し、国際社会でも指導的な役割を担えるよ

うな質の高い優れた人材を育成する。」との教育目標に基づき、海外の有力大学との学術交流の推進や海外拠点の設置による大学・企業間連携、さらには優れた留学生・研究者の受け入れや本学学生・研究者の海外派遣などを通じて、本学が世界の中で存在感のある大学へと益々発展するために、諸外国との学術的・文化的交流を積極的に推進させるよう努力して参りたいと存じます。

国際社会においてリーダーシップを発揮できる人材を養成する大学として高く評価されるよう、戦略的に事業を展開して参りたいと存じます。

理事・副学長（総務・財務担当） 西村 直章

平成6～7年度に主計課長として就任して以来、14年振りの昨年4月に理事・副学長として再び農工大に勤務することになりました。

当時は一般教養部の廃止に伴う独立研究科（BASE）の設置と農・工それぞれ学科の増設という大きな節目の時でしたので、大変貴重な経験をさせていただきました。

当時と比べると大学を取り巻く環境は一段と厳しくなっていますが、限られた財源のなかで質の高い教育と創造的な研

究を推進し、本学の理念である「使命志向型教育研究－美しい地球持続のための全学的努力」(MORE SENSE)を目指し農工大の発展に全力を尽くす覚悟です。

また、学生が楽しく学生生活を送れるキャンパス作りや、教職員が働きやすい職場となるように職場環境の見直しなどにも積極的に取り組みたいと思っております。同窓会の皆様方のご協力と更なるご支援を賜りますようお願い申し上げます。

同窓会第48回理事会・通常総会開催さる

■日時：平成23年5月28日（土）13：30～15：15 ■場所：府中キャンパス農学部講堂 ■出席者：176名（内委任状55名）



第48回理事会・通常総会は、5月28日（土）、母校府中キャンパス農学部講堂にて開催された。通常総会に先だって理事会が開催され、藤森会長を議長として平成23～24年度会長・副会長の推挙について高橋理事長から推薦があり、また、藤森会長から特別会員の推薦、通常総会の議案の説明があり、承認された。

渡邊副理事長から、出席者が定足数を超え通常総会が成立した旨の報告があった。藤森会長から、「同窓会創立50周年記念事業募金の終了・東日本大震災等」の挨拶があった。続いて、ご出席いただいた松永新学長をはじめ、来賓（額副学長、普後副学長、國見農学研究院長、堤生物システム応用科学府長、畑中名誉会長、梶井名誉顧問）の紹介があった後、松永学長から、同窓会からの支援に対する謝意があり、大学の現状（東日本大震災に伴う卒業式及び入学式の中止、教職員の被災地への派遣、備蓄品供出、見舞金の贈呈、15%の電力削減等）の紹介があった。引き続き、渡邊副理事長から、通常総会の議長については会則第9条に基づき、藤森会長が務める旨の説明があった後、議事録署名人に鈴木創三理事、馬場真知子理事を選出し議事に入った。

議事に先立ち、東日本大震災で被災した会員もことから、一分間の黙祷を捧げた。

議事

1. 平成22年度事業報告及び収支決算報告並びに監査報告

堀総務部長より、資料に基づき平成22年度事業報告〔別記1〕、平成22年度収支決算報告〔別記2〕があった。続いて、深水監事より決算報告書・帳簿・伝票等の精査をした結果、何れも適正に処理されており、事業・業務執行状況も適正であること、また、個人情報の保護に関する取扱いも適正に行われている旨の報告があり、何れの報告も異議なく承認された。

2. 平成23年度事業計画及び収支予算

堀総務部長より、資料に基づき平成23年度事業計画〔別記3〕、平成23年度収支予算〔別記4〕の提案と説明があり、審議の結果、異議なく承認された。

3. 平成23～24年度会長・副会長の選任

高橋理事長より、平成23～24年度会長・副会長の選任について理事会で推挙された者の提案がなされ、審議の結果、〔別記5〕のとおり承認された。

4. 名誉顧問の推挙

高橋理事長より、前東京農工大学長 小畑秀文氏を名誉顧問に推挙することについて提案がなされ、審議の結果、原案どおり承認された。

5. 特別会員の推薦

高橋理事長より、理事会で推薦された特別会員の紹介があった。

6. 同窓会創立50周年記念事業募金

亀山募金部長より、平成23年3月31日で募金活動が終了し、達成率は最低目標額の約60%となり、47,000千円を超えた旨の報告と謝礼の言葉があった。引き続き配分計画〔別記6〕について説明があり、審議の結果、原案どおり承認された。なお、このことについては通常総会に先立って開催された第4回同窓会創立50周年記念事業会において説明され、承認済である旨の報告があった。

7. 同窓会50年史の発行

大石同窓会50年史編纂委員長より、刊行スケジュール（平成24年3月刊行予定）及び部会・支部からの寄稿状況（17支部未提出）について説明があった。

8. 東日本大震災に伴う同窓生に対する募金活動

高橋理事長より、東日本大震災に伴う同窓生に対する募金活動〔別記7〕を実施したい旨の提案がなされ、審議の結果、実施することが承認された。本承認を受けて、早速、出席者に対する募金活動を実施することとした。

9. 同窓会の現状と課題及び今後の対応

高橋理事長より、同窓会の現状と課題及び今後の対応〔別記8〕について、現在取り組んでいる状況の説明があった。なお、同窓会会則の改正案（たたき台）を提示して検討をお願いするとともに、意見集約を諮ったうえで、来年度の通常総会に上程することとした。

10. 平成23年度「農工通信82号」への寄稿のお願い

馬場広報副部長より、同窓生からの寄稿についてお願いを行った。

11. その他

なし

通常総会終了後、福利厚生センターにおいて懇親会が開催された。



〔別記1〕

平成22年度事業報告

1. 第47回通常総会・理事会の開催

平成22年5月29日（土）、府中キャンパスにて第47回通常総会・理事会を開催する。議事内容は、1）平成21年度事業報告（案）、収支決算報告（案）、監査報告、2）同窓会会則の一部改正（案）3）平成22年度事業計画（案）、予算（案）、4）副会長の選任（案）の件、5）平成22～23年度理事・代議員の選任（案）、監事の選出（案）、6）特別会員の推薦（案）、7）同窓会創立50周年記念事業、8）同窓会50年史の発行、9）「農工通信81号」の11月末発行、10）その他新旧理事長の挨拶について諮られ、承認された。

2. 平成22年度副会長懇談会の開催

平成22年11月13日(土)に開催され、1)平成23~24年度会長・副会長の選出、2)募金の集計状況及び協力要請、3)同窓会50年史の部会・支部からの寄稿の提出状況及び刊行スケジュール、4)小井井記念ホール及び50周年記念ホールの工事スケジュール、5)同窓会の現状と課題及び今後の対応について懇談を行った。

3. 同窓会組織の強化、活性化および財務体質の健全化

部会・支部・職域組織の活動を更に強化して支援した。同窓会創立50周年記念事業募金活動のために各組織との連携を強める必要があるため、昨年度に引続き常務理事の積極的な派遣を行った。平成20~21年度に引続き、入会金、賛助会費等の大幅な収入増を図るための対策を推進した。

4. 同窓会創立50周年記念事業の募金活動

平成20年度第45回通常総会において承認され、募金活動(2ヶ年計画)がスタートしたが、募金集計額が最低目標額を大幅に下回っていたため、更に募金活動期間を1年間延長(平成22年度末まで)し、50周年記念事業の実施計画を推進し、47,000千円を超える募金となった。

5. 同窓会50年史の発行の進捗状況及び原稿依頼

平成22年度第47回通常総会において、同窓会50年史発行の進捗状況の説明及び未提出の各部会長・支部長宛に各部会・支部の「創立の経緯、活動の記録等」についての原稿の執筆の催促をした。これにより原稿(案)のたたき台が整った。また、平成22年7月2日(金)に50年史座談会を開催した。

6. 「農工通信81号」の11月末発行

昨年に引続き募金目標額の達成率を向上させるために、振込用紙等を「農工通信81号」に同封して再々度の協力要請を行うため、11月末に発行した。

7. 同窓会PR活動の実施

同窓会紹介パンフレット及びHPの更なる充実を図り、PR活動に努めた。

8. 会員の動静整理の継続実施

農工通信の未着信会員について常時追跡の動静調査を行った。

9. (財)東京農工大学教育研究振興財団への協力

財団の事務に対する実質的支援を従来どおり継続して行った。

10. 母校に対する援助、新入正会員歓迎行事の継続実施

学生の勉学・学生生活に関して、学会発表・コンテスト・コンクール等発表・入賞祝い・優秀卒論副賞等の援助・学園祭・課外活動の援助・同窓会推薦キャリア・アドバイザー支援等の予算を前年度と比べて更に増額して行った。また、卒業・修了証書カバーの贈呈を継続して行った。

11. 会員の慶弔

祝電・弔電を打電した。

12. 口蹄疫被害の同窓会員へのお見舞い

宮崎県で養豚業を営み、口蹄疫感染により全頭を処分する被害を受けた同窓生へ見舞金を送った。

2. 一般会計

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成22年度予算額	(B) 平成22年度決算額	(A) - (B) 増減	備 考
前年度繰越金	3,452,197	3,452,197	0	
入 会 金	4,220,000	4,910,000	-690,000	982人×5千円=4910千円
年 会 費	826,500	1,210,000	-383,500	806人×15千円=1209千円 余分納入2人×0.5千円=1千円
利 子	2,168,000	2,178,373	-10,373	国債2,048,000円 預金130,373円
基本金より繰入	17,753,303	17,753,303	0	
雑 収 入	320,000	376,350	-56,350	農工通信広告料外
合 計	28,740,000	29,880,223	-1,140,223	

(2) 支出

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成22年度予算額	(B) 平成22年度決算額	(A) - (B) 増減	備 考	
事 業 費	17,230,000	16,460,006	769,994		
内 訳	動静調査等管理費	1,500,000	1,255,834	244,166	人件費及び諸経費の節約
	会 報 発 行 費	6,100,000	5,820,560	279,440	安価契約
	HP管理作成費	400,000	597,205	-197,205	東日本大震災に伴う掲載量の増加
	部会・支部活動費	4,100,000	3,343,145	756,855	21年度6部会・11支部未申 22年度7部会・7支部未申請 学会発表等の申請 件数の増加
	母校援助費	3,800,000	4,244,000	-444,000	
	新入正会員歓迎費	900,000	824,630	75,370	安価契約
	分収林管理費	50,000	28,080	21,920	境界管理
	資料整備費	380,000	346,552	33,448	安価契約
	会 議 費	2,020,000	2,047,867	-27,867	
	内 訳	総会会議費	1,820,000	1,884,530	-64,530
副会長懇談会		70,000	65,337	4,663	
常務理事会議費		130,000	98,000	32,000	
事 務 費	8,270,000	7,407,087	862,913		
内 訳	雑 給	4,390,000	4,229,402	160,598	人件費の節約
	備 品 費	100,000	42,000	58,000	冷蔵庫(小型)の購入
	消 耗 品 費	750,000	723,058	26,942	節約
	通 信 費	750,000	694,819	55,181	節約
	旅 費	1,500,000	1,163,870	336,130	21年度理事派遣人数19名 22年度理事派遣人数20名
	事務用品印刷費	50,000	50,400	-400	
	慶 弔 費	80,000	98,110	-18,110	
	光 熱 水 費	110,000	118,652	-8,652	
	雑 費	200,000	90,541	109,459	節約
	そ の 他	340,000	196,235	143,765	賛助会費等の返付金が 予定より少なかった
職員厚生積立金	220,000	220,000	0		
予 備 費	1,000,000	50,000	950,000	宮崎口蹄疫被害見舞金	
支 出 合 計	28,740,000	26,184,960	2,555,040		

(3) 残高

(単位:円)

収入 - 支出	0	3,695,263	-3,695,263	
---------	---	-----------	------------	--

3. 特別会計

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(A)+(B)+(C) 合 計
前年度繰越金	19,540,178	495,104	11,964,068	31,999,350
繰 入 金	0	220,000	5,000,000	5,220,000
利 息	32,401	153	22,703	55,257
合 計	19,572,579	715,257	16,986,771	37,274,607

(2) 支出

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(A)+(B)+(C) 合 計
支 出 合 計	19,572,579	50,635	480,245	20,103,459

(3) 残高

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 職員厚生資金	(C) 50周年記念事業資金	(A)+(B)+(C) 合 計
収入 - 支出	0	664,622	16,506,526	17,171,148

4. 期末残高

(単位:円)

予算項目	基本金	一般会計	特別会計	合 計
合 計	351,912,729	3,695,263	17,171,148	372,779,140

[別記2]

平成22年度収支決算報告 (平成22年4月1日~平成23年3月31日)

1. 基本金

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	(A) 平成22年度予算額	(B) 平成22年度決算額	(A) - (B) 増減	備 考
前年度繰越金	324,523,453	324,523,453	0	
終 身 会 費	1,860,000	1,630,000	230,000	全額54人×30千円=1,620千円 分納1人×10千円=10千円
賛 助 会 費	24,510,000	28,940,000	-4,430,000	一般963人×30千円=28,890千円 留学生5人×10千円=50千円
そ の 他	0	19,572,579	-19,572,579	特別会計より繰入 (会員名簿発行資金)
合 計	350,893,453	374,666,032	-23,772,579	

(2) 支出

(単位:円)

特別会計繰出	一般会計通常繰出	一般会計特別繰出	合 計
5,000,000	12,255,000	5,498,303	22,753,303
5,000,000	12,255,000	5,498,303	22,753,303
0	0	0	0
0	0	0	0

(3) 残高

(単位:円)

収入 - 支出	328,140,150	351,912,729	-23,772,579
---------	-------------	-------------	-------------

(3) 残高 (単位:円)

収入 - 支出	0	0	0
---------	---	---	---

3. 特別会計

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	(A) 職員厚生資金	(B) 50周年記念事業資金	(A) + (B) 合 計
前年度繰越金	664,622	16,506,526	17,171,148
繰入 金	420,000	5,000,000	5,420,000
利 息	150	22,000	22,150
合 計	1,084,772	21,528,526	22,613,298

(2) 支出 (単位:円)

款 項 目	(A) 職員厚生資金	(B) 50周年記念事業資金	(A) + (B) 合 計
支 出 合 計	120,000	21,000,000	21,120,000

(3) 残高 (単位:円)

款 項 目	(A) 職員厚生資金	(B) 50周年記念事業資金	(A) + (B) 合 計
取 入 - 支 出	964,772	528,526	1,493,298

4. 期末残高 (単位:円)

予 算 項 目	基本金	一般会計	特別会計	合計
合 計	357,409,992	0	1,493,298	358,903,290

[別記5]

同窓会会長及び副会長 (平成23・24年度)

役職名	氏 名	卒年度	推薦母体
会 長	藤森 明彦	工化S42	常 務 理 事 会
副会長	藤巻 宏	農 S36	農 学 ・ 生 物 生 産 学 部 会
〃	草野 洋一	養蚕S47	蚕 糸 生 物 学 部 会
〃	佐藤 令一	植防S54	植 防 ・ 応 用 生 物 学 部 会
〃	大鳥誠之助	農化S43	農 芸 化 学 ・ 応 用 生 命 化 学 部 会
〃	土居 修一	林産S45	林 産 ・ 生 物 資 源 工 学 部 会
〃	星野 義延	環保S53	環 境 科 学 部 会
〃	松井 英輔	林 S38	林 学 部 会
〃	未定	—	生 産 環 境 工 学 部 会
〃	本間 秀和	地生H12	地 域 生 態 シ ス テ ム 学 部 会
〃	田谷 一善	獣医S46	獣 医 学 部 会
〃	羽田 有輝	製糸S43	製 糸 ・ 高 分 子 ・ 生 命 工 学 部 会
〃	千田 武	織高S46	織 維 ・ 有 機 材 料 部 会
〃	木村 雅俊	化工S48	化 学 工 学 部 会
〃	遠藤 幸一	工化S46	応 用 分 子 化 学 部 会
〃	尾崎 幸信	機械S52	機 械 シ ス テ ム 工 学 部 会
〃	宇野 亨	電気S55	電 気 電 子 工 学 部 会
〃	伊東 浩	応物S52	応 用 物 理 学 部 会
〃	大鳥 浩太	電情H13	情 報 工 学 部 会
〃	加藤 美治	MOT H21	M O T 部 会
〃	齋藤 隆	生シ院H11	B A S E 部 会

* 生産環境工学部会については、副会長候補 田内堯氏が4月28日に急逝されたため、本年10月に開催予定の生産環境工学部会総会において推薦された者を副会長に選任することとする。

[別記6]

同窓会創立50周年記念事業募金の配分計画

[最低目標額: 80,000,000円]

平成23年4月30日現在

同窓会としての集計額	配 分 計 画 額 (案)	不 足 額
47,178,725円	1) 小金井記念ホールの設置 (新総合会館内) 30,000,000円	
	2) 大学50周年記念ホール(府中) の増改修 15,000,000円	
	3) 事務費等 3,208,178円	
計 47,178,725円	48,208,178円	-1,029,453円



[別記7]

平成23年5月
東日本大震災に伴い被災された同窓会員への救援募金のご協力をお願いについて

東京農工大学同窓会救援募金会 発起人一同

平素より同窓会の活動には格別のご理解とご協力を戴き、深く感謝申し上げます。

去る3月11日午後発生した東日本大震災は、世界的にもまれな巨大地震で被害の規模も大きく、原子力発電所の甚大な被害も加わり被災地での復旧・復興は困難を極めています。

被災地域に在住する同窓会員は、1,200人以上に上り、不自由な生活を強いられている会員もいます。そこで、同窓会として被災された会員のお見舞いのため、5月28日開催の通常総会で賛同頂き、下記のように募金活動を実施することとしました。

募金への寄附金は、被災された同窓会員の皆様へのお見舞い金とさせていただきます。この募金が被災された同窓会員の皆様のお役に立てることを願っています。趣旨にご賛同頂き、何卒ご支援を頂きますようお願い申し上げます。

記

- 募金の単位: 一口 5千円以上
- 募金期間: 平成23年6月1日から平成23年7月末日までの2か月
- 振込口座等:

1) 郵便振替口座(窓口に備え付けの「払込取扱票」を使用)
口座記号番号: 00160-0-596079
加 入 者 名: 東京農工大学同窓会救援募金会

2) 上記口座を他行等からの振込の受取口座として利用される場合は、下記内容をご指定ください。
店名(店番): 0一九(ゼロイチキョウ)店(019)
預 金 種 目: 当座
口 座 番 号: 0596079

3) 振込手数料は各自ご負担お願い申し上げます。

4) 通信欄に氏名・卒業(修了)年・学科(専攻)を必ずご記入ください。

皆様より頂いた募金は、被災された同窓会員にお見舞い金として本会からお届けします。なお、募金の配分等の扱いについては、常務理事会に任せることとしました。

東京農工大学同窓会救援募金会発起人
会長 藤森明彦、理事長 高橋幸資、前(元)会長、前(元)理事長、副会長、部会長、支部長

[別記8]

同窓会の現状と課題およびその取組みと具体対応について (H23. 3)

現状と課題	取組み	具体対応
基本的事項		
1. 同窓会目的： 会員相互の交流・親睦、母校の発展貢献を目的としている。 [会員動向の把握・提供、農工通信の発行、総会・理事会・懇親会の開催、部会・支部総会の開催、部会・支部へ理事派遣、部会・支部活動資金の提供] [学生(準会員)支援、財団支援(事務・運営)、(経営協議会委員)]	目的に照らして是とした身の丈の範囲での 事業の検討 が必要 入学者=準会員とすることの検討が必要	・会則の目的は現行のまま、身の丈に沿い社会に開いた同窓会を目指す態勢・体制の追求 ・法人化対応をにらんだ大幅改正 ・会員認定に係る個人意思の表明に対する検討 ・準会員支援事業(学生援助)の効率的実施の検討 [総会構成員] ・会長・副会長、監事、支部長、理事100名以内、代議員150名以内、計323名。総数の20%相当60名以内を一般公募(HP)として総会構成員に加えることができると改正
2. 財務の状況： 同窓会収入は、 賛助会費(終身会費) に依存している。 基本金 (約3億2千万円)から、一般会計、特別会計に必要な経費を繰出している。 一般会計 は、本来設計では、1)基本金の果実、2)終身会費の1/2繰出し、3)年会費等の収入、4)入会金によって賄っていたが、1)および3)の減少で不足額を基本金から特別繰り出して成立している。いわば、 <u>赤字予算を組んでいる</u> 。	会計システムの根本的変更が必要	・基本金を 基本財産 として財務形態の整理 ・一般会計および特別会計を 運用財産 および 特定目的事業財産 とする財務システムに変換 ・将来的事業活動の整備充実と会計規模との見合いから適正な各財産規模の検討
3. 同窓会組織の状況： 同窓会は 任意団体 でとして組織、活動している。	特定非営利活動法人の検討	・事務局で関係規則収集整理後検討 ・NPO移行の可能性追求、準備 ・職員の服務規程の整備
4. 同窓会内部組織の状況： 学科・専攻単位の卒業生・修了生からなる 部会組織 、各都道府県単位に居住している同窓生からなる 支部組織 をもっている。 活動の低調な部会・支部がある。 <u>部会は、所属人数の増加、学科等再編で活動しにくい状況が生まれている</u> 。 <u>支部活動は県庁関係者が中心になって支えているが、企業関係者、特に工学系同窓生の参画および若手の参画が乏しく、活動主体の固定化が起こっている</u> 。 留學生が増加している。	部会・支部の活性化が必要 工学系の活性化 若手の参画 海外の活動組織が必要	・部会支部のテコ入れ案の検討 ・複数部会支部集会の奨励 ・職域活動、同好活動支援として、機能部会、同人クラブの新設の道を開く ・若手参画方策の検討 ・海外会員の組織化方策、海外支部整備 ・学科クラス委員を集めた懇談会、3年クラス委員の総会・懇親会招待の実施 ・学内外からの常務理事登用 ・会員E-メールアドレスの収集・整備
個別の事項		
1. 50周年記念事業の状況： 大学と共同で記念事業を実施しているが、同窓会はH24. 5の記念式典を目的に募金活動を実施している。 小金井記念ホールは産学交流会館の中で計画実施するが、 50周年記念ホールの改修 (給湯室を同窓会倉庫とし、トイレ・玄関設置、可能な範囲内でホール拡充)、 50年史の刊行の実施 。	募金の推進 50周年記念ホール改修財源の手当てと実施計画の推進が必要 50年史のH24. 5の刊行に向け制作推進が必要	・50周年記念ホール等の拡充整備計画案、スケジュールの確定(H22.10まで) ・同建築確認申請(H23. 4)、着工(H23. 7) ・記念式典案(会場は小金井、式典次第の検討)
2. 規則等の状況 会則、細則類で業務処理を行っているものの、業務発生時に個別に策定されてきた。 常務理事会の規則等未整備なものがある。	常務理事会規則等の制定を含め階層的な規則の整備が必要	・事務局で規則等の電子化 ・「会則」、「規則」、「規程」、「細則」、「申合せ」の階層的体系化 ・常務理事会規則等未整備規則の整備
3. 分収林の状況： 分収林の維持管理を行っている。H17にH32まで八王子市と契約延長している。 林木の搬出路なく、環境の点から伐採に問題がある。年次伐採後の植林等の環境管理が求められる。	措置方針の決定と八王子市との話し合いが必要	・検討専門委員会設置 ・伐採、契約更新、(無償)譲渡、市民憩い・自然研修企画等の措置に対応した対策案の策定 ・八王子との交渉
4. 広報の状況： 会員と同窓会のつながりを深めるために、農工通信を年1回発行し、全会員に送付している。名簿の発行廃止に伴い、年2回の発行が求められている。 HPは、逐次更新している。	農工通信の年2回発行の検討が必要。 HPのデザイン検討、部会・支部リンクの推進、常務理事会議事要旨の掲載検討が必要	・学外からの応援を含めた年2回発行体制の骨子検討 ・骨子に基づいた専門検討委員会設置 ・使いやすくデザイン性のあるHPの骨子案の作成 ・HP逐次更新できる体制整備 ・部会・支部HP開設推進と本部HPのリンク促進



「同窓会創立50周年記念事業」の募金活動終了に伴うお礼と報告

平成23年8月11日

同窓会長 藤森 明彦

昭和37年（1962年）に新同窓会として設立されました本会は、平成24年（2012年）に創立50周年を迎えることになります。それを期として、平成20年7月に開始いたしました「同窓会創立50周年記念事業」の募金活動は皆様のご支援ご協力により、平成23年3月を以て無事終了することができました。

この間、支部長様、部会長様はじめ多くの同窓会員の皆様には丁寧なご指導、ご鞭撻を頂くと共に多大なるご支援とご協力を賜り、4千7百万円有るの貴重なご寄附を頂戴することができました。ここに厚く御礼申し上げる次第でございます。

募金活動期間終了に当たって、最終の「募金の総額」及び「事業計画に沿って実施する事業」は以下のとおりでございますので、お礼方々ご報告申し上げます。

詳細につきましては、別途同窓会のホームページに掲載してございますのでご利用下さるようお願い申し上げます。

なお、「東京農工大学創基140周年・同窓会創立50周年合同記念事業」としての事業報告書は、後日、ホームページ等で報告申し上げます。

皆様方におかれましては、本学同窓会に対しまして今後とも変わらぬご厚情を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

1、募金の総額

- 1) 募金最低目標額 : 80,000千円
- 2) 募金達成額 : 47,554千円
- 3) 募金達成率 : 59.4 %

2、実施する事業等

- 1) 小金井記念ホール : 30,000千円
- 2) 50周年記念ホール（府中地区） : 15,000千円
- 3) 事務費 : 2,554千円

「同窓会創立50周年記念事業」の寄附者一覧

皆様のご支援ご協力のお陰で募金活動は無事終了いたしました。

ご寄附を賜りました皆様のご芳名を深い感謝とともに掲載させていただきます。

- 1、平成23年7月末現在。
- 2、掲載順は部会別、50音順。
- 3、（ ）は非掲載希望者を内数で示す。
- 4、詳細は同窓会HPをご参照ください。
- 5、敬称略。

農学・生物生産学部会 359名（16名）

會田 重道
青木 誠
浅井 雅美
浅野 昭
浅野 一郎
芦川孝三郎
熱田 正行
阿部宇一郎
阿部善三郎
天野 昭一
荒井 榮造
新井 孝
新井 紀子
荒田 久
飯田 一良

五十嵐貞雄
池田 和彰
池田 他人
池谷 紀夫
猪澤 洋
石家 健生
石川 駿二
石川 昇
石倉 皓哉
石崎新一郎
石田 康幸
石原 眞治
石丸 利於
石森 道雄
板橋 久雄
市川 義幸
伊藤 雅貞
稲葉 次郎

稲葉 友則
井上 完二
井上 誠司
井上 隆
井上 満
猪瀬 忠賀
今井 達郎
今井 直也
今市 忠志
岩倉捷之助
岩崎 和晴
岩崎 徹
岩田 成志
岩本 隼人
植原 貞範
上原 正
白井 千秋
宇田 太郎

宇田川良一
内田 成昭
内田 成信
上井 和彦
榎戸 彩子
遠藤 武雄
遠藤 和海
大石 直記
大川泰一郎
大澤 良
大島 隆治
太田 勝彦
太田 舜三
大塚 真紀
大月 征典
大伴 秀郎
大野智史・大野あゆみ
大橋 統州

岡田 俊夫
小川 宏次
小川 純子
小川 忠司
小川 秀文
荻原 勲
長部 茂幸
小野 敏忠
小野 博生
小原 嘉明
恩田 隆志
甲斐 志郎
香川 莊一
景山 登喜雄
加地 昇
柏崎 清作
柏俣 和夫
粕川 成一

門屋 一臣
金本 伸郎
釜江 正巳
鎌田 徳
神谷 充
加茂 正三
川窪 好
川島 長治
川島 保二
川戸 正自
河本 泰生
神田 修平
菊地 京子
菊地 茂
菊地 正己
菊地 利男
北野 誠
木下 隆雄

木下 孝宏
栗原 幸一
栗原 眞雄
栗原美智子
黒田 栄喜
小池 和明
小池 一正
小池 洋男
小泉 憲治
小泉 豊
合田 昌弘
古賀 淳士
小坂 洋一
越田 丞治
小島 喜三
小杉 正
小関 頼信
小林 五郎

小林 征司
菰田 肇
近藤 茂雄
近藤 祥江
齋藤 一治
齋藤 司朗
齋藤 博
齋藤 洋二
坂口 正三
坂田 毅
佐久間成浩
迫田 登稔
小藤 暁子
佐藤 明彦
佐藤 栄一
佐藤 哲明
佐藤 望
佐野 正己

信太 秀紀
篠原 昇三
洪沢 清一
洪谷 成美
志村 勲
志村 洋一
下 弘明
下田 博之
下間 博明
白石 郁朗
白城 克己
菅澤 彦一
杉田 孝雄
杉本 恵彦
菅生 義雄
鈴木 一郎
鈴木 一男
鈴木 一好

- 小野 眞人
小原 豊彦
鹿熊 俊明
貝塚 一郎
春日井 達造
片岡 弘毅
勝山 弘之
加藤 利依
加藤 正彦
金窪 悠
兼松 和夫
兼松 伸枝
萱嶋 憲保
菊田 愉美
川合 延夫
河村 隆
管 慶一郎
神田 尚俊
菊池 正夫
木下 一郎
木村 一雄
喜友名 強
吉良 幹男
久野 幸三
栗本まさ子
計良 伸行
慶留間 智厚
幸嶋 祥巨
甲野 雄次
小杉 光雄
児玉 順子
小寺 主司
後藤 彰治
小西 克利
小林 茂雄
小林 則勝
小峯 毅
五明 峻
近藤 昌弘
紺野 克彦
西郷 宏治
齋藤 崇
斎藤 利雄
佐伯 百合夫
酒井 道子
酒井 讓
櫻井 昭雄
佐々木 毅夫
笹崎 龍雄
笹崎 龍雄
菅 修司
佐藤 喜隆
佐藤 多津雄
佐藤 昌子
澤野 照之助
塩山 浩之
穴戸 洋一
志水 功
清水 敬一
清水 実嗣
清水 多佳子
清水 徹三
下山 勇
小久江 栄一
末永 朗
菅原 博治
杉井 太郎
鈴木 一哉
鈴木 由貴子
鈴木 嘉尚
関 哲生
関 令二
- 関 正太郎
関 稔
曾我 昭新
大門 重信
高岡 寛
高倉 剛二
高橋 喜久男
高橋 正
高橋 雄二
高松 勝憲
田川 雅代
瀧上 周
竹内 邦夫
竹内 健児
竹原 孝一
竹村 勇司
立花 史朗
立石 洋見
田中あかね
田中 巖
谷合 枝里子
田附 寿一
田谷 一善
津田 昭
土屋 忠雄
手塚 理雄
富樫 久
鳥飼 孝二
名須川 厚
永井 仁
中井 千恵
中阪 昌敬
長澤 洋二
中島 巖
中島 英男
中塚 繁
長塚 久
中野 秀治
長野 武彦
永松 直義
中村 健
中村 幸男
西 龍一
西貝 正彦
西嶋 貞幸
西田 晴二
西松 静三
野口 純子
野附 巖
芳賀 弘樹
橋田 勝明
早川 研一
原 亜知
原子 重男
日下 晴雄
百溪 百合子
平井 秀敏
廣井 みどり
廣田 里香
福岡 泰秀
藤田 健之助
古市 玲子
古橋 圭介
星 欽彌
細野 誠之
堀井 忠夫
前田 稔
増田 隆
真瀬 昌司
又野 一仁

- 町田 幸男
益満 宏行
松井 光蘭
松浦 健二
松岡 克己
松川 寿見子
松澤 武
松永 正彦
松永 佳昭
松本 幸雄
三森 長久
真山 真由美
水口 衛
水谷 武夫
水谷 正博
水町 充宏
三橋 修三郎
三森 都子
三森 信行
村松 梅太郎
室作 昭
森 操七郎
森田 晴夫
森谷 哲夫
八重樫 弘信
八木 恒文
柳澤 池恵
柳田 晴美
山岸 建太郎
山口 聡子
山口 成夫
山口 夏子
山口 又祐
山崎 輝清
山下 千恵
山田 隆弘
山田 實
山田 義雄
山中 良
山本 格也
山本 禎紀
横山 卓三
吉川 邦衛
吉田 和雄
吉田 元紀
吉田 誠二
吉田 讓
依田 明
米倉 久雄
米原 善隆
米平 勉
若狭 芳男
和田 聡志
渡辺 元
渡部 昭一郎
渡邊 俊夫
- 石野 卓由
石原 啓四郎
市村 周二
伊藤 澄夫
伊藤 暢
今井 史郎
今井 仁
岩佐 秀明
岩波 勝
岩間 丈男
植村 公夫
内田 勝彦
瓜田 章二
瓜生 虔二
遠田 寿之
大塚 克己
奥山 善英
小澤 政彦
小野 健一
小野 善太郎
小濱 精一郎
小尾 伸昭
笠川 昇
勝野 盛夫
加藤 美智子
金木 久喜
神山 靖久
亀崎 寿治
河原 雄輔
北村 愛夫
北村 昇
草間 健一
江東 新一
小嶋 桂吾
児玉 満男
後藤 文次
小林 茂男
小林 玉枝
小山 恒男
近藤 太郎
近藤 齊藤
佐々木 隆之智子
佐藤 良平
澤崎 喜代子
重松 正矩
志波 操
庄子 奈緒
菅原 隆行
杉山 治男
杉村 良夫
鈴木 重雄
鈴木 浩
鈴木 弘文
鈴木 眞雄
瀬木 秀保
当麻 春海
鷹野 貴彦
高林 千幸
竹村 一衛
田嶋 公庸
田中 浩明
田中 基三
田中 雄二
田村 香
田村 謙吾
出山 貞夫
富田 研二郎
土門 正信
永井 忠
中澤 靖元
中島 健一

製糸・高分子・生命工学部会
157名 (11名)

- 製場 正隆
青木 稔
青木 利吉
阿久津 眞一
足立 憲一
阿部 和弘
新井 一太
新垣 篤史
有川 廣
石井 正智

- 中島 良平
中西 義治
中野 陽介
成田 英次
西出 照雄
西山 陽二
羽賀 篤信
長谷川 茂
花輪 正明
羽田 有輝
浜 喜平
林 隆宏
林 益史
早田 鶴夫
廣末 隆
富士 喜八郎
藤井 忠生
藤富 貴男
藤根 敏雄
藤原 洋美
古澤 實
星野 邦夫
細田 英夫
堀江 英次
本多 第二次
前原 駿三郎
益子 堯
町田 屋 亨
松浦 達廣
松尾 健司
松田 憲明
丸茂 克忠
溝口 正伸
三谷 昌史
峰 與志郎
宮川 勇藏
宮城 清
向井 知大
村川 弘幸
村川 圭瑠樹
本木 康友
本山 悠輔
森 精
森 正徳
森川 一
森下 成和
八重樫 馨
柳沼 泰之
山田 邦雄
矢澤 元啓
矢島 正六
安田 勝年
安田 誠司
山口 正信
山田 晃世
山田 俊明
湯浅 英明
横倉 栄利
吉井 幸三
吉野 知子
渡瀬 久也
渡辺 皓寛
渡辺 安朗
和唐 博恭
- 織田 サヨ子
壁谷 美智子
坂根 政子
那須 静江
野村 眞佐子
引地 たけよ
福永 むつし
藤野 トシ
村尾 綾子
- 田中 達也
田中 康國
田中 芳巳
丹下 昇
千田 武
長 榮一
績 葛 修一
鶴岡 建二
寺田 章三
嶋田 利夫
中井 健一
永池 幸夫
中瀬 嘉康
中村 眞
西野 力
仁保 文雄
野口 武男
野本 洋一
橋本 定勝
長谷川 真澄
畑 泰之
伴 菊夫
東 功
比留間 藤郎
深水 智明
古田 陽美
古畑 盛生
本多 寛
増田 敏男
松尾 彩子
松本 祥
松本 紘明
松本 まさみ
水落 敏彦
三十九 久仁夫
美多 賀鼻一
峯 岸 俊夫
宮内 乙彦
宮林 典弘
宮原 寛
本村 洋美
森田 哲夫
安野 充
矢作 信幸
藪田 順一
山内 寛
山崎 正澄
山下 豊文
山本 康哲
山本 理
横尾 栄三
横田 茂男
横溝 清
吉田 了三
吉牟田 建
渡邊 敏行
和仁 尚三
- 飯山 登
池田 誠
石井 茂雄
石渡 莊介
板垣 和雄
市川 幾雄
伊藤 紀一郎
伊藤 眞一郎
井上 勝文
井上 豊
今村 彰仁
岩田 昇
宇川 拓水
内田 英世
遠藤 博司
大貫 康二
岡田 健二
小川 喜一郎
小川 城志
荻野 克義
柏岡 元彦
片山 毅
加藤 之貴
兼国 伸彦
金子 隆
兼松 博史
鎌田 剛
亀山 秀雄
川上 章
川口 行一
木村 雅俊
藤 飛良生
久保田 幸子
倉形 健
倉上 竜彦
黒羽 輝男
河野 博文
興石 幸彦
越島 陽子
小平 紀肇
後藤 宗人
胸形 眞名美
小松 正明
近藤 宏
近藤 眞澄
斉藤 彩
佐々木 宏子
紫垣 由城
下山 敏昭
須賀 創平
菅原 翔
鈴木 一郎
鈴木 将之
鈴木 能大
鈴木 英俊
住谷 明
高島 正
高野 文夫
千葉 秀樹
手塚 宣之
永井 義久
中川 紳好
中川 泰一
長澤 裕
中村 祐貴
西山 直孝
糠信 敦司
橋本 眞一
馬場 大輔
濱崎 輝美
半田 清久

繊維・有機材料部会
123名 (9名)

- 相坂 登
浅沼 寛
浅原 義久
入枝 利夫
石川 躰次
石沢 弘衛
井芹 純
市川 靖
市村 光由
伊藤 寛郎
稲勝 葆
岩島 寛
岩波 滋
岩波 弘介
薄井 洋介
薄田 幸夫
宇野 加津美
遠藤 佑治
大越 健介
大嶋 茂光
大沼 紀幸
岡田 邦男
小俣 文彦
柿内 卓
垣崎 憲道
笠原 要亮
加瀬 俊男
金子 由美
壁矢 久良
川崎 巖
河村 吾郎
木瀬 南
木村 太郎
桐谷 陸征
桐谷 清司
葛和 一郎
窪田 一郎
小池 一三
五島 正喜
近藤 秀男
斉藤 一夫
桜井 雅志
桜木 剛
佐藤 裕介
塩原 弘三
志田 雄造
恒藏 博司
鈴木 大介
仙波 義彦
高井 英雄
高木 利之
高橋 章友
高橋 弘忠
武井 勇
竹内 謙二
武田 迪昭

化学工学部会
110名 (5名)

- S60卒業 化学
工学科同窓会
青谷 真美
秋山 正巳
足立 英明
新谷 憲
安藤 衛(工化S42)
ほか工化67卒有志
飯島 哲

応用分子化学部会
202名 (10名)

- IC67ゴルフ会
有志一同
安藤 衛 石井 昭一
金山 裕弥 成瀬 勝夫
松本 俊吾 三島 勝
都田 康弘
饗場 聡
相羽 誠一
阿部 哲
新井 彦一
有澤 清
有山 時男
安澤 晴嘉
安藤 一男
安藤 衛
飯田 次郎
飯田 隆夫
伊王野 耕二
池田 由利子
石井 泰司
石川 真人
石毛 和夫
石田 文治
石原 友子
泉 浩
板谷 孝
市野 富雄
伊東 巖
伊藤 勝浩
伊藤 汎之
伊藤 裕二
稲葉 尚弘
井上 修一
井上 伸一
今村 祐一郎
岩本 秀雄
宇田川 賢司
内本 岩宏
江藤 建市

江里口健一 遠藤幸一 近江恭夫 大坂修一 大須賀弘 太田克朗 大高直輝 大竹陽介 大村裕英 大山拓正 岡壽隆 荻原茲夫 小沢紀一 小野弥太郎 小野好永 笠井利彦 柏崎雄治 片俣操 片岡保之 勝田謙次 加藤正一 金山裕弥 金田修一 上岡泰晴 亀谷雅哉 川邊志保子 神野砂男 北村一郎 北村益男 杵村義昭 木村富昭 清田康夫 櫛田靖彦 工藤晃 熊切慎二 倉林肇 小堺裕一郎 小林邦彦 小林生男 小林瑞葉 小松賢作 小峰義夫 小室一允 小屋原壯三 齋藤隆志 佐伯文夫 坂本光江 櫻井郁男 佐々木勝臣 佐々木道郎 貞森昭宏 佐藤隆 佐藤哲郎 重田征三郎 嶋崎幸雄 島田昭義 島村勲 清水一幸 清水康次 鐘維源 白川栄治 新館浩 菅原功 菅原靖 杉浦猛雄 杉坂英治 杉田真幸 鈴木一男 鈴木東義 鈴木義和 高木新

高木誠一 高野日出男 高橋秀幸 滝澤幸雄 竹本菊郎 田中明雄 田中壯 田中哲夫 田中哲治 田中利男 谷井宏邦 谷内暉 趙成洙 佃善文 樋谷忠雄 寺島英幸 富樫恵 戸田順治 戸塚育甫 殿塚美子 長崎健 永島武 中島統一 中島寿昭 中島俊二 中野祥子 中林實 中村榮太郎 中村勉 中山知義 成瀬勝夫 西田梓 西村彰彦 沼野晴光 野澤哲男 野島正一 野田憲康 野村和弘 羽鳥彰士 浜本光生 林勝彦 原田和夫 平澤猛男 平野正雄 廣瀬勝博 福田靖 藤田尚志 藤森明彦 古田篤史 前川佳博 前田寛 正山堯 益田久和 松岡立馬 松崎威毅 松元二郎 真野洋 丸山昭洋 三重野通啓 三島勝 溝口和雄 宮泰介 都田康弘 宮坂義三 村上尚 麩秀磨 望月文信 本野一郎 森和彦 森健 森谷吉久

安村 阜 谷田 徹成 柳田 明男 矢吹 裕二 山内 昭八 山川 芳男 山田 隆 山田 雄彦 大和 瑞枝 山西 昇 山本 保 吉田 朗 吉村 敬治 和久真理子 渡辺 正春

機械システム工学部会 150名 (14名)

S52年機械卒業生有志 11名代表 堀三計 青戸憲一 浅沼肇 天野輝夫 新井秀雄 栗賀宏介 五十里弘 石山達郎 市川裕之 市橋丈夫 市村泰男 井清智 稲葉隆史 今井三千雄 今泉正規 今成昌文 岩崎孝一 上原敏光 宇山俊之 江口和壽 大川雅之 大崎雅之 大島茂男 大谷幸利 大塚謙一 大野泰弘 小笠原健二 岡添弘 岡本修二 尾崎幸信 小田道明 小日向敬二 柿内隆夫 柿嶋秀史 勝部能民 金平克之 神井隆三 亀山敦史 神野豊 木内徹夫 清田厚治 倉益幸弘 久利修平 桑原利彦 幸地生好 小園久光 小林俊介 小林正一 小林照武

小針 遼 近藤景人 佐伯悦二 坂田大 桜井雄介 佐藤公平 澤田孚夫 四宮節三 洪水洋一 清水文雄 新藤茂男 末木健之 須合雄孝 鈴木昭彦 鈴木年雄 鈴木宣毅 鈴木昌毅 須田和義 高岡伸明 高瀬建次 高野靖久 田上将治 瀧上紀吉 瀧口佳隆 田中明良 田中好一 田村恵祐 塚原輝雄 辻平吾 釣屋政弘 中川純也 中島規久 中川幹夫 中田泰正 夏恒 夏目浩幸 鳴海順夫 南原慶孝 新仏利仲 西澤宇一 野間口英雄 乃村善正 早川伸哉 早部哲夫 原幸一 久富東弥 平井正彰 伏見恵一 藤原要 二本敦 堀三計 堀江福男 堀之内将耶 堀部達文

電気電子工学部会 106名 (10名)

秋田正憲 浅海博圭 安藤雅生 安藤恭之 井川健二 石ヶ森久悦 稲田久 浮邊英彦 大井喜久夫 大泉隆弘 大川儀郎 大窪肇 大鳥正通 大塚淳 大西登 小木曾亨 替地修也 加賀屋信二 笠井実 加藤良夫 金澤健一 木下進 木村宗弘 久保田拓朗 栗原大輔 黒間裕昭 黄清均 小林喜一 小林勇人 五味勝 齋藤淳二 櫻井友尚 佐々木智憲 佐藤真 猿渡靖博 澤田誠一 品川隆明 篠原信一郎 島影久太郎 下道晶久 白井誠 白石秀雄 相山尚和 鈴木茂人 鈴木庸介 鈴木喜之 角大輔

諸永清文 八藤後四郎 柳下英明 柳田光由 山口立雄 山崎和也 山崎猛 山澤道夫 吉田浩司 吉田秀久 依田義人 米澤康男 渡辺和也 渡部健一 渡辺晋也 渡辺雄志 和田光章

電気電子工学部会 106名 (10名)

宗恵五 滝澤恒明 武井祐治 竹内章 武江完次 立川道雄 谷口勝 土屋知大 出口均 代表宇野亨 徳田正教 富田博 鳥海裕一 長島健二 中津不二雄 西村康司 長谷川正人 羽太嘉昭 馬場敏 林恒司 平地康剛 平山恵一 福田玲一 福山良一 古屋一雄 細川仁 前田幸一 松川洋 松崎嘉明 松本聡 宮腰智寛 宮下晴信 宮永長七 武川満 向山篤 村松康雄 茂泉修司 毛利敏 本山基彰 初山真 森秀樹 諸隈武彦 吉田一正 吉田賢一 吉田正明 吉田満 渡部幸一

応用物理学部会 42名 (3名)

荒井芳文 伊東浩 上野大輔 内山岳彦 大沢雄二 大野直次 笠井俊和 柏村圭治 勝城啓之 桂川則之 河村穰 桑田昌之 小泉幸久 佐伯尚文 作間考雄 佐々木隆幸 佐藤隆之 佐藤哲也

佐藤豊 示野竜三 庄司罔美 庄子幸樹 鈴木勲 関根朝次 高橋孝文 田代敏也 永田亨治 中村信一 中村義男 中谷浩 橋本祐也 尾藤宏光 藤江大二郎 前島研三 松浦宣行 松尾義之 松川尚弘 水城俊幸 向井雪音

情報工学部会 28名 (3名)

安達政彦 五十嵐道弘 池田裕治 伊藤丈朗 香川新 金子隆宏 河合顕太郎 小平和正 小林貞夫 近藤勝人 鈴木岳大 高木久 高橋正博 武内茂雄 千葉広隆 外川良太郎 根本秀政 藤森英明 本堂敦 水田祥泰 最上隆男 山口浩太 山口陽三 山田剛史 和田裕一

MOT部会 9名

新井信昭 井口一世 柄川俊二 鹿糠悦夫 小島真 設楽政次 堀井則孝 都田利夫 渡邊俊夫

BASE部会 5名

浅井恒雄 小宮直城 佐藤隆太

田中元治 松田亜希子

その他 29名 (6名)

安部浩 大谷義夫 木村園子 桑田大 けやきクラブ同 会長渡辺彰 小島寛明 小林節子 佐々木信光 清水本裕 少林寺拳法部 OB会 鈴木健之 千賀裕太郎 竹本菊郎 塚本良則 津田勝憲 農工大同窓・都立 高校教職員会 代表原田静男 福永保介 水谷純也 村田房子 村山登 山崎美代造 山田昭一 好田正

香川県支部 徳島県支部 高知県支部 愛媛県支部 福岡県支部 佐賀県支部 長崎県支部 熊本県支部 大分県支部 宮崎県支部 沖縄県支部

大学に寄附(平成23年3月末現在)した教職員(会員)氏名 53名

赤木康宏 安藤哲 飯村靖文 伊豆田猛 一島英治 宇野亨 近江正陽 大島浩太 大谷幸利 岡崎正規 岡山隆之 片山義博 亀山秀雄 鎌田壽彦 神田尚俊 北野克和 國見裕久 桑原利彦 額頼明伯 小柴満美子 齋藤憲一郎 齊藤美佳子 櫻田武嗣 櫻谷淳 瀬戸昌之 銭衛華 瀧田守親 田中治夫 滝山博志 千葉一裕 寺岡徹 東城清秀 殿塚隆史 富永洋一 夏恒 並木美太郎 野口恵一 濱田龍之介 馬場真知子 平澤正 星野義延 本多英一 町田登 松岡正邦 水雲智信 本橋健次 矢口芳生 山口哲也 楊宗興 横山岳 吉川正人 吉田誠 渡邊敏行 渡辺直明

「東日本大震災」の救援募金活動 終了に伴うお礼と報告

平成23年8月11日

同窓会救援募金会発起人代表

同窓会長 藤 森 明 彦

去る3月11日午後に発生した東日本大震災は世界的にもまれな巨大地震で被害の規模も大きく、更に福島第一原子力発電所の甚大な被害も加わり、未曾有の大被害を受けました。

今回の震災では、現在もまだ、大変多くの方々がつらい避難生活を送られています。

本学同窓生におきましても例外ではなく被災地において、お亡くなりになられた方、家が津波により流失し家財すべてを失った同窓生もおります。

そうした東日本大震災被災同窓生への援助の手を差し伸べる一助として、第48回の通常総会において緊急に「同窓会救援募金会」が設置され、平成23年6月～7月までの2ヶ月間募金活動を実施し、無事募金活動を終了することができました。

この間、支部長様、部会長様をはじめ多くの同窓会員の皆様には、ご協力を賜り貴重な救援募金(2,982,497円)を集めることができました。ここに厚く御礼を申し上げる次第でございます。

募金活動の終了に当って、ここに集計結果、配分額をお礼方々ご報告申し上げます。

なお、別途同窓会のホームページに掲載してございますので、ご利用下さるようお願い申し上げます。被災同窓生救援募金にご協力頂きありがとうございました。

1、集計結果

1) 東日本大震災の募金額	: 2,982,497円
2) 特別寄附金	: 899,839円
3) 一般会計予備費	: 617,664円

合 計 4,500,000 円

2、お見舞金の配分額

1) 死 亡 者	: 100,000円 (1名)
2) 自 宅 全 壊	: 1,200,000円 (6件)
3) 自 宅 半 壊	: 1,600,000円 (16件)
4) 実 家 全 半 壊	: 300,000円 (6件)
5) 自 営 被 害	: 950,000円 (19件)
6) 現役学生の実家全半壊	: 350,000円 (7件)

合 計 4,500,000円

「東日本大震災救援募金」の募金者一覧

皆様のご支援ご協力のお陰で募金活動は無事終了いたしました。

ご寄附を賜りました皆様のご芳名をお礼とともに掲載させていただきます。

- 1、平成23年7月末現在。
- 2、掲載順は、50音順。
- 3、詳細は同窓会HPをご参照ください。
- 4、敬称略。

愛知県支部 獣医・畜産部会代表

水野銚一郎
あかぞ会一同
高藤 慎一 高橋 幸資
高松信一郎 田中 治夫
長南 康正 野村 義宏
服部 次男 平山 誠
藤本 修身 増田 隆
渡辺 敦夫

S34農化卒クラス会有志代表

須田 浩行
群馬県庁他林学系同窓「樺会」
石井 久雄 井田 由夫
石井 達也 石田 博文
小此木哲雄 大塚 敏博
岡野 幸治 影澤 圭太
栗原 三郎 黒澤 勉
齊藤みづほ 坂田 春生
櫻井 正明 佐藤 淳
白銀 雄 須川 均
深澤 裕司 曲沢 修

青木 稔
青戸 憲一
秋谷 貴仁
浅見 昌敏
芦川孝三郎
阿部 修
阿部 順
安倍 玉枝
新井 眞一
新井 彦一
荒木恵美子
安斉 文夫
井草 五郎
池上 隆文
池田 隆一
池原 太一
池谷 紀夫
石井 静
石賀 義弘
石坂 隆
石田 博文
石原 睦司
市川和佳子
市村 光由
一蝶 彬
伊豆田 猛
伊東 禎男
伊東 良郎

糸数 剛
井野 圭男
井上 勝文
井上善治郎
今福 道夫
今村 成男
岩村 寛
白井 良一
白井 玲子
宇野沢正美
浦島 匡
上井 和彦
江原 孝子
遠藤 公作
大石 勇
大分県支部
大川泰一郎
大里 耕司
大島誠之助
大沼 正夫
大場 利治
小笠原義倫
岡田 春美
岡部 廣二
岡本 道生
岡山県支部
小川 益男
荻原 茲夫

小邦 徹
織田 祐示
小野宇三郎
小日向敬二
笠井 利彦
梶井 功
加瀬 正彦
勝田 謙次
加藤 泰博
門屋 一臣
印牧 正
金谷 和夫
金本 伸郎
壁谷美智子
亀山 秀雄
亀山 義夫
萱嶋 憲保
川島 長治
河村 尚徳
神田 尚俊
北原 敬悟
木村 雅俊
木村 覚
京都府支部
櫛田 靖彦
久須美紗織
國見 裕久
久野 幸三
久保田淳夫
熊切 顯夫
熊谷 夫夫
久米 賢次
久米 千智
倉島 脩二
栗原 績
栗原 三郎
暮石 裕
黒田 栄喜
桑葉くみ子
小池 洋男
瀨瀬 明伯
向後 雄二
高知県支部
合津 俊一
河野 茂子
河野 誠也
河野 威雄
児玉 満男
後藤 文次
小西 克利

小林 昭一
小堀 健司
埼玉県支部
坂内 敬
坂下 佳水
坂野 雅敏
坂野 好幸
迫田 登稔
笹原 由雅
貞松 光男
佐藤 雄治
佐藤 令一
重田 征三郎
重田 有仁
重田 好美
重松 正矩
静岡県支部
島田 昭男
清水 武
清水 康次
志村 勲
下 弘明
下田 博之
上橋 崇志
白井 邦郎
白井 幸吉
白石 郁朗
白山 持琢
菅原 博治
鈴木 彰夫
鈴木 普
鈴木 創三
鈴木 敏明
鈴木 敏信
鈴木 庸介
盛山 桂一
善林 六朗
曾根 正澄
高田 幸宏
高橋 幸資
高橋 新二
高橋 正
多川 閃
瀧上 紀吉
瀧川 桂三
竹内 道雄
竹腰 正保
竹澤 淳二
武田 弘紀
辰宮 ユミ

立石 洋見
田中 治夫
田中 浩明
田中 宏征
田中 理絵
田原 義之
玉城 武
千田 武
千年 篤
地平 寛治
帖佐 直
塚田 浩徳
塚原 健
續葛 修一
堤 正臣
寺峰 孜
土居 忠夫
同窓会事務局員一同
殿岡 修
富田 健介
友田 慶一
内藤 照章
永井 昌史
中尾 清治
長澤 幸一
中田 勝久
永留 伸晃
中村 秀子
中村 幸夫
中本 達也
中山 峯雄
百鬼 史訓
那須 康行
夏 恒
西澤 宇一
西田 晴二
西村 寿
西村 浩
西村 弘行
沼本 春樹
根立 政美
練尾 徹
野坂潤一郎
野田 憲康
野村 俊悦
野村 昌志
則武 宏一
生原喜久雄
橋田 勝明
橋本 淳二

長谷川 茂
畑中 孝晴
服部 一夫
馬場 繁幸
馬場 信行
馬場真知子
原 保治
原 忠雄
半田 清久
平澤 正
平塚 義治
平野 正雄
平野 正史
平原 敏史
平松 和彦
平松由利子
平山 武男
広瀬 正之
深水 智明
深見 博一
深谷 真一
普後 一
藤井 勉
藤井 昇
藤田 誠
藤卷 宏
伏見 宜隆
藤森 明彦
藤原 輝夫
淵野雄二郎先生の
定年退職を祝う会
淵野雄二郎
古性 和典
古野 優
逸見 玄吾
穂坂 範明
星野 清久
星野 徹也
細梅 満
堀 三計
前田 貴章
牧 佳輝
増澤 政男
増田 隆
舛谷 雅広
町山 紀郎
松井 英輔
松浦 史瑞
松永 是
松丸 勝二

三浦 昭男
三木 六男
水口 衛
溝口 和雄
御園生昭雄
ミツカン農工OB
南井 隆
皆川 哲
箕田 豊尚
宮城 稔
三宅 信行
宮崎県支部
宮野 照男
村上 博
村松梅太郎
村山 光一
廻谷 義治
轟 秀磨
茂木 則子
本野 一郎
百瀬 好樹
森近 勝行
森谷 修
森山 真久
師岡 輝夫
柳沼 泰衛
安田 勝年
安田 惣悦
山岸 一則
山岸 拓二
山田 祐彰
大和 公人
山本 明
山本 賢
山本 康哲
山本 湧藏
山本 宗興
楊 洋一
横澤 信次
横溝 富雄
吉田 紀子
吉田 康夫
依田 義人
和田 敬三
渡辺 一義
渡辺 元
渡部 壮一郎
渡邊 俊夫
渡邊 敏行
渡邊 直人

被災地（南相馬市・原発25km地点） にいて思うこと

三森 裕（生産H13）

農工大院平成15年卒の三森と申します。卒業後、福島県職員として、働いております。会津地方で勤務後、平成21年度より、浜通り地方南相馬市にある相双農林事務所に勤務し、主に園芸振興などの業務に携わっています。

このたび、「被災地の状況を伝えてほしい」とのご依頼をいただきました。福島県には大勢の先輩方がいらっしゃいます。若輩者の私ではありますが、僭越ながら寄稿させていただきます。

この原稿は7月初旬に書いていますが、あれから4カ月ほどたちました。この4カ月、さまざまなことを体験しました。一言では表せませんが、地震発生当初のこと、被害の状況、その後の街の様子、人々の様子などお伝えします。何かを感じ取っていただければ幸いです。

<地震当日>

3・11当日は、南相馬市にある事務所内におりました。経験したことのない強い揺れで、立っていることも困難なくらいでした。机の下に入ろうとしても机が滑って動いていくありさまでした。長い長い揺れがあり、さまざまなものが落ち、書庫などは書棚ごと倒れたりしました。それでもけがはなく、そのまま庁舎中庭に一時避難し、何度も来る強い余震が落ち着くまで待ちました。

1時間以上も待ちましたが、あるとき海のほうから大きな音が聞こえてきました。その時は分かりませんでしたが、今思うとそれが津波の音でした。

<地震による被害>

震度6の揺れは強烈でした。庁舎もヒビが入るなどして耐震性が落ち、一部立ち入り禁止となりました。南相馬市小高区や相馬市などの市街地の古い家屋は、倒壊したところもありましたが、全般的にみて、地震での倒壊は、意外と少なかったです。

<津波の被害>

すでにテレビ等でご存じのとおり、地震そのものよりも、津波による被害は甚大でした。海岸から数キロに及ぶ範囲で、壊滅的な被害を受けました。

海岸近くの集落は消滅し、流された瓦礫が次の家々を壊して行きました。海岸の護岸、防潮堤はもちろん、防風林も根こそぎ流されました。巨大な送電線の鉄塔も基礎から倒されて鉛のように曲がり、川の河口近くにかかる橋も、橋げた

ごと100mも上流に吹き飛ばされてしまいました。猛烈なエネルギーであったことが分かります。

人的被害は、死者行方不明者あわせて、県全体で2000人近くにのぼります。

私の職場にも親族7人を一度に失われた方がいました。また、仕事でお世話になったある農家は、津波の到達を知って、自分の車と、奥さんとお孫さん達の車と2台で逃げましたが、後方の奥さん達の車は間に合わず、次にバックミラーで確認したときには、姿が見えなかった、とのことでした。このような話が、数多くあります。

農業関連でも、沿岸部の水田が海水に水没し、塩と瓦礫まみれになったのを始め、沿岸部での営農を支えてきた各種農業土木施設（水路、農地海岸、排水機場、農道など）も壊滅的なダメージを受けました。（特に干拓地では地盤沈下もあり、その排水に農業土木部門の部署は大変苦労しました。）

また、JAのカントリーや、大型のトマトハウスなど各種大型施設も地震および津波の被害を受け、使用不能どころか、跡形もなくなってしまったところもあります。

このような被害を目の当たりにして、まずは言葉を失ってしまった、というのが正直なところ です。

<原発事故による影響>

事故の一報は、3月12日の夕刻に入りました。11日当日はそのまま職場に待機し、翌朝帰宅後（他の職員は被害確認）、そのままぐちゃぐちゃになったアパートを片付けていましたが、市の防災放送がかかり、原発で爆発が起きたことが知らされ、直ちに屋内に入ることを指示されました。

ここから、地震、津波に続く第3の災害に遭遇することとなったのです。

影響は、多方面に及び、今もお進行中です。

まずは、爆発により飛散した放射性物質による直接の被害です。このことは、その全容はまだ分かりません。実際にしばらくの間は相当量が浮遊していたと思いますし、その後も降雨等で土壌や樹木に吸着していると思います。この日から、常に線量値を気にし、さらなる事故を気にし、ガソリン残量を気にし、夜もテレビをつけて熟睡できない日々が続くこととなります。（最近はもう気にせず寝るようになってしまいましたが）また、学校校庭などの汚染も問題になり、郡山市などはこの暑さのなかでも、マスクに長袖で登下校、窓を閉め切った授業と聞きます。

農作物でも相当濃度で検出され、各種野菜等が出荷規制となりました。（今はほぼ解除となりました）また一時期は、水にも検出され、東京でも問題になったことは記憶に新しいかと思います。

次に、避難指示等による避難の実施と、区域分けによる地域の分断です。第一原発より20km圏内は「避難指示区域

（のちに警戒区域）」として強制的に避難、30km圏内は「屋内退避区域（のちに緊急時避難準備区域）」として、自主避難を勧め、緊急時には常に避難できる者のみの居住が許される（病人や子供などの居住は望ましくないとされる）地域となり、これに加え、より環境放射線量が高く、累積での被ばく量が高くなると見込まれる地域が「計画的避難区域」として、やはり避難すべき地域となっています。また、最近では、スポット的に線量が高い地域で、戸別に避難勧奨を行う「特定避難勧奨地点」というものも設けられました。

これらの設定により、双葉郡の市町村はほぼ全域が避難指示の対象となり、南相馬市は全種類の区域指定を抱え込む状況となりました。南から、概ね、小高区が警戒区域、原町区が緊急時避難準備区域と一部計画的避難区域、鹿島区が指定なし、といった状況です。

私が住む原町区は、原発から25km地点にあり、この区域指定のなかで、宙に浮くこととなりました。

市長の方針で、当初はできうる限り市民を避難させました。これにより、7万人いた人口は一時1万数千人までになりました。原町区に限って言えば、人々は避難し、ほとんどの商店が閉まり、私のアパートも私1人になり、まるでゴースタウンと化しました。警察と消防、自衛隊の車しか見かけなくなり、街には、避難した家で放した犬たちが群れをなしていました。

そうした中、食糧・ガソリンがなかなか手に入らず、しばらくは職場で炊き出しをしていました。屋内退避区域ということで、あらゆる物流がストップし（業者が社員の安全確保のため、トラックを入れない）、孤立したためです。それでもしばらくして、自衛隊による物資が届けられるようになり、当初、ご飯にゴマ塩だったのが、サバ缶が来た時にはものすごいごちそうに思えました。（今は、一部大型チェーン店を除き、ほぼ物流は復活しています）

また、「屋内退避」の指示により、津波被災地の搜索活動も思うように進みませんでした。ようやく本格的に行われたのは、4月下旬になってからだと思います。それまで、おそらく数百以上になる亡骸が、そのまま放っておかれることとなりました。

その後、屋内退避指示が長引く中で、徐々に人々は戻り始め、結果現在は半数程度の市民が戻ってきています。これは、避難先にいつまでもいられないという事情と、少しでも働ける者は働いて、日々の糧を稼がなければならないという事情からです。父親だけ戻って、他の家族は避難したまま、という「逆単身赴任」世帯も多々あると聞きます。国の指示は、あくまで「自主避難」であるがゆえに、きちんとした生活の保障が示されぬままであったから、とも考えます。

こうして、現在は、見た目少しずつもとの街の様子を取り戻しつつありますが、原町区は学校が閉鎖されているこ

ともあり、若い世代の住民は少なく、経済活動も低迷しています。とある商店では、通常時の3割の売り上げにしかならない、と言っていました。

南相馬市原町区はこのような状況ですが、戻れるのか、それがいつになるのかさえ分からない小高区や双葉郡の8町村、今になり避難を強いられている飯館村やホットスポットに当たる世帯があり、未だに混乱しています。

<農業における影響>

原発事故の影響は、産業界の各方面にわたっています。直接的に生産物に現れる農業はもちろん、各種工業、観光業への影響も測り知れません。

ここでは、自分が仕事で関わる農業について、少し記します。

原発の地元である、双葉郡においては、ほぼ全域にわたり、農業は再開できずにいます。

この地域は、梨や畜産などが盛んな地域で、去年は、新たな試みとして、梨やカボチャを香港・上海に輸出するなど、これからの発展が期待される地域でした。

それが、目下全く再開の見込みは立てられない状況です。

一方、かろうじて一部営農できる相馬地域においては、事故後、国の指示のもと、県はすぐに生産物のモニタリング調査を開始しました。「想定外」の出来事のため、基準値さえ無いなかでの調査でしたが、やがて暫定基準値が設けられ、それにより、出荷の規制等を行うこととなりました。

野菜や牛乳で初めに超過が認められ、しばらく数値を超えていましたが、現在は落ちつき、ほとんどの品目で解除となりました。

一方、作付の制限という点については、水稻で示されているのみです。警戒区域・計画的避難区域・緊急時避難準備区域等の地域と、土壌のセシウム汚染濃度が5,000ベクレル/kgを超えるところは制限となりました。

これを受け、南相馬市は、指定外の区域も含め、市全体で水稻の作付制限を行うこととしました。

ただし、野菜その他については、土壌汚染と生産物の関連について、研究上の知見が無いとの理由から、国から作付の制限指示は出されませんでした。

野菜や果樹については、生産物のモニタリングを進めていくとともに、これから収穫となる穀類についても、調査を進めて、安全の確保をはかっていきます。

しかし、すでに、福島産についての、風評被害は起こっています。値段がつかない、注文が入らない、売れない、といった状況が起きています。この状況をなんとか改善していかなければと思います。

畜産については、また別の問題があります。

酪農家については、生産した牛乳がしばらく出荷できず、しばらくは廃棄する、という日々が繰り返され、とてもつらい状況におかれました。生き物であるだけに、えさなど、収入はなくても経費はかかります。

肉牛についても、資産価値が高いだけに、その牛が売れるか売れないか、は大変な問題で、廃業に追い込まれた農家も少なくありません。

また、事故後、警戒区域に指定されても、家畜の世話を残っている農家が相当数いました。家畜の避難先を確保し、移動させる、という作業が行われました。

しかし、警戒区域内で、それが十分にできなかったところにおいては、野良牛、野良豚という新たな問題も生まれました。（動物愛護団体が逃がしたとの説もある）特に豚については、空家に侵入し、中を荒らすという問題があり、現在市町村とともに、捕獲作業を行っています。

<今後に向けて>

以上、雑駁ながら、現状について、ほんの一場面の切り取りにすぎませんが、記させていただきました。

地震・津波に加えて、放射能の問題が、福島県の復旧・復興の足かせとなっています。

現地に立ったとき、なかなか、圧倒的な現実、前向きな思考になれない、という気持ちもあります。しかし、ここであきらめてしまっただけでは、何も前に進めない、何か光を探していかななくては、と思います。

本当であれば、農業も含め、県全体をどのように立て直すか、という視点から、自分なりの意見を書ければよいのですが、正直、そこまでの思考ができていません。

農業に関していえば、試験研究の分野では、塩害の対策、放射能除染対策について、取り組み始めました。これは、とても大切なことで、しっかり進めていくべきと考えています。

私のいる行政では、農産物や土壌のモニタリングに協力し、その結果を広くお知らせすること、復旧に取り組めるところは、それを推し進めていくこと、さらに、10年後20年後、あるいは100年後を見据えて、どうしたらまた農業を再開し、次代へ引き継いでいけるか、その具体策を考えていかねば、と思っているところです。

実は、本年度から始まる県の大型観光キャンペーンのキャッチフレーズが「ホッとするふくしま」でした。いまは、ホッとする、からはまだ遠い状況です。

仕事でも、半ばパニックになった方から、さまざまなお叱りの電話などを受けることが、たびたびあります。

皆さんが、「ほっと」できる福島県にしていくこと、そのために、長期戦とはなりますが、踏ん張っていかねばと思います。

<みなさま、そして母校へのお願い>

この場をかりて、皆様をお願いしたいことがあります。

それは、福島県のこと、福島県で起きていることについて、ぜひ、今後とも関心を寄せていただければ、ということです。

4月初旬に、ようやく少しの休みがとれたので、実家（東京）に行きましたが、東京はほぼ普通の生活を取り戻して、テレビも通常通りの番組、災害があったことがすでに過去になりつつありました。

通常どおりの生活ができる場所は、どんどん、そのようにしていただければと思います。しかし、そうでないところがある、ということをごくどこかで覚えていただければと思います。

今回のようなできごとが、ご自分の住む街で起きたらどうだろうか、ということをご想像していただければ幸いです。

うまく本文に織り込めませんでした。地震・津波だけの災害であれば、福島県も復旧・復興に向けてもっと動けていました。

しかし、原発事故が、私たちの生活のあらゆる場面で「分断」をもたらしています。家族の、地域の、世代の、産業の、気持ちの、さまざまな分断です。その分断が、復旧を遅らせていることは、事実かと思えます。

そのことを、少し想像していただけたら、私たちが今経験していることは、将来に向けて、決して無意味ではないのかな、と思います。

関心を持っていただきたいということは、母校農工大に対しても思えます。

現地にいて、農工大の名前はほとんど聞きません。

これは乱暴な物言いで、失礼を承知ですが、この未曾有の災害に対し、あまり関心が無い、ということでしょうか。

農工大の強みは、農学部と工学部がともにあるということにあると思います。

特に放射能については、全国の研究者ほとんどが専門外、かと思えます。逆にいえば、データは取り放題でもあるかとも思えます。

研究の世界について、私のような者が口にすべきではないかもしれませんが、実学を謳う農工大の卒業生としては、若干さびしい思いもあります。

長期戦になりますから、ゆっくりでもいいので、実際に研究に取り組むかどうか別としても、社会科学も含めたあらゆる面での課題について、関心を持っていただけたら、と思います。

今後とも、福島県を、東北をよろしく願います。

「救援金を受け取られた同窓生からのお礼の言葉」

この度は、同窓会員の皆様のご厚情を賜り、一昨日見舞金を頂戴し誠にありがとうございました。

頂戴した見舞金は、被災した両親の生活の一助とさせていただきますつもりです。

また、今回のことをきっかけに、東京農工大学の卒業生であることを誇りに思い、岩手の農業の再建と更なる発展に、現在の仕事を通じて少しでも貢献できるよう、自分にできる精一杯の努力をしていこう、と、気持ちを新たにいたしました。

母校のより一層の発展を祈念しつつ、乱文乱筆ながら御礼を述べさせていただきます。岩手県在住 Iさん

前略

このたびの東日本大震災に際しまして、心のこもったご支援、ご援助賜りましてまことに有り難うございました。厚くお礼申し上げます。

かつてない未曾有の大惨事で私が住む大槌町は、市街地が壊滅し、町長や役場職員も多数犠牲となりました。我が家は大規模半壊となりましたが、幸い我が家は家族4人も無事でした。現在は一階を修理し、どうにか元の生活にもどりつつあります。

一緒に仕事をさせていただいた方々、友達やその家族、多くの方が亡くなり、震災当初はどうすれば良いのか分からず、被災地にながら何もできないことに歯がゆさを感じました。今もできることは少ないですが、皆さまに支えられ復興に向けて進み始めております。

私一人の力はちっぽけですが、全国の皆さまのご支援に感謝し支え合い、助け合いながら前を見て頑張っていきたいと思えます。

本当にありがとうございました。略儀ながらお礼のごあいさつとさせていただきます。草々 岩手県在住 Fさん

残暑お見舞い申し上げます。

この度は、東日本大震災の被害に対し、心温まるお見舞いのお言葉と皆様からの沢山の貴重な義援金を賜り誠にありがとうございました。

過去、現役当時の赴任先でも幾度か大きな地震に遭ってきましたが、今回はそれまでの経験を遙かに超える時間の長い激震で建物と家財に甚大な被害を被ることになりました。

今なお、連日連夜の余震でまだまだ落ち着かない日々ですが、私どものこともさることながら、今回の東日本大震災では多くの方々が犠牲になられたことを思い、地域の一日でも早い復興に向けて微力を尽くしていきたいというのが今の偽らざる心境であります。皆様に対する感謝の気持ちを十二分に言い尽くせないもどかしさを感じますが、皆様のご厚志の意をくみ取り義援金は大切に使用させていただきます。

この度は、お見舞い誠にありがとうございました。宮城県在住 Kさん

この度のご厚情には心より深謝申し上げます。

仙台市内は比較的順調に復興が進んでいるように思います。当院もほぼ平常通りの仕事ができるようになっておりますが、津波の被害にあった地域においてはまだまだ、復旧・復興には多くの時間と労力が必要とされると思われまます。機会がありましたら是非一度お足をお運び頂ければうれしく思います。この度はお心遣い頂き、誠にありがとうございました。宮城県在住 Sさん

前略

先日は救援金の御送付を頂き、思いもせぬことで驚きましたが、同窓の皆様の暖かいお心とご支援と、ただただ感謝しながら受け取らせて頂きました。誠にありがとうございました。

被災の状況は厳しいものでございましたが、現在はほぼ元の状況に復し、日常が戻ってきております。

獣医師として、石巻や南三陸へ、現在、動物救援活動に参加しております。

復興への道は、遠く感じられますが、ご支援を心より感謝申し上げます。宮城県在住 Sさん

前略 東北地方太平洋沖地震、その後の巨大津波被害に際しましては、同窓会より過分なる義援金をいただき、ありがとうございました。平成23年3月11日大震災発生から5ヶ月が経過しました。自宅のあった南相馬市鹿島区烏崎地区は、壊滅的な家屋流失(135戸中123戸)の被害を受けました。

さらに、福島第一原子力発電所事故により、当地区は緊急時避難準備区域に指定され、津波被害・放射能被害の二重苦となり、放射能汚染が心配され、将来の希望が見出せない日々でした。

自宅は、流失しましたが、幸いにも家族の者は、怪我もなく無事でした。現在、仮設住宅、借家、独り暮らしなど家族バラバラな生活をしております。

今は、避難生活ですが、原発の放射能、津波被害から一日も早く復興できるよう、家族皆で力を合わせて頑張ろうと話しています。

まずは、近況のご連絡かたがたお見舞いのお礼といたします。末筆とはなりましたが、皆様方もくれぐれもお自愛ください。早々 平成23年8月16日 福島県在住 Aさん

謹啓 東日本大震災のお見舞金として、8月12日に金10万円を拝受致しました。

このような多額のお見舞金を頂戴致しまして、誠に有難く心から厚く御礼を申し上げます。

大学を卒業してから半世紀も過ぎておりますのに、未だに同窓生としてこのような恩情にあずかれますことに、感激も一入でございます。有効に使わせて戴きます。

私の近況でございますが、漸く来週の8月22日に屋根瓦の修理が始まるのが昨日確認できました。台風の到来前に工事のメドがついて、ほっとしております。

ただ、未だに毎日のように余震が続いておりますので、夜はパジャマに着替えることなく緊急時に備えております。

3月11日の郡山市の震度は6弱でした。自宅のお墓の石碑なども倒れたままです。屋根瓦は材料や人手の関係で、また墓石などは業者の処理数の多さなどで時間がかかっている訳でございます。しかし、今回は地域の多くの人の達の復旧課題でもありますので辛抱して頑張ろうと思っておりますが、これらの一日も早い解決こそが、同窓会皆様の御厚情に報いることであると存じます。

尚、これから先、別の地域で同じような震災が起きた場合には、心からのお手伝いをさせていただくべく肝に銘じておりますことを申し上げて、御礼のことばとさせていただきます。敬具 福島県在住 Sさん

前略

この度は、東日本大震災に障り、東京農工大学同窓会の皆様よりお見舞を頂き、心より大変感謝申し上げます。

去る、3月11日の平安時代以来の大地震、大津波、それに伴ない福島第1原子力発電所の放射線事故を起し、3倍の被害を重ねてしまいました。

特に放射線事故は、私達、科学に関係したものとしても、歴史上初体験の出来事です。

今、これらに立ち向かい、なんとか早く、正常な生活にもどすための努力をしております。

私どもの、学校も、半壊状態の修理や放射線の中での、学生生活の正常化を図っている所です。

この様なときに、心強いご支援を頂き、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

皆様からの御支援をバネに、これからも一層がんばっていきたく思っております。

これからも、全国からの同窓会の皆様の心の支えの御声援で、早く立ち直ることが皆様への心よりの感謝の標になると考えて、努力しておりますので、よろしく願います。

ここに、お礼の手紙とさせていただきます。草々 福島県在住 Iさん

同窓会救援募金会様より、過分なるお見舞いを頂きましたこと、謹んで感謝申し上げます。

私は、3月11日の東日本大震災により、地震及び原発事故により住居(福島県双葉郡双葉町)を離れ、福島県耶麻郡猪苗代町の避難所に避難しております。

一時帰宅した家は傾き、再び元のように生活するには、問題が大きすぎます。

幸いなことに家族は皆無事で、私は現在仕事をしております。

(三井物産プラントシステム(株)) 以前のように落ち着くには、かなりの時間が必要のようです。
同窓会皆様のお気持ちに比べられますよう頑張りたいと思います。
この度は誠に有難うございました。 福島県在住 Mさん

拝啓
このたびは心のこもった温いお見舞いを頂きまして、誠にありがとうございます。私達の事を気にかけて下さる皆様がいらっしゃる事を知り、大変に心強く思いました。
心より御礼申し上げます。 敬具
千葉県在住 Mさん

この度は思いがけずお見舞いをいただきましてありがとうございます。
3月の地震では、自宅が内陸部にあるため、津波の被害は幸い受けませんでした。しかし、水道が止まり、ガソリン、日用品、食料なども手に入らず、原発の事故も情報が不確かで精神的にも大へんでした。
自宅 蔵 その他の建物に大きな被害が出ましたのは、4月11日12日の地震によるものです。今は生活も元に戻りつつあります。ただ、まだ放射能の農作物に対する影響に不安があり農家にとってはまだまだ気の休まらない日々が続くと思います。
大学時代の友人達は何人かわざわざ自宅までお見舞いに来てくれました。
大へんな被害を受けましたが、人の温かい思いに触れ大きな力をもらったと思っています。
東京農工大学同窓会救援募金会にご支援いただきました皆様にも感謝の気持ちを伝えていただけましたら幸いです。
本当にありがとうございます。 福島県在住 Nさん

残暑お見舞い申し上げます。
このたびの東日本大震災にあたり、被災会員への支援活動として義援金募集活動を行って頂きかつ、御見舞をお送り頂きましたこと、心より感謝申し上げます。誠に心の支えとなりました。
被災いたしました自宅マンションの復旧工事も、この9月より始められる目途が立ち、3月の完成を予定しています。
避難地の移動や整理の関係で、連絡が遅れました事、お許し下さい。
また、義援金をお寄せいただきました方々へよろしくお伝え下さい。 福島県在住 Aさん

拝啓 東京農工大同窓会々員の皆様には大過なくお過しのこととご拝察申し上げます。
この度の震災に関しましては、救援募金会まで設置していただき、私のような末端の一会員にまで義援金を配分していただきましたこと、大変ありがたく心より御礼申し上げます。
今回の震災を通して何よりも残念であったのは、10年もかかってようやく完成した1ha区画の汎用ほ場124haが、1年も使わないうちに海水をかぶって全滅してしまったことです。放射能汚染と相まって、集落のコミュニティーも全滅してしまいました。今は震災から5ヶ月が経過して、少しずつ復興のきざしが見え始めたところです。
歩みはのろくとも、始めればいつかは終わるものです。皆様の善意を無駄にせぬよう、一步一步復興に向けて努力を積み重ねて参ります。
皆様のご多幸をお祈り申し上げます。 敬具
福島県在住 Nさん

残暑御見舞申し上げます。
此の度は東北地方災害の被災者に対し多額の義援金を賜り、深く感謝申し上げます。海岸より10kmの所に住んでおりましたが、100年以前から津波の体験はなく、今だに悪夢を見ている気持ちから抜け切れません。幸いにも人災がなかったこと、何よりと思うだけです。
すべてを失い、ゼロからの出直しですが、同窓会の皆様方の御厚意を支えにがんばって参ります。
本当にありがとうございます。 福島県在住 Aさん

心温まる義援金を頂きありがとうございました。
家の解体は出来るだけ早く、やりたいと思っております。
募金を頂いた皆様によるしくお伝えください。 岩手県在住 Uさん

前略 この度は、思いがけないお見舞いのお心遣いありがとうございます。ありがとうございました。
東日本大地震のあとの大津波により、宮古市内中心部はほぼ1.5mの海水(泥水)につかり全壊、大規模半壊で、親戚、知り合いでも犠牲者が多数ありましたが、幸いにも私の家族は避難して無事でありました。
宮古の自宅も大規模半壊でしたが、ヘドロ状の泥が入り込み、家具家財、電気製品、書籍等全て失われ、手の付けようがない状態でした。
災害発生当時は宮古保健所勤務であり、3月末の定年退職まで災害対応、復旧の公務に目いっぱい勤めましたが、その後は個人として実家や親戚の災害復旧の手伝い等もあり、なんとか生活できるまでには3カ月以上を要したところです。
今回の災害では在勤中においても全国からの多大なる物的、人的支援をいただくとともに、個人的にも親戚、友人のほか皆様から激励、ご支援を賜りまして、皆様の御厚情に感謝いたしているところです。
さらに同窓会の皆様から過分なる義援金を賜ることになり、厚く御礼申し上げます次第です。
後片付け等の残務処理に追われ、御礼が今日まで遅れましたこととお詫び申し上げます。 岩手県在住 Hさん

前略 この度は過分な見舞金を頂戴し恐縮しております。今だに大きな余震があり、落ちつかない日々ですが、内陸部はほぼ日常を取り戻しています。
皆様のご健康をお祈り申し上げますとともに心より御礼申し上げます。 草々
宮城県在住 Oさん

今日は。
この度は震災に対して多大なるお心遣いをいただき、誠にありがとうございます。
大学を卒業してもう30年にもなろうとしている今改めて大学の4年間をともに過ごした皆様の絆に感動しています。
こちらは未だに余震によって、不安な生活を送っていますが沿岸部に比べればまだまだ……。
残念ながら教え子やそのご家族の中にも津波によって命を落とした人もいます。残念でなりません。
教え子の中にはまだ避難所にいる人も多く、何とか仕事に行っている状況です。
かつて勤務した七郷中学校は津波で荒浜地区がほとんど失われてしまいました。
普通の生活に戻るにはまだまだ時間はかかるかと思えます。
学校の方も、地震により壁が落ちたり、ガラスが割れたり屋上の高架水槽に穴があき水が出ない状況でした。やっと、4月18日からスタートしました。
3月11日に続き4月7日の余震で2度後片付けをしました。半年が過ぎ、やっと少し落ち着き、学習発表会なども何とか行うことが出来ました。
家の方はかろうじて津波の被害を逃れましたが、屋根が壊れ、応急処置はしたものの直すまでには時間がかかりそうです。家の中も亀裂が入ったりしていますが何とか生活しています。
楽天やベガルタの活躍となでしこジャパンのワールドカップ優勝等の明るい話題で、少しずつ元気を取り戻しています。とは言っても、沿岸部はまだ大変ですが……。
今回皆様から頂いた志は、屋根の修理代等にに使わせていただきます。本当に感謝、感謝です。とにかく今やれることを頑張っていきたいと思えます。
本当にありがとうございます。 宮城県在住 Aさん

たくさんのお礼状を頂きました中から、一部をご紹介させて頂きました。
(平成23年9月末現在)

叙勲受章にあたり

叙勲受章の栄に浴して

本多 正二（製糸S32）

平成22年秋の叙勲で、地方自治功勞により瑞宝双光章を授与されました。予期せぬ受章に驚き、また感激しました。私はこの受章は私独りのものではなく、永年共に仕事をしてきた仲間を代表して戴いたものと思っています。先日はこの受章の叙勲祝賀会を土木部OBの仲間が多勢集い盛大に開いてくれました。仲間に対し心より感謝し大きな感激を受けました。県庁在職中の仕事について職歴を通して振り返ってみたいと思います。私は農工大に昭和28年4月に入学し、昭和32年3月に卒業しました。卒業当時は鍋底と言われる程の大不況で就職難の時代でした。大半の卒業生は確たる就職先も決まっていなかったように記憶しています。しかし、それ程深刻にも考えていなかったように覚えています。私は郷里長崎に帰り就職しようと決意しました。帰郷して間もなく7月に県南部地方に未曾有の集中豪雨があり、特に諫早市は市内を貫流する本明川の氾濫により数百人の死者を出す大災害となりました。県土木部は、この復旧事業のため多数の土木臨時技術職員（土木部長辞令）を採用してその対策に当ることになりました。私もこれに応募し幸いに採用され島原半島に設置されたばかりの島原土木事務所に勤務を命じられました。これが私が専門違いの土木の世界に入ったきっかけです。昭和32年の9月でした。基本となる測量から土木工学、橋梁工学等の参考文献を職場の上司からいただき現場での指導もされました。2年程経つ頃には、何とか土木の技術補助員としての役目を果たすことが出来るようになりました。勉強と現場での実習が続く毎日でした。自分が設計した図面が現場で形になり完成することの楽しみを覚えました。この頃、私の人生に対する方向が決ったと思っています。県の土木技師の任官試験に合格して正規の長崎県職員になりました。30才になっていました。この時代のすべてが、その後の私の県土木技師としての原点となっています。勉強と苦勞の連続でした。県土木部には、10の地方機関がありますが初めての転勤辞令は県都長崎土木事務所の道路維持補修係長への抜擢でした。昭和44年の長崎国体の年で道路整備が交通対策としての重要な仕事となっていました。昭和46年には、本庁土木部道路課の維持補修係長に就任し県全体の道路維持計画の見直しに取り組みました。昭和50年には、道路課の企画調査係長として、県内幹線道路網の計画に取り組み県内道路のネットワーク作りに盡力しました。昭和52年4月初めての離島勤務を命

じられました。県内土木の地方機関では対馬、壱岐をはじめ五島上、下の4つの離島地方機関があり上五島地区の有川土木事務所建設課長の辞令でした。当時この地区では上五島空港、青方ダム等の大型プロジェクトが計画され、特に上五島空港建設は県の重要なプロジェクトとして注目されていました。2年間の勤務で着工までの軌道に乗せることが出来ました。昭和54年4月には長崎土木事務所の道路課長となり、昭和56年4月本庁土木部道路維持課の技術課長補佐の辞令をうけました。昭和57年7月23日には、長崎地方は3日間にわたる集中豪雨におそわれ坂の長崎は土石流の発生と、市内を流れる中島川の氾濫により299名の死者を出す大災害となりました。また長崎市内に通じる道路は全て被害をうけ一時孤立状態になりました。県内の交通状況の把握とその対策に指導的役割を果たすことになりました。昭和58年4月大瀬戸土木事務所長に就任。昭和60年4月には道路畑の私が本庁土木部港湾課長に異例の抜擢されました。本人は勿論のこと周囲も大変な驚きでしたがその後の3年間は私の行政手腕が問われる試練の期間となりました。長崎県は港湾県として5つの重要港湾をはじめ数多くの地方港湾を有しております。当初、成功した港湾企業会計により工業団地造成は時代の推移と共に未売却地として残り県の大きな負担となっていました。大変な苦勞と努力の末、解決出来た一つが針尾工業団地、現在の観光スポット、ハウステンボスです。また県都長崎の都市再生計画の先行プロジェクトとして、長崎港の機能の見直し計画を策定し、大型観光船の接岸施設と共に市民が水辺に親しむことが出来るシーサイドパークを造ることにしました。現在、水辺の森公園として立派に完成し市民に親しまれています。昭和63年4月土木部次長に就任。平成元年4月土木部長に任命されました。長崎県土木行政のトップとして県勢発展のため盡力し57才で勇退。33年間の県庁勤務を振り返って無事に終えることが出来たのは、ひとえに知事をはじめ共に仕事をしてきた仲間のお陰げだと心から感謝しています。最後に農工大学生の活躍をご祈念申し上げます。



府中の学生生活が原点

真柴 孝司 (林S38)

平成21年春、昭和38年林学科卒業の同級生が、唐沢演習林に全国から集合し、山火事跡地に桜を植栽しました。そして、当時の看板娘が看板オバアサンになっている（客もピチピチ学生からオジイサンですが）居酒屋‘すずめ’で学生気分さながらにさわぐ楽しい時を過ごしました。この私たちのクラスは、毎年、全国各地にいる同級生の在住地を持ち回りにして同級会を行っています。さらに、関東地域では年4回のゴルフコンペを楽しむなど、人生を豊にしてくれる楽しい仲間であります。

このすばらしい友人を得ることになります。当時はのどかさ抜群の東京農工大学林学科を昭和38年卒業し、農林省林野庁に入庁しました。30年間の農林省勤務は、国有林関係業務がおおむね半分で、福島県庁勤務も含め民有林行政への従事が半分でありました。最後の勤務が林業講習所（現 森林総合研修所）所長であったことが、今回、瑞宝小綬章受章に浴することになったものと思います。

叙勲受章式の当日、お互いが農林省在職中は会うことがありませんでした同学年の金谷和夫さん（獣医学科卒業）と会いがけず同席いたしました。懐かしく学生時代・農林省時代の話や現況などの雑談に話が弾み、皇居での受賞者集合写真も並んで撮影されるなど、長い1日の日程も短時間の感覚で終了しました。

農林省林野庁において従事した業務を思い起こしますとき人間の忘却機能はよくできているものだと感じます。戦闘的な全林野労働組合との交渉や日米木材関税交渉などの苦闘の思い出は次第に意識から薄れていくのに対し、遺伝学の進行と一体的に発展を図ろうと5つの育種場を林木育種センターとして統合させた時あるいは酸性雨の全国一斉調査の予算記事が朝日新聞の一面に掲載された時などの喜びの記憶は鮮明でして、人間というのは都合よくできているものだと思っています。

島国である日本は、国土の中央部に森林があり、周辺部に人間が住む都会があります。森林、とりわけ最も奥地に位置する国有林を仕事場とする私にとって、仕事場に赴くのに少し寄り道も考えれば、多くの地域を丁寧に見て歩く機会に恵まれていました。しかし、日本全国を出来るだけくまなく訪れるためには、海側が問題です。そこで、海側について2つの目標を設定しました。1つは主な岬は訪れる。2つは主な島は訪れる。これも訪れるのに少し寄り道も考えれば、丁寧に見て歩くことになるというものです。岬は鹿児島県大隅半島の佐多岬で予定は終了し、島は小笠原を最後に完了したと思っていたのですが、とんでもない島が残っていることに気がつきました。淡路島です。近々に訪れたいものです。

一方、自然豊かな星、青い地球に生を得たのですから、出来るだけ多くの美しい自然と接したいと考え、自分なりの目標

を設定し訪れることにしました。

世界4大フォール

北極に最も近い北米アラスカのバローとヨーロッパのグリーンランド（オーロラも）

南極に近い南米のパタゴニア、アフリカのケープタウン、オーストラリアのタスマニア

エベレストと陸地で海拔-350メートルの死海

珊瑚の海

等々なのですが、こうした自然探訪の旅は年齢とともに体力的にいささかきつくなってきました。今後は人間が創生した文化に着目した海外旅行に変更しなければならないでしょう。

東京農工大学を卒業して50年、自分の関心事や興味を追いかけつつ、健康、仕事、家庭など私の人生を築いてきた原点は、府中駒場の大学時代であると幸運に感謝するとともに、残された人生も気楽に謳歌したいと考えております。



同窓生からの寄稿

同窓会の森（分収林）で樹木学実習

渡辺 直明（林S51）

東京都八王子市の裏高尾には約7haの同窓会の森があります。八王子市の市有林で、同窓会の先輩諸氏が植栽、下刈り、間伐の管理をしてきました。最終的に伐採するときに収益を市と折半するという契約—分収林契約を結んでいるので、現在の管理者は同窓会ということになります。しかし、昨今の材木価格は昭和50年台に比べると1/3から1/4にしかありません。そのため伐採を遅らせ、契約を延長しているところです。

暗い話はさておき、この森の一番高い場所としては高尾山のハイキングコースの城山茶屋、標高670mから5分ほどで尾根側の端に辿り着きます。下の方の端は京王バスの終点、小仏停留所から40分くらいです。但し、こちら側には道らしい道はありません。普通のアプローチは日影バス停になります。健脚なら1時間で尾根側の端に到着できるでしょう。

22年度からこの森の番人を仰せつかった私は12月5日に学生3人とこの森の境界を刈り払いしてきました。地域生態システム学科の堀口君、宮崎さんと応用生物科学科の笠原君の3人です。学生達は健脚なので高尾駅北口を8時32分発のバスで出発して10時過ぎには城山茶屋に到着しました。まずは、富士山を背景に記念写真です（写真1）。刈り払うと言っても、最終的な間伐は終わっていて、隣接の森林も同じくらいの林齢なので、特に茂っている訳ではなく、境界杭を確認しながら時々、支障になる木をナタで切ればいい程度で初冬には丁度良い作業です。苦労したのは境界の石探しです。角柱なので分かり易いのですが、かなり土に埋まっているものがあり、場合によっては完全に頭が埋没していたものもありました。少々手間取りましたが、暗くなる直前には下山できました。



（写真1）

この時、この森を眺めて樹木学実習に使えると考えました。この実習ではアチコチの森で枝葉を採集して標本を作り、最終的には枝葉だけで同定できることをめざし、実習なのに成績は

試験で決まります。しかし、問題が一つあります。標本用の枝葉を採集できる場所が少ないことです。高尾山は府中からも近く、森林植物は豊富なので大変良い場所ですが採集は困難です。森林管理所の職員の方と一緒に、ハイキングの人々から白い眼で見られ、「森に入り込んでいる。」などと糾弾されたこともあります。

というような事情から、今年になって5月23日に実習で同窓会の森に行ってきました（写真2）。この日は大雨の予報で実施するかどうか迷いましたが、直前の雲の動き情報から大丈夫だろうと考え、入山しました。結果的には小雨で済み、40種くらいの標本を採取できました。照葉樹林とブナ林の植物が混在するのが高尾の強みです。他の実習地では少ないコバノガマズミやシラキ、ウラジロノキなどが採れたのは有り難かったのですが、同窓会の山はスギ、ヒノキの人工林ですが、林床にはハナイカダ、クロモジ、ウリノキなどが目立ちました。城山茶屋で解散したら学生の下山は早くも40分後くらいには日影バス停に着いたようです。私は10分遅れ。私の歩く速度が速いというクレームが学生から出ることがありますが、事実でなく、労ってくれていることがよく分かりました。



（写真2）

同窓会の森は色々な角度から使えると思われます。契約期間の間にご利用されることを提案いたします。例えば、環境教育や森林ボランティアの実施場所としては便利でしょう。豊富な森林植物があることから、この秋には昔に使われた簡素な工芸品などの素材について解説する講座を予備的に開いてみたいと考えていますので、興味がある方はご連絡下さい。

33年ぶりの母校

岩本 隼人（農S54）

東京農工大学農学部農学科を卒業し、農林水産省に勤務して33年目となります。農林水産省ではポストの異動が平均2年で

実施されており、その一環として今、東京農工大アグロイノベーション高度人材養成センターに特任教授として来ております。

今年の3月、突然、人事担当から、農工大に前記ポストがあり面接を受けてみるという内容の電話を受けました。調整の結果、3月14日（月）の午後に面接がセットされましたが、当日は、3月11日の東北大地震の影響で、京王線が不通ということになってしまいました。さてどうしようかということとなったのですが、結果的に、自転車で1時間かけて農工大と自宅を往復することとなりました。また、帰りにはスーパーに寄りペットボトルを自転車の籠いっぱい仕入れるということもありました。

面接の結果がよかったと自分では勝手に判断しているのですが、何とか3月中に話がまとまり、4月から今の部屋で業務を開始しました。スーツ姿で自転車に乗り仕事場になるであろう所に行ったわけですが、この初めての経験でスタートしたということに象徴されるように、これまでに味わったことがない雰囲気の中で職業人としての毎日を過ごしています。学校自体は、30年前と比較して大きく変わったところ、ほとんど変わらないところ様々ですが、その報告についてはまたの機会ということにして、今回はアグロイノベーション高度人材養成センターについて触れてみたいと思います。

当センターは、平成20年6月に設立され、博士後期課程学生とポスドクを対象に、イノベーション創出人材を養成することを目的としています。簡単に言えば、企業で役に立つ博士人材の養成ということとなります。学生のコミュニケーション能力の向上及び学生と企業との接点の提供が業務の2本柱になるのですが、「世の中に貢献できる力のある博士を養成する」とすり込んだ名刺を持って、企業や大学を訪問する毎日を過ごしています。

東京農工大学の特徴の一つは、これまで四半世紀に渡って、全国18大学で構成される大学院連合農学研究科と密接に連携して博士人材の養成を行ってきたことだと考えていますが、当センターはこの基盤の上に立ち、さらに全国の国立、公立、私立大学を含めた、全国の農学系学生から公募により、養成対象者を選抜しています。

今年度は、春期実施分として、5月25～27日の3日間にわたり、全国より23名が参加して「アグロイノベーション戦略研究ワークショップ」を開催しました。ワークショップでは、東日本大震災の被害地域が広範囲に及ぶとともに、その多くが農漁村であり、過疎化や高齢化が進みつつある地域であること、災害復興に当たっては、地球環境や日本経済が抱えている課題を解決するという視点からの取り組みが求められていること等を考慮して、今後の新しい食料・農業・農村政策の魁となるような震災からの復興策を、4グループに分かれて討議し政策提案としてとりまとめを行いました。そして、最終日には、農林水産省で実際に政策を企画立案している担当課長に講師として参加してもらい、政策討論を行いました。

博士人材に研修の機会を与えるということでは、実際に企業に出向くことが最良の方法であると思います。当センターでは、企業での3ヶ月の長期インターンシップを実施しています。ワークショップでの研修を了え優れた成績を取めた養成者は、「アグロイノベーション研究生」として東京農工大学に雇用された上で、国際機関、国内大手商社、メーカー、特許事務所等に出向いて、長期の研修を受けます。これに要する費用は東京農工大

学の負担となりますので、基本的には、企業及び本人の負担はありません。

このようなプログラムを受けることにより、企業等が必要とする能力がかなり強化されることとなると考えられることから、ワークショップの参加者が全国35大学から161名、企業へのインターンシップ参加者が47名、卒業を迎え就職した者が14名というのがこれまでの実績となっています。そして、この5月のワークショップに参加した者がこれから企業での研修に臨むということとなります。

日本の発展や国際競争力の確保のためには「イノベーション」が不可欠であり、そのためには、それを担う人材の養成・活用が重要な課題となっています。この拙文を読んでいる同窓生の皆様の周りに、博士人材を活用してみたいという企業等がございましたら、是非、東京農工大学アグロイノベーション高度人材養成センターのスタッフにご一報いただければたいへんありがたいと考えております。

北海道支部講演会の開催報告

宇野沢正美（農工S46）

当支部では、平成23年4月28日札幌市内のホテルにおいて支部講演会を開催しました。14名の方が出席され、各人それぞれ知識を深めまた久しぶりの再会を楽しみました。本講演会は、北海道大学大学院教授の長谷川周一氏（昭和46年農業生産工学科卒）が、本年3月をもって退官されたことを記念し、「土の研究に携わって40年」と題して開催したものです。また本会では、現支部長である西村弘行氏（現東海大学副学長・教授）がこれまで研究してきた成果を取りまとめ、今年4月に出版した著書「北の健康野菜」の披露も併せて行いました。

ここで、長谷川氏のプロフィールを簡単にご紹介します。氏は農工大卒業後、昭和46年から北海道大学大学院に進学し、大学院在学中、マニラにある国際稲研究所において約1年間稲と土の研究に取り組みました。大学院博士課程修了後は、農水省農業土木試験場及び同農業環境技術研究所に勤務し、その後平成13年に北海道大学大学院農学研究科の教授に就任しております。それから本年3月まで約40年間、一貫して土壌物理の研究に携わり北海道や国内ばかりでなく、国際舞台でも活躍され多くの業績を残しております。また、氏は、国の将来を担う学生の教育にも熱意を持って当たり、授業では学生に対し常に「土」の重要性を訴えてきました。

講演会に話を戻しますと、講演、出版披露の後の懇親会では、会員各自が近況報告を行いました。講演内容に対する質問など話に熱が入り、持ち時間を大きく超過する人もいて、和気藹々とした雰囲気の中であっという間に2時間が過ぎてしまいました。

当北海道支部には、名簿上約400名の会員が登録されておりますが、最近同窓会出席者の固定化と高齢化が目立ってきました。これからは、道内にいる若い会員にも出席してもらえるよう、幹事一同、より一層魅力ある同窓会づくりに努力していきたいと考えております。



於：チサンホテル札幌

同窓会東京支部から楽しいサロンへのお誘い 「けやきクラブ」創設22周年にあたって

山本 賢（農工S43）

都内在住の同窓会員数は9500人を超えるため、東京近郊の人たちが任意に集まって談笑する空間があってもよいのではないかと、農・工両学部同窓生有志による月例会「けやきクラブ」が発足したのは平成1年です。集いの場は、毎月第三火曜日6:00~8:00 p.m.、新宿中村屋4階「ラコンテ」に決まりました。

平成6年には「けやきクラブ」創設5周年を迎え、「東京集会：フォーラム“農工大学の現状と将来”」を開催するとともに、「北京同窓訪問団」の結成に参加しました。その後、同窓会東京支部発足のための活動の事務局としても機能し、平成13年には東京支部の発足に際して、「第2回東京集会：自然との共生」を開催しました。

最近では、同窓会のご好意により農工通信に案内を載せていただけるようになったことや口コミにより、徐々に集まりの輪が広がってきています。サロン雰囲気重視して友人連れの出席もOKとしていますので、同窓の輩の陥りがちな理科学的技術談義は勿論のこと、異なる分野の方々の新鮮な話題や若い女性たちの華やいた話題に触れる機会があります。音楽に関すること、日本舞踊のこと、人材開発コンサルティング業務のこと、身近な環境対策の実践活動など、様々な話題が上りますが、今後は就職や再就職というような側面での話ができるようになればと思っています。

今後は、できるだけ学生諸君に参加していただき（会費は無料）、「グローバル化と日本の将来」というような話や、研究室で取り組んでいる課題、若いエネルギーを燃やす部活やサークル活動などについてのプレゼンをいただくことは、老人の域に入らんとする同窓生たちにとって、新しいパワーを魅みかえさせるには絶対必要条件でもあります。

永年会場として使わせて頂いた新宿中村屋は、ビル建て替えが予定されており、当面「けやきクラブ」は、新宿東口の「新宿ライオン会館」地階のビアホールに変更いたします。案内は、巻末の掲示板に掲載されていますのでご覧ください。仕様は従来通り割勘といたします。予約不要ですので、ふらりと立ち寄っていただければ、幹事、出席者一同、望外の喜びです。

獣医師と戦争 —ビルマ戦線のインタビューに同席して

対馬美香子（獣医H2）

獣医学科の大先輩、高橋威彦先生（昭和15年卒）は太平洋戦争のビルマ戦線で戦った、世界で唯一人御存命の獣医師です。ビルマ戦線の貴重な証言を記録するために、米国で獣医史を研究しているコーネル大学前獣医学部長Donald F. Smith教授が来日し、2010年11月7日、11日の2日にわたり、東京都内のホテルにおいて高橋先生に詳しいインタビューが行われ、私は同席する機会に恵まれました。

高橋先生は東京高等農林学校を卒業後、獣医将校としての教育を陸軍獣医学校で修めました。中国北部の部隊に配属されましたが、大戦が勃発し中国中部に移動、ビルマ作戦に参加することになり、中国から50隻の大輸送船団で南方に向かいました。先生は約300頭の馬の衛生管理を受け持ち、40℃を超える狭い船内での25日間の航海で1頭の損耗もなくバンコクまで輸送させました（作戦秘匿のため目的地は到着まで知らされませんでした）。その後イギリス兵とグルカ兵（勇猛で有名なネパールの山岳民族）の混成部隊と戦いながら、国境のジャングルの山を越えビルマに進撃、インパール作戦に従軍されました。

ビルマの急峻な山岳地では車両が使用できないため、分解した砲を運ぶために馬が使われましたが、兵士が切り開いた細い山道は人がひとり通る幅しかなく、馬がよく足を踏み外して谷底に落下したそうです。糧食が不足し馬が飢えて砂を食べて疝痛を起こしたり、トリパノソーマなどの寄生虫病、蹄葉炎などがありましたが、薬はサルファ剤やヨードチンキ程度しかなかったとのことでした。インパール作戦では、敵軍との激しい戦闘や敵戦闘機の銃撃、栄養失調や病気で馬は次々と死に、高橋先生の部隊でも、全ての馬が戦場で斃死、部下の兵士も多くが命を落としたそうです。ビルマ戦線とインパール作戦では、約30万人の兵士のうち約20万人が死に、荷役のために運ばれた5,000頭の馬の全てが日本に帰って来ることはありませんでした。日本軍が撤退する街道の端には兵士と馬の死体が累々と連なり、「白骨街道」と呼ばれたそうです。

現地で終戦を迎え、先生は捕虜収容所を経て1946年に復員されました。

高橋先生は93歳のご高齢にもかかわらず矍鑠とされ、地図を示しながら、従軍体験を昨日のこつのように克明に話されました。しかし、先生は、今まで自身の体験をあまり語ってこられなかったそうです。その理由として、自ら志願して獣医将校になり従軍した責任を感じているし、今の若い獣医師に話しても理解してもらえないだろうと語られました。もっと誇りに思ってもいいのではというSmith教授の問いかけにも、悪条件の中1頭の損耗も出さずに馬の輸送を成し遂げたことは獣医師として誇りに思っているが、従軍体験そのものに対する思いは言葉にできないと口をつぐまれました。

太平洋戦争のとき、獣医将校は約770名、そして獣医師免許を持つ全ての獣医師約5,000名が「予備役」とされたそうです。馬の診療に携わらず公衆衛生などに従事していた獣医師も戦地にかりだされました（そういう獣医師は現場では使い物にならなかったそうです）。Smith教授がかつてインタビューした米軍の獣医将校（故人）も同じ時期、同じ場所で同じような

苦難を経験しているとのことでした。

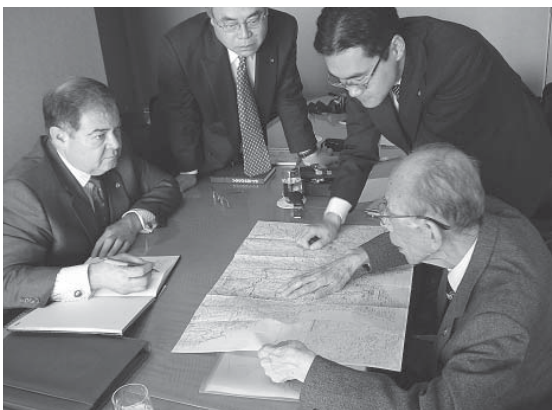
戦闘を直接体験した方から、しかも獣医将校として馬の治療をされた方から、栄養失調や敵襲で兵士や馬が次々と斃れていく話を直接聞き、獣医師の1人としてとても考えさせられました。洋の東西を問わず、戦争になったときどんなことが起きるのか、獣医師がどのような立場に立たされるのか、私たち戦争を体験していない世代も関心を持っていなければならないと強く感じました。放っておけば時とともに消えてしまう貴重な経験が、証言としてSmith教授の記録に残されることになり本当によかったと思います。

インタビューの詳しい内容は、Smith教授のブログにも掲載されています。

Veterinary Legacy Sunday, November 7, 2010 "An Interview with a Japanese WW II Veterinary Officer"
<http://www.veterinarylegacy.blogspot.com> (英文)



インタビュー終了後、硬く握手を交わす
Donald F. Smith教授（左）と 高橋威彦先生（右）



地図を示しながら従軍体験を語る高橋先生

追記 高橋威彦先生は、平成23年9月6日ご逝去されました。インタビューでお会いした時は「(旧制) 中学で習った」英語を流暢に話され、とても元気でいらしたのに信じられないと思います。高橋先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

林科S41入・S45卒同期会

一島 正三 (林S45)

東京農工大林学科にS41年入学同期生とS45年卒業同期生の集まり、

全会員45名： 出席者：26名 欠席者：13名

物故会員：2名 不明者：4名

卒業後の進路：国家公務員・地方公務員・学校の先生・民間会社
大学院進学後に公務員・民間会社、

今回の出席者は26名で、内訳は公務員が17名・民間会社8名・教職員1名、と農工大の特徴的な進路であった。

我々の学生時代は丁度学生運動が盛んに行われ、又社会は高度成長期に向かわれる時であった。

昭和45年に東京農工大学農学部林学科を卒業してから、40年が経過し、皆還暦を過ぎて、今尚勤められている人、完全リタイヤし第二の人生を歩んでおられる人、等である。

会の始まりにあたり、幹事より今回亡くなられた同期生、相原君・国松君に対し全員で黙祷をささげ、その後同窓会本部からの資料の説明・農工大の近況報告・同窓会事業等の報告を行い、皆様の近況報告となった。学生時代を振り返り、和やかな話でおおいに盛り上がったひと時でした。

秋田県角館出身の太田君は王子緑化で17年間勤務後、実家に戻り、実家を継ぎ、町民にあと押しされ角館の町長となり、H13/6～H17/3まで町長を勤める、角館町は人口1万6千人で、昔佐竹藩に属し400年前の武家屋敷が残り、しだれ桜と川沿いのソメイヨシノが有名で、観光で訪れる人は年間250万人と東北きっての観光地であり、又これらを生かした、映画やテレビのロケ地として、NHKの朝の連続ドラマ、「雲のジュータン」・映画「たそがれ清兵衛」や「釣りバカ日誌」で有名を馳せたところです、又秋田米の産地であります。町長の時に、さらなる観光促進を図るべき、政策に重点を置き、町の活性化に寄与した。その後平成の大合併の基、角館町・田沢湖町・西木村との合併で現在仙北市となり、町長の職を退き、現在家業を継いでいるとの事。

神奈川県出身の高梨君は、建設省在任中コロポギ計画の専門家として、JICAよりインドネシア公共事業省に派遣(昭和52年11月～56年3月)され、東部ジャワ州クデリ市に位置するクルー火山工事事務所で、火山泥流を防止するための技術指導に携わった。帰国後は、建設省の直轄事務所のみならず、県の砂防・土木行政に携わり、赴任地は、北は青森から南は広島まで広範囲に亘っている。

その後、(財)砂防フロンティア整備推進機構において、砂防指定地や地すべり防止区域等を効率的に管理・活用するための砂防情報管理システム(GIS管理システム)を構築すると共に、平成11年6月の広島災害(土砂災害)を契機に制定された土砂災害防止法を適切に運用するための、土石流等危険区域設定支援システムの構築に尽力された。これら研究成果は、イタリアや中国等で開催された国際会議で発表された。

現在は、航測量・コンサルタント会社で、砂防関係業務の技術指導を行っているが、若手社員育成のための、'肩の凝らない仕事の哲学'という研修講座を実施している。政策研

究大学院大学の修士課程（水災害コース）の非常勤講師として、土砂災害危険区域の設定手法を海外からの技術者を対象に講義（英語）されている。

千葉県出身の小平君は千葉県県職員として勤務し、その中で千葉県は浦安等の埋め立て地が多く、埋め立て地の緑化に大変貢献し、それらに伴う緑化はどうあるべきかを東京農工大学大学院連合農学研究所へ論文提出を行い、博士（農学の学位）をH10年3月に取得されたとの事、今も尚千葉県県職員として活躍中であります。

それぞれの社会で農工大で取得された学識経験を遺憾なく発揮され、現在も活躍中である。各々が40年間を振り返り語られた事は大変有意義であった。その後林科の学生時代を振り返り全員で林科の「ペロリ節」を合唱し、次期3年後の再会を期し、散会した。

今回欠席された方々に今回の会の報告と出席者全員の写真を送付したところ、皆様から手紙を頂き、次回は必ず出席したいと言うありがたい言葉があり、その中で、河野君から頂いた手紙には農工大学の思い出と地元の宮城県美里町小牛田の自然観察インストラクターとして活躍し、美里町の「学校山」をボランティアにより、整備して「美里町版トトロの森」を作られたとの事、地元の子供たちの自然観察園として活用されていると毎日新聞に掲載されているとの報告があり、これは今回は是非とも農工通信に寄稿してくれと頼み、了解頂き、今回掲載されておりますのでご覧ください。

40年振りの再会はそれぞれが歩んできた道のりと思いがあり、大変有意義なひと時でありました。



時期：平成23年2月4日（金）
場所：海事センタービル内「シーガル」
幹事：平川隆夫・渡辺広士・一島正三

自治活動を担った者たちの還暦

桂川 雅信（農工S47）

本学（農学部）の淵野雄二郎氏が本年3月で退官となり、昨年3月には渡辺研氏が退官されたことを契機に、1970年前後の農工大で学生自治会、寮委員会、学友会、農ゼミ、生協理事会など、当時の学生による自治活動を担った者たちが40年ぶりに参集することとなった。去る5月14日のことである。

たまたま淵野氏が1960年代に全学連の再建や新寮闘争に関わり、三多摩学生自治会連絡協議会の議長や新寮の第二期寮

長をつとめた時期が、1970年の大学改革の時期につながっていたことから、多くの自治活動を担った学友がお二人の退官祝いを契機に集まり、みずからの歩んだ道を振り返ることとなった。

「農工大退職者を囲み、みなさんの再出発を祝う会」として、79名の方々に呼びかけが配布され、全国から40名の方が当日の会に出席いただいた。

呼びかけを配布した後に3月11日の震災となり、東北地方の友人たちの参加が危ぶまれたが、福島からも参加いただくことができた。

この会を準備する過程で、A4版1枚に卒業後に歩んだ道と今後の抱負を書いていただき、返送された原稿をそのまま印刷して冊子を作り上げた。

題して「風の記録」（第1版）。

この記録集は卒業後に農業者、技術者、研究者、教育や行政の専門家として、企業や団体の指導者として、地域の相談役として、同世代を生き抜いた仲間たちの記録である。

寮長経験者の峯村（農学科48年卒）は「ゼロからの出発で牛飼いを始めて28年。億に近い借金も返し終えて、今は肉牛230頭の経営を築くことができました。働きづめでしたが、長男に経営を譲りようやく多少のゆとりができてきました」と述べている。淡々とした口調だが農業者としての開拓者魂と苦しかった道のりが垣間見える。

寮委員経験者だった大村（生産工学46年卒）は静岡県職員として農業土木一筋で頑張ってきた。彼は退職時まで労働組合活動を続け「まじめで正義感が出世のじゃまをした」けれども、「充実した現役生活でした」と述べている。自分の関係した工作物が残っていることや組合活動の経験も、これからの人生にとって糧になる、と記した。

大学改革まっただ中で学生会委員長だった土居（林産学科47年修卒）は、道立林産試験場の研究職として入庁、組合活動もやりながら学位を取得、その後秋田県立大の木材研究所に移っても大学の民主的発展のために活動し、今は筑波大学で研究を続けている。国内外の方々の助けも借りながら「多少なりとも科学技術の発展に貢献できた」と厳しかった半生を振り返っている。

入学後に第二期革新都政実現に奔走していた片山（寺沢むぎほ（農学科48年卒）は、卒業後に都立高校の教員となり、今は憲法の「良心の自由」を守るために裁判を闘う原告の一人である。

在学中に東京都学連書記次長だった西村（生産工学科46年卒）は、民間企業に就職したあと実家に戻り川崎市役所に入庁、上下水道技術者として力を蓄積しながら職場の中央委員となって組合活動を続けたあと管理職となり、退職時は川崎市建設局長だった。「根を伸ばす基には必ず家族という養分があった」と書いている。

大学改革時に両学部の自治活動を支えた大塚（製糸学科45年卒）は、研究職として群馬県に入庁、20年近く組合役員として労働運動に関わり、その後は管理職として行政の中枢部で仕



事をした。昨年、農工通信で紹介された「富岡製糸場世界遺産構想」は彼の思い出深い仕事であった。県庁退職後には前橋市の副市長に選任され4年間を過ごしている。「左翼がそのような道を進むことは時代が求めているのかも知れません」と記している。

工学部で新寮闘争に関わっていた宮井（工業化学科46年卒）は、長く大学に在籍する緻密な「生き字引」的存在だったが、卒後は環境計測機器の中小企業に就職、技術開発と労働組合活動の双方で企業を牽引すべく努めた。技術者としては発明大賞を受賞し、知的財産権部長なども歴任したが、退職したのちの大震災では「原発問題で深刻な衝撃を受けた」旨を記している。

社会への貢献、人々への思いやり、地域との連携、変革への挑戦などなど、当時の自治活動が培った「思い」や感性は、その後の日本社会を建設する上で重要な柱の一つとなってきたことは間違いないはずだ。

誰もが平坦ではない道を歩んできた40年。まさに千差万別の人生だが、どこか共通する部分を感じることができる。技術力だけではなく、政策立案能力、判断力や説得力、どれをとってもそれは、かつて大学で学んだものが学問だけでなく、その学問を活かす力を自治活動の中で獲得していたのである。

ささやかな人生だが、残りの半生は再び自由の風に乗って世界を駆けめぐりたい。

志半ばで逝った学友のためにも「風の記録」第2版を準備したいと思う。

「ところで、おまえは何してたんだ」ですって？ もう紙数が足りなくなりそうなので、私のことはウェブサイト「全国水の相談所」で検索してご覧下さい。



渡辺先生・淵野先生退官、花束贈呈

西出照雄同窓会前副会長を偲ぶ

羽田 有輝（製糸S43）

本学同窓会前副会長である西出照雄さんは、平成22年7月18日に永遠の眠りにつきました。（享年68歳）

私と西出さんとの関わりは、単に現在の製糸・高分子・生命工学部会推薦による本学同窓会副会長の前任・後任というものだけでなく、ここに至るまでには浅からぬものがあります。

簡単に述べますと、西出さんは東京都出身で本学工学部製

糸学科を昭和41年3月卒業であり、当方も同様の東京生まれの2年後輩で製糸学科を昭和43年3月卒であり、また卒業論文作成をする専門課程では、ともに同じく故小野四郎本学名誉教授の下で学び、指導を受けた学生・同窓生であったことです。当時の昭和41～45年頃は、絹物性として生糸のグラフト重合などを含めた粘弾性の研究が華やかな時代でもあり、2年先輩の西出さんがパイロン等の高度試験機を使いこなす研究姿がまぶしく映る光景が走馬灯のように思い出されます。

また、古くなって恐縮ですが「製糸学科70年の歩み」（発行：昭和48年9月、発行者：製糸学科70年記念協賛会）発刊に際しては、ともに卒業年次代表として同記念行事に協賛・参加し、同誌の製糸学科、工学部時代での学生生活の思い出をその1（西出さん）、その2（当方）として寄稿したこともありました。（当方の場合、社会人になって間もなくの寄稿であり、若気の至りで書きなぐっており、今読むと赤面することしきりのものです。）

このような関係から、敬愛する先輩の大学卒業後の歩みを一部顧みて、西出さんを偲んでみたい。

先輩は昭和17年4月6日生まれで、本籍地は東京都台東区とのこと。

昭和41年4月1日付けをもって農水省蚕糸試験場入省（岡谷製糸試験場配属）以来、平成15年3月（独）農業生物資源研究所昆虫生産工学研究グループ長として定年退職するまでの間、一貫して製糸学・絹工学分野の研究に従事され、さらにその後、（財）大日本蚕糸会 蚕糸科学研究所に請われて勤務され、平成17年7月から同会理事・研究所長として4年間、絹の多用途開発等の研究・実用化に邁進、ご活躍されました。

この間、昭和56年9月には東京工業大学で工学博士の学位論文を取得した後、（社）日本蚕糸学会の蚕糸学進歩賞受賞（昭和54年4月）、科学技術庁の注目発明選定受賞（昭和58年4月）、（社）日本蚕糸学会の蚕糸学賞受賞（平成3年3月）と数々の表彰を受け、また、（社）日本蚕糸学会評議員や日本シルク学会副会長の要職を歴任されたことから、絹物性研究に精進した成果の賜だけでなく優秀な人材の育成にも大きく寄与されたことが窺い知れるところです。

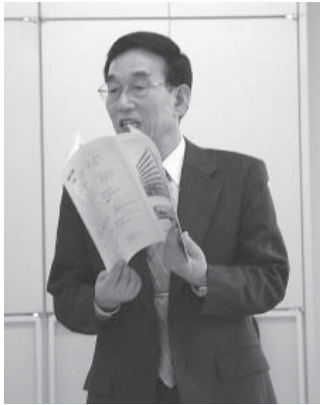
特に、日本の蚕糸業界には、学会が3つあります。年代順に「日本蚕糸学会」「日本シルク学会」「日本野蚕学会」とあり、この前2つの学会に深く関与・活躍された西出さんは、その温厚、円満な性格とスポーツ好きの趣味からの広範囲な人脈をもつ特異な指導者であるからでしょう。これも、西出さんの本学における学生時代は、勉強一辺倒の青白いガリ勉型でなく学業の傍ら野球部に属しており、4年間合宿・練習にも明け暮れたとのことで、このことから自ら体を動かすのが好きなスポーツマンでもあったことも、多くの友、知人を得る発端になったのかと推察されます。

ついで、本学同窓会においては多くの諸先輩・後輩に慕われたことから前々副会長勝野盛夫氏の後を引き継ぎ、同窓会の発展に鋭意、尽力され寄与されたのはつい最近のことです。

誰でも亡くなったあとでは、良く言われるということには、私も同じ思いをもちますが、こと私たちの先輩・西出照雄氏を賞

賛することに関しては何の迷いも感じません。それは、これまで述べてきたように西出さんは誠に優れた資質の持ち主であり、友人、知人にとって良き友であり、関係学会、業界にとって偉大な功績者でしたからです。残された私たちに出来ることは、生前の西出さんが言い、話したこと、著した数々の文献等を今一度鮮烈にすることではないかと思っている今日この頃です。

改めて先輩のご逝去を謹んでお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。



在りし日の西出さん（蚕糸科学研究所、所長時代）

海の中にも森があったことへの驚き

馬場 繁幸（林学院S52）

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴って発生した津波及びその後の余震によって引き起こされた東日本大震災は未曾有の災害であり、被災された方々には心からお見舞いを申し上げます。また、亡くなられた方々、ご遺族の方々には衷心よりお悔やみを申し上げます。

そんな時に、海にも関連しているマングローブの話を書くのは、なんとなく気が重く、気乗りはしないのであるが、追悼の意味も込めて散文を書いてみることにしたい。

1 マングローブへのきっかけ

今では、多くの小学生もマングローブのことを多少は知っている。しかし、私が琉球大学農学部助手として赴任した1978年当時は、そんなに多くの人たちがマングローブのことを知っているとは思えなかった。第一、私自身が「植物に海水をかけると枯れる」と思っていたのであるから……。生まれてはじめて見たマングローブは、今、私が住んでいる西表島であった。その後、1980年頃からインドネシアの東カリマンタン州（ボルネオ島）のサマリダ市にJICA（現国際協力機構）の短期や長期専門家として派遣され、そこで見たマングローブは、西表島ではじめて見た樹高10mにも満たない低いマングローブと違い、樹高が20mを超えるものであった。

2 気孔が葉の両面にある？

植物に海水をかけても枯れることのないことへの学問的な(?)興味は尽きない。葉の表面がどのような構造をしており、葉の細胞の中からの水分が、どうして葉に付いた海水中に拡散し葉が萎れないのか、オヒルギやヤエヤマヒルギ等の根の通気

組織中でガス交換をしているが、どうしてガス交換だけで水分は入ってこないのか、双子葉植物の葉は、葉の表裏がはっきりしており両面葉（表と裏の区別のある葉）であることが多いが、マングローブの中でもマヤブシキやヒルギモドキの葉は当 faced 葉（表裏の区別のない葉）であり、気孔も葉の両面にあるが、その意味しているところは何か等々、組織学・器官学的にみて、とても興味の尽きない植物である。

3 好塩性なのか耐塩性なのか

マングローブは満潮時に海水に浸るような立地環境に生育しているが、苗木を使い異なった塩濃度で栽培すると、海水（約3.5%）の塩濃度では生育が抑制され、一般的な傾向としては2.0%以下の塩濃度の方が生育には適している。マングローブは好塩性の植物ではなくて、耐塩性の植物であり、本来は淡水湿地に生育したいのであるが、他の植物との競争を回避するために、耐塩性を獲得して、海、すなわち潮の満ち干のある潮間帯に進出した植物と考えることが妥当だと考えている。

4 コンクリート防波堤は津波を防ぐのか

岩手県宮古市田老地区の高さ10メートル、長さ2.4kmの田老堰も、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震によって発生した津波を防ぐことはできなかったのであるから、アカマツやクロマツなどを優占種とした海岸防災林は、その役割を果たすこともなく壊滅しても仕方がなかったかもしれない。でも、たとえそうであったとしても、海岸防災林が津波や高波にまったく役に立たないとは思いたくない。その理由は、2004年12月に発生したスマトラ沖地震津波でも、2009年9月のサモア沖地震津波でも、マングローブ林は防災上重要な役割を果たし、津波から人命や家屋を守ったのである。スマトラ沖地震津波でも波高は場所によっては10mを超え、サモア沖地震津波後の調査では津波が5mを超えていた。東北地方太平洋沖地震津波の10mを超えるような津波に対して、コンクリート建造物だけでは、その威力を止めることができないことを、多くの方々の尊い命と引き替えに学ばせていただいた。被災された方々、亡くなられた方々のためにも、物理的に津波を押さえ込むコンクリート構造物だけではなくて、それと併用することで防災機能が発揮できる海岸防災林を再生することが、私たちは、今、考えなければならないことのように思っている。

津波は決してわが国だけの問題ではないのであり、たとえば開発途上国の海岸に延々とコンクリート構造物を作ること、10mを超える津波を堰き止めることのできるコンクリート構造物を建設することなど、無理なことである。したがって、熱帯の開発途上国の海岸線に防災機能を発揮可能なようなマングローブ林や海岸林を作り上げることが、私たちにできることの一つだと思っている。

東北地方太平洋沖地震津波が1000年に一度であるから、防げなかったのであれば、500年に一度、100年に一度のものは、どうにかして防ぎたいものである。

5 私のできること

前世紀は、エビ養殖池の建設、工場用地への埋め立て、港湾の拡張など開発等、経済成長という錦の御旗の下に世界中の熱帯や亜熱帯の沿岸からマングローブ林が失われてしまった世紀であった。失われた海岸防災林や、二酸化炭素吸収源としてマングローブ林を保全・再生することが今、私ができることであると思っている。琉球大学に赴任した当時は、北を向い

て仕事をしてきたこともあったが、住めば都、今は南を向き、特に失われたマングローブ林の再生に関する仕事をしている。

6 夏の朝一番の仕事

西表島にいる時の初夏から夏の朝一番の仕事は、夜明け前の風の強さと波の確認である。風が弱く、海が凪いでいたら、日の出前に私の小さな舟でカツオ釣りに出漁する。2、3本釣れたら午前8時には帰港し、8時半には勤務している。そんな生活を送れることが、都会に住み時間に追われる生活と比べて、どれだけ健康的で有り難いことかと日々思っている。

同窓生の中で、朝のカツオ釣りに参加したい方は、是非、西表島にお出でください。ただし、海が凪いでいる時しか出漁できないので、それは覚悟してください。そして、私と一緒に、熱帯の開発途上国の海岸線にマングローブを植える活動をしようではありませんか。

東北地方太平洋沖地震津波やスマトラ沖地震津波では、役に立たなかった海岸防災林でも、時には十分に機能して人命を守ったり、家屋や農地を守ったりすることができるのではないかと、今も思い続けています。開発途上国の海岸に防災機能が発揮可能なマングローブ林や海岸林を作り上げることが、東北地方太平洋沖地震津波で亡くなられた方々への慰霊と、私にできるご供養の一つのような気がしています。(合掌)



カヌーにのる筆者（西表島もマングローブの茂る河川にて）

土の基本原則 -2009年12月札幌 SRU講演より-

川辺 泰幸 (エリック) (農S37)

近年世界的に有機農業に対する関心が深まっていますが、それは食物の質の低下と代謝病の増加に関係するものと思われます。

農業におけるNPK肥料の大量投下、薬剤の限りない増加がその背景にあると考えられます。バイオ農業 (Biological farming) は有機農業も含めて、その問題の解決に対するチャレンジとしてモーメンタムを得てきました。

世界的コンサルタント協会であるアメリカのブルックサイド連盟の一員として過去30年近く私はオーストラリアを中心に南北アメリカにて農家のアドバイスを独立した立場から実践してきました。現在は北海道にて多くの畑作、酪農家の指導をしています

がその中で昨年12月の全道SRU大会での自分の講演をここに引用して同窓の皆さんのご批判を仰ぎたいとあえて投稿する次第です。

なおSRUとはSoil Research Union土研究連盟という意味で私の指導を受けたい農家が作った組織です。

題して、土の基本原則

土はオールブリック博士 (生物体系を基にする農業の世界的権威者、ブルックサイド連盟の指導に当たった人) の示す生物性体系のピラミッドの土台であり基盤です。

土は生物、物理、化学の総合体ですが、土の分析では化学性を中心にそれぞれの畑に対する施肥の処方を作って話をしています。しかし、土の生態系は、物理性をも含みます。

あるメンバーが今年のフィールド研修で、ドクターの処方通りに3年やったが作物が不均一で生育が悪い。貴方は大嘘つきだ。と言いました。見ると確かに畑の真ん中が非常に生育が悪い。どうしてだろう。しゃがんで圃場全体を見渡すと面白いことに中央部分が線を引いたように悪い。今年は雨も多かったので低い部分に耐水があったように思われた。"問題は排水の悪いこと、土には空気が必要であるから、排水溝を作る必要がありますね"と私が言うと、実は排水溝が以前在ったのを作業の便利をよくするために埋めました。という返事。参加者一同大笑いで終わりました。

土の物理性には土の粒子サイズ、それは小さいものが粘土、荒いものが砂土、間は壤土〔シルト〕その比率でTEC (総塩基置換容量) が決まります。粘土が多いほどTECは高くなる。高いものほどカチオン (陽イオン) の保持力が高まる。それは土の肥沃度とも関連する。

砂壤土でも有機質が多いと腐植が増える為TECは高まる。

空気は土の約3分の1必要。それは作物の呼吸作用、土の微生物の呼吸作用に必要不可欠。また酸素不足の土では肥沃な土でも栄養の有効性が低下する。

Caを石灰の形で施す時、それがTECの適切な比率であれば土の通気性を改善するが、過剰の場合には有害作用をする。Mg、Kは過剰の場合には土を固め通気性を悪くするので注意する。

緑肥を土の反転して埋めると酸素不足でアルコール発酵することさえある。

それは根の生育を止める。

土の臭いが悪いときがその例。

土の温度 作物の生育には一定の温度が必要である。耐水状況では土の温度は上がらない。土のミネラルバランスが良い土には多くの微生物が活動する為早春の地温も早く上がっていく。空気が適切な割合の場合には地温がよりやさしく変動するため作物、牧草の生育を助ける。

土の生物性 土の表土15cmには永年草地では実にヘクタール9トンに当たる微生物、生き物が住んでいる (ラッセルのイギリスにおける研究)。実に牛10頭以上に当たる。

作物の残渣、根、ほか有機質はその生物の餌であり、その糞、死骸は全て作物の栄養となる。土のバクテリアには空気中の窒素

を固定する力がある。マメ科に付く菌は年間200kgのNを固定し作物に提供している（シアースのニュージーランドでの研究）。

マイコライザ菌は燐酸を有効にする上で重要。ほかにバクテリアもPの有効性に欠かせない。

窒素の有効性はバクテリアによって決定的に左右される。

有害な硝酸、亜硝酸も土の微生物により作物に有効な形に変えられる。

土の微生物には有機質が餌として必要。しかし、土のミネラル、Ca, Mg, K, Na, P, S, Mn, Cu, Zn等の成分とそのバランスが活動する為には不可欠であり、多くのミネラルは植物、動物の体の構造、つまり繊維が作物の茎を丈夫にして倒伏を防ぐように、骨は動物の骨格を作るうえで重要である。

石灰はpHを調整する為に施すという考えが間違っていることが解りますね。

多くの化学薬剤は土の生物にとって有害である。過剰の窒素、特にNO₃, Cl, SO₄, PO₄なども過剰の場合には有害である。一般にはこれらはまとめて化学肥料と呼ばれ、有害視される傾向があるが、過剰が害であり、適度のN, P, Kの施肥は作物の生育にとって必要であり、農作業として重要である。

（有機農業の限界点）。ただしその場合、施肥の方法によっては肥料成分の濃度が高くなり有害となる場合もあるので注意する。私は全層施肥を助言し押し進めて来たが、その一つの理由がここにある。作条施肥では濃度が部分的に過剰になる。

〔全層施肥の第一の得点は作物の根が生育していく中で継続してその養分を吸収できることにある。〕

病気の問題；多くの菌類は酸性土壌で活発であり、菌のすべてが病気の原因でないことはバクテリアすべてが病気の原因でないことと同じである。病気の原因はある特定の菌またはバクテリアが異常発生し増加することにある。そのコントロールは異常発生しないようにすることであり、その第一の方法は土の生物の生態系のバランスを維持することによって病原菌を食べる生物を多くすることにある。

この原理は牛のルーメン微生物のバランスと共通する。

ルーメン栄養学の基本原理は一般に良く見られるような単に乳牛の必要とする蛋白、エネルギー、カルシウム、等の種類とバランスを取ることだけではない。陽イオン、陰イオン、微量元素を含めた全体のバランスを整えること、過剰の硝酸の発生を防ぐことなど、それによってルーメン内の微生物の適切なバランスを維持することにある。



Murray Grey

例えばCa, Mg, Pのような主要なミネラル成分の不足とアンバランスは農家の餌給与に良く見かけられることであるが、そのために微生物による発酵がVFA構成にとって好ましくない結果をもたらしたり、さらに牛の生理繁殖に影響を与える。

作物部のメンバーにも以上の点は共通することであるので、うなずけるであろう。

例えば、米、小麦、豆などで植物自体は充分成長しても肝心の実の入り方、種子が充分に入らなかったりするのがその例である。又生育期間が必要以上に伸びて収穫が遅れ、実が均一にならない場合もそのためである。

ポテトではタマの不揃い、澱粉価が上がらない、ビートでは糖分が低いなど。

つまり、作物、牧草、牛の生理作用と土の微生物の生態系のバランスが全く異なる世界のように見えても、その本質において密接に関連しているということである。

その中で、土の腐植は微生物の貯蔵飼料庫のような役割を持ち、土壌生態系にとってはなくてはならない要素である。



成果の出た小麦畑

土の化学性；地球の発達の数十億年の歴史で、岩石が風化作用で細くなり土に変わっていった。その過程で多くのミネラル成分が植物に利用される形に変わっていったが、畑となる土の形成には、地盤の隆起と貝類化石の風化が大きな役割を持っている。ミネラル、微量元素は酵素の重要な成分であり、高等植物、動物の育成と活動上なくてはならない要因である。

土の化学成分の比率がそのために決定的に重要であることは長い間知られてない科学であった。農業科学は効率主義に追われ、量生産を求めてN, P, Kという3要素があれば良いような錯覚にとらわれてきたのである。

バルク生産に捕らわれて農業が進められて来た結果は、いうまでもないが、作物も牛も動物、ヒトも含めて病気の多い世界を作っている。化学薬剤が薬が全てを解決する？ 薬に頼る農業が現れたのである。その反動として薬拒否の有機農業が発生した。

しかしながら、岩石から出るミネラル成分は化学物質である。土のpHが弱酸性6.2レベルであることが重要な理由は岩石の分解と溶解促進する為であるが、バクテリアにとってはミネラルの多いpH6.5程度の条件が適している。生きた土には無

数のバクテリアが働いている為岩石はその働きで溶解され分解されていくことを忘れてはならない。その働きがなければ腐植の形成も起こらない。それは肥沃な土がバクテリア無しには出来ないことを意味する。土壌化学者はこの点を無視して土を純粹の化学作用の観点のみから見る人が多いという欠陥がある。

しかし、化学を否定することは間違いである。

生物の活動に必要な酵素の働きは化学反応である。有機物は化学成分からなる無機物から生まれたわけである。

薬剤の為の化学物質を否定することとミネラル成分となる化学物質を使うことを混乱してはならない。

有機農業は化学肥料を否定するが、その求める方向性自体を否定するものではないが、方法的限界が問題である。

土の化学性、Ca, Mg, K, , P, Na, Fe, Mn, Cu, Zn, 空気中のN, O, C 等の成分がある一定の割合で存在するとき、地球の生物は繁栄する。

その割合は生物の種類により異なる。それは生物が多様な環境に適するように進化してきた為である。

人類が必要とする栄養成分が得られる割合はその食物となる作物、動物の要求するミネラル比率の中に求められる。



研修するSRU

SRUの基礎であるミネラルバランスの研究を最初に始めた人たちが20世紀に存在した。ポアシン、オールブリック博士等がそれを進め、効率と大量生産を追求するNPK農学と肥料薬剤産業に惑わされない理論を確率したことは我々にとって実に幸いなことであった。

Ca 68%, Mg 12%, K 4% H 12% に代表されるミネラルバランスの比率を出し、それをアメリカの多くの指導員、ブルックサイドコンサルタント達に教授したのはオールブリック博士であった。私自身もそれを追及して1981年に初めてアメリカを訪れ、現在までにちょうど20回訪米、ブルックサイド協会上級指導員の一人として認められている。

それは土の化学生が如何に土の生物活動を盛んにし、土の構造を良くする役割を持つかを明瞭に示してくれたのである。

微量元素を含めた多くの研究は今もそれに続いて行なわれている。

SRU 創立して19年になるが、以上の土の性格、生物—化学

—物理性の重要性は幅広くメンバーの圃場、牧場で証明されて来ました。

それは現在進められている効率と利潤を求める大規模な工業的農業には受け入れられない原理であろう。逆に小規模な家族経営農業の成功と存在にとって必要不可欠な原理である。

それは永続農業と人の健康、環境維持につながる原理であると確信している。

自己紹介

S37年農工大卒業後ニュージーランドへ渡航しMassey マッセイ大学修士に入学し、放牧草地学専攻、その後ニュージーランド国籍を得てカレッジ教諭を務めた後オーストラリアにて国際合弁牧畜事業に研究、管理者として携わる。その仕事が現地牧場主達に認めれコンサルタントとして1980年独立する。1981年アメリカBrookside Lab協会のコンサルタント連盟に参加、オーストラリア、ニュージーランドのブルックサイドコンサルタント連盟の会長を務める。

1995年オーストラリアの5年余の研究成果を基に大規模草地肉牛生産システムの論文をまとめ日本大学より学位を得る。

現在ニュージーランド北島にて小牧場を持ち妻Geraldineと共に在住。

絹糸紡績業と鶴見良憲（岡山県出身）

田中 浩明（製糸S33）

安政6年の横浜開港により生糸の輸出が大幅に伸び、生糸の生産は増加したが、その副産物である屑繭・出殻繭や生糸製造過程で出る生皮苧・熨斗糸等（副蚕糸と総称）を機械的に糸にする「絹糸紡績業」は明治の初期まで日本になかった産業である。このため、日本の副蚕糸はスイス人等外国の貿易商に安く買い叩かれていた。

明治4年に、明治新政府の要職にあった大久保利通卿らがヨーロッパを巡回した時、紡績工場マネージャーが一つの織物を見せると、卿はその光沢などを激賞されたところ、マネージャーは笑って「これは日本国が捨てるような粗末な屑糸を紡績して織った反物ですよ」と答えたと言う挿話がある。（鐘紡百年史）

明治6年にウィーン万国博覧会に勤務中の内務官僚・佐々木長惇（元福井藩士）はスイスの絹糸紡績工場を視察し、日本で絹糸紡績業として産業を起せば、製糸業にとっても無駄がなくなり、一挙両得であることを政府に建言した。佐々木は帰国後、大久保利通内務卿の協力を得て、群馬県多野郡新町（現高崎市）に官営で日本初の絹糸紡績工場・内務省勸業寮屑糸紡績所（のち、官営新町絹糸紡績所）を建設することとなった。

新町工場の規模は精紡機・2100錘で機械の導入を除き、工場候補地の選定・建物の設計・施工等を殆ど日本人の技術者が行い、日本最初の自力官営工場建設であったと云われている。

この紡績所の初代所長は工場建設の功労者・佐々木長惇が就任したが、最後の所長に岡山県出身の鶴見良憲が任命され

ている。鶴見は当時最も優秀な技術者で、経営者としてもすぐれた実績を残している。

鶴見良憲の先祖は備中松山・水谷藩家老の鶴見内蔵助良直である。水谷藩は元禄7年に藩主とその養子が急死し、跡目がなく取潰された。その時、赤穂藩の家老・大石内蔵助良雄が、幕命により城受取のため備中松山藩に派遣され、両内蔵助の対面により無血開城となった話は多くの忠臣蔵ドラマに取り上げられている。

その後、水谷家は三千石の旗本に取立られ、その代官所を備中国布賀（のち黒鳥・現高梁市備中町）に置き、その代官職に鶴見内蔵助の孫になった。

鶴見良憲は4代目の代官・鶴見良直の跡継ぎとして、嘉永4年（1851）に生まれた。鶴見は明治維新後に武士を捨て大阪に出て、大阪の造幣寮に出仕し、同局の雇技師キンドル氏の薫陶を受け、工業に関する技術及び経営について学んだ。その後、陸軍々吏に転じ、北海道の開拓使役所で永山武二郎（のち、北海道庁長官）のもとで、北海道の官営企業の経営を担当した。

鶴見はこの経営手腕を買われ、新しく建設される内務省勸業寮糸紡績所に入所したと思われる。建設当初の鶴見の業務についての資料がなくわからないが、鶴見が所長となって明治18年頃には、「原価計算法の創案」「予算に始めて利益勘定を導入」「夜業の開始」などを取り入れ、経営の改善により、赤字を解消したとの記録がある。また、鶴見は最後の所長として三井家の理事・中上川彦次郎と交渉を行い、明治20年にこの紡績所を三井系の三越紡績所に約15万円で払下げた。

その後、鶴見はしばらく新町に残り、絹糸紡績機械の研究や技術者の指導を行い、この絹糸紡績所で育った技術者や経営者が、各地で活躍している。

民間初の絹糸紡績工場は明治19年に京都の稲垣藤兵衛を中心に発足した第一絹糸紡績会社である。この工場の建設にあたって東京帝国大学工科大学の谷口直定教授に協力を求め、教授の推薦により当時、同大学の学生の広田理太郎を中心に15名の研修生（うち、女子9名）を官営新町絹糸紡績所に送り、鶴見らの指導を受けた。

第一絹糸紡績会社は設計を英国のグリーン・ウッド社に求め、同社のヒュートン・ヒンズが来日し、広田とともに、明治22年に精紡機・3000錘の工場を完成し操業を開始した。その後、広田は取締役所長に就任し、鶴見良憲の長女・敏子と結婚している。

民間で2番目に建設された工場は明治29年の日本絹保土ヶ谷工場（精紡機・2700錘）であるが、後に富士紡績に買収されている。

当時、日本における絹糸紡績業界の第一人者である鶴見に対し、各地から会社設立の要請があったが、同郷の先輩である三井物産の馬越恭平の肝入りで、鶴見の出身地・岡山に民間で3番目の共立絹糸紡績(株)を設立することとなった。鶴見は同社の取締役と工場の支配人に就任して、岡山市門田に精紡機・4500錘の工場を建設、明治30年に創業を開始した。

この工場の建設にあたっては外国人技術者は一切雇わず、新町絹糸紡績所時代の職員・工員を引き連れて工場を建設した。まず工事中に精紡機2台・600錘を据付け、試験操業を行い工員の養成と市場の獲得に努めた。これにより生産がス

ムースに行われ、工場が完成した明治30年下期の第1期の決算で35千円の利益をあげ、利益配当を行っている。当時の絹糸紡績業界で操業当初から、黒字の会社は他にはなく、業界では鶴見良憲という技術・経営に優れた人物がいたからと云われていた。

鶴見は明治34年に共立絹糸紡績(株)を退社、各地の絹糸紡績工場の指導や絹糸紡績機械の研究をしていたが、明治39年（享年57才）に小田原で亡くなった。

鶴見は絹糸紡績の技術者・経営者としては優れた才能を持ち、絹糸紡績の発展に尽くした先駆者であったが、資本家にはなれず、晩年は貧しい生活であった。（孫の鶴見俊輔の著「黒鳥陣屋のあと」による）

その後、共立絹糸紡績は合併により、絹糸紡績(株)から鐘淵紡績(株)と社名は変わるが、昭和20年6月の岡山大空襲で焼失するまで中国・四国地方の唯一の工場として絹紡糸の生産を続けていた。（戦時中は絹紡糸による軍用落下傘の製造）

明治末期の絹糸紡績業界は整理統合が進み、鐘淵紡績(株)と富士紡績(株)の2社独占体制となると、この2社は技術を専有し、なかなか新規参入が難しくなった。

当時、日本最大の養蚕・製糸県である長野県は絹糸紡績業への進出が遅れ、長野県丸子町（現上田市）の信濃絹糸(株)が大正9年に工場を建設することとなったとき、信濃絹糸(株)の創始者・金子行徳はその経緯について回顧録で次のように述べている。

製糸業は相場に左右される不安定な事業であることを身にしみて体験し、長野県は原料面からは不安がないので、絹糸紡績業への進出を計画した。これにより製糸業には気の毒な「罰点工女」（規格外の生糸を作ると、減点される制度）を救うことができ、また、機械部門に就職口のない少年男子も多く就業の機会を与えられると考えた。しかし、当時は極秘主義の時代だから絹糸紡績の内容をなかなか知ることができない。幸い岡山の絹糸紡績工場にいる某技術者を紹介して貰ったが、工場に行き面会することなどはとてもできず、社長が自ら岡山まで出張し、夜中に岡山駅で密会をして相手の言うままの法外の条件を丸呑みにして招聘して絹糸紡績業を始めることができた。

このように、鶴見の残した技術が養蚕・製糸の盛んな長野県の絹糸紡績業にまで、影響を与えていることは注目すべきことである。

日本の絹糸紡績糸の生産は、最盛期の昭和7年頃には15社・35工場で世界の60%を生産していたが、製糸業の衰退に伴い、平成15年のシナノケンシ(株)（信濃絹糸(株)の後身）が施設をタイのシナノケンシタイランドの工場に移転したことにより、126年続いた日本国内での絹紡糸紡績業は消滅した。シナノケンシ(株)では日本絹糸紡績業の遺産として、当社の資料・機械は勿論、日本絹紡協会の保存資料もすべて引き継ぎ、最後の絹糸紡績工場のあった場所に、日本で唯一の「絹糸紡績資料館」を建設し一般に公開している。

一方の旧内務省勸業寮糸紡績所があった群馬県高崎市新町の地元に「よみがえれ！新町紡績所の会」ができ、富岡製糸所を中心とした群馬県の絹産業の一環にこの旧内務省勸業寮糸紡績所を世界遺産に含める活動しており、期待したい。



鶴見良憲のガラス写真肖像（京都・鶴見俊輔家蔵）「慶応4年7月・18才のとき、代官見習として京都に行き、撮影したもの」

植物防疫とともに

林 宣夫（植防S48）

私は、昭和44年に植物防疫学科に入学し、卒業後直ちに群馬県農業試験場に勤務し、昨年（平成22年）3月に群馬県庁を定年退職しました。群馬県庁職員として、前半は農業試験場で病害虫特に植物病理の仕事に、後半は県庁で一般農政の仕事に携わってきました。こうした折り農工通信への寄稿を依頼され、良い機会と思い大学卒業後の生活を振り返ってみました。

私は卒業後幸いにも、私の生まれ育った群馬県の農業試験場病害虫課に勤務することになり、農工大で専攻した分野である植物病理の担当になりました。

そもそも植物防疫学科へ入学した動機は、当時から、食料増産は大きな社会的な課題であり、農作物の病害虫による被害を少なくし、食料生産の安定に貢献することでした。当時の群馬県の農業試験場の病害虫課では、群馬県が全国有数のコンニャク産地であり、農家経営においても大きな位置を占めていたことから、コンニャクの生産安定技術の確立が喫緊の課題でした。コンニャク栽培では長年の連作により、主要な生産阻害要因はいわゆる土壌病害と腐敗病、葉枯病の二つの細菌病の発生でした。私は、この二つの細菌病の対策を担当することになり、私にとっては、最も主要な研究テーマになりました。

とはいつても都道府県の試験場では、特定テーマに限定した業務だけでなく、病害虫全般にわたる対応が求められました。日常的には、普及員（現在は普及指導員）、農協の営農指導員、生産者の方々が、連日生育異常の農作物を持ち込み、その診断と防除対策を相談するために来場しました。

いまでも、印象深く記憶しているのは、当時、水稻の田植機の急速な普及に伴い、箱育苗中に各種の病害が発生し、その診断と対策にてんてこ舞いしたことです。種子消毒剤として使用されていた有機水銀剤の使用が中止となり、代替薬剤はいずれも効果のある対象病害の範囲が狭いいわゆる選択制の高い薬剤であり、対策には、的確診断が求められました。イネの育苗期には試験場の実験室から廊下まで、育苗箱で埋め尽くされ

ることもありました。

植物病理の分野では、この診断業務は今も大切な仕事ではないかと思います。最近、植物の病気の診断・治療・予防につながる臨床技術の開発と「植物医師」の養成、「植物病院」設立にむけた取り組みが始まっていると聞き、大いに期待されるものと思っております。

平成元年から、職場が県庁に変わり、一般農政に関する仕事に従事することになりました。ちょうどその時期に全国的にゴルフ場における無登録農薬の使用が問題になり、行政の立場から、「ゴルフ場農薬の使用基準」や「ゴルフ場における農薬使用ガイドライン」「適正使用者の認定制度」の立ち上げなどに当たりました。

平成14年にも食用作物における無登録農薬の使用実態が全国的に明らかにされ、本県においても一部の作物でその使用が確認され、農薬の使用者の責務、遵守すべき事項を明確にした「群馬県における農薬の適正な販売、使用及び管理に関する条例」を制定することになり、この仕事に携わりました、この条例の制定を機に群馬県においては、生産者や生産者団体がみずから生産した農産物の残留農薬を分析し、その結果を消費者の皆さんに提供する仕組みができました。農薬使用における安全性確保において大きな前進があったのではないかと考えています。

世界の人口動向や食料生産の状況を考えると、我が国においても一定の食料自給率を維持していくことが必要だと思います。近年では、平常時は食料を輸出している国が、国内の食料が逼迫してくると、すぐに輸出制限をするような事態が世界的に見られています。食料の生産と供給を安定させることは、世界的にも国内的にもきわめて重要な課題であり、農工大へ入学してから40年以上も経っている今でも植物防疫の果たす役割は依然として大きなものがあると思っています。

朱鷺舞う佐渡に向けて

高橋 紀男（農工S60）

私が現在勤務している佐渡が島は、新潟からフェリーで2時間30分、面積は855km²で東京23区の約1.5倍、周囲は約280kmと日本海に浮かぶ日本最大の離島です。人口は6万4千人、ピーク時から半減していますが、就労人口の約1/4が第1次産業に従事する自然豊かなところです。海岸線は変化に富み、美しく豊かな自然に恵まれ、能に代表される伝統芸能等も面々と受け継がれています。日本の野生朱鷺の最終生息地であることから、現在も朱鷺の野生復帰に向け、「エコアイランド佐渡」を目指し、そのシンボルとなる朱鷺と人が共生するための取り組みが行われています。

2015年頃までに小佐渡東部に60羽を定着させることを目標に、平成20年9月から始まった朱鷺の放鳥は、既に4回、60羽を数えています。朱鷺の野生復帰を目指し、主な餌場となる水田の整備のみならず、営巣・ねぐら木の確保等、様々な取り組みが行われています。生物多様性の保全と持続的な環境保全型農業の取り組みでは、既に3割減減（農薬、化学肥料の使用が慣行農法の3割減）を全島で達成し、平成24年度

までに5割減減の達成をめざしています。また、先進的な地域では更に生き物を育む農法にも取り組み、朱鷺と暮らす郷認証米として、広く販売も行われています。残念ながら今年も、野生の朱鷺は自然界での2世誕生まで至りませんでした。連日20羽余りの元気な飛翔が確認され、次の放鳥に向けた順化訓練も進められています。

これら鳥に受け継がれた朱鷺をシンボルとした森と水田、ため池や河川がつながる豊かな生態系や景観を保全する「生きものを育む農法」の振興による「トキと暮らす郷づくり」の取り組みがFAOから評価され、今年6月「能登の里山里海」とともに先進国では初めてとなるGIAHS（世界重要農業資産システム）の認定を受けました。GIAHSは世界農業遺産とも訳され、農業が持つ食糧の生産という役割に加え、生物多様性保全や農業文化、伝統の保全そして自然景観の保全など、生物資源や文化的諸要素の次世代の継承を目指すための活動を認定するものであり、単に農業の面だけでなく、観光振興のきっかけとしても期待されています。

朱鷺のみならず、洞爺湖サミットで有名になった金剛杉、映画“オーシャンズ”のコブダイの弁慶、国内の約半数30余りの能舞台、昨年暫定リスト入りし世界遺産登録を目指している金銀山等々、海に山にと魅力あふれる佐渡に、皆さん“こいっちゃ”（おいでください）。



佐渡で舞う朱鷺

農政雑感

池田哲二郎（農S43）

私は、昭和43年農学科を卒業し、埼玉県庁で34年間農政に係わる行政業務に従事してきました。

こうした中で、日々感じていたことを述べて見たいと思います。

過去を振り返って一番感じ入ることは、農業基本法制定前後から論じられてきた農業構造問題の多くが未だに解決されていませんし、十分な解決策も見出せておりません。

いみじくも、私が、大学卒業一年目の職場の大先輩に「農政とは底なしの沼に金を積み込むが如しと」教えられたことを思い出す感があります。

その大きな要因として、農業者及び農村社会が歴史的、社会的に培われてきた農村文化や野業者の生きる為の知恵と、

農政諸施策のせめぎあいの中で、有効な調整が行えなかったことではないかと感じています。

調整の担い手は、行政組織は勿論ですが、農業委員会、農業協同組合、農業共済組合、土地改良区等農業関係団体などもその責務を持っていますが、経済の高度化・グローバル化や広域化の中で形骸化し、農業指導者としての地位から降板しているかに見えます。また、別の側面から見ますと、逆に農政目標の実現を阻害している機関・団体になっている様に感じます。

農業後継者について論じられることは多いですが、農業指導者（かつては篤農家が多かった）の後継者問題の方がもっと重要な課題ではないかと思えます。

振り返りますと昭和40年から50年代の国・県・市町村の農政担当者は農村出身者であり実家が農家である人が多く農村や農業に対する思い入れが精神風土として強く感じられました。現在の行政文化に農業・農村に対する思い入れ（農業問題を課題し解決する）が希薄化しているようです。このことは、先の農業関係団体にも感じられます。

一方、農政の受け手である農業者は、前近代的な農業施策や農業指導者を信じていないことが双方の調整を困難にしてきました。

農業者にとって重要なことは農業経営もさることながら、農家経営を豊にすることであり、多様に変化する経済社会の中で、中長期的に家を守る視点を大切することである。

このことが農業後継者問題や遊休農地問題を引き起こしており、農政当局と農業者との間に意識のずれを発生させています。

生産性の高い農業産業を確立し、消費者に安全で安心な農産物を供給する為の農政目標を実現するには多様な担い手や、農業指導者の育成を行える行政環境を整備するとともに、農地政策や農業所得政策などの抜本的な見直しが必要と思われます。また、農業関係機関・大学・農業団体等の機能分担の改革が日々必要ではないかと感じられております。

平成東日本大地震

鹿熊 俊明（登志）（獣医S34）

平成23年3月11日午後2時46分に東北関東大震災が起こった。床屋に出かけようと千波大橋の上を走っていた。道に沿った電柱は、鞭のようにしなって道路側と道路端に交互に揺れ、今にも折れはしないかと心配であった。信号は止まり、一般の車は左に寄って徐行していたが自分の車の入る場所がなかった。追い越し車線は先まで車が1台もなかったのでそこをいい年こいて無謀にも飛ばした。地震もさることながらこの歳にして初めての体験であった。遠回りして家に帰ったが、IBS放送は那珂川の橋が通れないということで車渋滞は酷かった。巻き道をして最近、落成したばかりの寿橋を通して思いのほか早く家に着いた。町内の公民館の前には液状化現象が起きていた。那珂川には大洗から芥もくたが津波に乗って水府橋を遡っていた。

4月1日の閣議で東日本大震災に命名することが了承された

が、菅政権も東電のことで世間に言い換えることが多くなり、おかしくなった。危機管理は大丈夫かい。人の真価はこんな時に見られるものだ。日本列島沈没なんてことになりはしないだろうけど。国土地理院では牡鹿半島・金華山が東南東に5.3米移動し、1.3米地盤が陥没した場所があるという。大船渡市三陸町綾里湾の調査から津波の高さが20米に達し、波の端は29米の坂道まで登っていた痕跡が見られたという。今回の地震はマグネチュード9.0で千年に一度という大地震であった。

俳句をやっている人を俳人というが、私もその一人で廃人になるまで続けるつもりでいる。何か珍しいことが起こったり、好奇心で物を見たりすると詩心はそれを17文字のものにしてしまう。自信がないけれどもいくつか紹介したい。古語では地震のことを「なる」というが、「自信がない」とは「自信が地震」となってしまう。3月10日は「水戸の日」というて水戸では観梅期間の真っ最中であった。

地震に揺る三千本の水戸の梅
 啓蟄や液状化地震また余震
 みちのくの迷ふ魂かも陽炎立つ
 見えぬものに囁かれ穂の芽の惚けり
 陽炎の叫びはムンク大地震
 春の地震積み木崩しの大谷石
 陽炎のゆらぎは何ぞ地蔵尊
 目に見えぬものへの焦り田水張る
 朧夜の窓際にみて地震酔ひ
 賽の河原めく被災地の朧月

本校同窓会の第48回の通常総会の終了後、今回の震災の義援金を募ったところ、出席者100人ほどで54万円余の基金が集まったという。被災者の一人としてお礼を申し上げます。7月までは支部の方でも募金が計画されるというので会場では基金に応じないで来た。私も被災者で保険会社の損害査定員から50%以下の被害というお墨付きを貰った。支部の募金の際には、募金を誘発するために率先して募金に応じようと思っている。3月末に日赤に義援金を家内と別々に寄付してきたが、被災者のほうには届いているのだろうか。今回の災害対策は、阪神・淡路大震災より対応に時間がかかっているようだ。

この頃は、列車に籠城することもあるので出かける時は現金を多めに持つようにしている。何時、災害に遭うかも知れないので洗髪とミューズ石鹸によるボデーシャンプーは旅先の緊急外科手術を想定して清潔を心がけるようにしている。私には想定外ということをなくしたい。喜寿、傘寿、米寿、卒寿、白寿、茶寿、皇寿、…どの寿までか生かして貰えるか楽しみである。

農工大学の思い出

西村 寿 (農工S50)

学生時代の思い出の一つを紹介させていただきます。私のクラスは、農業土木専修20人と農業機械専修10人ほどの30人が同級生でしたが、試験が近づくと、誰が言い出したのかはつきりしませんが「試験合宿」なるものをやっております。

た。農学部校内の武道場の裏手で学園通りとの間に「合宿所」と言われた量の間のある木造の建物があり、ここを学校から借りて合宿するのです。

まずは、授業によく出ていた者が、ノートを整備し、そのコピーを準備し、みんなに配布します。また、ある者は、科目ごとに先輩から過去の試験問題を取り寄せ、時には、模範解答も教えていただき、傾向と対策案を作成します。先生役(私はそこそこまじめに授業に出ておりましたので、先生役も多かったと記憶しているのですが)は、少し前から試験準備を始め、合宿中は先生となります。もちろん、人によって得意科目が違いますから、その科目が得意な者が先生役になります。

クラブやアルバイトが忙しく授業にあまり出られなかった者も合宿には顔を出し、それなりに準備をしていきます。合宿所から試験会場に通学する者も出てきます。パチンコで忙しい者も、景品を仕入れてきては授業料代わりに置いていきます。真剣に勉強する者、議論にふける者、寝ている者、ノートのコピーと過去問だけを持って帰る者いろいろいます。夜は、誰からともなく酒盛りが始まります。酒だけ飲みにくる者もいたような・・・。

試験の成績はというと、先生役がよいとは限りません。いつの世も、頭のよい人や要領のよい人はいるもので、準備の時間の長さが成績に比例するようなことはまずありません。ノートの準備や過去問の準備をしたり教えてあげた者より、合宿に参加して短時間集中した者の方がよい成績であったというようなことはしばしばあることでした。でも、その時間が無駄であったと思っていた者は少なく、皆との共通の時間を快く感じていたのだと思います。この合宿は、専門課程に入ってからそれぞれの研究室に分かれるまで何回か続きました。当時、他の学年やクラスで同じようなものがあったというような話はあまり聞きませんでしたので、ユニークなものだったのでしょう。

最近、仕分け作業、費用対効果、コスト意識、競争原理などの言葉があらゆる場面でよく出てきます。どれも否定するものではありませんが、私はどれも好きな言葉ではありません。公務員として長く働いてきましたので、一般の会社ではもっと厳しいと言われるかもしれませんが、何でも、お金で判断したり、競争をあおったり、順位を付けたりすることには違和感を感じてしまいます。そのような社会で皆(できるだけ多くの人)が幸せに感じているならもちろんよいわけですが、一部の人が満足し勝ち組負け組を固定化するような社会はよくないと思います。

学生時代、私たちのクラスが合宿をして試験対策をやっていたのは、他の人よりよい成績を取ってやろうとか、出し抜いてやろうとかという感覚でなく、クラス意識が強くてがやがややるのが楽しくしたかったのではないかと。多分にお調子者が多い集団だとは思いますが、お陰様で卒業後も「生産工志緑会」という名の同級会を作って、3年～5年間隔、全国持ち回りで今もクラス会を続けております。それにしても農工大は本当によい大学だったと今でも思います。

遍 歴

星野 徹也 (農化S47)

人生の晩年を迎えてな何かに取り憑かれ、駆り立てられる生活を振り返り、やや大げさに言えばこの人生は何だったんだろうと顧みる事に紙面をお借りすることと致しました。

私は、越後平野のほぼ中央に位置する農家に生まれ、長男は跡継ぎ、それ以下は金の卵と呼ばれた集団就職の時代に田舎を抜け出すことだけを考えていましたが、運良く東京の大学に入り、府中にあるのに何故か「駒場寮」と呼ばれ、月額100円の寮費で東京生活が始まりました。その寮生活は、小説で読んだことのある旧制高校の佇まいを彷彿とさせるもので、取り壊し寸前の「駒場寮」最後の半年間の生活は、東京に出た最初のカルチャー・ショックとなり、恐らくそこにいた寮生の誰もが忘れられない記憶をそこに残すこととなったのではないのでしょうか？驚くことに、当時の寮生は真面目に寮費3倍値上げ阻止というような運動をやっていて、このような運動について戸惑いながら、300円の意味について考え、先輩たちの話を聞いたものです。

それから、あの時代、敗戦から講和条約と同時（間違っているかも知れませんが）に締結し今も引きずっているアメリカとの不平等な安全保障条約の改定問題（70年安保）と、当時の学園闘争に対して、殆ど全ての寮生がその影響から逃れられなかった政治風景に、田舎者の頭は整理がつかず、大学の勉強というものに手が着かない状況が続いてしまいました。これを書き出したらこのことだけで終わってしまいますので、これ以上触れないことにしますが、そもそも私は政治運動の煩わしさから距離を置きたいと思ながらも無関心ではいられない学生時代だったと総括できるかも知れません。そのような中で、専門とは別の芸術的なものにあこがれていたため、美術部の部室を拠点に絵を描き、自分の世界を広げていきました。最初は工学部の西ヶ原記念館に、取り壊した後は別のかかなり広い部屋をあてがわれ、居心地の良いそれらの部屋で多くの時間を過ごし、色々な人がやってきては通り過ぎていきました。殆ど絵は描かないのにそこを居場所としてやってくる人、中には絵の外にヴァイオリンやフルート、ピアノなどの楽器を弾く人たちがいて、楽しそうに合奏するのを傍らから見て、絵と共にそれを自分のものにしたいという欲求が増していきました。見よう見まねでヴァイオリンを始め、もっと簡単に音楽に触れることの出来る合唱団に入りました。女子美術大学との混声合唱で宗教曲の練習中、室に入った瞬間人間の声の響きの圧倒されました。こうして、私の学生生活の大部分は、美術と音楽に終始したものになりました。6年かけて何とか卒業しましたが、振り返るとまさか絵や、音楽で食っていけるものではないと思い知り、また専門を考え直し、私の目には間口が広いと見えていた（ごめんなさい！）高橋健先生の研究室に研究生として拾って戴きました。間の悪いことに学費も不足がちでアルバイトとして高校の非常勤講師を掛け持ちしてしまい、不勉強の身で人に教えることがどんなに大変か思い知りしました。とにかく学校の準備に追われて研究室どころではなく、先生や共同研究者に随分迷惑をかけてしまいました。ただ、この発酵研究室

に在籍していたことが、ある県の醸造部門に就職の道を開くことになりました。クラスで最もふさわしくない人間が地方のといっても技術、研究部門の仕事に就いて、内心忸怩たる思いもありましたが、腹をくくって立ち向かおうと決めたものの、仕事は何でも泥縄式になっていったような気がします。ただ、当時、高度経済成長の時代で、清酒メーカーも幾分余裕があり、酒造会館に間借りしていた分室で、業界内情と深く関わり合いながら技術支援にかかわることが出来ました。実験室は、大学の古い学生実験室とよく似た雰囲気を持っており、酒造会館の裏には木造の実験室も残っていて、今考えるとなかなか趣のあるものだったという気がします。市民オーケストラに入団したため、昼休みには裏の実験室にこもってヴァイオリンの練習をしていました。絵の方もやめなくて続けており、当時、美術界は抽象や超現実主義などが流行していて、アヴァンギャルドなど何でもありで、自身はそれほど影響を受けたとも思えないのですが、当時は随分変な絵を描いていたと思います。身近に篠崎輝夫という画家がいて大きな影響を受けました。篠崎は日本美術の根底にある色彩感覚と画面の構成力をもって、具象、抽象を超えた表現で、絵馬をテーマに構成的な作品を、そして後年シルクロードに取材した壁画のようなスケールの大きい作品を残しています。その他、マリーノ・マリーニの洗練された表現に魅力を感じていました。イタリアの彫刻家、マリーニはギリシャ、イタリアの古典に根ざした洗練された造形美を受け継ぎながら、現代的な独自の感性を示す表現で人を惹きつけます。その彫刻家は、平面に再構成した多くの油絵の大作を残していますが、フィレンツェのマリーノ・マリーニ美術館で出会った圧倒的な作品群の前に、これだけ人の心を捉えて放さない芸術的な表現があるのか！とあらためて神の与えた唯一無二の創造力に驚嘆し衝撃を受けました。私は、篠崎やマリーニの共通性はギリシャローマ美術の、そしてルネサンスの芸術家が目指した徹底した描写力とみて、ゆめゆめデッサンを怠ることの無いようにと自分に言い聞かせ、機会があれば人体の写生に励みました。どうも私は、何かのために何かを捨てるということが出来ないようで、音楽にのめり込んでゆく中で、これまでのヴァイオリンに加えてヴィオラ、オーボエも手がけるようになりました。ある時期からヴァイオリンはヴィオラに持ち替えましたが、オーボエは管楽器でメカニズムが全く違うため、簡単にはいかず、ハンブルク交響楽団元首席奏者の河野剛先生に教えを受け、デトモルト音楽大学教授G.シュマルフスの「オーボエ・アカデミー」に、参加して、若い音楽家や音楽家の卵たちに混じって公開レッスンを受けました。シュマルフス先生は5、6カ国語が話せて日本語も出来、最初はローマ字で後に漢字交じりの日本語で電子メールが来るようになりました。このようにしてオーボエの音を磨き、ヴィオラで参加しているオーケストラとは別の市民オーケストラに入団しました。オーケストラの中で管楽器は1パート一人で演奏するため、ソリストのような役割をする事があり、弦楽器とは別の魅力を感じるようになりました。ただ、一人1パートということは、練習を休むとそのパートが欠けることになり、仲間の響きを買うことになります。仕事も忙しくなり、外にも色々なことをやっていたため、オーケストラの拘束時間が苦痛になり退団しました。その後は、

これまで出会った気の合う仲間と小編成のアンサンブルで練習を楽しみ、もう一つのヴィオラで参加していたオーケストラも退団して小編成の室内アンサンブルに乗り換えました。アマチュアオーケストラも成熟してくると、トロンボーンなどの金管楽器の出番が無くならないように大きな編成の曲を取り上げることが多くなって、アンサンブルやハーモニーの美しさを追求する事に関心がいかなくなりがちです。大編成オーケストラから、指揮者無しでお互いの音を聴き合っただけのアンサンブルを作っていき室内楽に活動を移しました。

展覧会の方は、日展を初めとする公募型の会派は、家元制度のようなピラミッド構造になっていて、残念ながら展示物そのものに魅力を持った会派もないと感じて、出品もせず会場に足を運ぶこともなく、発表の場はとてま少なくりましたが、すぐれた制作がなければ発表する意味もないので、とにかく制作を続けて、作品作りに励むことにしました。

仕事のことも書かなければなりません。若い時代は酒造会館で酒類業界の意を受けながら、泊まりがけで清酒造りでの深夜の仕事を知り、杜氏の職人技の一端を学びました。

感覚を研ぎ澄まし、身を削り、寝ずの番をしながら造って、満足のいく点と読み違えた欠点が製品に反映する厳しい世界を垣間見ることが出来ました。杜氏の酒造りにかける意気込みと日々技を磨くことに捧げる姿勢は、美術や音楽などの芸術に通じるものがあると共感を覚えました。

時代が下ってくると、次第に産業構造も変化し、それに伴い県の出先である職場も別の機能を求められるようになり、地域の活性化、地域振興など行政の要請で、果実ブランドや、発泡酒なども手がけましたが、製品の品質はともかく事業化では最終的にどれもうまくいきませんでした。清酒に戻って、醸造微生物の改良と原料米の開発は、メーカーにとって、コストを掛けずに付加価値を付けることが出来るため、業界の活性化に寄与すると、それぞれ別の時期に開発を進めました。当時、吟醸酒の香りを高くする技術は、安易に添加する事を除けば、それこそ身を削り神業の技術を要したのですが、酵母の遺伝的な代謝系制御で香気成分高生産性を付与することが出来る技術が開発されました。当然、特許技術でありましたが、特許侵害で開発された酵母も出回り始めた中で、当所では、県内清酒メーカーに、開発した酵母の特許使用契約を結んだ上で使って貰いました。特許使用料を負担することとなりましたが、違法のものが出回っていた中で使用料はわずかであったと聞いています。現在、特許期間が過ぎて自由にその技術を使用できるようになりましたが、いま市場に出ている香り高い清酒は全てと言っていいほど、このような酵母を使用して造られたものであります。ただし、清酒の品質は香りだけで決まるものではないので、全国鑑評会に出品されるような清酒は、今もって技術の粋を究めた職人技で造られた製品であることは変わりません。これが国酒ともいべき清酒の品質を牽引する役目を果たしていると思われまます。

次に、原料米の開発ですが、清酒に使用される原料米は「酒造好適米」といって清酒製造にのみ使われる専用の米があります。大粒で心白を持ち、晩生のものが多く、早場米の産地である千葉県には、それまで酒造好適米品種はありませんでした。米の品種開発は当時の農業試験場の仕事でありますか

ら、農学科出身、しかも絵で共通の趣味を持つ現農林総合研究センター所長の小山豊氏の研究室と楽しく共同研究を進めました。私の方の作業は、育成された系統の醸造適性評価を行い選抜を進めるというものです。開発された新品種は、夏場の気温の高い時期に登熟する全国でも珍しい品種として注目されました。種苗法に基づいて品種登録し、奨励品種に指定された酒造好適米品種「総の舞」は、全体に清酒製造数量が減少しているため栽培面積は伸びていないようですが、県独自の品種として付加価値を付けて世に出ています。

「工業試験場」も「産業支援技術研究所」と名称が変わり、部署も「酒造課」から「醸造課」、「食品醸造室」となり、私の再任用最後の年には「食品バイオ応用室」に再編され、酒や醸造の文字が消えてしまいました。



高橋健先生と・・・完成間近・・・



高橋健先生肖像

2008年11月に高橋健先生の米寿記念パーティーが開催され、出席した折に先生のもとにご挨拶に伺ったのですが、覚えておられるはずもない中で、絵を描いている旨話して先生の肖像画を描くことを提案したところ、半信半疑だったと思いますが承諾されました。あの日、キャンバスを持って先生のお宅で描かせて戴きました。3時間の約束を30分ねばって何とか描き上げましたが、日頃のデッサンの成果が出たかどうか、ひとまず満足して戴けたようです。

小林節子先生には88歳の時に我が田舎の小屋において戴い

て肖像画を描くことにしていましたが、クラス仲間と一緒に時間が取れなくてその場では実現しませんでした、しかしまだあきらめてはいません。

この4月に再任用期間が終了して、晴れて自由時間が格段に多くなり、コンサートや絵画の制作に専念し、新たに、昔の合唱経験から独唱を目指し「千葉県歌曲アカデミー」でトレーニングを受け、声を鍛えコンサートに参加する事も多くなりましたが、今年1月に突然逝った同級生を送るために唱う事になろうとは思いませんでした。フランクの荘厳ミサ曲の中から「天使の糧」とカッチーニの「アヴェ・マリア」が、毎年のように会っていた彼女に届いたでしょうか？

現在は、少しだけ社会との接点を持つために、ある専門学校で若い学生たちと楽しく実験を続けています。

そして、拙文を記しながら、暗い少年期に芽生えた芸術的な憧れを、現実には解放したのが当時の自由な空気の農工大であり、私の人生はそこで出会った多くの友人、先輩、師の許に築かれたものであると思ひ至り感慨に耽っています。あと50年元気に生きられたら何者かになるか・・・などと夢想し、あきれられています。



ギャラリーコンサート（自作小品の前で）

まだやりたいこと、やり残したことが山ほどあって整理のつかないまま疾風怒濤の人生を突き進むような気がしていますが、自分でも音楽をやっているカミさんを踏み台にしたこの生活は、まこと反省しなければならないのです。

忘れ得ぬ人生の記憶

河野 真人（林S45）

人は記憶をバネに生きる不思議な生物です。農工通信の物語を、百年に一度の大地震をくぐり抜け、書いてる私です。原爆後の長崎で、川原の骨を投げて遊び、溜め池に落ちヒキガエルの卵に絡まれ気絶したこと。山野草が命綱の時代でした。高次の4人組で晩秋の島原半島3泊4日歩け歩け野宿の旅。担任はガンバレの一言。田んぼに寝て、満天の星空に人工衛星を発見。教科書にはない宇宙に感動。農工大を目指し、夜行列車で駒場寮に辿り着くと、ペロリ節の特訓と酒を飲まされ奇跡の合格となった。寮ではストームや星夜に雨が降る

行事も今は思い出。二夏を北国でと友と金華山や早池峰などに登り、熊の足跡に逃げ帰ったり恵山と十勝三股でのバイト。その帰路、利尻岳や知床を森繁久弥の知床旅情のテーマソングに乗って、今話題の国後島も輝やいてました。自然保護を専攻し、3年次は丹沢の鹿調査の荷物運び、4年次の卒論は運良く、新潟県依頼で妙高山の生態調査に挑戦。単純に見た事を記録するだけ。しかし、残雪の5月から11月の新雪まで、山の無人小屋に食料を背負って通うのは、大変。夏には貴重な食料をネズミに食べられるという悲劇も。高山植物咲き乱れる中に、雷鳥の親子を発見。写真が証拠と新潟県に報告し、アルプス以外の雷鳥繁殖地として地元新聞で話題になったとのこと。ところがその後、焼山が大噴火し、妙高の雷鳥達も絶えたそうです。農工大を卒業後、偶然にも、熱帯林業の大谷先生から、ボルネオの森調査に行かないかとの話があり、行く行く、行きたいですと、初めて飛行機に乗り、地球の丸さを宇宙から眺め、小型機に乗り換え、ジャングルを伐採した飛行場に降り立った。元首狩族のイバン族の村に世話になり、森の生活が始まった。竹や木をツルで結んだだけの高床式のロングハウス。蛇や虫や湿気対策の家。男と女の部屋は別。女の部屋に行ったらこうなるよと頭蓋骨を見せられる。昔は部族間の戦いで、敵の首は村の入口に飾る風習だったが、今は国で禁じられているようだ。イバン族が、オイコラ！ナカムラ！とか軍歌を歌い、日本人の頭蓋骨も並べられ、戦時中、大和・武蔵が石油基地として、駐留していたことを初めて知った。熱帯林は樹高80m、林冠はキャベツ状に多種多様で、同じ木を捜すのが難しく、落葉はすぐに分解されてしまうので、樹木の同定は難しい。イバン族は視力2.0、木登りは生きる為の技。姿が見えないと思ったら、木を伝って、ランプタンとかドリアンとかを必要だけ採ってくる。男達でのヒーローは、木登り大会で優勝すること。女性は競うことはなく、皆でおしゃべりをし、川で洗濯をし、一枚の布を胸の所まで、クルッと巻いておしまい。

日本からの食べ物で、イバンの人気は醤油、ラーメン、不人気は餅と梅干でした。森から街へ買い物に行く時は、丸木の舟に乗って、川の所々に並べた果物や布や米の物々交換風景も見られました。ヘリコプターでの上空からの調査は軍のを借りて、川添いを低空飛行したり、高い所から茶色の蛇行は本当に蛇のように見えました。海辺にはマングローブというタコ足状の根を持つ数メートルの低木林が見られます。熱帯林はラワン材やチップとして輸入され、伐採跡地は急激に砂漠化した所もたくさんあります。最近のテレビで、私が歩いたブルネイのイバン族の村が、エコツーリズムの森として、日本人にも人気だと知って、嬉しく思いました。また、ボルネオからの帰国の時、思い出にと最高峰キナバル山に登ろうと、登山口のロッジに寄った時、日本人が登山にやってきましたと写真入りで紹介され、それが縁で一晩ホームステイし、おいしいビールや焼肉をごちそうになりました。森のイバン族とは別に、英国人の多い明るい海辺の話です。帰国後は、体験を活かして自然の魅力を子供達に伝えたいと生物の教員になり、東京、長崎、宮城とウロウロし、その間、生物部、山岳部の顧問を続け、無人島でのキャンプ。先生・生徒・保護者との満点の星を眺め、42キロ歩け歩けを実行。男子校山岳部では、4泊5日の朝日連峰縦走で、以東岳を下り降りる

とそのまま雪解け水を集めたタキタロウという陸封された巨大イワナが棲息することで有名な大鳥池で、パンツ一つで泳ぐのが男の約束。そして全員の記念のポーズが文化祭山岳部の毎夏の下界での話題でした。夏でも残雪があるのは、世界でも日本の東北の豪雪地帯だけというのも嬉しい。もちろん山上のお花畑は深い雪があり、夏の暑さで雪がきっちり消えて行くことという奇跡の現象なんです。ついでに蔵王という山は冬のトドマツに氷雪が激しく日本海から吹きつけて、エビのシッポが大きく育って、スノーモンスターになるのも世界でここだけの現象、温暖化で樹氷が見られなくなる日も近いそうです。私が最後に勤務した高校には学校林があり、日本一の森ををモットーに、ヤブ蚊の夏も、寒さの冬も、生徒と笹刈りに汗を流し、樞や櫛や櫛のドングリが育つような明るい里山再生活動を展開。小泉首相から総理大臣賞を得たことも。今ではカタクリ、シュンラン、エビネの春から、秋のドングリ、紅葉、冬の炭焼きまで小学生の森体験授業から、県全域を対象にした県民大学まで20回程の里山行事を展開しています。

モンゴルの青年がホームステイし、森体験に参加し、焼芋を初めて食べ、机に伏せていたので声をかけると、森の歌を聞いていたとの答えに??。モンゴルは草原と砂漠の国で馬でどこまで走っても風は歌わないという。森林率1%以下。人口密度0.9人/ha。環境が厳しい分、朝青龍や白鵬が育つことも納得。退職後、地球の未来の為に、森の木を、梟や翡翠のアートにし、売り上げ金でタンザニアへ4万本に成功。人類誕生の地、世界一の火山キリマンジャロの氷河を守る為。息子が留学中、マラリアに倒れ、奇跡の生還の御礼もあつての植林です。後日、憧れのキリマンジャロにも登頂し、今は獣医として頑張っています。

3. 11大地震の日の素敵なお話、自転車で津波被害を記録中、松島で70人が全員、天空の楽園に逃げ助かった部落の話。竹林を越える津波を見て、逃げろと叫び、丘に走った。88才の佐々木さんが津波に備えよという記録を忘れず、道を造り、山菜や柿、梅、桃、栗、アケビ、小鳥の為にツルウメモドキなども植えた楽園は廃虚となったガレキの山を見下すまさに天国でした。焚火をする薪やライター、非常食も。避難所では、食パン1/4、ミカン半分が一食分だったそうです。

りんごと私の関係

葛西 智 (生産H13)

私は、青森県の岩木山麓でりんご生産を営む農家の次男坊として生まれました。両親は私に家業を継がせるつもりはなく、「月給取りになれ」が口癖でした。作業を手伝っても言われた通りにするだけで、りんごのことは何一つ知りませんでしたし、知ろうともしませんでした。

高校時代、「バイオテクノロジー」という横文字に惹かれ、生物の先生の勧めもあって農学を志すことにしました。農工大学に入学した後も、農学は学問として学ぶものであって、農業に関わるつもりはないと自分の中で割り切っていました。

そんな中、構内ではソフトボール大会が行われており、同級生の内山君に半ば強引に引きずられ参加することになりました。どうやら「耕地の会」というサークルのチームらしく、彼らは底抜けに明るくてとても楽しかったのを覚えています。これをきっかけに、私は「耕地の会」の一員になりました。このサークルの活動は飲み会がメインでしたが、近所の農家に畑の一面を借りて麦や野菜を栽培したり、時には新潟や福島農家を訪れて「援農隊」として作業を手伝ったりするものでした。彼らのほとんどは農業とは比較的遠い環境で育ったにもかかわらず、本気で農業を学ぼうとしていました。彼らと活動を共にする中で、農業から遠ざかろうとしていた自分の浅はかさに気付きました。彼らと過ごしたことは僕にとって大きな意味があったし、今でも支えになっています。

私は今、地方独立行政法人青森県産業技術センターりんご研究所(旧青森県りんご試験場)というところに勤務しており、りんごの栽培に関する研究に携わって10年になりました。僕は月給取りになりましたが、やはりりんごとの関係は続いています。最初の頃はりんごのことを全く知らず、自分の不甲斐なさに悩んだこともありましたが。研究対象としてのりんごの奥深さを知り、まだまだ分からないことだらけだということも知りました。

地方の研究所は地元産業の活性化に寄与することを最大の目的としていますので、現場に直結した研究成果が求められます。りんごは青森県にとって米に並ぶ主要な作物であり、当研究所に対する生産者や関係者からの期待度は非常に高いと認識しております。私もその一助となるべく、りんご「ふじ」の果実障害に関する研究に取り組んできました。「ふじ」はりんご生産量の半数以上を占める主要品種ですが、つる元に亀裂が生じる「つる割れ」と呼ばれる裂果が発生したり、貯蔵中に果肉が褐変する「内部褐変」という障害が発生したりします。これらの果実障害はりんご産業にとって大きな打撃を与えますので、早急に対策を確立する必要がありますが、その発生機構については長い間未解決のままです。今回、これらの果実障害の発生機構の解明に関する研究成果が評価され、平成22年度園芸学会東北支部賞・研究部門賞を受賞することができました。私のような若輩者が・・・と恐縮しておりますが、今後とも地元りんご産業の活性化に寄与できるような研究に邁進したいと思っております。

思えば私の人生はりんごと切り離せない関係にあるようです。最近は体つきもりんご体型になってきました。りんごと私。私とりんご。私はりんごと共に生きています。

見知らぬ地に住むということ

金山 武史 (農化S62)

初めて熊本を訪れたのは、20年以上前のことでした。

静岡に生まれ育った私にとって、九州は身寄りも友人もない、未知の地でした。JR鹿児島本線で博多から鈍行を乗り継ぎ、初めて赴任先の植木駅に降り、誰もいない駅前に立って途方にくれたことを今も覚えています。

(その後、九州では鉄道敷設の際に強い反対があってJRが市街地から離れたところにあり、そのためJR駅ではなく、バスターミナルが市街の中心にあることを知りました。もちろん植木町も、国道3号線沿いはしっかり栄えています。)

あれから20年。私は今、縁あって熊本にいます。農林水産省を退職し、懐かしい植木町に戻って副町長(助役)を務めていましたが、昨年3月熊本市と合併し、現在は、来年4月の政令指定都市移行を目指す熊本市役所で、農業振興の仕事をしています。地方自治の仕事は大変やりがいがありますし、地域の方々はもちろんのこと、農工大の先輩方に温かく迎えていただき、大変助けられています。

好きが講じてビール会社に行きたかった私が、このような人生を送るとは想像もしていませんでしたが、節目節目でそのときの風に逆らわず、自然に従いながらやってきたような気がします。そして今は、日本一のすいかをはじめとしたおいしい果物と温泉、そして豊かな海に恵まれたこの地の暮らしを満喫しています。何より一番うれしいのは、いつ行ってもそれなりに釣れること。天草の入り江には未開のポイントがたくさんあって、キス、アジ、カワハギといった季節ごとのさまざまな魚たちが、雑魚釣り専門の私をいつも満足させてくれます。

これまででも、仕事柄何度か転勤を経験し、その都度初めての地に住むことになりました。横浜、岡山、千葉……。引越しは大変な作業ですが、引越しするたび身軽になり、リセットされていくのは気持ちが良いものです。別れ、そして新しい出会い。

誰かが言っていました、「寂しいのは、去る者より、残された者。」

そして、あの未曾有の大震災直後の3月14日、私は懐かしい国分寺の街を久しぶりに訪れていました。この春から、上の子が学芸大に進学し国分寺に一人暮らしを始めることになり、この日は入学手続きにやってきたのでした。

「何で好き好んで親父と同じ街に住むのかね」とぶつぶつ言いながら、体は自然にかつて知ったる街を案内してくれます。国分寺に特別快速が止まるようになった、というのは知っていましたが、降りて駅ビルの中に入るのは初めてでした。立派な駅ビルに、洒落たファッションの店がずらり。「我々の頃は、駅ビルなんてなくて、南北連絡の長〜い連絡通路があっただけ」

農工大はやっぱり府中だもんね。樗通り、養老の滝、競馬場。でも大学の同級生が集まって話題に出るのはやっぱり「仲よし」。酔っ払ってあんまりいい思い出がないね。国分寺といえば、南口の「ロード」はまだあるのかな……。

そんなつまらぬ親父の独り言は無視して、娘はとっとと北口を歩く。おっと、駅を一步出ると、見覚えのあるパチンコ屋、本屋、商店街の変わらぬ風景。それでも彼女にとっては、不安と期待の入り混じった、見知らぬ街での新しい暮らしの始まりです。いわし屋の生簀を眺めながら、またまた無視されると知りつつも、そんな彼女の挑戦にささやかなエールを送ろう。

「人生は、いつも旅の途中。出会いと別れの中で、大切な

友と、自分自身を大事にしながら歩き続けよう。Good Luck !」

第二の人生を歩む

柴里 道男(農化S49)

私は1974年に農学部農芸化学科を卒業し、食品系の会社に就職しました。会社ではいい仕事を沢山やらせてもらいましたが、年功が上がるにつれて自分の経営感覚の乏しさに気が付き、このままでは厳しいと感じていました。同時にもっと直接的に人のためになるような仕事をしたいという思いも芽生えていました。そんな頃たまたまテレビで、脱サラしてマッサージ師となった人が自宅で開業し生き生きと働いている様子を見ました。これは自分の探し求めていたものに近いと思い、その関連の情報を収集し自分の考えをまとめて転進を決断しました。

マッサージ師は正確には按摩マッサージ指圧師と言います。関連した資格に鍼灸師があります。この二つの職業資格は専門学校で同時に取得することができます。ここで重要なことは、①国家資格である、②開業権がある、③業務独占権がある、④中高年から再出発できる、という特長があることです。これが脱サラ転進を可能にしてくれます。職業は様々ありますが、中高年から脱サラ転進して何とかやっていける仕事は数えるほどしかないと思います。幸い専門学校に合格し1999年から3年間学生生活を送りました。入学してみると学生の年齢構成は極めて幅広く、高校卒業したての子から定年退職したオヤジまで揃っていました。老若男女入り混じった学生生活はなかなか楽しいもので、25年間のサラリーマン生活でたまった疲れを洗い流すことができました。

入学前、農工大で学んだ事やサラリーマン時代に身に付けた知識は何か役立つだろうと思っていましたが、意外にもほとんど役立ちませんでした。少々役立ったと言えるのは生理学と衛生学の知識ぐらいでした。食品関係の知識は食養生に生かせるから絶対有利と思っていましたが、実際には食養生は臨床論のごくごく一部なので使いみちがありませんでした。むしろ私は理科系の知識を持った者として、戸惑う場面が何度もありました。専門学校の授業の中には科学的に説明できないことが多々あって、自分の中で調和させるのに労力を要したのです。ここではそれを具体的に語ることは避けようと思います。現在の知識を基準として拙速に当否を判断すべきでないと思うからです。それに何より私が荒唐無稽だと思う治療理論によって立派な成績を上げている人もいますので。ただし私は今の自分が説明できない治療技法は探っていません。

2002年に国家試験に合格し、晴れて按摩マッサージ指圧師、鍼灸師となりました。さっそく屋号を決めて保健所に届け、自宅で開業しました。タウンページには電話番号を登録しました。ジャンジャン電話がかかってきたらどうしよう、

と下手な心配をしていましたが、何日待ってもまったく電話はかかってきませんでした。初めのうちは電話機が壊れているんじゃないかと心配になったほどです。そのうちにこんなものなんだと分かってきました。現在もあまり状況は変わりません。暫くして介護業界の会社からお誘いがあったので2005年から訪問療養マッサージを始めました。これは在宅や施設のご老人を訪問し、健康保険を利用したマッサージをするものです。これで一定数の患者さんを頂き、何とか息ができるようになりました。昼間はおもに訪問に出てマッサージをやり、夕方からは自院で鍼灸治療をやるというパターンで今まできています。

マッサージは原始的な技ですが、その力の入れ方、動かし方により、対象である人体の反応は奥深い変化をします。効果は直接的に筋肉腱に表れる一方、感覚受容器から反射経路に入り全身的にも表れます。これらを体得するためには長い修養が必要です。鍼灸も同様。まだまだ解明されるべきことが沢山ある魅力的な世界です。

今年で10年目になります。今までを振り返ってみると自分の幸運をひしひしと感じます。脱サラを家族が理解してくれたこと、25年も勤めた会社から気持ちよく送り出して頂いたこと、資格を取ってほぼイメージ通りの仕事に就けたこと、少々の失敗はあっても順調に患者さんを頂いていること、等々。そして近頃特に自分が恵まれていると感じるのは、思う存分ボランティアに関われるということですね。これは脱サラする時の希望でもあります。仕事の量を加減しながらボランティアにも力を注ぐという姿は第二の人生にはふさわしいように思います。現在は具体的にはデイサービスで奉仕したり、障害児キャンプの裏方スタッフをしています。また臨時のボランティアとして旧赤坂プリンスホテルにいる被災者への鍼、マッサージのサービスに出仕しています。

第一の人生は農工大で教わった知識を生かして25年間の技術者生活、第二の人生はまったく異なる世界に踏み込んで少々気ままに生きる？年間。多くの皆様に感謝！

母校での学びが生き続ける日々

横林 和徳 (農S43)

農高教員の道を選ぶ。

入学した年の1964年、北海道は大冷害でした。同級の故成田君の提案で冷害対策実行委員会を組織し、大学周辺の民家から衣類を集めたり、府中や調布駅頭でのカンパ活動に取り組みました。この組織が農業問題研究会となり、65年救援物資送り先の北海道広尾町の農作業体験を兼ねた農村調査へ進みました。この時、農家を訪ねて「人間らしい生活をしたいから離農する」と言われた言葉は今持って頭を離れません。このサークルで、66年の長野の佐久、67年の新潟との県境の栄村と学生手作りの調査と農業労働を体験しました。合わせてサークル結成の後、途絶えていた農ゼミ活動を故西川裕人

君を先頭にして再開させました。当時、農ゼミのテーマは「日本農業破壊の本質を究明する中で農学生の社会的任務を果たそう」でした。こんな活動で学んだのは、主権者意識を持って、積極的に農村の変革に取り組む農民の役割でした。そうしたなかで、将来の農民が育つ農業高校に勤め、農民運動を担う卒業生を育てたい、そんな気持ちで農高教員の道を選びました。

教員時代の取り組み

教員時代取り組んだことは、全国教育集会に提出したレポートに現れています。1回目は「普通科における農業教育の実践と課題」(1977年)です。これは農業教育は農高生だけでなく、国民的な共通教養として農高以外の生徒にも広げることを目指したものでした。2回目は「技術の歪みを正す教育を－省農薬の教育を大胆に」(81年)。当時の外観重視で多農薬散布の栽培法を改め、消費者にミカンの栽培方法の説明書を入れ、生協出荷に取り組んだものです。3番目は「食糧と農漁業を考える長崎県各界連絡会の取り組み」(87年)です。これは地域の消費者、労働組合、農民組織の交流と学習を目指した組織の確立です。発足会には230人集まり、学生時代佐久を紹介してもらった故平井正文先輩(当時大阪法経大教授)に講演してもらいました。45歳の時長崎県高等学校教職員組合(全日本教職員組合傘下)の専従執行委員長となり、通算8年間教職員の要求実現に取り組み、県下全部の高校・障害児学校の組合員を激励してまわりました。主権者意識を持った農民を育てたい思いがこんな形で出てしまいました。教員4年目に、卒業生が就職した地元の縫製工場の労働組合の設立を援助し、「労働者の権利」の学習や模擬交渉等を手伝ったこと。40代前半3校目の諫早農高分校で、荒れた生徒達を前にして連続3年間1年生を担任し、憲法と旧教育基本法の理念で同僚と共に立て直したこと。こんな学校内外での体験が組合専従を担うエネルギーになっていました。今、T P P参加阻止運動で若い時担任し、今農業委員になっている卒業生と一緒に議会請願に取り組んだり、県内の県労連関係の農業問題の学習会ではレポートしたりしていますが、就職時目指した農民運動をダイナミックに組織する夢には届いていないようです。

退職後に観光ブルーベリー園を開設

50代半ばは、諫早農高で果樹を担当しましたが、90年代から健康果実として注目が高まったブルーベリーを農場に植え付けました。同時に退職後の生活は農民の仲間入りをしたい強い衝動に駆られ、1.6%の山林と原野を購入し、ブルーベリーの観光農園を開く計画を立てました。在職時、数年かけ90本の梅と約100本のブルーベリーを植え付けました。一時は草にブルーベリーが隠れてしまう危機もありましたが、妻や親戚の援助が有り乗り切りました。「なぜ、ブルーベリーを植えたのか」と摘み取りに来た来園者によく聞かれます。母校では園芸研究室に籍を置きましたが、当時果樹担当の岩垣先生が「これまでの果樹は研究がかなり進んでいるので、新しいものを取り上げたい」としてブルーベリーを研究しておられました。私は3品種の交配に関する調査に卒論で携わり、同僚の照井君と施肥や伸長測定を体験しました。こんな体験から、世間でブルーベリーが脚光を浴びるなか、これは黙ってはおれない、そんな気持ちで観光農園を開きました。

この間、母校の農場も度々訪問し石川駿二先輩（現日本ブルーベリー協会会長）に指導を受け、今持って、私の園から直接疑問点を訪ねる等、一方ならぬお世話になっています。日本ブルーベリー協会からの情報は欠かせませんが、この協会は多数の本学出身者が支えておられます。私にとっては母校様々なわけです。摘み取りに来た子どもからは「チョウウまい」の声が聞かれます。地元の直売所に出荷するブルーベリーのケースには「食と健康と平和をつなぐ9条ブルーベリー」と印字しています。

栽培面積も増え、家庭果樹としても広がっているブルーベリーに故岩垣先生も微笑んでおられることでしょうか。私の就職決定時に戴いた先生の「技術学の基本は事実を体得すること」こんな言葉も若い時胸に刻んでいました。



管理棟から見下ろすブルーベリー園

学生時代よ！再び

渡邊 直人 (林S50)

昨年35年勤めた岡山県を退職しました。最後の夏、大学時代の思い出の場所を尋ねることにし、日光までマイカーで往復しました。学生時代の宿のご主人、草木の演習林宿舍跡、都内から府中に移転した妻の母校、農学部一号館4階の教室、ぶらぶら歩いた中山道の望月宿から和田峠、馬籠から妻籠宿となつかしい思い出を妻と再現することにしました。

8月8日（土）：夜自宅発、9日（土）中仙道望月の宿、10日（月）渡良瀬渓谷のサンレイク草木、11日（火）武蔵村山市の妹宅、12日（水）中仙道馬籠の宿、13日（木）自宅着の計画を立て、ネットを活用して資料を集めながら昔の思い出を探しました。

○8・9日：夜12時鴨方ICから山陽高速に乗り諏訪湖を目指しました。途中京都付近で大雨に会い、諏訪湖SAだったので朝6時半でした。ここで朝食を採って、ビーナスラインで白樺湖から霧ヶ峰へ、車山の頂上へはリフトで往復、学生時代の宿のご主人の姫木平の別荘で昼食を頂いて、それから和田峠から旧道を通って中仙道の和田宿の陣屋跡、笠取峠の松並木を訪ねて雨の中、夕霧で霞んだ望月の宿に着きました。

○10日：大雨の中を佐久ICから高速に乗り伊勢崎ICで降りて大間々警察署の前まで来た時、電光掲示板が「日光方面は交通止」だと教えてくれました。警察で解除の時刻を聞いたが拉致があかず、宿にも連絡したがいつ解除になるか分から

ないとのことでした。時間待ちでは仕方がないので、裏街道を通って中禅寺湖まで行くことにして根利機械化センターの入口を通って老人温泉、トウモロコシ街道、金精山トンネル経由で華厳滝を見に行きました。大雨警報下、現地は土砂降りでも滝も雨と霧で何にも見えませんでした。滝の近くの県事務所に寄って草木方面に通行できるかと聞くと「できない」とのこと。仕方がないのでまた来た道を帰り、水沼駅の本線まで帰ったところ、道路協の案内板が「日光方面通行止め解除」を示していました。やったーと思って渡良瀬川を遡って神戸駅舎で小休憩をしました。それから演習林事務所に寄って、当時、現地案内をしてくれた小林さんの近況などを聞きました。草木駅は湖の底に沈むが宿舍は沈まない高さだと学生時代に聞いており、その宿舍の校門の石柱がここにある聞いていたのでその場所を教えてもらいました。帰りに門のところで職員の方に妻と一緒に記念写真を撮ってもらいました。草木湖のダムの上を通過し右岸に渡りやっと宿ついたのは夕方5時を過ぎていました。

○11日：朝食前に雨の中を一人で歩いて宿舍跡を見に行きました。舗装されて駐車場になっていましたが周囲の石垣は昔のまま残っていました。階段もそのまま有りました、38年ぶりの宿舍跡に立つと、学生時代のいろんなことが思い出され感無量でした。草木の宿舍跡を尋ねるのがこの旅行の本当の目的でした。天気が回復してきたのでもう一度中禅寺湖を目指し、途中の足尾駅では入場券を買い、いろは坂を歩いて半月山の展望台から足尾銅山跡を見て昔を懐かしみました。それから日光東照宮にお参りして、逆コースで帰り、富弘美術館に寄ってから武蔵村山の妹宅に泊まりました。

○12日：早朝に妻の母校の東京外語大府中キャンパスまで行き、農学部の校門の前では時計台をバックに並んで記念写真を撮りました。それから、中央高速に乗って妻籠・馬籠宿を目指して西進しました。JR南木曾駅で入場券を買ってアリアバイを作り、東山魁夷美術館へ寄ってみたがお休みでした。妻籠から馬籠の宿に向う途中で、学生時代はこの石畳を歩いたんだなーと思い出し、「是より木曾路」の碑の前で妻と並んで写真を撮りました。



最愛(?)の妻とツーショット

○13日：もう一度、新茶屋の前を通って中津川へ出て高速道路で岡山へ向かい、夕方4時半には家に着きました。東名高速の牧之原SA付近では11日の地震で路肩崩壊があり、応急工事が行われ、お盆に間に合うように通行できた日であったように覚えています。

奉職後初めて、夏休みをフルに使っての5泊6日、往復2,518kmの青春時代でした。

PS 1年後輩の渡辺直明さんへ、演習林事務所や草木宿舍の情報をありがとうございました。

在職中のガン宣告と放射線による高度先進医療治療

安田 勝年（製糸S42）

卒業後は郷里に帰り、直ぐに岐阜県職員として採用されて繭検定所に入所し、初めて配属された職場は業務課一係で、繭検定期間中は、検定繭の受付、秤分け、乾燥、選繭と判定業務が主な業務であり、研修期間中は、調整繭の保管と選繭作業で女子工員たちの技術指導でもあり、先輩から見習うことから始めたことです。当時は入所して一年目は、土室式の気熱乾燥機で、深夜の明け方まで乾燥しないと（キョウソンの発生の原因）正常な受付とならないとのこと、若さの体力で従事した体験が忘れられなく、当時は、大変周囲から喜ばれたことでした。また、夏季の飛騨地方の検定繭の受付、乾燥業務（五月末頃から十月末頃迄）は臨時の高山乾繭所長となり任務を果たしたことです。当時の乾燥機も土室式の気熱乾燥機で、ボイラーで蒸気を作って生繭を乾燥し、トラック便で可児市（当時は広見町）の繭検定所へ発送する仕事でした。ボイラーの運転には2級の資格が必要となることから、直ぐにもとるよう命令されたもので、試験に合格してボイラー技士の資格をえた。その後47年からは、高山乾繭所は廃止となり、本所の一係で、先輩達と共に仕事することになり、主に日本乾燥機の一段バンド型乾燥機の運転並びに選除繭の判定と秤分け作業や可児川からの引き込みによる給水と硫酸バンドによる浄化の製糸用水の管理などで検定繰糸業務の支援を行ってきたわけであった。なお、当時の煮繭、繰糸、揚げ返し、小節検査などの業務は分業体制となっており、各部署では、長年技術を培われてきたベテランの方の配置で、繰糸管理の現場では、戦前から在籍されてきた教婦さんの存在など円滑に検定が行われてきたので、小生など出る幕でなく、毎日が淡々としていて、やりがいのある仕事だと感じえなかった。そこで、将来を考えて、一念発起で各種の資格（1級ボイラー技士、危険物取扱甲種、低圧電気工事士、空調管理士、ハム通信、宅地建物取引主任者資格など）を取得することに専念したものです。また、当時、県では蚕糸職員の他の部署への異動による削減などの行政改革が行われていて、繭検定所の設置意義が問われていたときでもあることから、将来が先細りで、夢のある職場ではないと悲観したものです。そこで、当時内緒で宅建資格が生かせる名古屋の地産トーカーなる不動産会社の採用面接試験を受けたところ、浮き沈みの激しいこの業界の仕事に賭けるよりも、公務員だから将来は年金などで保証されて安泰だから、今の仕事に専念した方が賢いよとたしなめられて帰宅したことでした。この間には繭検定所長には蚕業試験場長をしておられた方が転入されてきたので、試験研究することには前向きな人で理解があったため、たまたま輻射熱を利用した生繭の真空乾燥について調査することを提案したところ、大変に興味をもっていただか

たので、岐阜県府中市の某企業と生繭乾燥試験を実施することになりました。翌日の明け方まで、経過時間ごとの乾燥率を不眠不休で測定した記憶があります。当時周囲では、蛹がはぜて内部で汚染が発生するのではと危惧されたが、後で乾燥方法を検討すれば（初期の高温乾燥と真空乾燥を併用した方法で）解決できたことを覚えています。先々にはマイクロ波と真空乾燥によることで乾燥時間も速くなったことで改良がはかれた覚えがあります。昭和54年からは、更なる行政機関職員の見直しで、他の職場に転任することが決まり、繭検定所を離れることになった。その後、県の農業技術課や蚕業指導所、蚕を一から学ぶことで蚕業試験場と渡り歩いた。その見直しで、平成2年4月1日には繭検定所と蚕業試験場が統合されて蚕糸研究所（平成10年生物産業技術研究所に名称変更）となり、養蚕から製糸まで一貫した研究体制として、先進型養蚕技術開発、絹新素材技術開発、養蚕農家自らがシルクブランド製品（桑実や繭毛羽、選除繭などの活用やシルクパウダーの用途開発）を開発できる技術支援体制がとられた研究部門として製品開発係が設置され、平成4年から17年3月迄、繭検定業務（9年度に廃止）から製品開発係担当として加わり、研究開発に専念する機会を得た。そして、定年を迎えるまでには、農家では不要となった繭毛羽や汚染くず繭から網状生糸、ガラ紡糸、シルクパウダー等の製品化の加工開発に取り組み、新しく開発した製法技術を養蚕農家へ普及させ、シルク特産品作りの指導などした。また、各地域のイベント祭りのバザーに参加し、シルク製品の販売促進に努めたことでした。そして、この通算38年間を岐阜県民の奉職者としての勤めを終える間際になって、定期検診により前立腺ガンの疑い（血液検査の腫瘍マーカー判定値PSA75）で見つかり、ぐずぐずしてたら県人事課から直ぐにも精密検査の要請があったので、岐阜市民病院泌尿科医師による触診と生検を受けた結果、触診により前立腺外部周辺に小指の頭程の痼りがあるとか、また採取した生検組織10カ所中8カ所にガン細胞が見つかり、医者からは直ぐにも手術しないと催促され、当時は大変ショックを受けたことでした。過去には、職場を共にした先輩が手遅れで亡くなられたことがあり、毎日沈痛な思いが続く中で、切らずに治すことができる病院が心当たりないかと友人に相談したところ、ネットの画面から高度先進医療技術（外部照射による陽子線、重粒子線の放射線治療と放射線が出る微少針を患部に埋め込む内部照射治療や超音波照射治療）で治す病院を教えもらい、市民病院の医師からの紹介状をもって千葉市内の放医研重粒子医学センター病院を受診（平成15年7月末）し、重粒子線治療の臨床治験者として認定されたことで、その後3ヶ月半ホルモン療法を継続した後、患者にあった治験スケジュールで照射することとなり、1日1回の1週4回で5週間の重粒子線照射の治療をした。照射に要する時間はわずかであるが、照射部位の位置決めで20～40分程かかるのは、正常な部位に悪影響を与えずに、ピンポイントで正確に患部に照射してガン細胞を死滅させるため我慢することであったし、その待ち時間に尿意を催すようになると、冷や汗をかいて大変でした。そして、治療してから半年後にお尻から血便が見られたが、暫くしてから収まり、気持ちが落ち着きました。入院時の治療代は、臨床治験者として認定されたので、高額医療費の負担か

ら逃れることができ、大いに助かり、定期検査で病院を受診するときは、今でも感謝感謝の気持ちでいっぱいだと思います。現在は、時々の血液検査で腫瘍マーカーはゼロ値近辺で推移しているため、今のところ再発の心配はないとお墨付きをいただいているところではありますが、最近では男性の前立腺患者が年々増加する懸念あるとのことで、全国でガン罹病でお悩みの方は多くおられると思うと、一刻も早く健康保険の適用認定になればと願っている者の一人です。放射線の利用も使い次第で人類のためにもなるが、しかし、今回のような原子力発電所事故災害のような放射線の拡散では、地球上の農産物、海産物などの生き物の恩恵に浴する人類にとっては、生存権を脅かされていると言わざるを得ない。地震と大津波による原発事故がひとたび起これば、広範囲の市町村地域の人々をも巻き込んだ大災害の危惧が叫ばれながら、政府と電力会社の対応の遅れから、原子炉の爆発事故を防ぐことができなかつたことで、将来にわたって住民らを悲惨な苦しみに追い込む暮らしとなったことは大変悲しくて、沈痛な心境であり、早く放射能の拡散が止まるのと、もとの暮らしの生活に復帰されるのを祈るばかりの日々であります。

人生って不思議なものですね！

杉山 満丸 (蚕糸S55)

私が29歳の時、私にとって厳しく、そして、とても恐ろしかった父が突然脳溢血で倒れた。

祖父も曾祖父も脳溢血で亡くなっているため、きっと私もいつか脳溢血で倒れるのだらうと考えている。

父は倒れてから2年2か月の間、集中治療室から出ることもなく、悔しそうにウーウーという獣のような音を発し、何度も何度もクチビルを噛み切つて血を流したが、人間としての言葉は一言も発することができないまま亡くなった。

父が亡くなった時に父が祖父から相続していた福岡市東区にあった4万6千坪に及ぶ土地と家屋は、わずかな農道を残してなくなっていた。私は小さい頃から「杉山家の土地はアジアのために使ってしまう。お前には一切残さない」と口癖のように言われて育てられたが、その父の言葉通りになったわけである。

父は1960年代前半から現在のNPOのような活動を行い、インドの人々（ガンジーの直弟子たち）と交流し、インドの貧しさや飢餓に驚き、そして人々の純粋に国を思う気持ちに感動し活動の輪を広げていった。「あまりのインドの惨状を何とかせねば」とたった一人で窮状を訴えに国連に向かったこともあった。結局、国連ではたらい回しになり、その様子を見かねた国連の理事から「だからこそあなたの活動が必要なのです」と説得され、自分の無力さとそうならざるをえなかつた自らの運命を思い一人涙を流したと書き残している。

父は孤独な戦いの中で、地元の人々とともに木を植え、作物ができる環境を作り上げ、倒れる前年には国連主催の砂漠緑化会議に招聘された。そして、帰国後に出版した「砂漠緑化に挑む」（葦書房）が父の仕事の集大成となった。

一方、息子の小生は、頑固で実直な父に反発し、青春時代

を過ごした。

農工大に入学したのも「理系の国立にしかやらない」という父の厳命に逆らえなかつたからである。

父が亡くなった後、2年ほどして父が借りていた事務所の92歳になる大家さんからお話があり、事務所を引き払うこととなった。

33歳で独身であった私は悩んだ。

それは…。

父の事務所を片付けて出来た100箱近い段ボール。この父が残した資料をどうするかと言うことであった。

父を嫌っていた私ではあったが、さすがに実直だった父の資料を捨てることには抵抗があった。独身の私は2DKのアパートに住んでいたが、覚悟を決めて父の資料をアパートに入れると2部屋が段ボールで一杯になった。父の資料を持ち続けることは私が結婚を諦めることとなった。

「10年間は持ち続けよう。そして、その間に誰も父の資料を必要としなければ、覚悟を決めて捨てよう。ごめんね、おやじ」そう思いながらそれからの日々を過ごした。

何事もなく、孤独な9年が過ぎてゆき、もうすぐ10年目の誕生日。「10年経ったらどうしようか？」そう考え始めた私の誕生日の数ヶ月前に奇跡が起こった。

なんと、「水と緑のキャンペーン」を始めていた地元のテレビ局から「資料があれば、お父さんのインドでの業績を番組化したい」というお話を戴いたのである。

そのおかげで、俳優の田中健さんとドキュメンタリー番組「緑の父 杉山龍丸の軌跡」（全国放送）撮影のためインドの現地に飛び、10日間で約4500kmの旅をすることとなった。

その時には最後に父がインドに行ってから20年近くが経過していた。ドキュメンタリー番組ということもあり、田中健さんと私は何も知らされないままインドに向かった。「現地はどうなっているのだらう？」少し不安に思いながら現地に着いてみると、現地には緑が溢れ、私たち取材クルーは人々から大歓迎を受けた。私は、手を差し出してくれた多く未知の人々と固い握手を交わし、抱擁をくり返した。そして、くり返していくうちに自然と体中に熱いものが充満し溢れていくのを感じた。人々が父に感謝していることが伝わってくる。こんな経験は後にも先にも初めてである。父を動かしていたのはこの感覚なのか！私は感動して、感動して毎日毎日胸がいっぱいになった。父は、戦争中に負傷しており、体調が悪いと立ち上がることもさえない出来なかつたはずである。現地は、日本では考えられないほど暑く厳しい環境にあったが、そんな中で、「父が現地の人々とともに地道に木を植えて環境を変えていったという事実」に驚き、私は、父の苦勞と偉大さに気づかされた。

「あなたの周りの緑はあなたのお父さんが植えた木々たちです。みんなあ



若い頃父と木を植えた村長とその孫たちとともに

あなたの兄弟ですよ」そんなインドの人々の優しい言葉を思い出すと、今でも胸がいっぱいになる。取材の最後に私たちはタール砂漠へと向かった。そして、緑がなくなるにつれて人々の表情が険しく変わっていくことに気づいた。砂漠に二人で立った時に田中健さんがぼつりと言った。

「緑は人を優しくするんだね。緑が多い所に住む日本人は幸せだね」

あれから、13年。番組になったおかげで色々と私の周りには変化があった。

約100箱に及ぶ父の資料は、10年以上経った今も整理中ではあるが、福岡市総合図書館に寄託予定資料として預かってもらっている。そのおかげでアパートに空間ができ、結婚し子供も授かった。

田中健さんの紹介によって、放送の2年後にインドに行った体験を「グリーン・ファーザー」（ひくまの出版）という本にして出版する機会を与えられ、その本が読書感想画コンクール指定図書となり、「関口宏の本パラ」という番組で紹介されるという機会まで与えていただいた。そして、今年、この本の英語版・ヒンズー語版・パンジャブ語版がインドで出版予定である。

父が書き残した「ふたつの悲しみ」という文章も中学校3年の国語の教科書（光村図書）に掲載され、現在も掲載中である。福岡県では、中学3年で使用する道徳の副読本（東京書籍・日本文教出版）に父のことが紹介されるようになった。さらに、第二次世界大戦中、第一期の航空整備将校としてフィリピン戦に従軍した父が「この記録を残してからでないと死ねない」といって涙を流しながら書き残した「幻の戦闘機隊」というフィリピン航空戦記も出版の約束ができ（書肆心水）、その準備中である。

父の事を民放の番組で度々取り上げていただき、とうとう今年2月にはNHK-B S プレミアム8「杉山家三代の物語」（曾祖父杉山茂丸・祖父夢野久作・父杉山龍丸）で90分番組となった。

地元の福岡県筑紫野市では、NHKの番組効果によって本年3回に及ぶ文化講演会が開催される運びとなり、現在準備中である。

最初の番組を見た「谷底ライオン」（<http://homepage2.nifty.com/tanizoko/>）というサイトの主催者（滋賀県在住）が父の業績に注目し、父が作っていた小冊子全てを「杉山龍丸アーカイブ」として掲載してくれている。「父がインドで培った緑化の技術を多くの人々に知ってもらいたい」という私の願いを聞き入れていただき実現したものである。

その結果、九州大学農学部で「インドで行った緑化手法の科学的な解明」に取り組んでいただけることになり、本年度から研究が始まった。もう一つ、生前父が「乾燥地の塩分集積を解決できるのはこの方法しかない」と言い残した「シートパイプ工法」も注目を浴びつつある。私が1990年に農業土木学会誌に投稿した「シートパイプクロス暗渠工法と施工後の状態」（第58巻第2号）がきっかけとなり、今年の夏、その説明のために海外の塩分集積地に行かないかというお話を載している。

苦しく、孤独だった約十年。そして、たくさんの方々に助けていただき、今の自分がある。「父が応援してくれているの

だろう」、そんなことが言える今が信じられない。ほんとに、人生とは不思議なものである。

木の仏を彫る

神原 輝洋（林S43）

同期の皆様、ご無沙汰しております。いかがお過ごしですか。

記憶は、思い出さないと引き出しからこぼれ落ちて忘れ去られていくようである。しかし、時に思い出すことにより、箱から廃れることはなく、整理されて、むしろ新しい記憶のごとく引き出しやすい位置に置きなおされるようだ。だから、大切な思い出は、時々思い出している方が良い。農工大での記憶は、いにしへの奈良の都のごとく遙かな彼方であって、霞がかかっている。輪郭がはっきりしないのである。こんな記憶もまた、心地良いものである。

仏像を彫りながら過ごしている。正確に言えば、仏様を彫り



瑠璃（るり）観音
2011/05 完彫

だしたいと思って、木曾の天然檜を彫っている。伊勢神宮の遷宮に使われるあのご神木と同じ木である。ほぼ毎日、木に向かっている。彫刻作業を始めると、様々な記憶が浮かんでくるが、美しいモノばかりではない。むしろ、苦さや、恥ずかしき出来事のほうが多く頭をよぎり、自責や反省、怒りや怨念に、五体から脂汗を滲ませながら、彫っている。

像を彫り進むのに頼りとするのは、光と影である。障子のあかり

や、電球の光に、正面からかざし、斜めにかざし、逆さにかざして、見えてくる陰影を彫り進む。表から裏へとつながる陰影を追いかけて行くのである。地蔵の頭を丸く彫る。突き出たところを削るだけ。1つの凸が2ツになり凸は小さくなる。それをまた削る。4ツの凸になりさらに低くなる。次は8ツになりさらに低く……。気がつけば、陰影は円やかになり、荒波は静かなベタ風になっている。もう何千回、ノミや刀を入れたんだろう……。そのころは、落ち着いてきてなにかも見えなくなって仏様らしきものと対峙している。

しかしながら、翌日もまた滲む脂汗から始まる。このような日々の繰り返しである。いっこうに「向こう岸」は見えない。それでも彫っていく……と、少しずつ見えてくる。たとえば、胴と手の間の隙間は、木の表と裏、両側から徐々に彫り進む。すると、そこはだんだん薄くなっていき、ある日、裏側の光が表側に透けてくる。これが、「後光」というものだろうか……。何日、あるいは何時間かかったのか。ああ、貫通したんだ……と。

もしかしたら、これが一つの「彼岸」なのかもしれない。などと、たあいな独り言の日々である。

私は再就職の面接で、庭の掃除もするように言われた。大木が生い茂って鬱そうとしている山の麓の史跡の広い庭である。従来は、専属の掃除のおじいさんがいたのである。私は困って、知り合いの坊さんに相談した。答えは・・・「仏教の修行は掃除から始まるんだ。」・・・と。「ああ、そうか。」と、私はすぐに覚悟を決めた。この方は、「仏像彫りも修行だ。」と教えてくれた。「ああ、そうか。」と、また納得。

彫っていて教えられることはいろいろある。菩薩は修行中で悟りをひらく前の姿だから、宝冠や胸飾りを飾り、装身具がきらきらしている。悟りを開いた如来は、捨ててしまっただろ粗末な納衣（糞掃衣）のみである。塑像は、継ぎ足し、盛り上げていくものだが、木の仏像を彫るのは、引き算である。私も、どんどん捨てて行こう。身軽になろう。日々の生活も気楽になるし、いずれは旅立つときも楽だろうから。そんなことを思ったりしているが・・・？。

円空は、北海道にも遊行し、汲めども尽きることのない笑顔をたたえた観音様を彫った。その後に彫られた、荒ぶる「護法神」。最後は、五穀を絶ち、十穀を絶ち、水を絶って、生身で土中の桶に入り自ら命を絶ってしまった。何を祈っての入定だったのか。

その塚は、ふるさとの近くに残ったものの、「即身仏」にはなり得なかった円空。修行が厳しい「修験道」の祖、役行者（えんのぎょうじゃ）よりもすさまじかったかもしれない生き様。「円空仏」は、そんななかで自他への強い祈りから生まれた仏様。円空の仏様も、その他を捨ててしまっている。

仏像は彫れたものの、仏様はなかなかお出ましにならない。昭和の大仏師、松久宗琳先生の本には、「基本を大切に、一にも根、二にも根、気まますしな」と書いてある。そうすれば、人それぞれの仏様が出てくるということが、最近私にも少しながら解ってきた。私には、円空仏は絶対彫れないなあ・・・かと思いつながら、それでもいつかは・・・と、淡い夢は持っている。「三にも根」で、地味な積み重ねの日常を、紡いでいこうと思っている。

このたびの東日本大震災には、ことばがありません。ご冥福をお祈り致します。また、皆様の普通の生活の営みが、一日でも早く始められますよう、お祈り申し上げます。

ドイツ

堂本 晶子（生産H18）

2002年に農学府生物生産科学科を修了して、あっという間に3年が過ぎてしまいました。大学で取り組んだ研究と同じような研究を仕事で出来て、とても運がいいと思っていたら、4年も経っていました。さらに、気がついたらグループ内で在籍年数が2番目に長くなってしまいました。仕事に迫られる時期とか、色々ありましたが、やはりどんなときでも息抜きはしないとイケないなあとは最近思います。

その息抜きに、卒業してからドイツに2回行きました。

1回目は卒業旅行で、後輩と4人で行きました。私一人だ

け滞在農家が100km程離れた場所で、約2週間滞在したにも関わらず、後輩と会ったのは3回くらいでした。寂しさもありましたが、その代わりに、滞在先の方ととても仲良く出来ました。

毎日搾乳のお手伝いをしていましたが、カップにいったコーヒーに直接搾乳して飲んだカフェオレが忘れられませんでした。他にも、ドイツの波が出るプールに連れて行ってもらいました。日本には海があるし、そんなプール沢山ある。と思っていましたが、波が1mくらい（体感）であり、おぼれそうになりました。やはり、スケールが違いました。一番忘れられないのが、小学生と同じくらいの身長だったことです。親近感がわいたのか、年は全く違う私と、言葉が通じないにもかかわらず、子ども達は仲良く接してくれました。色々なドイツ語を教えてくださいましたが、なかなか上手に発音できませんでした。とても楽しかったので、また2年後に必ずくるから！！と約束して、帰国しました。

2回目はその2年後、自主的にドイツの環境保全型農業の先進事例を勉強してきます！！と言って9連休を取得しました。帰ったらその報告会を行うということもあり、しっかりと勉強？？してきました。

前回滞在したときは、搾乳と牛の世話に明け暮れていましたが、今回は休暇で来たのだから、好きなことをして休みなさいと言われたので、観光の他に帰国後の報告会のために、農場内の色々なところを見て回りました。

お世話になった農場は、かなり力を入れて環境保全型農業に取り組んでいました。数百haの広大な土地に、畜産、飼料作物、作物、野菜ハウス、直売ショップ、パン焼き工房などがあり、散策するだけで一日が過ぎていきました。

農場で使用する電力は太陽光、風力発電でまかなわれていること、耐肥性のある植物を用いた、浄水施設をもっている事など、家畜ふんは全て農場で使用しており、外からほとんど肥料を持ち込んでいないことなど、とても興味深いことばかりでした。ただ、農家の方も、私も片言の英語だったので、どこまで理解できたかは分かりません。

またドイツに行くために、頑張って仕事をします。次はオクトーバーフェスタにも行こうと目論んでいます。

最後に、すてきな農家さんを紹介して下さった、木村先生に感謝です。



ドレスデン近郊の町ノッセンにて

「砂川闘争の記—ある農学徒の青春—」を出版して

武藤軍一郎（農S34）

1959年7月8日に立川米軍基地に侵入した私は同年9月22日に逮捕された。逮捕されたのは23人（労働者、学生）で、10月2日にそのうちの7人が東京地裁に起訴され、私もその中に入っていた。こうして東京地裁での砂川事件公判は1958年1月から始まった。

私が東京農工大学農学部に入学したのは、1955年で、砂川町に立川基地拡張反対同盟が結成された年であった。1955年と1956年の秋、基地拡張の強制土地測量を阻止しようと集結した農民、労組員、学生に武装した警官隊が警棒をふるい多くの流血者を出した。警官隊の暴力の中で行われた測量は時間切れで完了しなかった。ついに政府は1956年10月14日に測量の中止を発表したのである。当時全国で米軍基地反対の闘いが行われていたが、砂川町の闘いは基地反対闘争の天王山として有名であった。

1957年7月8日の砂川事件は、立川米軍基地の滑走路の一部の土地所有者8人が、土地貸借契約更新を拒否したことから生じたものであった。時の岸信介首相は裁判で争うことを避け、首相の強権発動によって土地使用を継続しようとした。7月8日基地で行われていた測量に私達デモ隊は柵の外から測量反対を叫んでいたが、気が付くと私達は基地の中に5mほど入っていた。かくして同年9月22日に「日米安全保障条約に基づく行政協定に伴う刑事特別法2条違反」という罪名で23名が逮捕され、うち私を含む7人が10月2日に起訴された。

東京地裁における判決は1959年3月30日に下された。判決は、「米軍が日本に駐留することが日本国憲法に違反し違法である。したがって7名全員無罪。」というものであった。この「伊達判決」は憲法を正しく解釈した画期的なもので、国民の宝である。しかし日米政府は安保改定を目前に、大いに驚き、慌て最高裁に跳躍上告を行った。最高裁はこれに応え、同年12月16日に原判決破棄、差し戻しという判決を下した。これは15人の裁判官の一致によるもので、憲法を条約の下に置く、自らの司法権を放棄したものであった。

その後差し戻し裁判は東京地裁で行われ、1961年3月に有罪罰金2,000円という判決が下った。この後東京高裁、最高裁に持ち込まれたが、1959年の最高裁判決の枠から抜け出ることは出来なかった。

私は1960年4月から九州大学大学院農政経済学科に入学していた。私は大学院で勉学、研究に従事しながら、砂川事件公判の度に上京していた。1965年7月に九州大学農学部附属農場の助手に採用された。1976年に農学博士の学位を授与され、1998年に退職したが、名誉教授を戴いた。

砂川事件と私のかゝりは以上の通りであるが、現在の私と砂川事件について述べておく。2008年に東京農工大学から大学創立60周年事業の『校史資料』の執筆を依頼された。『校史資料No12』は何故か、好評を博した。そこで高畑滋、梶島弘通、深川進、宮井迅吉、淵野雄二郎の諸氏から私に砂川事件を単行本として出版するようという強い奨めがあった。私も砂川事件、「伊達判決」を風化させることなく、語り継ぎ、米軍基地を日本から撤去させねばと思っていたので、本の出版を決意

した。早速砂川闘争関係の資料を集め、当時の友達に電話インタビューし、せつせと原稿を書き、2010年12月に本が出来上がった。自分で言うのも変だが、読みやすく、面白く、砂川事件と私の個人史がうまく描けたと思う。実際読売、毎日、東京、朝日の各新聞は多摩版、都下版に書籍出版の記事を写真入りで大きく報道し、朝日新聞は九州版に「砂川から辺野古に闘いを進める著者」とユニークな記事を書いた。またしんぶん赤旗に稲澤潤子氏の書評が載ったが、実に素晴らしいものであった。

今年4月に私は砂川事件元被告の坂田茂氏、土屋源太郎氏と沖縄に行き、辺野古、高江で基地反対を行っている人達と交流した。この模様を沖縄タイムズと琉球新報が大きく報道してくれた。私は本の出版以来どんな小さな集会にも出かけ数冊ずつ売り続けている。東京農工大学、九州大学の多くの学友にも本を買い求め、読んでくださったことに心から感謝している。お陰様で本はよく売れ、3月に再版となった。

同書は花伝社（東京）から出版され、定価2,625円である。私のファックス番号は092-947-5629（電話と同じ）で、申し込んでもらったら、本と振込用紙をお届けする。



自衛隊築城基地撤去の座り込み

歌曲「東京農工大学 わが母校」について

池田 澄雄（獣医S32）

平成22年11月1日発行の農工通信No81に、級友加藤正彦君（獣医S32）の投稿「昭和32年卒業獣医学科クラス会記」が記載されましたが、そのとき私の拙い詩「東京農工大学 わが母校」も掲載して下さり誠に有難うございました。

同時期に級友の伊藤守男君（獣医S32）は、同窓会獣医学部会便りNo62に拙詩と共に、「母校を愛する詩に曲を」を投稿して、同時に作曲する人を募って下さいました。そして、大先輩の信州大学名誉教授中村健先生（獣医S17）に作曲して頂くことが出来ました。

この歌曲の詩と曲は同窓会獣医学部会便りNo63に掲載されました。

拙詩が歌曲として獣医学部会便りに掲載されるまでに、部会便り編集委員会の対馬美香子編集委員長、田谷一善部会長、下田実先生、獣医学科の島津先生、作曲者中村健先生、級友の伊藤守男君、加藤正彦君には大変お世話になりました。

特に対馬美香子編集委員長と級友2名には、幾度もお手紙を頂き、母校内で、打ち合わせ会を持って下さるなど大変お

骨折りを頂きました。有難うございました。

その後、この歌曲を獣医学科以外の農学部や工学部の各科の方々にも歌って頂きたいと言う思いが強くなり農工通信に楽譜と歌詞を投稿する次第です。

農工通信へ投稿することでは、作曲者中村健先生の御承諾を頂きました。

作曲者は、元の詩（農工通信No81に掲載）の第1章について、最後の2行の文章を加えて9行にし、若き日の歌に等の言葉を加えて作曲されました。このために歌いやすい詩の構成になり、名曲になっていると思います。

作曲者の中村健先生に心から御礼を申し上げます。

第2章と第3章については、作詞者が、第1章に揃えて、歌と字数を直しました。今思えば、詩にはもっと吟味すべき点多かったと思っています。

楽曲については、作曲者は最終稿と言っておられます。

再度御手数をおかけ致し、大変恐縮に存じますが、宜しく御願い申し上げます。

東京農工大学 わが母校

作詞 池田澄雄
補作 中村健
作曲 中村健

(一) けやきのこずえが 風に鳴る
武蔵野原のなかに 輝く時計塔
真理を求めぬ わが母校
野の草茂る 道の辺に
心懸かせわが友よ 若き日の歌に
無い 学び 競い合い 語れ青雲の憧れも
東京農工大学 わが母校
けやきのこずえが 風にそよぐ
武蔵野の青空たかく 輝くわが母校

(二) 出すたく野を 赤むとき
染の葉は 月の光に 縁に照り映えて
窓辺に動く人の影 巧みの技を極らん
若き日の夢 伝統と革新胸に
努め きたえ 奮めゆく
さらなる われらが学業を
東京農工大学 わが母校
けやきのこずえが 風にそよぐ
武蔵野の月光のなか 輝くわが母校

(三) 蹄鉄の音 土をけり
いななき響く学び舎に 農工の真髄を
学べる われらが書せよ
若さに燃えるこの時に
友よ 気づくや 若き日の その輝きに
業と真理を双肩に 開く園土の行く末を
東京農工大学 わが母校
けやきのこずえが 風になる
武蔵野の原のなかに 輝くわが母校

国枝栄氏とアパパネの活躍

田谷 一善 (獣医S46)

国枝栄氏（昭和53年卒）が調教師として大活躍していることは、これまでも農工通信で紹介してきました。その後も国枝氏の調教馬の活躍が続いています。最近では、牝馬アパパネ号の活躍が目されています。第61回阪神ジュベナイルフィリーズ（平成21年12月3日）でG1レースで優勝して2歳牝馬の頂点に立ってからのアパパネ号の活躍は目覚ましく、第70回桜花賞（平成22年4月11日）、第71回優駿牝馬（オークス）（平成22年5月23日）、第15回秋華賞（平成22年10月17日）を連覇し、牝クラシック3冠を達成しました。特に、第71回優駿牝馬（オークス）では、ゴール直前までサンテミリオンとのデットヒートを演じ、半世紀以上を誇る日本中央競馬の歴史の中でG1レースでは、初めてとなる1着同着となり、平成の大接戦として話題となりました。平成23年に入ってからアパパネ号の活躍はめざましく、第35回エリザベス女王杯では、惜しくも3着となりましたが、ヴィクトリアマイル（平成23年5月15日）では、ブエナビスタ号を破ってレコードタイムで優勝しました。今後も益々活躍が期待されます。最近では、本学の教職員の方々にも国枝氏のことは良く知られており、国枝氏の調教馬が勝つと、学内を歩いている私に皆さんが「おめでとうございます」と祝福してくれます。

東京農工大学 わが母校

作詞 池田澄雄
補作 中村健
作曲 中村健

PART 1

PART 2

PART 3

A けやきのこずえが 風に鳴る
けやきのこずえが 風にそよぐ

B わーさしのはらの なーか はーかが やく とけいとう
ひーさしのおお せうたか ーかが やく わが ぼこ ーらー

C しん りきもと める わが ぼこ う ののくせしー げる みち のべに

D こーこう いに わせ わが とち よ わーかき びの うた に

E つーどい まー なび きき いる い かーたれ せいうんの 高こ がれ も

D.C.

F とうきょうのうこう たー いが ー わーが ぼーこー う



ヴィクトリア マイルで優勝したアパパネ（2011年5月15日）
国枝氏提供（右から2番目）

退職にあたり

生物生産学科

淵野雄二郎 (農S43)

昭和39(1964)年4月に農学部に入學、以来、本年3月定年退職するまで、学生、院生、そして教員として、あしかけ47年間、多くの先生方、職員の皆様には、本当にお世話になりました。まずは、心から感謝申し上げます。

さて、改めて振り返りますと、入學した1960年代は、新制大学移行から10余年を経過し、教育研究体制も軌道にのり、長期的な整備計画に着手する時期でした。農学部の一歩新しい建物は3号館（'62年）で、その後2号館（'65年）、1号館（'66年）と続きました。入學当時は本館の東側には、古びたモルタル及び木造の校舎が並んでいました。なぜ1号館と称しながら、竣工が一番おくれたのか、それは、そこに学生寮があったからです。

私の大学四年間はこの学寮移転＝新寮建設運動に全力投球でした。農学部は駒場寮、工学部は西ヶ原寮と呼ばれ、それぞれ東京高等農林学校（昭10年）、東京高等蚕糸学校（昭15年）が府中、小金井に移転したときに建設された木造二階建ての立派な寮でしたが、老朽化がひどく、建替えの要望が強く、新寮建設委員会が組織され大学側と息の長い交渉が続ききました。いわゆる新寮闘争です。

大学との交渉が難航したのは、新寮移転にともなう経費負担の増大と学寮規則制定問題でした。本学は両学部とも戦時体制下でも自由な雰囲気維持されており、学生自らが決めた自治規約に基づき自主管理を行っており、学生の教育の機会均等を保障するために、寮費も低額に押さえられていました。それが、1960年代後半から、いわゆる学園紛争の時代になり、全国的に老朽化がすすむ学寮の建て替え要求に際して、文部省は、“政治活動の拠点”になっている自治寮への統制を強める方針を打ち出しました。それは、新寮建設の概算要求にあたって、文部省が雛形を示した「〇〇大学学寮規則」を策定しろということでした。また、寮の水光熱費の受益者負担の原則の適用（負担区分）で寮経費が引き上げられるということで、全学的な反対運動が盛り上がりました。

最終決着がついたのは昭和42（1967）年12月でした。およそ5年に及ぶ大学当局と学生側との粘り強い交渉（話し

合い）が続いたこととなります。当時、学生部長であった飯野善治先生はじめ厚生補導委員や関係教職員の皆様には大変なご苦勞をおかけしました。このあと学園紛争（1969年本館バリケード封鎖）に遭遇しますが、本学の場合、それまでに培った教員と学生の信頼関係が厚く、一時的な緊張関係がありましたが大学の自治をそこなわず解決にむかっていると記憶しています。

さて、学生時代の思い出話が長くなりましたが、学生時代に学恩を受けた先生方は、真剣に学生と向かい、大学のあり方を論ずるときも、まずは学生ありきで、熱心な議論をされていたと思います。そのような先生方の背中を見ながら、私も教員生活を送ったつもりですが、ひるがえって、現在の、とくに国立大学法人化後はどうか、研究優先、研究実績に評価のウェイトがおかれ、“本来の教育”のあり方への追求が希薄になっているように思われます。自らの自戒も含めてですが。

化学システム工学科

松岡 正邦 (化工S43)

37年半の研究室生活にピリオドを打ちました。学生時代の4年間を加えるとこれまでの人生の64%を農工大学で過ごしたことを知りました。これまでは、年とともにこの割合が増えてきましたが、これからは減る方向です。この値が50%になるころには平均寿命を迎えているはずですが。

大学では、学生時代には運動に励み、伴侶に出会い、教官（務めたときは教官でした）や教員としては教育と研究を楽しみ、世紀の変わり目を挟んで管理・運営の一端を垣間見て、そして同窓会では学部を超えて先輩や後輩と交わるという多くの経験をさせていただきました。この間の本学の量的なそして質的な発展は素晴らしいものであったといえます。その中で人との出会いが如何に貴重なものか、如何に現在の自分に深く関わっているかを気付かされました。何と幸運な時間と空間と人に出会えたものだと感謝の思いで一杯です。

同窓会50年史座談会

《 同窓会の将来を語る 》

と き：平成22年7月2日（金）

ところ：50周年記念ホール

出席者：藤森会長、畑中前会長、大石元理事長、下田元理事長、
坂野元理事長、生原元理事長、亀山前理事長、深水
監事、高橋理事長、堀総務部長、淵野事業部長

司 会：高橋理事長

陪席者：山田事務局長

＝ はじめに ＝

高橋：今日は、同窓会50年史の座談会として、「同窓会の将来を語る」ということで、皆様にお集まりいただきました。お忙しく、また暑いところ、有難うございました。

本会は、その前身の二つの同窓会が一緒になり昭和37年に発足しました。平成24年に50周年を迎えることから、同窓会創立50周年記念事業を実施することとし、50年史の刊行、同窓会小金井記念ホールの設置、50周年記念ホール等増改修、学生援助の充実、記念式典の実施の5事業を掲げました。折しも大学は、明治7年内務省勸業寮内藤新宿出張所農事修学場および同出張所蚕業試験掛を創基として、平成26年に創基140周年を迎えます。そこで、大学と合同して記念事業に取組んだ次第です。

本50年史座談会では、今後の本会の目的と事業、本会の組織と活性化、同窓会と社会、身近な同窓会と活性化、海外の組織等について、皆様にお話し合いたいただきたいと思っています。本座談会に当たり、本会の発足に先立つルーツを50年史編纂委員長である大石先生にお調べいただき、その詳細は本書に収録されていますが、概略先ずご紹介いただきたいと思っています。

大石：本会のルーツは、明治政府の先進技術・学術を取り入れる富国政策により、農業および養蚕・製糸の教育が駒場および西ヶ原の二つの学校の設立で始められたことにあります。以来、卒業生の活躍は、わが国の農業、蚕業・製糸における学会・学術の発展に大きな貢献をしてきました。同窓会は、駒場には学科を母体に農・林・獣の組織があり、これらは大正10年に連合して駒場交友会となりました。また、西ヶ原では、西ヶ原蚕友会を経て大正2年に西ヶ原同窓会が設立されました。両同窓会は、昭和24年に本学が発足した以降もそれぞれ別個に活動してきましたが、昭和37年大学発足後13年にして念願の統合を果たしました。

＝ 会の目的と事業 ＝

高橋：本会は、二つの学校を基盤とした同窓会が社会情勢

や学内の組織改編を踏まえて、それまでの歴史と活動を超えて発足したわけで、その想いは会則の「会員相互の交流と親睦」と「母校の発展貢献」という目的に凝縮されているものと思います。この目的の基にさまざまな事業を行うかたちになっていますが、さらに事業を展開するとき、いろいろな推進の仕方、あるいは問題点があるかもしれません。今後、それをどのように考えていったらよいか、いかなもののでしょうか。

亀山：卒業生の親睦のほうにちょっと偏った傾向になっているように思います。同窓生同士のコミュニティーのほかに、大学とか社会に対する貢献という要素、たとえば、母校を通じて同窓生が何らかのかたちで社会貢献することを考える時期かもしれません。

生原：大学と同窓会をあまりくっ付けず、少し離れたところに同窓会を置きたいために本会の目的を作った理念があったのだと思っています。大学は教育を通して将来社会で活躍できる人材を養成する、同窓会は、それと同じようなことをするところではなく、卒業した人たちが、互いの交流を進めて母校のための応援をするような位置付けで同じではないように思います。いわば同窓会は「親睦と応援」で、同窓会自体が産業云々のために活動するとなると、余程のシステムを作っていないとできないというような感じがしています。

亀山：同窓会が社会に対して直接何かやるというよりも、大学を応援するということは社会貢献事業に対して、OBが積極的にボランティアで協力するという感じで捉えております。

堀：会則には目的は書かれていますが、本会の理念は謳われていないので、これを謳うと目標的なものが明確になってよいように思います。

畑中：社会貢献的なものをどのように入れていくか、それには、会の財務にも関わってきますので、あまりお金をかけないでやれるものが欲しいですね。たとえば、同窓会で科学博物館のお手伝いを積極的にやるとか、講師を派遣するとか、何かささやかなことでよいが会の目的の中にあって良いように思います。

大石：今のお話のような方向で、会則の目的、目的を受けての事業展開を再検討することが必要でしょう。会員の認識を深め、特に、新しく社会に出る同窓の意識を高めていくことが大事と思うのです。同窓会が行う事業展開には、財政的な支えが必要なので、それを認識した上で優先度を考え、社会にあるいは同窓に向かって進めていくことではないかと思うのです。同窓会がイニシアチブをとって社会に向かって講演会や公開講座を開くということも、若い同

窓の同窓会に対する期待、そして、大いに貢献しようという気持ちを引き出すきっかけになるのではないかと。それから、学生への援助を通して、同窓会が学生および大学の発展に貢献をしていることを、如実に見せていくことは、大事ではないかと思うのです。

高橋：会の財政ですが、金利が低い昨今では会費収入で殆ど賄うことになります。しかも終身会費（賛助会費）の納入率が良いこともありますが、常に新入会員の賛助会費に依存するとすると財政的には一定の制約が生じます。その意味で財務的裏付けを必要とする同窓会活動はある範囲を考えざるを得ないでしょう。

＝ 会の組織と活性化 ＝

高橋：さて、話題を本会の組織の問題に移したいと思います。本会は、出身の学科専攻を母体とした部会と、在住する都道府県別単位の支部組織をもって活動しています。しかし、部会の人数は年々増え、学科専攻の再編で部会構成が複雑化し、支部も人数増の問題に加えて活動主体が固定化しています。また、本会自身も任意団体のままでいろいろな事業を無理に行おうとしますと限界もあるので、将来的に法人格のある団体を目指すべきとの意見もあります。いかがでしょうか。

坂野：ある国立大学の同窓会に税務調査が入り、厳しい措置を受けたと聞いています。いつまでも任意団体ということではいけないのではないかと、なかなか大変なことでしょうが法人格を考えて検討するべきでしょう。

畑中：今、公益法人の見直しもあって、国でも団体のあり方の検討がなされていますが昔ほど団体をつくるのは難しくないので、将来は社会的に認知される組織としていくよう前向きに検討しなければいけないでしょう。

大石：多くの大学が同窓会の位置付けをどうしているのか、本学同窓会も検討する必要があると思います。

淵野：同窓会は公益法人的なものは取りにくいのでしょから、いろいろな試行錯誤の中で非営利法人のような形態が模索されていこうと思います。

下田：同窓会の内部組織ですが、三つの支部が一緒になって講演会を開こうとした愛知県支部の発案のように、部会・支部組織は長い伝統があるがその上に地域ブロックのような組織化も必要になると思うのです。その中で、大いに活動を活性化すれば、会費も集まってくるでしょうし、社会的貢献と組織と併せて考える必要があろうと思っています。

深水：社会的ニーズが広がる大学をOBが横から支えることを通じて活性化できないか、ただし大学側がいかにコントロールしていくかの課題は残りますが。

淵野：同窓会は独自に財源をつくる力がない組織ですから、社会性、公益性のある活動はできないため限られた身の丈の範囲で、人の活用も含めどうできるかという工夫も大事でしょう。

大石：現在、同窓会の組織は、部会と支部の二つによって構成されていますが、卒業生は、自分の学んだ学科に愛着を持っているし、卒業後も社会や自分の生計とのつながりも、学んだ専門性との関わりが深いので、部会に強い意識を持つのは当然だと思うのです。いってみれば、部会組織は戸籍で、支部組織は現住所ですね。現住所はいつ変わるかも分からないので、部会ほど意識をしていないのではないかと。このように考えると、部会組織をもっと強力にすれば、同窓会全体の力を強めていくということになるのではと思います。では、どのような方法があるか、なかなか難しい。先ほど、地方でも公開講座みたいなことをやったらどうかと、考え方として申しましたが、難しい問題だとは思いますが。生原：部会数は、21で農、工同じで、支部は48あります。支部会員数は、東京だと1万人近くになる一方、佐賀は約60名で非常に異なっています。部会支部活動資金は全体で350万円予算立てしていますが、年間約30支部が活動し、部会は数年に1回、2年に1回の活動が多く、参加者も多いとは言えず活動は全体的に活発とは言えないのが実情だと思っています。特に若手の参画が少なく、それは研究室の問題もありますがそもそも母校に対する愛着がかなり希薄なのだと思います。それには、本会の準会員である学生に同窓会意識を芽生えさせることから始める必要があると思います。現在取組んでいる課外活動や学会発表等に対する学生援助事業は、かなり有効で引続き充実して実施するべきだと思います。

個人と同窓会を結び付けるという点で、同窓会の意思を決定する総会を見直せたらと思います。総会は代議員制をとっていますが、そこに会員個人が参画できる方策を講じられると良い。若い人、特に卒後20年ぐらいまでの人は、研究室に愛着を持っているので、総会が終わったら大学にお願いして研究室を開放して先生方と話ができるようにすると、絆も深まり組織も活きてくる感じがしています。何かしないと、若い人の同窓会意識がますます希薄になってしまうのではないかと。

畑中：総会にもっと関心をもってもらうことは大切ですが、個人参加というのは具体的にどうするんだろう。議決権はないのでオブザーバー参加のようなことにしていくのかな。

生原：そこを、大きな工夫ができないかを含めて、総会の在り方が検討できるとよいのですが。

高橋：本会と個人との対応をどうするかということの一つの提案と理解しました。総会を個人レベルの直接参加に切替えるかどうかの検討になりますが、会員個人との対応をどうするか大きな課題の中で今の提案を考えてみることにしたいと思います。

下田：同窓の集まる会合では、研究室単位の集まりが最も多く、30人、50人集まる。ところが、支部総会ではわずか。支部の場合はだいたい県の職員が中心で、それ以外の人の参加が非常に少ないですね。特に少ないのは工学系。駒場

交友会と西ヶ原同窓会が一緒になって一本化したという原点からあまり発展していないですね。支部総会を活性化するには、常務理事を派遣するだけでなく、大学の教職員の先生を派遣すると参加する人も変わるでしょう。大学の先生方も特別会員になっているのだし、もっと同窓会と一体化した先生であってほしいと思うのです。

生原：部会と学科再編についてですが。学科再編で、できた新しい学科の場合、統合して作っていますので、みんな一つのAという学科でありながら、同窓会組織では元の部会に所属する人もいれば、新学科から入った人は新学科の部会に所属するといったように、一学科の中にねじれや所属部会が異なる現象が出ている。できるだけ早い時期に、この複雑さを解消する工夫をしないと出口の異なる人たちが併存して、新しく統合してできた学科や研究室に対する思い入れや対応が希薄になり、同窓意識の低下が増すように思う。特に新しい学科を作った場合、新旧部会の扱いは是非検討していただく必要があるのではないかと。

大石：理事長在任時にその問題について経験があります。部会の再編については、関係する部会にアンケート調査を行い、部会間での調整によって得た結果を尊重して決めてきました。しかし、矛盾は拭い得ません。たとえば林学部会であっても、学科は再編で地域生態システム学科となっており、なかなか難しい問題です。部会の構成とそのあり方を整理していく必要があるかもしれません。

畑中：中央の組織として、常務理事を学内の同窓教員お願いしていますが、外部も入れろという意見がありました。ただ、常務理事会に出席できないといけないので現職の人は難しいし、年配では先生方とのバランスがとりにくいとかの問題もありました。

また、理事や代議員などに、これだけ女子学生が増えているのに女性が少ないという声もあり、両方とも今後前向きに検討すべき問題だと思います。

＝ 社会に開いた同窓会 ＝

高橋：同窓会の目的や事業を考えるに、社会に開いた同窓会にしたら、社会貢献を考えたらどうかとの話がありましたが、これらのことを将来どう考えるかについてご意見をいただければと思います。

亀山：何かやろうという気持ちになるには、その組織のミッションを自覚することが大事だと思います。今は空気のような感じですね。同窓会は、卒業後も生涯に亘って世代それから専門を超えた交流と、切磋琢磨して大学や社会に貢献・発展するコミュニティーだと思っています。そのコミュニティー意識を持てば、そのメンバーとして自分は何をしようか、支部はどうしようかとなってきて、いろいろな活動ができるのではないかと。これからは、もうちょっと同窓会としてのミッションを明確にPRすることが必要ではないかという感じがしています。

畑中：社会貢献というのは夢の部分もあるから、さっき財政の裏付けとか言ったけど、そんなことはあまり気にしないでアイデアを出していく方がいいかもしれない。

生原：これから大学が一番困るのは、社会貢献だと思うのです。同窓会は4万人のシンクタンクを持っていますので、大学と一緒に、ただし大学のほうでかなり綿密な話し合いをしてもらって、同窓会はそのサポート体制をとって応援するやり方、ときには大学のお尻を叩くこともありましようが、そのほうがお互いにメリットを生かせるような気がするのですが。

深水：私も同じで頭は大学だと考えています。要するに、低コストで高い信頼とは言いませんが、同窓会はある程度の信頼度がある支援団体なので使わない手はないだろうと思っています。先ほど、支部や部会の活動の話がありました。そういう組織とは異なりますが、同窓の中には、何か働きたいと思っている人がいるので、たとえば、学生の就職を支援する部会とか、先生方の社会貢献に纏わる何かをする部会とか、言ってみれば機能別部会のようなものを是非何とかして欲しい。最近、ビジネス関係の会を作ろうと思っていますが、そのような会だと若手が出てきます。これも活性化の一つで財政的負担は、それほど考えなくていい。

下田：私も今のお二人のご意見に賛成ですね。本学の場合は、府中市や小金井市に協力して社会貢献の仕事をしています。このようなときに同窓会にも協力を求め、同窓会は会員に何かの形で働きかけ、それが支部会への出席も広がると思うのですが。

深水：たとえば、一橋大学は、如水会が主催して就職の支援活動をやっています。OBが、200人ほど。今度、東京工業大学が、蔵前工業会と共同でセミナーを開きますが、そういうことも普通にやっています。

堀：将来的には先のお話のような、機能別部会のようなものができれば、学生のうちにOBとフランクに話ができる機会が生まれ、つながりをもって同窓会の会員になります。就職相談などで学生がOBと接して風通しがもっとよくなると、学生やその後の同窓会員もより理念をもった形で同窓会を認識してくれるのではないだろうか。農工大に入ったら同窓会はこういう理念で動いているのだと。

亀山：本学は、いわゆる産学連携が非常に盛んな大学ですけども、いい技術を持っている先生の産学連携を支援する部分にOBの協力が大事であろうと思います。OB知識集団が、産学連携でちょっと困っている先生に対して、橋渡ししてあげると農工大の特徴を支援することになるのではないかと思います。大学発のベンチャー企業も同様で、技術力はあるが営業力がないから、ベンチャー企業としては発展しないことが多い。そこに営業経験のあるOBが支援すれば本学を発展させる力になり、実際に、卒業生で組織したAT-Netzがこの支援を行っています。このようなことは、

今後、農工大支援の機能別部会としては重要ではないかという気がします。

畑中：大学で売りに出せるような、そういうネタというのは、どういう格好で外部から接触してきたのですか。

亀山：一応、年間特許件数が200件出願されているのですね。それを、TLOに一応渡しているのですが。なかなか、TLOが商売気がなくてですね。

畑中：産学間の技術のマッチング難しいのでどこでも苦労しているのですが、いろいろなところで目に触れるように『農工通信』とかホームページにも「こういうところに、農工大のシーズがあるので、興味がある人は見てください」と一覧表で紹介してもらうのもいいのかな。

亀山：そうですね。そういう情報提供を進めると良いと思います。

深水：先日農工大の新技术説明会がありましたね。6件か7件かありましたが、あれも一つと思います。

淵野：本会のもう一つの社会貢献としては、財団法人東京農工大学後援会（現教育研究振興財団）への支援があると思います。本会が基本財産を拠出して昭和54年に後援会を設立し、以来事務局体制のバックアップや執行体制への人的支援をずうっとしています。振興財団は公益法人として、本学の研究と教育に多大な支援事業を実施しています。しかし、同窓会は、振興財団と組織が異なり、また、公益法人の制度改革もありますので、本会と振興財団の関わりも改めて議論する必要があると思います。

亀山：公益法人制度改革によって振興財団にも公益的な活動が強く求められていますので、本学だけに支援するのではなく、広く公益を目的とする事業を行う必要があります。先ほどの社会貢献の器として、同窓会がそこを通じて大学と一緒にやる仕掛けとしては、振興財団の組織をうまく活用できるとよいかもしれないですね。

高橋：共催ということかもしれませんが、組織が異なるので乗り入れしすぎないようにすることと思います。

＝ 身近な同窓会と活性化 ＝

藤森：同窓会長を仰せ付かっていながら、同窓会活動に最も不熱心で60歳過ぎまでできてしまいました。考えてみると、どうも同窓会との接点、つまり、同窓会が何をやっているかを知る場がなかったような気がします。特に工学部の自分の場合、部会の総会も3年に一回やるかやらないかでは、なかなか、同窓生であるという認識をもつのはかなり難しいのではないかと思います。私は、農工大を終わったあとコロンビア大学に行きましたが、東京に日本支部会があって結構活発にやっているのです。学長・学部長クラスが来日すると呼んで集まりをもったりしています。同窓会の存在をもうちょっと身近に感じさせる工夫というのを一歩一歩積み重ねていった上に先ほどから出ているような社会貢献なり、何なりの、大きな理念に沿った活動に

結び付けていくということが必要ではないかなと、自分の経験からそんなことを感じています。また、今回の50周年記念事業で小金井に同窓会記念ホールのな部屋が産学交流会館内に建設されますが、誰もが気軽に利用できるように工夫することも、同窓会をより身近なものに感じられるのではないですかね。来やすいような状態にすれば、せっかく大きなお金を使ってできるものですから、そのようにしたら有効でしょう。

亀山：化学工学部会では、ホームカミング授業を年一回やっています。卒業して5年以上経った人を対象に講習会を企画して帰ってきてもらう。結構、20人ぐらい集まってきましたね。OBとの絆がだんだん強くなっていくような気がします。同窓会で、大学に一度来ないかという、総会とは別に、ホームカミングデーのような行事をしてもいいかもしれないですね。

畑中：身近に感じてもらうという点では、学園祭のときに農業経済関係では「農経会」を開いていますが、幾つかの期をまとめてホームカミングデーをやってもいいと思います。とにかく学校に来ていただくためには、最近は大学で一般向けの講演会などをやっておられますので、こうした催しに同窓会からも通知を出し、積極的に参加できるようにしてはどうかと思います。

また、同窓生との結びつきも、今は『農工通信』（会誌）が1年に一回届くだけで個人情報問題から名簿もなくなってしまったので、会誌をせめて年二回ぐらい出したらいいのではないかと言っているのです。今、若い人はホームページの方が好きなのですけれども、もう少し工夫しないと、やや硬直的でなかなか本当に見たい形にはならないという部分があるように思う。先ほど機能別部会という話がありましたが、会誌も、先生方がやるのはなかなか難しいから、ライター組で編集委員会をつくって、完全に誌面もセットして印刷に渡したらそんなにお金もかからずやっていけると思います。ホームページもそうでしょう、やはり、機能集団的なものを作っていくのは非常に大事だと思います。

生原：同窓会の名簿がなくなりましたね。名簿を捲って同窓の現況を知っていたのにそれが切れてしまいました。そうすると、『農工通信』を年二回ぐらいの発行にようになっていくことですが、原稿の集まりが悪く編集に困っている状況があるのでOBの方にお問い合わせにしても原稿集めを改善する必要があるでしょう。

亀山：同じ人が2回だと大変という意識があるから、やはりチーム制にして違うグループが担当して編集するというところでどうか。そこに、OBの参加を募れば受けてくれる人はいると思うのです。

生原：そうですね。書きたい人がいるであろうそれが発掘できていない。4万人いますし、題材は色々あるでしょうからそれが上ってこないのは何なのかということのを少し考えておく必要がありますね。

下田：結構、編集の仕事をやっている人もあちこちにいますので、『農工通信』の編集ボランティアとして同窓生でやる人いると思うのですよ。それで、外の意見もたくさん入りますし、役員の方の仕事も楽になりますから。

畑中：原稿は待っているだけでは大変なので、先生方にも卒業生を選んでいただいて原稿依頼すればいいのですよ。あとはそれを纏めるだけ。

どうも前任者というのは、自分の時代に出来なかったことをヤレという悪い癖があるので、せめて会誌のお手伝いだけはしようと思っています。

生原：先ほどは機能別部会の話もありましたが、もう少し小回りのきく関係者の集まりやユニットは身近で役立つので、この会社にこれだけのメンバーがいるとか、県でこういう人たちがいるといった情報源となるものが欲しいですね。名簿もなくなったので、簡単に見られるようにたとえば『農工通信』に会社や職場のユニット的な情報が出ると、お互いに利用できるのではないかと思うのですが。

畑中：昔、農林省では、農林省の職員とそれから関係団体に行っている人の同窓生の会があって、すぐ声が掛けられるので、お金かからないし、情報交換したり、先生をお呼びしたりしていました。今の若い人たちは、あまりやりたがらないのと、そういう名簿を作るのもなかなか難しくなっていますが、組織固めにもなるし大変大事なことだと思っています。

藤森：事務局では会社別に名寄せができるわけですか。

高橋：名前だけでなく連絡先や職場も全て含めてできます。ただし、それをどのように使うかを、適正な依頼であればお出しします。

生原：「こういう分野で活躍している」とか、「こういう分野が将来…」とかの紹介記事があると興味に応じて連絡ができるようになり、そのようなものが『農工通信』に載せられれば役立てられるというのが、希望です。

畑中：職場通信のようなちょっとした記事欄ができるとよいでしょう。

大石：確かに名簿がなくなったことから、種々の情報が必要なことは分かるのですが、多数の会員を色々グルーピングして『農工通信』に掲載するのは容易ではないと思うのです。例えば、獣医ですと、多くの卒業生は、獣医に関わる分野で活躍しているから、会員が希望する情報を部会誌で提供すれば、あまり手間も金もかからないでできると思うのです。

畑中：獣医は、職業的に割合に狭い範囲にきちっとなっていて、非常に結束が固いしやり易いが、他の学科は再編を繰返して分野や職域も広がってきているのでなかなか難しい。獣医学科を見習って、それぞれの学科で頑張ること大事かもしれませんけれども。

先ほど若手の同窓会参画が少ないとのことで、同窓会を身近にとらえてもらうために学生への支援を行っている

の話が出たが、学生にとっても支援されていることが分かりやすいように、きめ細かくしていけると更によい。

大石：財政の許す範囲で学部学生、大学院生などへ、また、サークル活動や学術的な面でも支援を積極的に行うように考えていいと思います。

亀山：経済的な面以外に、知的支援の面もあるように思います。文科省は、「社会人基礎力養成」を大学学部時代にきちんと身に付けさせてほしいと言っています。社会人基礎力では、コミュニケーション力が重要ですが、大学教員ではコミュニケーション講座の担当は難しいですね。そういう場面に、コミュニケーションに長けたOBの知的支援はもってこいと思います。あと、通常の授業でも、理論だけでは学生は飽きてしまうので、スポットで1回ぐらいそれを使った事例をOBに話してもらってと活きた授業ができます。そういう支援も同窓会としてもこれからあるのではないかと思います。

＝ 海外組織 ＝

高橋：部会と支部の強化とその中での支部会の複合開催のお話もありましたが、それと少し視点が違うかもしれませんが、海外の問題をどうするかもあると思います。留学生も増えています。在来から、海外組織をどうするかということは検討してきましたが、ご意見はいかがでしょうか。

下田：私どもは農工大学日中友好会、正式には、「東京農工大学と中国同窓生との友好を深める会」と言いますが、平成6年にスタートして現在17年目になります。日中友好条約が結ばれてから、戦前の中国の卒業生あるいは戦中の卒業生がときどき日本に来るようになりました。特に立川市が北京と友好都市協定を結んだことで、北京の人たちが来るというチャンスが多くなったのです。その際本学にも寄られるというので、歓迎会を開くことが何回かあったことが契機になって、同窓による日中友好会を作ろうと、まったくのボランティアでスタートしたわけです。同窓生に声をかけて募り、現在会員は50名程でしょうか。中国の現地に働きかけて農工大学中国同窓会を作ったのです。支部（組と呼ぶ）が、北京、東北、華東、天津等に作られました。大学や研究機関の人が主ですが、民間の企業に勤めている人もいます。毎年訪中団を結成し、シンポジウムもやっており、それに関連する施設の見学等、大変勉強になりました。今は、大学の国際事業推進部局と連携しています。

訪問先は、本学の20ある中国姉妹校協定大学を拠点としています。我々にとっても中国の現状を知る非常にいい機会になります。17年間綿々と続いている一つの大きな要因は、工学部を卒業したある女性の会員が多額の募金を下さっていることで心から感謝しております。このような同窓の集まりができたことは、良いことだと思っています。

淵野：大学は中国の上海と北京にオフィスを置いて海外企業と連携して活動しています。問題は、そこを利用して活

動すること、どういう情報をそこに集中していくかのためのネットワーク作りをすることが大事なことです。

同窓会の支部という形を、中国の人たちはとっています。この人的なつながりをどう蓄積して行くかということでは、大学の上海と北京オフィスに、中国留学生の同窓生の窓口を作ってくれるように要請してきました。同窓会として、あらためて留学生をどのような位置付けにするかという議論も進める必要があるでしょう。ただ、平成4年に、宋先生が農工大日中友好会の招待で、中国留学生として初めて同窓会に出席されたときには、中国同窓会の支部と名乗ると言うことが確認されました。中国だけでなく、韓国等もありますから、海外支部組織を同窓会としてどう位置付けるかということは、これからの課題になってくよと思ひます。

下田：総会出席時に支部代議員に旅費を出しますが、中国の人達にはなかなか難しいということだったので、我々が持ちました。今、沢山の留学生がいるでしょう。

生原：留学生全体が、400人から500人ですね。調べたら、そのうち、中国は本当に多いですね。

下田：15年ほど前から、外国から来た同窓生をどう扱うかということは一つの課題であったわけですね。

淵野：実は留学生については、終身会費を1万円にしてあります。在学中にできるだけ同窓会として把握する努力は必要ですね。あと、消息は、研究室でしか分からないことが多いので、同窓会と研究室のあいだで意思疎通を図る努力をもう少しする必要があると思ひます。

高橋：2年ぐらい前に、中国支部として同窓会の支部組織とすることについて現地側に打診させていただいたことがありましたが、中国側の事情で支部とすることがなかなか難しそうだというお話がありました。今は、そういう問題はないということに理解していいですか。

淵野：「支部」という言葉ですね。日本の組織の支部が置かれるというのは、よその国の支部が～という印象を与えるので、それで「組」という言い方をしていたりします。ですから、その名称の問題があります。日本の支部と同等の扱い、たとえば、総会に代議員を出すとか活動資金を出すとかと言う措置は必要ないと思ひますのでそれも含めて検討する必要があると思ひます。

畑中：留学生も沢山、各国にるので、できるだけ支部というか、向こうの同窓生の集りを作っていくことは非常に大事だし、支援できるものは支援しようという話でよいのではないですかね。中国は、上海なら上海、北京なら北京の集りでしかできないのでしょう。それはそれでもよいのではないかなと思ひます。

藤森：中国だけではなく、タイでも何か支部のご要望が出ていると、この間ちょっと伺いましたけれども。

亀山：あと、ベトナムとかマレーシアもあります。しかし、こちらは組織化されていないので今後課題でしょうね。

高橋：いずれにしても、実質的な支部という意味で運用できるような形を、早くとれば良いと思ひます。

＝ 大学の経営への参画 ＝

畑中：大学の経営への参画という意味で、同窓会から、工学部と農学部から一人ずつ経営協議会に入っています。同窓会長という当て職ではないので、同窓会の話をするわけではないのですが、同窓生のいろいろなことを反映する場は一応大学にもっていただいています。

＝ おわりに ＝

高橋：皆さんに座談いただいたお話を少し振り返ってみますと、本会の目的と事業においては、在来の活動に加え、社会に開いた活動をさらに考えるとよいであろう、それには、もう少し具体的なある種の旗頭的な位置付けをもつことが、よりよい活動につながるのではないだろうかというようなお話をいただきました。

本会の組織問題は大きな問題ですが、任意団体ということ、もう一度見直し、法人格のある団体にする検討時期にきているだろうとお話でした。

それと、部会の在り方も、学科や専攻の組織編成に伴って、なかなか旧来通りいかないという場面も現実に見受けられることから、ここも再考する必要があるかもしれない。支部組織では、留学生の増加に鑑み、海外の組織も重要と位置付けて整備して、海外の人たちの力を高め、本会や本学の発展にも資することであろうとのことであつたと思ひます。

また、同窓会を身近なものとして色々な意味で強化していくには、若手の学生時代からの支援をさらに推進することが大事で、将来につながるであろう。そして、同窓会活動においては、今までの部会と支部の活動という形のみでは硬直化しているのではないだろうか、それぞれの強化工夫も当然必要だが、複合的な組織化を進めるのもよいかもしれない、また、きちんとした組織ではないにしても様々な機能的な集まりとして、機能別部会的な色彩や職域の集いをさらに整えていくと、同窓会を身近に感じさせ有効な活動と活性化ができるかもしれない、それはまた、若い人たちの同窓会の意識というものを高め、大学への貢献ということにも大いにつながっていくであろう。具体的には、就職の支援とか、知財関係の支援とかいくつか挙げられました。それとともに、同窓のつながりを深めるためには、名簿に代替するようなサービス業務というのをできるだけ整備し、たとえば職域情動的なものが提供されればそれに越したことはない。このようなことであつたと思ひます。

本日の、本会創立50年を契機とした「同窓会の将来を語る」座談会ですが、皆さんの想いやご意見が本会の今後の発展の縁となることを願って、これをもちまして終了させていただきます。皆様長時間有難うございました。

平成22年度 同窓会学生援助事業報告

同窓会学生援助事業に支払われる援助金は、会員の皆様からの同窓会費（終身会費・年会費）や、入学時に納入いただいた賛助会費を元に支出しております。平成22年度の援助金の総額は¥4,244,000でした。ここにご報告申し上げます。今後とも母校援助にご協力頂きますようお願い申し上げます。

1. 学会発表 (466件)

①農学部・農学府 (前期) : 33件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	曾我 直美	応用生物科	4	糖脂脂肪酸エステル結合澱粉の糊化挙動	日本応用糖質科学会
2	河内 奨	環境資源科	4	平塚～丹沢山塊間でのエアロゾル化学成分の変化	第51回大気環境学会年会
3	安喰 研子	獣医	6	The welfare assessment of stabled horses on the basis of behavioural observation throughout the year	Int. Society of Applied Ethology
4	奥 啓輔	獣医	6	アトピー性皮膚炎病態形成におけるFc受容体のγ鎖の意義	第150回日本獣医学会学術集会
5	佐久間翔平	獣医	6	肥満細胞におけるオートファジーの解析 1.IgE感作によるオートファジーの誘導	第150回日本獣医学会学術集会
6	西川 翔	獣医	6	ヒト中皮腫細胞における腫瘍性増殖制御分子としての転写因子NF-κBの役割	第150回日本獣医学会学術集会
7	桑田 和倫	獣医	6	β-naphthoflavone (BNF) によるラット肝発がん促進作用と酵素処理 isoquercitrin (EMIQ) による制御メカニズムの解析	第150回日本獣医学会学術集会
8	盛田 怜子	獣医	6	フェノバルビタール (PB) 誘発ラット肝増殖性病変に対する酵素処理イソクエルシトリン (EMIQ) の抑制作用	第150回日本獣医学会学術集会
9	小川文一朗	獣医	6	アクリルアミド (ACR) の発達期暴露によるラット海馬歯状回でのニューロン発達障害の回復性とその標的細胞について	第150回日本獣医学会学術集会
10	柏 毅	生物生産科学	M1	キャベツ萎黄病菌はトマト萎凋病菌レース1の非病原力遺伝子 <i>SLX4</i> を保持する *学生優秀発表賞*	平成22年度日本植物病理学会大会
11	関口紗央里	生物生産科学	M1	青、緑および赤色LEDをイチゴ葉面に照射したときの光合成特性	園芸学会平成22年度秋季大会
12	星野 裕昭	生物生産科学	M1	ブルーベリーにおける果実の着生強度と果皮および果肉の測定法	園芸学会平成22年度秋季大会
13	望月 佑哉	生物生産科学	M1	根量および根の活性に着目した多収性イチゴ‘紅ほっぺ’の解析	園芸学会平成22年度秋季大会
14	伊藤 隆博	生物生産科学	M2	野生型 <i>Agrobacterium rhizogenes</i> を用いたピオラへの矮性形質の導入	園芸学会平成22年度秋季大会
15	吉川健太郎	生物生産科学	M2	小石丸繭の蛍光色素の遺伝性	第57回日本シルク学会研究発表
16	遠藤 倫生	応用生命化学	M1	タンパク質工学的手法を用いた糖鎖結合型バイオハイブリッドの創出によるβ-ラクトグロブリンのアレルゲン性の低減化	日本食品免疫学会2010年度大会
17	藤森 隆寛	応用生命化学	M1	IgEクラススイッチに対する抗原とB細胞レセプターの親和性の影響	日本食品免疫学会2010年度大会
18	藤原 渉	応用生命化学	M1	乳酸菌 <i>Lactobacillus plantarum</i> NRIC0380 菌株により誘導されるTreg細胞の抗原特異性 *ポスター賞*	日本食品免疫学会2010年度大会
19	岡田 知拓	応用生命化学	M2	Influence of the affinity of antigen to B cell receptor on IgE class switching	JA ACT2010
20	石川 靖之	応用生命化学	M2	コドン頻度を改変した細菌由来リグニン分解遺伝子の導入による植物体リグニン構造の改変	The X II Cell Wall Meeting 2010
21	鳥村 悠	応用生命化学	M2	糖代謝とN-結合型糖鎖付加との関連	日本生化学会関東支部例会
22	中村 珠子	応用生命化学	M2	小麦バター・生地中の小麦澱粉の熱的性質に及ぼすアミノ酸の影響	日本応用糖質科学会
23	後藤 隆徳	環境資源物質科学	M1	再生コピー用紙における耐久性の評価	第77回紙パルプ研究発表会
24	渡辺 光正	環境資源物質科学	M1	リサイクル処理手すき紙の物性に及ぼす低密度調整剤添加の影響	第77回紙パルプ研究発表会
25	小平 斐美	環境資源物質科学	M2	小学校5年生の総合的な学習の時間におけるスライドショー制作	2010PCカンファレンス
26	青木千佳子	物質循環環境科学	M1	輸入プラスチック製品からのノニルフェノールからの溶出	第19回環境化学討論会
27	池田 圭輔	物質循環環境科学	M1	Ionic composition of aerosols collected on board during the aerial observation carried out over the East China Sea in October,2009	2010 International Aerosol Conf.
28	小川 佳美	物質循環環境科学	M1	PAHs and n-alkanes in the aerosol transported around the East China Sea	2010 International Aerosol Conf.
29	大井 彩子	物質循環環境科学	M2	東アジアから東シナ海周辺に輸送されるエアロゾルの金属成分	エアロゾル学会
30	花岡小百合	物質循環環境科学	M2	Chemical composition of aerosols collected on board in the aerial observation in autumn,2009	The 8th Int.Symposium on Advanced Environmental Monitoring
31	清水亜希子	物質循環環境科学	M2	家畜排水由来抗生物質による熱帯アジア水域の汚染実態説明	第19回環境化学討論会
32	森本 拓也	物質循環環境科学	M2	雨天時越流下水に由来するPPCPsの沿岸堆積物への蓄積	第19回環境化学討論会
33	曾我 昌史	自然環境保全学	M1	都市近郊林における蝶類に林分レベルの要因が及ぼす影響	第121回日本森林学会

(後期) : 58件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	廣田 早紀	生物生産	3	市販鉛筆削り器によるブルーベリーの挿し木繁殖の省力化	園芸学会平成23年度春季大会
2	小林 俊也	生物生産	4	コシヒカリの太稈準同質遺伝子系統と太稈遺伝子座集積系統の倒伏抵抗性	日本作物学会関東支部講演会
3	中村 彬良	生物生産	4	水稲における倒伏抵抗性に関与する太稈性の遺伝子座の解析 -コシヒカリと中国117号の第2,3染色体組換固定系統を用いて-	日本作物学会関東支部講演会
4	三田村芳樹	生物生産	4	温湯消毒時に水稲品種「ひとめぼれ」の種子が示す高温ストレス耐性の生化学的解析	日本育種学会
5	峯岸 和明	生物生産	4	イネ伸長節間の細胞壁形成ステージ分類に基づく Brittle 変異体 <i>cwa1/bc1</i> の壁形成解析	2011年度農芸化学学会大会
6	宮川 直人	生物生産	4	タバコ属種間雑種 (<i>Nicotiana suaveolens</i> x <i>N. tabacum</i>) の細胞における雑種致死過程のプロテオーム解析	日本育種学会
7	金城 寛俊	応用生物科	4	ブルーベリー品種と幼虫の発育温度がアウトウシヨウジョウバエの被害に及ぼす影響	第55回日本応用動物昆虫学会大会
8	菅野 希	地域生態システム	4	都市近郊林の地表性甲虫類に林分レベルの要因が及ぼす影響	日本生態学会第58回全国大会
9	長谷川佑樹	地域生態システム	4	刈払機使用時における下腿筋筋電位および重心動揺について	人類動態学会
10	阿部 真子	獣医	5	完全房室ブロックを示した原発性心臓リンパ腫罹患犬1例の心臓病理	第31回動物臨床医学会年次大会
11	北見友香里	獣医	5	犬の腫瘍性疾患に対するACNUの有効性に関する検討(予報)	第31回動物臨床医学会年次大会
12	藤沼 十月	獣医	5	長期経過観察を実施した局所性組織球肉腫のビーグル犬の2例	第31回動物臨床医学会年次大会
13	長谷川千紗	獣医	6	ナノ粒子を多く含むディーゼル排気ガスが雌マウスおよび雌ラットに及ぼす影響に関する研究	日本畜産学会
14	原田 健弘	獣医	6	成熟雌サラブレッドの下垂体・卵巣ホルモン分泌の年周期的変化	第23回日本ウマ科学会学術集会
15	望月 佑哉	生物生産科学	M1	イチゴ5品種における総乾物重と根量との関係および静電容量を利用した根量の推定	園芸学会平成23年度春季大会
16	丸山 裕佳	生物生産科学	M2	マウスP19細胞株の神経特異的分化形質発現のp53がん抑制タンパク質による制御	第10回日本再生医療学会総会
17	井上 和也	生物生産科学	M2	水稲品種リーフスターの強稈性をもたらし要因の解析	日本作物学会関東支部講演会
18	富田 綾	生物生産科学	M2	水稲品種ハバタキの染色体断片をコシヒカリの第11染色体に置換した系統の窒素蓄積	日本作物学会第230回講演会
19	桑原 萌	生物生産科学	M2	アサガオにおける花弁老化関連遺伝子の発現制御に関わるシス配列の探索	園芸学会平成23年度春季大会
20	李 玫	生物生産科学	M2	膜貫通型LRRプロテインキナーゼ遺伝子のホモログIn29はアサガオの花弁老化時のプログラム細胞死に関与する	日本育種学会
21	仲西 藍	生物生産科学	M2	ブルーベリーの種間雑種種子の発芽および初期生育における促進法	園芸学会平成23年度春季大会

22	田村 瑞	応用生命化学	M1	担子菌 <i>Coprinopsis cinerea</i> 由来セルラーゼ CcCe16B の立体構造解析	日本応用糖質科学会
23	松田 佳奈	応用生命化学	M1	<i>Shewanella amazonensis</i> 由来 GH99 a-Mannosidase の発現系の構築と性質の解析	日本農芸化学会 2010 年度大会
24	岡崎 愛	生物制御科学	M1	ハマキサムライコマユバチの繁殖生態に及ぼす宿主の影響	第 55 回日本応用動物昆虫学会大会
25	佐野 朋也	生物制御科学	M1	マイマイガ防除における昆虫病原微生物の利用	第 55 回日本応用動物昆虫学会大会
26	柘野 優輔	生物制御科学	M1	チャハマキにおける新たな性比異常系統の原因因子の同定と系統解析	第 55 回日本応用動物昆虫学会大会
27	秋月 直也	生物制御科学	M2	3 系統の <i>Wolbachia</i> に感染しているチャハマキにおける細胞質不適合と <i>Wolbachia</i> の母系伝播効率	第 55 回日本応用動物昆虫学会大会
28	岩崎 昌美	生物制御科学	M2	イネばか苗病の生物防除資材の探索	平成 23 年度植物病理学会大会
29	岡本 陽子	生物制御科学	M2	トマト品種「Micro-Tom」の持つ萎凋病菌 <i>Fusarium oxysporum f.sp.lycopersici</i> レース 2 および 3 に対する耐病性	平成 23 年度植物病理学会大会
30	北澤 雅	生物制御科学	M2	トマト萎凋病菌が保持するサリチル酸ヒドロキシラーゼホモログ遺伝子 (SHHI) の機能解析	平成 23 年度植物病理学会大会
31	波田野未由来	生物制御科学	M2	<i>Gibberella sacchari</i> 形質転換体交配後代に生じるハイグロマイシン B 耐性遺伝子の変異について	第 10 回日本糖質分子生物学コンファレンス
32	村上 勇介	生物制御科学	M2	イネいもち病菌の交配過程の観察と日本産株の交配不全性原因について	平成 23 年度植物病理学会大会
33	大橋亜沙美	環境資源物質科学	M1	加熱による木材からの有機酸生成	第 61 回日本木材学会大会
34	澁澤 悠哉	環境資源物質科学	M1	Air-injection 法によるパーティクルボード製造 - 空気流量がボード物性に及ぼす影響 -	第 61 回日本木材学会大会
35	黒岩 恵	物質循環環境科学	M1	4 地点の森林土壌における総硝化速度と微生物	第 121 回日本森林学会大会
36	赤塚 武俊	物質循環環境科学	M2	沖縄渡戸岬における窒素酸化物、硝酸塩の変化	第 16 回大気化学討論会
37	宮崎 麻衣	物質循環環境科学	M2	尾隙ワックスモニタリング 移動経路を考慮した海鳥の汚染実態および食性の解析	日本鳥学会 2010 年度大会
38	山田 尚人	物質循環環境科学	M2	東シナ海周辺に輸送されるキノコ類と多環芳香族化合物	第 16 回大気化学討論会
39	藤津亜季子	自然環境保全学	M1	低木液果への果実食者の訪問	日本生態学会第 58 回全国大会
40	佐々木道子	自然環境保全学	M1	森林 Ao 層の詳細な画分法の検討	第 122 回日本森林学会大会
41	岡田 彩	自然環境保全学	M1	玉原高原におけるブナ林の動態 - ブナ実生・稚樹の生存率・成長量からの考察 -	植生学会第 15 回大会
42	近藤 一樹	自然環境保全学	M1	東京湾臨海埋立地の造成緑地における植生の現状と将来予測	植生学会第 15 回大会
43	篠原 光礎	自然環境保全学	M1	栃木県箒川における群落複合の分布と河川の地形的特性との関係	植生学会第 15 回大会
44	秋山 華	自然環境保全学	M1	都市緑地におけるテントウムシ群集の年次間比較	日本生態学会第 58 回全国大会
45	梅村 佳寛	自然環境保全学	M2	ブナ科堅果資源量の年次変化がツキノワグマの生息地選択に与える影響 * ポスター賞最優秀賞 *	日本生態学会第 58 回全国大会
46	竹田 千尋	自然環境保全学	M2	代替餌としての落葉の評価 - エゾシカの行動道跡から	日本生態学会第 58 回全国大会
47	渡辺なつ樹	自然環境保全学	M2	北海道に東遊するゴマアザラシの食性	日本生態学会第 58 回全国大会
48	幸地 彩子	自然環境保全学	M2	自然保護運動における運動主体間の関係性 - 泡瀬干潟保全運動を事例として -	林業経済学会 2010 年秋季大会
49	林 あかね	自然環境保全学	M2	赤谷プロジェクトにおける自然資源管理の実態と今後の展望 - 「赤谷の森・基本構想」策定から見えたもの -	林業経済学会 2010 年秋季大会
50	福原 宜美	自然環境保全学	M2	イノシシ害対策事業における住民参加の実態と課題 - 栃木県日光市長畑地区を事例として -	林業経済学会 2010 年秋季大会
51	辻 智	自然環境保全学	M2	神奈川県北部の対照流域法試験地における水の移動に伴う元素動態	第 122 回日本森林学会大会
52	秋葉 行雄	自然環境保全学	M2	カラマツ人工林の潜在力を活かした落葉広葉樹林化に関する基礎的研究	日本生態学会第 58 回全国大会
53	坂垣友規子	自然環境保全学	M2	北海道北見地方における固有種エゾマコナの生育地の特徴	植生学会第 15 回大会
54	大津 千晶	自然環境保全学	M2	植物の機能型構成からみた草原植生の約 25 年間の変化 * ポスター発表賞 *	植生学会第 15 回大会
55	権田 亜実	自然環境保全学	M2	武蔵野のコナラ二次林における管理の有無による種組成の変化	植生学会第 15 回大会
56	深町 篤子	自然環境保全学	M2	北限シオジ林のネコノメソウ属 <i>Chrysosplenium</i> (ユキノシタ科) 5 種の分布と生育立地	植生学会第 15 回大会
57	滝口 晃	農業環境工学	M1	小河川におけるタナゴ類の生息環境	応用生態工学学会第 14 回大会
58	山本 康仁	農業環境工学	M2	多摩川中流域におけるトウキョウダルマガエル <i>Rana porosa porosa</i> の生息状況と水田環境の関 * 若手優秀発表賞 *	自然環境復元学会

②連合農学研究科 (前期): 6 件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	篠崎 良仁	生物生産科学	D2	アサガオの花弁における開花後の活性酸素種の増加に PI3K が関与する	園芸学会平成 22 年度秋季大会
2	二宮 伸哉	生物生産科学	D3	デンドロメーターを用いたイチゴ果実径の日変化	園芸学会平成 22 年度秋季大会
3	稲見 圭悟	生物生産科学	D3	トマト萎凋病菌新型レース 3 では非病原力遺伝子 <i>Stx4</i> がトランスポゾンによって破壊されていた * 学生優秀発表賞 *	平成 22 年度日本植物病理学会大会
4	安達 悠	応用生命科学	D2	T 細胞の活性化とアナジー化の決定における Ca ²⁺ シグナルの役割	日本食品免疫学会第 6 回学術大会
5	島田幸治郎	環境資源共生科学	D1	東アジアから輸送される炭素質エアロゾルの輸送パターンと汚染ブルームの特徴	エアロゾル学会
6	沈 剛	農業環境工学	D2	Mapping and Detecting the Changes in the Mountainous Ecosystem at Landscape Metrics Using ASTER Images	農業機械学会

(後期): 11 件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	福家 光敏	生物生産科学	D1	高温、強光および高湿ストレス下におけるイチゴの生理生態学的研究 (1) 異なる苗齡における葉位別の光合成特性	日本熱帯農業学会
2	堀内 尚美	生物生産科学	D2	秋季開花性ブルーベリーの開花特性と果実の品質	園芸学会平成 22 年度春季大会
3	新城 亮	生物生産科学	D3	マンノース結合型イネレクチン (MRL) の遺伝子発現制御組換え体イネいもち病抵抗性と GFP 融合 MRL の発現局在性	平成 22 年度植物病理学会大会
4	山本 真民	生物生産科学	D3	C 型肝炎ウイルス感染における粒子表面コレステロールの役割	第 58 回日本ウイルス学会学術集会
5	中島 亜美	環境資源共生科学	D1	ツキノワグマの採食物と移動距離の関係	日本生態学会第 58 回全国大会
6	有本 勲	環境資源共生科学	D2	ツキノワグマの 1 日の探餌行動パターンの区分	日本生態学会第 58 回全国大会
7	盧 曉強	環境資源共生科学	D2	カルスト地域における森林土壌の窒素無機化と微生物バイオマス	第 122 回日本森林学会大会
8	Rakotondramanga Soalandy Fanjamalala	環境資源共生科学	D3	Decentralization, forest and livelihoods: Case studies from Bohol Province, the Philippines	林業経済学会 2010 年秋季大会
9	小坂井千夏	環境資源共生科学	D3	ツキノワグマの土地利用は食物資源の変化にどのように対応しているのか? * ポスター賞優秀賞 *	第 16 回野生生物保護学会・日本哺乳類学会 2010 年度合同大会
10	相原 延英	農林共生社会科学	D3	火傷病リスクにおけるリスク・コミュニケーションの在り方に関する一考察	日本農業市場学会 2010 年度大会
11	阿拉坦沙	農林共生社会科学	D3	内モンゴル自治区の牧畜産業化の現状と発展方向 - 赤峰市の牧区を調査分析 -	中国農業経済学会

③連合獣医学研究科 (前期): 2 件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	剣持 明	獣医	D3	Modifying effect of lac color and cochineal extract on the development of capsular invasive carcinomas induced by promotion with sulfadimethoxine in a rat two-stage thyroid carcinogenesis model	IUTOX2010
2	松田 彬	臨床獣医学	D4	Involvement of spontaneous NF- κ B activation in development of glucocorticoid resistance in human lymphocytes	14th International Congress of Immunology

(後期) : 6件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	堀井 康行	基礎獣医学	D2	雌 Hatano 高回避系 (HAA) および低回避系 (LAA) ラットの社会的・不安・学習行動に関する研究	第150回日本獣医学学会学術集会
2	Dhawal Pramod	獣医学	D3	Biphasic changes in testosterone with changes in estradiol from the testes of thoroughbred stallion in response to human chorionic gonadotropins (hCG)	第150回日本獣医学学会学術集会
3	潘 玲梅	基礎獣医学	D3	Dynamic Changes in Secretory Activity of Adrenocortical Cells During the Reproductive Cycle in Female Rats	43rd Annual Meeting SSRUSA
4	山本 ゆき	獣医生理学	D3	Secretory pattern of prolactin and cortisol during pregnancy of African (Loxodonta africana) and Asian (Elephas maximus) elephants	International conference on Diseases of zoo and Wild Animals 2010
5	中尾 周	獣医学	D3	犬の完全房室ブロック症例における房室伝導系の病理	第92回日本獣医循環器学会
6	Kaewmanee Saroch	基礎獣医学	D4	A clear seasonality of Musth in a captive bull African elephant (Loxodonta africana) in Japan	第150回日本獣医学学会学術集会

④工学部・工学府 (前期) : 63件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	伊藤 光樹	電気電子工	4	電界放射電流誘起型 EM による単電子トランジスタの集積化と特性制御	第71回応用物理学学会学術講演会
2	重藤 元	生命工学	M2	マウス ES 細胞からのインスリン分泌細胞への分化誘導方法の開発	日本実験動物学会
3	重富 知也	生命工学	M2	難濾過性食品からの生菌分離	日本食品衛生学会
4	石垣 亮	応用化学	M1	シクロデキストリンを有する配位子を用いた ATRP 挙動	第59回高分子学会年次大会
5	橋本 寛喜	応用化学	M1	多重モデルアプローチを用いた予測モデルのアップデート手法	化学工学会第42回秋季大会
6	酒井 美希	応用化学	M1	単結晶 AIN の格子定数の温度依存性	第2回窒化物半導体結晶成長講演会
7	東川 義弘	応用化学	M1	サファイア (0001) 基板上 InN HVPE 成長における成長初期核制御の効果	第2回窒化物半導体結晶成長講演会
8	霜村 友基	応用化学	M1	オキシエチレン鎖を有する二酸化炭素/エポキシド共重合体の合成とイオン伝導性の評価 *若手優秀ポスター賞*	平成22年度繊維学会年次大会
9	松田 真宏	応用化学	M1	強磁場を利用したイオン伝導性高分子電解質中のクレイの異方性制御	平成22年度繊維学会年次大会
10	千葉 雄大	応用化学	M1	表面修飾メソポーラスシリカを充填した高分子複合膜のプロトン伝導特性	第59回高分子学会年次大会
11	伊藤 朋紀	応用化学	M1	創傷被覆材への応用を目指したポリエチレングリコール修飾キトサンの合成と特性評価	第59回高分子学会年次大会
12	高見 拓	応用化学	M1	ポリエチレングリコール-ポリ乳酸ブロック共重合体を共混させた乳化法を利用した経肺投与用表面修飾ナノ粒子の開発	第59回高分子学会年次大会
13	横澤 尚子	応用化学	M1	組織接着性ハイドロゲルへの応用を目指したポリエチレングリコール修飾アテロコラーゲンの合成と物性評価	第59回高分子学会年次大会
14	加藤 真洋	応用化学	M1	天然ゴム/ポリエチレン熱可塑性エラストマーの構造と変形回復性	第59回高分子学会年次大会
15	川手 己有	応用化学	M1	光散乱法による超臨界二酸化炭素雰囲気下での PVDE の融解挙動の評価	第59回高分子学会年次大会
16	河野富美弥	応用化学	M1	二酸化炭素雰囲気下における結晶性高分子の変形挙動	第59回高分子学会年次大会
17	早乙女俊樹	応用化学	M2	ポリアクリロニトリルの脱水素化反応に伴う不均一構造形成	第59回高分子学会年次大会
18	橋田 憲人	応用化学	M1	エッチング AI ワイヤを用いたメタノール改質型マイクロリアクタの開発	化学工学会第42回秋季大会
19	中野 了	応用化学	M1	マイクロリアクタを用いた温度非定常操作 *SIS 部会・研究奨励賞*	化学工学会第42回秋季大会
20	米倉 有美	応用化学	M2	気相触媒反応に適した熱交換型マイクロリアクターを用いた研究	化学工学会第42回秋季大会
21	高津 衣世	応用化学	M2	熱可塑性エラストマーの変形挙動の X 線回折と光散乱による分離評価	第59回高分子学会年次大会
22	吉川悠以子	応用化学	M2	高分子反応による環状炭化水素基修飾スチレン共重合体の合成及びそのポリマー改質効果	第59回高分子学会年次大会
23	内田 裕介	応用化学	M2	組織接着性ハイドロゲルへの応用を目指したブロック共重合体が形成する三層構造高分子ミセルの調整およびゲル形成特性評価	第59回高分子学会年次大会
24	諸石 眸	応用化学	M2	タンパク質徐放制御のためのブロック共重合体が形成する高分子ミセルを組み込んだシート状材料の開発	第59回高分子学会年次大会
25	Tan Khee Sean	応用化学	M2	Design of a Dependable Process Control System	PSE Asia 2010
26	金平真梨子	応用化学	M2	触媒を用いたアンモニア分解に関する研究	化学工学会第42回秋季大会
27	川田 晋平	応用化学	M2	間伐材由来の木炭を用いた VOCs 酸化触媒の開発に関する研究	化学工学会第42回秋季大会
28	木田 智久	応用化学	M2	炭素系材料を用いた排ガス浄化触媒の開発	化学工学会第42回秋季大会
29	山田 記央	応用化学	M2	アルマイト放電電極を用いた揮発性有機化合物の分解に関する研究	化学工学会第42回秋季大会
30	大江 祥元	応用化学	M2	超臨界二酸化炭素処理による高分子電解質のイオン伝導度の経時変化とイオン溶存状態の解析 *優秀学生ポスター賞*	第21回プラスチック成形加工学会年次大会
31	遠藤 正律	応用化学	M2	高分子電解質複合体のイオン伝導度に与える様々な無機フィラーの充填効果	第21回プラスチック成形加工学会年次大会
32	中村 美月	応用化学	M2	カーボネート単位を有する高分子電解質のイオン伝導性に及ぼす側鎖構造の影響	第21回プラスチック成形加工学会年次大会
33	北島 峻輔	応用化学	D1	超臨界二酸化炭素を利用した固体高分子電解質/クレイ複合体のナノ分散化とイオン伝導挙動の解析	第59回高分子学会年次大会
34	増田 豊	応用化学	D2	Two-step growth of (0001) ZnO single crystal layers on (0001) sapphire substrates by halide vapor phase epitaxy	ICCG-16
35	田島 純平	応用化学	D3	r 面 sapphire 基板上 a 面 AIN HVPE 成長初期過程におけるキャリアガスの影響	第2回窒化物半導体結晶成長講演会
36	三木 肇	機械システム工学	M1	超音速機用ダイバータの空力設計と性能評価	第42回流体力学講演会
37	木村 俊一	機械システム工学	M1	セラミック超微粒子感圧感温複合塗料の特性評価	第42回流体力学講演会
38	青木 亮太	機械システム工学	M1	急減圧による発泡マグマの破碎に対する粘弾性の影響	日本混相流学会年次講演会 2010
39	野々口裕三	機械システム工学	M1	気泡による揮発性物質の高効率捕集	日本混相流学会年次講演会 2010
40	丁 侃	機械システム工学	D1	Investigation on the Cutting Process of Plasma Sprayed Iron Base Alloys	ICoPE2010 & 13th ICPE
41	澤田 龍明	物理システム工学	M1	半導体表面超構造上 Ag 超薄膜の REM-4PP による量子井戸状態の研究	日本物理学会 2010 年秋季大会
42	高橋 一徳	物理システム工学	M1	スベルミジン投与による DNA 凝縮の環境制御型透過電子顕微鏡観察	日本物理学会 2010 年秋季大会
43	山本 育	物理システム工学	M1	陽極酸化法による GaAs ポーラス構造の電解液濃度依存性	第71回応用物理学学会学術講演会
44	坂下 伸哉	物理システム工学	M2	化成電圧以外の要因による陽極酸化ポーラスアルミナの細孔間距離の変化	第71回応用物理学学会学術講演会
45	篠崎 陽平	電気電子工学	M1	Ray Focusing Property of 256-view SMV Display	3DSA2010
46	厚母 息吹	電気電子工学	M1	分割型電圧フィードバック EM でのナノギャップ狭窄過程における消費電力の検討	第71回応用物理学学会学術講演会
47	滝谷 和聡	電気電子工学	M1	電界放射電流誘起型 EM でのナノギャップに生じる平均電力の検討	第71回応用物理学学会学術講演会
48	粕谷 洋介	電気電子工学	M1	Interferometric signal evaluation by frequency-spacing sweeping of supercontinuum	16th Microoptics Conference
49	茂澤 清信	電気電子工学	M1	Fiber network characterization by transmission analysis of test pulses generated by optical pulse synthesizer	16th Microoptics Conference
50	石津 裕之	電気電子工学	M2	Pulse compression control using optical pulse synthesizer and phase modulator	16th Microoptics Conference
51	木下 昌洋	電気電子工学	M2	Optically driven sensor network with wireless sensor nodes	16th Microoptics Conference
52	大和田 穰	電気電子工学	M2	光周波数コムのアリアンセンサへの応用	光波センシング技術研究会
53	遠藤 尚史	電気電子工学	M2	Improvement in Accuracy and Speed of Distance Displacement Measurement based on Two-Photon Absorption of Si-APD	ODF'10
54	櫻井 拓登	電気電子工学	M2	Waveform Measurement of High Speed Vibration Using Fiber Optic Interferometer with LN Phase Modulator	ODF'10
55	目黒 大地	電気電子工学	M2	High speed Optical Millimeter Wave Sweeper using Laser Diode with Direct Current Modulation and MZ interferometer	ODF'10
56	上野 俊介	電気電子工学	M2	Integration of Single-Electron Transistors Using Field-Emission-Induced Electromigration	IEEE NANO 2010
57	桑原 洋介	電気電子工学	M2	パッシブパルス処理をした金属細線チャネルのエレクトロロマイグレーション過程における発熱分布の可視化	第71回応用物理学学会学術講演会
58	渡邊 敬登	電気電子工学	M2	電界放射電流誘起型 EM による強磁性ナノ構造の新規な作製手法の検討	第71回応用物理学学会学術講演会

59	西村 信也	電気電子工学	D3	ディスクリット Si 接合型電界効果トランジスタにおける磁気抵抗の変調制御	第71回応用物理学会学術講演会
60	佐藤 茂樹	情報工学	M1	部屋全体の割り込み許容度推定のための動きと音の分析	第61回ヒューマンインタフェース学会研究会
61	浅山 景子	電子情報工学	D1	糖鎖層を持つ血管内皮細胞間隙のリゾソーム透過過程: 数値流体力学的研究IV	日本物理学会2010年秋季大会
62	喬 維凡	電子情報工学	D2	Generation of optical short pulses with pulse-shaped phase waveforms and their fiber transmission characteristics	16th Microoptics Conference
63	横地 界斗	電子情報工学	D3	Speckle noise suppression by unbalanced nulling interferometer and adaptive optics	CLEO2010

(後期): 228件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	神山 周也	生命工	3	マウス由来嗅覚受容体 mOR-EG の酵母における機能的発現効率向上を目指した RTP との共発現系の構築	第62回日本生物学会大会
2	Savangsuksa Aulaphan	生命工	4	ヒト由来 μ -オピオイド OPRM1 とその変異体 A118G の酵母による発現と機能解析	第62回日本生物学会大会
3	吉崎 誠人	生命工	4	超好熱性古細菌 <i>Thermococcus</i> strain KS-1 由来 sHsp のシャペロンシステムの解明	日本生物学会東日本支部第5回学生発表討論会
4	渡邊 俊則	生命工	4	チオシアネート加水分解酵素の成熟化過程におけるアクセサリタンパク質との相互作用機構の解明	日本生物学会東日本支部第5回学生発表討論会
5	芦野 雄大	生命工	4	ヒト由来 Methionine Aminopeptidase (hMAP) の組換え体発現・構造決定と新規 Type1MAP 阻害剤認識機構の解明	酵素工学会第64回講演会
6	荒木 智	生命工	4	<i>Deha 1 oocoides ehenogenes</i> st.195 類縁株由来クロロエテン類センサキナーゼのクローニングと組換え体発現	酵素工学会第64回講演会
7	宮澤 健太	生命工	4	Production and NMR Analysis of Silk-like Proteins containing Cell-adhesive Sequences for Bone Scaffold	2010 環太平洋国際化学会議
8	岩井 若菜	生命工	4	コーティング法による小口径絹人工血管の作製とイヌ頸動脈への移植	第59回高分子討論会
9	田和 昌樹	生命工	4	フォトアフィニティラベリングプローブを用いた標的タンパク質探索法の開発	日本化学会第91春季年会
10	堀野入 恵	生命工	4	耐熱性シトクロム P450 による一原子酸素添加反応の温度依存性	日本化学会第91春季年会
11	一条 亮論	生命工	4	Zwitterion 添加による疎水性イオン液体の水和状態の改善	日本化学会第91春季年会
12	荒木 辰哉	応用分子化学	4	ロジウム触媒を用いた [2+2+2] 付加環化反応による面不斉 [7] [9] パラシクロファンの不斉合成とジオキサ [7] パラシクロファンの X 線結晶構造解析	日本化学会第91春季年会
13	石田 麻奈	応用分子化学	4	ロジウム触媒を用いた 1,6-エンインのアルデヒドによる不斉環化反応	日本化学会第91春季年会
14	岡本 隆一	応用分子化学	4	ロジウム触媒を用いたオレフィン異性化 / 不斉分子内 Alder-Ene 反応によるジヒドロベンゾフラン誘導体の合成	日本化学会第91春季年会
15	栢田 健吾	応用分子化学	4	ロジウム触媒を用いたヘテロ原子架橋 5-アルキナルとアシルホスホネートによる不斉環化反応	日本化学会第91春季年会
16	宮内 祐太	応用分子化学	4	ロジウム触媒を用いたアリールエチルエーテルとカルボニル化合物との完全分子間共三量体反応	日本化学会第91春季年会
17	岡田 悠哉	有機材料化学	4	室温で ms のリン光寿命を有する有機色素・有機金属錯体からなる材料システム * 奨励賞 *	第20回インテリジェント材料・システムシンポジウム
18	新井 美葉	化学システム工学	4	cocrystal 形成による物性の改善	化学工学会第76回年会
19	山岸 貴匡	化学システム工学	4	メカノケミカル法による結晶構造の変化	化学工学会第76回年会
20	大江 健人	化学システム工学	4	核化現象の及ぼすマイクロ波の影響	化学工学会第76回年会
21	江夏亮太郎	機械システム工学	4	大ひずみ線形二軸応力経路における冷延 IF 鋼板の塑性変形挙動 * 優秀論文講演奨励賞 *	第61回塑性加工連合講演会
22	瀧水 大作	機械システム工学	4	二軸引張試験による 6000 系アルミニウム合金板の材料モデリングと成形性評価	軽金属学会
23	庄司 観	機械システム工学	4	Power Generation from Trehalose in Hemolymph Experiment for Development of Cyborg insect	第48回日本生物物理学会
24	竹村 龍一	機械システム工学	4	The Construction of Self-organized and Frameless swimming Bio-Robots With Cardiomyocyte Gel.	第48回日本生物物理学会
25	張 笑辰	機械システム工学	4	長さの変化するクレーンシステムの運動と振動の制御	TRANSLOC2010
26	大友 秀昭	機械システム工学	4	電解機械複合研磨によるチタン加工の特性調査	精密工学会2010年度秋季大会
27	土橋 祐	機械システム工学	4	5 軸マシニングセンサにおける 3 次元円弧補間運動の誤差曲線に及ぼす検査条件の影響	日本機械学会
28	二瓶 友彦	機械システム工学	4	匂い濃度の空間分布提示装置	平成23年電気学会全国大会
29	相原 将人	物理システム工学	4	MgB ₂ /AlOx/MgB ₂ 接合の作製	第58回応用物理学会学関係連講演会
30	秋元 俊介	電気電子工学	4	電界放射電流誘起型 EM による単電子トランジスタの作製条件と特性制御の検討	第58回応用物理学会学関係連講演会
31	八木麻実子	電気電子工学	4	電界放射電流誘起型 EM によるナノギャップ作製における交互電手法の検討	第58回応用物理学会学関係連講演会
32	須田隆太郎	電気電子工学	4	電界放射電流誘起型 EM による Ni 量子ポイントコンタクトの形成	第58回応用物理学会学関係連講演会
33	北川 潤	電気電子工学	4	分割型電圧フィールドバックエレクトロマイグレーションを用いた Ni ナノチャンネルの抵抗制御進行過程の評価	第58回応用物理学会学関係連講演会
34	井上 真嘉	電気電子工学	4	1THz 帯域の光パルスシンセサイザを用いたパルス生成	第58回応用物理学会学関係連講演会
35	鷲崎 曜	電気電子工学	4	光周波数シフタの導入による分光器の精密較正	第58回応用物理学会学関係連講演会
36	小島 崇人	電気電子工学	4	光周波数コム間隔掃引干渉法の高分解能化	第58回応用物理学会学関係連講演会
37	水野 陽介	電気電子工学	4	光パルスシンセサイザを用いた波形整形可能なパルス圧縮	第58回応用物理学会学関係連講演会
38	田野 直樹	電気電子工学	4	周波数コムを用いた DWDM 伝送の注入同期によるホモダイン検波の可能性	電子情報通信学会
39	奈須川佑太	電気電子工学	4	フレキシブル基板を用いた VA-LCD の作製とその評価	電子情報通信学会
40	稲富 雅彰	電気電子工学	4	有機 EL 素子のヘテロ界面形成とその素子特性への影響に関する研究	発光型 / 非発光型ディスプレイ合同研究会
41	坪香 雅彦	電気電子工学	4	光重合型液晶性高分子膜を用いた新規な偏光消素子の作成及び評価	日本液晶学会討論会
42	真瀬 佳祐	電気電子工学	4	UV 重合型液晶性高分子膜の作製及び評価	日本液晶学会討論会
43	大久保信哉	電気電子工学	4	5 軸能動形磁気軸受制御系に対するモード分配行列設定の一方	第53回自動制御連合講演会
44	森本 和樹	電気電子工学	4	リニアスライダの位置決め制御に対するフィードバック誤差学習の実装方法	第53回自動制御連合講演会
45	染矢 貴洋	電気電子工学	4	スクリーン印刷法による高効率結晶シリコン太陽電池の電極形成における高速焼成プロセス	第7回次世代の太陽光発電システムシンポジウム
46	栗原 貴之	電気電子工学	4	ホログラフィックディスプレイにおける視域の最大化	映像情報メディア学会
47	五位潤竜也	情報工学	4	テクスチャ合成を用いたステレオグラム生成	情報処理学会第141回グラフィクスとCAD研究発表会
48	馬渡 翔太	情報工学	4	Hybrid Images を用いた掲示板の輝度補正手法	情報処理学会第142回グラフィクスとCAD研究発表会
49	高橋 都子	情報工学	4	曲面を持つ紙パッケージの制作支援ツール	ビジュアルコンピューティングワークショップ2010
50	岡田 拓也	情報工学	4	時系列に基づいた文献参照関係の可視化	ビジュアルコンピューティングワークショップ2010
51	安部 亮介	情報工学	4	複数デスクワーク同時進行中の割り込み拒否度推定に向けた頭部運動の分析	情報処理学会第73回全国大会
52	守屋悠里英	情報工学	4	ボイスチャット中の会話活性化度推定に向けた音声情報の分析	ヒューマンインタフェース学会
53	三上 卓也	情報工学	4	脳波による興味関心度・疲労測定	日本シミュレーション&ゲーミング学会
54	長嶺 精彦	情報工学	4	脳波を用いた乗り心地解析	日本シミュレーション&ゲーミング学会

55	突 彰	情報工学	4	Evaluation of Human-Interest in Watching TV Commercials by EEG	NCSP11
56	平岡 大介	生命工学	M1	メチル化 CpG 結合タンパク質を用いた新規メチル化頻度測定法の開発	第 62 回日本生物学会大会
57	佐藤 佑哉	生命工学	M1	クモ牽引糸局所構造モデル化合物の安定同位体ラベルと固体 NMR 構造解析	第 49 回 NMR 討論会
58	八木 剛仁	生命工学	M1	小口径絹人工血管の作製とラット腹部大動脈への移植	第 59 回高分子討論会
59	鶴巻 晃子	生命工学	M1	イオン液体・PEO 複合体をベースとしたイオン伝導性高分子の設計	第 59 回高分子討論会
60	稲田 祥平	生命工学	M1	LCST 挙動を示すイオン液体/水混合系を用いたタンパク質の抽出	第 59 回高分子討論会
61	黒田 浩介	生命工学	M1	イオン液体を移動相とする HPLC: イオン液体中での固体酸によるセルロースの加水分解反応の解析	第 1 回イオン液体討論会
62	佐藤 雅	生命工学	M1	<i>Bacillus pallidus</i> RAPc8 由来コバルト型ニトリルヒドラーゼの大量発現系構築とキャラクターゼーション	酵素工学会第 64 回講演会
63	高橋 翔平	生命工学	M1	<i>Thiobacillus thioarvus</i> TH115 由来硫化カルボニル分解酵素 COSase の結晶構造	酵素工学会第 64 回講演会
64	中西 拓也	生命工学	M1	チオシアネート加水分解酵素の成熟化過程におけるコバルト挿入機構	酵素工学会第 64 回講演会
65	栗原 惇	生命工学	M1	イオン液体/水混合溶媒中におけるピリルビン酸化酵素の直接電子移動反応	2010 年電気化学秋季大会
66	武田 康太	生命工学	M1	<i>Pseudomonas putida</i> KT2440 由来キノプロテイン・アルコール脱水素酵素の電気化学的解析	第 4 回バイオ関連化学シンポジウム
67	守谷 和騎	生命工学	M1	超好熱性古細菌由来 II 型シャペロンの反応機構の速度論的解析	第 83 回日本生化学会大会
68	友成 太一	生命工学	M1	分裂酵母 <i>Schizosaccharomyces pombe</i> 由来 Hsp90 とコシャペロンの協調作用機構	第 83 回日本生化学会大会
69	井上 宏樹	生命工学	M1	破骨細胞分化に対するポリメトキシフラボノイドの効果	第 83 回日本生化学会大会
70	岩永陽二郎	生命工学	M1	メラニン産生に及ぼす L-アスコルビン酸の影響	第 83 回日本生化学会大会
71	櫻村 出雲	生命工学	M1	乳癌細胞の性ホルモン依存性細胞増殖の解析	第 83 回日本生化学会大会
72	清水 和	生命工学	M1	皮膚細胞の増殖と分化を制御するステロイド因子の解析	第 83 回日本生化学会大会
73	高田 秀春	生命工学	M1	脂肪細胞の分化と脂肪蓄積におけるプロスタグランジン E2 の関与	第 83 回日本生化学会大会
74	増井 聡美	生命工学	M1	血管内皮細胞による管腔形成制御の解析	第 83 回日本生化学会大会
75	佐藤 紀幸	生命工学	M1	Synthesis of Fluorescently Labeled Analogs of Antitumor Saponin OSW-1	2010 環太平洋国際化学会議
76	角掘 健治	生命工学	M1	直接電子移動能を有するグルコース脱水素酵素の安定化	2010 年電気化学秋季大会
77	戸田 礼	生命工学	M1	アミロイド形成蛋白質細胞毒性評価用蛍光バイオセンシングを用いたインスリン・グルカゴンの細胞毒性の評価	2010 年電気化学秋季大会
78	宮本 侑典	生命工学	M1	糖化ペプチド酸化酵素の機能改変による脱水素酵素化	2010 年電気化学秋季大会
79	長島 大地	生命工学	M1	基質特異性が改変された PQQ グルコース脱水素酵素の SMBG 用酵素としての評価	2010 年電気化学秋季大会
80	中島 満晴	生命工学	M2	Engineering Pyrroloquinoline Quinone Glucose Dehydrogenase harboring <i>de novo</i> designed loop region	2010 環太平洋国際化学会議
81	安瀬 佑希	生命工学	M2	Diversity of FAD dependent glucose dehydrogenases and their potential application for the glucose enzyme sensors	2010 環太平洋国際化学会議
82	今井 杏奈	生命工学	M2	Biomolecular engineering of multiheme cytochrome c responsible for direct electron transfer capability of glucose dehydrogenase complex	2010 環太平洋国際化学会議
83	丹部 絵梨	生命工学	M2	フルクトシルアミノ酸/ペプチド脱水素酵素の構築および糖化蛋白質センサーの応用 * 第 20 回メイラード学会若手研究者奨励賞 *	第 20 回メイラード学会
84	福元 拓郎	生命工学	M2	Structure Analysis of A Steroidal Glycoside from <i>Ornithogalum Saundersiae</i>	2010 環太平洋国際化学会議
85	田口 怜美	生命工学	M2	Spherulite formation with phosphonium type zwitterion and amino acid ionic liquids	2010 環太平洋国際化学会議
86	阿部 由寛	生命工学	M2	分裂酵母 <i>Schizosaccharomyces pombe</i> 由来 Hsp104 の発現、精製及び機能解析	第 83 回日本生化学会大会
87	福谷 洋介	生命工学	M2	昆虫由来嗅覚受容体ヘテロ 2 量体の出芽酵母における機能的発現	第 62 回日本生物学会大会
88	中川あゆみ	生命工学	M2	ATP - induced Dynamic Motion of Group II Chaperonin Detected by Diffracted X-ray Tracking	The 3 rd Int.Symposium on Protein Community
89	亀谷 俊輔	生命工学	M2	アラニン連鎖ペプチドの分子間構造に関する固体 NMR による研究	第 49 回 NMR 討論会
90	宮本早矢香	生命工学	M2	歯科再生医療用の家蚕絹フィブリン足場材料の開発	第 59 回高分子討論会
91	安藤 孝記	生命工学	M2	高度好熱菌 <i>Thermus thermophilus</i> HB8 由来 Methionine Aminopeptidase と新規阻害剤の複合体 X 線結晶構造解析	酵素工学会第 64 回講演会
92	前田 悠貴	生命工学	M2	<i>Rhodococcus erythropolis</i> N771 由来 一酸化窒素合成酵素遺伝子の発現及び精製	酵素工学会第 64 回講演会
93	塚越かおり	生命工学	D1	Screening of DNA aptamer which binds to α -synuclein * Poster Award for Young Scientist *	ISNAC2010
94	野中 芳彦	生命工学	D1	Screening and Development of a VEGF-binding aptamer	ISNAC2010
95	増田 美幸	生命工学	D1	Preparation and Structural Control of the Electropolymerized Ruthenium Complex-based Films as a Mediator for the Electrocatalytic Oxidation of NADH	第 60 回記念錯体化学 OSAKA 国際会議
96	山中 保明	生命工学	D1	SCNase 基質特異性へのアルギニン残基の影響	東京農工大学・電気通信大学第 7 回合同シンポジウム
97	横山 智史	生命工学	D1	乳癌の増殖と骨破壊における EP4 受容体を介したプロスタグランジン E ₂ の役割	第 83 回日本生化学会大会
98	辻 優希	生命工学	D1	Preparation of benzimidazolates-based ionic liquid as a proton conductive matrix	Pacificchem2010
99	河野 雄樹	生命工学	D2	Phosphonium-type ionic liquids showing LCST-type phase behavior after mixing with water	Pacificchem2010
100	小林 愛	生命工学	D2	脂肪前駆細胞の分化成熟におけるコラーゲン産生の解析	第 83 回日本生化学会大会
101	猪木 孝洋	応用化学	M1	水素・窒素混合雰囲気における高温熱処理が c 面 sapphire 基板に与える影響	応用物理学会結晶工学分科会 2010 年
102	篠塚 俊克	応用化学	M1	ハライド気相成長法を用いた sapphire (0001) 基板上 ZnO 二段階成長 * 発表奨励賞 *	応用物理学会結晶工学分科会年末講演会
103	矢吹 俊輔	応用化学	M1	環サイズの異なる環状アルコキシアミンの合成とスチレンの環拡大重合	第 59 回高分子学会年次大会
104	浜田 晶啓	応用化学	M1	ATRP とクリック反応によるポリスチレン-ポリエチレンオキシド星型共重合体の合成	第 59 回高分子討論会
105	丸山 慧	応用化学	M1	有機塩基を用いた α, β -不飽和イミン類の (E), (Z)-異性化反応	日本化学会第 4 回関東支部大会
106	吉田 拓郎	応用化学	M1	旋回攪拌重合法によるミリオーダー球状高分子ゲルの作製 * 優秀ポスター賞 *	化学工学会第 42 回秋季大会
107	草野 大地	応用化学	M1	光照射によって屈曲挙動を示す高分子ゲル	第 20 回インテリジェント材料・システムシンポジウム
108	馬場 翔	応用化学	M1	近赤外レーザー照射による非接触式感熱型蛍光記録	第 20 回インテリジェント材料・システムシンポジウム
109	澤田 弥生	応用化学	M1	ロジウム触媒を用いた [2+2+2] 付加環化反応による置換テトラヒドロナフタレンおよびトリフェニレンの合成	日本化学会第 4 回関東支部大会
110	崎山 調史	応用化学	M1	Enantioselective Synthesis of Axially Chiral 1-Arylisquinolines by Rhodium-Catalyzed [2+2+2] Cycloaddition	2010 環太平洋国際化学会議
111	識谷 哲朗	応用化学	M1	Synthesis of Axially Chiral 4-Aryl-2-quinolones By Catalytic Asymmetric Intramolecular Hydroarylation	2010 環太平洋国際化学会議
112	森 文哉	応用化学	M1	Asymmetric synthesis of axially chiral biaryl bisphosphine by rhodium-catalyzed intramolecular double [2+2+2] cycloaddition	2010 環太平洋国際化学会議
113	小林 政之	応用化学	M1	Asymmetric Construction of Chiral Multicyclic Skeletons by Rhodium-Catalyzed Cycloaddition Cascade	2010 環太平洋国際化学会議
114	岡崎 恵理	応用化学	M2	Rodium-Catalyzed Multi-Cascade Reactions of Diynes to Produce Substituted Dihydronaphthalenes	2010 環太平洋国際化学会議
115	野川 直裕	応用化学	M2	ロジウム触媒を用いた不斉連続 [2+2+2] 付加環化反応によるらせん構造を有するフルオレン誘導体の合成	第 97 回有機合成シンポジウム
116	橋本紗永子	応用化学	M2	噴霧晶析における結晶多形の制御	化学工学会第 76 年会
117	宮田 佳織	応用化学	M2	メカノケミカル法によるラセミ化合物の分解	化学工学会第 76 年会
118	秋山 恵	応用化学	M2	シクロデキストリン-液状ゼンポリマー包接化合物の合成とその性質	第 19 回ポリマー材料フォーラム

119	山田 和親	応用化学	M2	ヒンダードアミン含有高分子安定剤の合成	第19回ポリマー材料フォーラム
120	吉原 直希	応用化学	M2	立体的に対称な四官能架橋剤を用いた末端架橋型剛直性高分子ゲルの物性	第59回高分子討論会
121	勝間 彩子	応用化学	M2	アミノ酸含有ビニルモノマーを用いた環状高分子の合成	第59回高分子討論会
122	玉田 春仙	応用化学	M2	環状アルコキシアミンによるスチレンの環拡大重合 * 若手講演賞 *	第59回有機合成化学協会関東支部シンポジウム
123	土屋心之介	応用化学	D1	自己集合能を有する含ジアセチレンオリゴペプチドの合成と重合	第59回高分子討論会
124	山本佳世子	応用化学	D3	製造業とのかかわりでのみ“大学発”ベンチャーの役割と重要性	産学連携学会
125	國谷 幸佑	物理システム工学	M1	エッジ状態間遷移を利用したランダウ・スピン分光	物理学会第66回年次大会
126	井口 善仁	物理システム工学	M1	ソリッドイマージョンレンズを用いたマイクロレーザーグラフィ	日本物理学会第66回年次大会
127	宮岡 知足	物理システム工学	M1	CuInS ₂ ナノ微結晶の合成と発光特性	日本物理学会2010秋季大会
128	池田 愛	物理システム工学	M1	Ag添加塗布法による T ₁ Ln ₂ CuO ₄ 超伝導薄膜の低温合成	第58回応用物理学会学術関係連合講演会
129	武田宗一郎	物理システム工学	M1	Ba _{0.65} K _{0.35} Fe ₂ As ₂ /Sr _{0.35} K _{0.45} Fe ₂ As ₂ 分子線エピタキシー成長	応用物理学会第71回
130	浅井 翔太	物理システム工学	M1	Superconductivity in undoped bulk T ₁ (LaSm) ₂ CuO ₄ prepared Via a molten alkaline hydroxide route	ISS2010
131	山岸 健	物理システム工学	M2	A study of the doping dependence of Tc in Ba _{1-x} K _x Fe ₂ As ₂ and Sr _{1-x} K _x Fe ₂ As ₂ films grown by molecular beam epitaxy	ISS2010
132	西雪 和樹	物理システム工学	M2	Simple route to grow high-quality MgB ₂ thin films using decaborane as a boron source	ISS2010
133	斉藤 慶太	物理システム工学	M2	PIC-J 会合体微小共振器の短パルス励起発光特性	第21回光物性研究会
134	内田 拓	物理システム工学	M2	周期的磁性体を用いた冷却原子の磁気トラップとその応用2	日本物理学会2010秋季大会
135	北上 景一	物理システム工学	M2	Rb 原子の光誘起脱離 II	日本物理学会2010秋季大会
136	膳 裕記	物理システム工学	M2	周期磁化表面との相互作用による低速電子の磁気共鳴	日本物理学会2010秋季大会
137	永山 博一	物理システム工学	M2	陽極酸化法による InGaAs 混晶半導体のポラス構造の作製と評価	第58回応用物理学会学術関係連合講演会
138	宮谷 郁哉	機械システム工学	M1	Active Stereo Nose:Using Air Curtain to Enhance the Directivity	IEEE Sensors 2010 Conference
139	牧下 智美	機械システム工学	M1	ザリガニを模倣した水中ロボットによる化学探査・顕微鏡アームの改良 *機素潤滑設計部門卒業研究コンテスト最優秀賞*	日本機械学会2010年次大会
140	和田 佑太	機械システム工学	M1	Collecting a Database for Studying Gas Distribution Mapping and Gas Source Localization with Mobile Robot	ICAM2010
141	西江 剛	機械システム工学	M1	常時記録型ドライブレコーダの急ぎ運転検出機能の開発-車間距離と加速度の主成分分析による閾値の検討-	自動車技術会2010年秋季大会
142	青柳宗一郎	機械システム工学	M1	車車間通信を利用した前方車衝突警報システムの開発	ヒューマンインタフェースシンポジウム
143	菅原 史法	機械システム工学	M1	Forming Limit Prediction of Sheet Metals Subjected to Combined Loading Using Forming Limit Stress Curve	AMPT2010
144	乃万 暢賢	機械システム工学	M1	Springback Analysis of Draw-Bending of 980 MPa Cold Rolled Steel Sheet and Its Experimental Verification	AMPT2010
145	松實 良祐	機械システム工学	M1	右折時における歩行者衝突回避のための自動運転システムに関する研究 *優秀発表賞*	第53回自動制御連合講演会
146	斉藤聡太郎	機械システム工学	M1	シート接触圧センサを用いた鉄道車両の乗り心地評価に関する研究	日本機械学会年2010年次大会
147	下瀬 文允	機械システム工学	M1	無信号交差点通過時における自律走行車両の速度制御に関する研究	第28回日本ロボット学会学術講演会
148	伊東 悠一	機械システム工学	M1	E-Defense 数値シミュレータの性能評価 (アクチュエータの非線形特性の考慮)	Dynamics & Design Conference 2010
149	澁谷 直城	機械システム工学	M1	極低濃度電解液による微細軸形成条件の検討	精密工学会2011年度春季大会
150	寺田 篤	機械システム工学	M2	工具電極の運動制御による生成物の排出と電解加工特性の向上	2010年度精密工学会
151	中山 尚志	機械システム工学	M2	工具電極の超音波振動による電解加工特性の向上	2011年度精密工学会
152	吉澤 孝紀	機械システム工学	M2	レーザーダによる低速自動運転車両の経路追従制御に関する研究	第53回自動制御連合講演会
153	浅原 晋佑	機械システム工学	M2	振動制御装置のアクチュエータ変位を考慮した制御系設計	第53回自動制御連合講演会
154	越前 はるか	機械システム工学	M2	3自由度電動型加振装置を用いた他軸干渉とその制御に関する研究	Dynamics & Design Conference 2010
155	霜野 慧亮	機械システム工学	M2	Control of a Linear Motor Driven Table via Minimal Control Synthesis	The 10th International Conference on MOTION AND VIBRATION CONTROL
156	瓜本 新	機械システム工学	M2	生物発光を利用した嗅覚センシングシステムの基礎的研究 *優秀論文発表賞*	電気学会ケミカルセンサ研究会
157	竹田 敏広	機械システム工学	M2	ビンフィンの傾斜がタービン翼冷却に及ぼす影響に関する研究	第38回日本ガスタービン学会
158	秋山 裕喜	機械システム工学	M2	AMD を用いた鉄道車両の車体弾性振動多モード制御による乗り心地改善	日本機械学会第19回交通・物流部門大会
159	赤沼 憲仁	機械システム工学	M2	インレットディストーションがファン騒音に及ぼす影響	第51回航空原動機・宇宙推進講演会
160	高橋 久	機械システム工学	M2	Evaluation of Tribological Properties of Palm Oil on Improved Pendulum Type Friction Tester	ASIA TRIB2010
161	木村 大	機械システム工学	M2	粘弾性体モデルを用いたブレーキ材の摩擦振動のシミュレーション	トライボロジー会議2010秋
162	志岐 知洋	機械システム工学	M2	イチゴ輸送時の損傷を防ぐ振動制御のための積荷のモデル化の研究	第19回交通・物流部門大会
163	坂本 正哉	機械システム工学	M2	Study on Vibration Characteristics of the Seats for High Speed Railway Vehicle by Using the Analytical Model	MOVIC2010
164	西郷慎太郎	機械システム工学	M2	ドライバの運転状態を考慮した個別適成型車間距離維持支援システムの開発	第28回日本ロボット学会学術講演会
165	磯谷 十蔵	機械システム工学	M2	超小型電気自動車を用いた前方障害物自動回避の精度向上に関する研究	自動車技術会2010春季大会
166	林 飛龍	機械システム工学	D1	アクセルペダル反力制御によるドライバの加減速操作誘導の研究	自動車技術会2010年春季大会
167	丁 侃	機械システム工学	D1	シリンダライナ用鉄系合金溶射皮膜の被削性に関する研究	2011年度精密工学会
168	万 里明	機械システム工学	D2	Lane Change Behavior Modeling for Autonomous Vehicles Based on Surroundings Recognition	2010SAE Annual Congress (Autumn)
169	ANDAR Mohammad Omar	機械システム工学	D2	Measurement and analysis of the biaxial loading and unloading behavior of AZ31 Mg Alloy sheet	AMPT2010
170	宝地戸俊介	電気電子工学	M1	光周波数コムを用いた DWDM 伝送信号のヘテロダイン検波	電気情報通信学会2010年ソサイエティ大会
171	古市 匠	電気電子工学	M1	MIMO 相関チャンネルにおける Phase Rotation プリコーディング法に関する一検討	電子情報通信学会
172	神山 準一	電気電子工学	M1	融合移動グラフィックに基づく腹部 CT 像からの複数臓器同時抽出	電子情報通信学会 医用画像研究会
173	進藤 季世	電気電子工学	M1	大局的形狀を考慮可能な新しい Boosting アルゴリズムの提案と評価	電子情報通信学会 医用画像研究会
174	中込 啓太	電気電子工学	M1	複数形状グラフィックに基づく腹部 CT 像からの肺野セグメンテーションの高度化	電子情報通信学会 医用画像研究会
175	中田美沙希	電気電子工学	M1	腹部の複数臓器の統計的同時形状モデルの提案と評価	電子情報通信学会 医用画像研究会
176	長竹 陽平	電気電子工学	M1	Hysteresis Reduction in EO Characteristics of Photo-Aligned IPS-LCDs with Polymer-Surface-Stabilized Method	International Display Workshops '10
177	清水 敦之	電気電子工学	M1	光重合型液晶性高分子膜のゲート絶縁膜への応用とその電気的評価の研究	日本液晶学会討論会
178	松原 貴志	電気電子工学	M1	新規な構造を有する半透過 LCD の研究	日本液晶学会討論会
179	根本 勇樹	電気電子工学	M1	結晶 Si 基板を用いたシリコンナノワイヤー太陽電池の作製	第71回応用物理学会学術講演会
180	永嶋 沙織	電気電子工学	M1	結晶シリコン太陽電池作製におけるスクリーン印刷法によるエミッタの形成	第71回応用物理学会学術講演会
181	鈴木 秀紀	電気電子工学	M1	Passivation of Screen-Printed Boron Emitters in n-Type Multicrystalline Silicon Solar Cells Using Double Layers SiNx:H Films	25th European Photovoltaic Solar Energy Conf and Exhibition
182	鈴木 紹太	電気電子工学	M1	Novel Phosphorus Screen-printed Emitter for Crystalline Silicon Solar Cell Fabrication	25th European Photovoltaic Solar Energy Conf and Exhibition
183	小林 慶至	電気電子工学	M1	Growth and Characterization of p-Type Multicrystalline Silicon Ingot Using Feedstock Intentionally Contaminated with 30 ppm Titanium	25th European Photovoltaic Solar Energy Conf and Exhibition
184	浦野 洋平	電気電子工学	M1	Super Multi-View Windshield Display for Driving Assistance * Merck Grand Award *	IMID/DMC/ASIA DISPLAY2010
185	横内 理人	電気電子工学	M1	Speckle reduction in holography using a time-multiplexing technique	SPIE Photonics West OPTO
186	小笠原 悠介	電気電子工学	M1	真空バルブモータの位置決め精度改善 - 永久磁石を用いた軸受剛性補強とドライバ変更 -	第53回自動制御連合講演会
187	小笠原 孝仁	電気電子工学	M1	空圧式除振装置の床振動フィードフォワードに及ぼす位置フィードバックの影響	第53回自動制御連合講演会
188	中川 玲	電気電子工学	M1	進行波型超音波モータの2端子対等価回路の応用に関する一提案	第53回自動制御連合講演会

189	福田 遼	電気電子工学	M1	空圧式除振装置に対する流量外乱オブザーバの実装	第53回自動制御連合講演会
190	相崎 秀斗	電気電子工学	M2	最小次元オブザーバを用いた空圧式アクティブ除振装置の内圧推定の一手法	第53回自動制御連合講演会
191	秋山 昌也	電気電子工学	M2	3種類の電流ドライブを用いた絶対変位センサの比較	第53回自動制御連合講演会
192	小宮 英明	電気電子工学	M2	空圧アクチュエータへの機械系外乱オブザーバの実装	計測自動制御学会第11回制御部門大会
193	Mohebulah Wali	電気電子工学	M2	Realization and Application of the Base Plate Jerk Feedback in a Pneumatic Positioning Stage	第53回自動制御連合講演会
194	内山 悠	電気電子工学	M2	Fabrication and Evaluation of Silicon Nanowire Solar Cells	25th European Photovoltaic Solar Energy Conf and Exhibition
195	吉葉 修平	電気電子工学	M2	微結晶シリコン薄膜をエミッタ層に用いたヘテロ接合太陽電池の作製	第71回応用物理学会学術講演会
196	古市 和也	電気電子工学	M2	結晶シリコンにおけるシリコン窒化膜パッシベーションの水素プラズマ処理効果	第71回応用物理学会学術講演会
197	小川 圭祐	電気電子工学	M2	RF水素リモートプラズマによるテクスチャを用いた太陽電池の作製	第71回応用物理学会学術講演会
198	伴 直樹	電気電子工学	M2	スクリーン印刷による高効率結晶太陽電池用電極形成における高速焼成プロセス	第71回応用物理学会学術講演会
199	片山 裕矢	電気電子工学	M2	無機系垂直配向膜上における液晶配向特性の評価	2010年日本液晶学会討論会
200	佐藤 伸也	電気電子工学	M2	曝露雰囲気依存する液晶性有機 TFT の電気的特性	2010年日本液晶学会討論会
201	関根 嵩史	電気電子工学	M2	高性能LCDのためのインセル型光学補償フィルムの評価に関する研究	2010年日本液晶学会討論会
202	内田 悠司	電気電子工学	M2	膝臓の統計的形状モデルのための統計解析法に関する比較研究	電子情報通信学会 医用画像研究会
203	落合 啓明	電気電子工学	M2	条件付確率アトラスの提案と腹部CT像からの膝臓抽出への応用	電子情報通信学会 医用画像研究会
204	西村 透	電気電子工学	M2	立体サンニャック干渉計による白色光ナリング	日本天文学会 2011 春季年会
205	矢澤 孝尚	電気電子工学	M2	協調センシングにおける観測情報収集の効率化に関する一検討	無線通信システム研究会
206	西川 浩太	電気電子工学	M2	ナノシリコンの赤色 PL と青色燐光に対する外部電解効果	第58回応用物理学会学術連合講演会
207	Habiburahman Shirani	電気電子工学	D1	Using Voice Coil Motor as an Actuator to Control the Isolated Table's Fluctuation Caused by the Supplied Air Pressure	ISFA2010
208	鈴木 啓介	情報工学	M1	小出力力覚提示装置を用いた環境での把持物体はめ込み位置の認知支援	第15回日本バーチャリアリティ学会
209	仁科 圭介	情報工学	M1	省電力・高速化を目的とした SSD を用いたディスクキャッシュシステムのブロックデバイスドライバによる実装	第116回システムソフトウェアとオペレーティング・システム研究会
210	大石 哲士	情報工学	M1	下肢筋駆動型車椅子の操作方法の検討	第23回自律分散システムシンポジウム
211	杉山 雄紀	情報工学	M1	歩行ロボットの身体動作設計に見るオノマトペ・情動表現の共通理解	第23回自律分散システムシンポジウム
212	宮武 宏幸	情報工学	M1	運動単位が視覚運動変換学習に及ぼす影響	第23回自律分散システムシンポジウム
213	山口 寛	情報工学	M1	ダーツ投擲における筋活動と運動技能の熟練度評価	第23回自律分散システムシンポジウム
214	弘中 悠介	情報工学	M1	リアルな皮膚表現のための血管モデルの生成に関する研究	情報処理学会第141回グラフィクスとCAD研究発表会
215	Luangvilay Pasitthideth	情報工学	M1	Text Search from Handwritten Digital Ink Using Directional Features	CJKPR2010
216	王 大慶	情報工学	M1	Design of a Server for Online Handwriting Recognition	CJKPR2010
217	寶理翔太郎	情報工学	M2	Supplementation of Charadter Recognition Candidates using Tri-gram Context for On-line Handwritten Japanese Text Recognition	CJKPR2010
218	川崎 我一	情報工学	M2	トライ辞書を用いた語彙情報駆動型のオンライン日本語住所認識方式	パターン認識・メディア理解研究会
219	Sherini Somayeh	情報工学	M2	古代木簡解読支援システムにおける字体検索の高性能化	人文科学とコンピュータシンポジウム
220	高倉 純	情報工学	M2	Techniques to Enhance Images for Mokkan Interpretation *ITESOFT best poster paper award*	12th Int.Confe.on Frontiers in Handwriting Recognition
221	鎌田 勝寛	情報工学	M2	遠隔作業間の手の擬似的な拘束による共同物体操作の支援	日本バーチャリアリティ学会
222	盛合 智紀	情報工学	M2	Plan9 と ECMAScript を用いた分散組み込みシステムのプログラミングシステム	第116回システムソフトウェアとオペレーティング・システム研究会
223	辻 真志	電子情報工学	D1	アレー自由度を超える到来波の波数推定法の一検討	電子情報通信学会 アンテナ伝搬研究会
224	甲斐 孝志	電子情報工学	D1	絶対変位センサを用いた除振装置の床振動フィードフォワードに関する一研究	第53回自動制御連合講演会
225	高 金鋒	電子情報工学	D1	Effects of Feature Extraction and Dimensionality Reduction for Off-line Handwritten Japanese Character Recognition	CJKPR2010
226	陳 濱	電子情報工学	D1	Effects of a Large Amount of Artificial Patterns for Off-line Handwritten Japanese Character Recognition	CJKPR2010
227	程 誠	電子情報工学	D2	A Discriminative Model for On-line Handwritten Japanese Text Retrieval	CJKPR2010
228	小原 祐樹	電子情報工学	D2	PIC-J 会合体微小共振器の高濃度極限におけるポラリトン状態消失の可能性	日本物理学会 2010 年秋季大会

⑥生物システム応用科学府 (BASE) (前期) : 20件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	片野 有規	生物システム応用科学	M1	気-液界面を晶析場とした有機微結晶粒子群の安定製造	分離技術会年会 2010
2	金子 奈央	生物システム応用科学	M1	非溶媒添加晶析での操作条件が有機結晶形態に与える影響 *学生賞*	分離技術会年会 2010
3	関 優一郎	生物システム応用科学	M1	反応晶析における結晶粒子群の成長現象とその成長速度	分離技術会年会 2010
4	羽田 舞	生物システム応用科学	M1	変調操作を組み入れた温度操作による結晶粒子群品質制御 *学生賞*	分離技術会年会 2010
5	株本憲一郎	生物システム応用科学	M1	神経-筋相互作用により運動発達する生体ロボティクス -細胞から再構築した筋によるマイクロハンドの駆動制御-	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2010
6	清水 恒志	生物システム応用科学	M1	細胞ビルドアップ型ウエットナノロボティクスの構築と機能創発 -昆虫細胞シートを用いた室温環境駆動型マイクロポンプの作製-	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2010
7	大坪 孝彦	生物システム応用科学	M1	無機塩の有機溶媒へのナノ分散法 *ベストプレゼンテーション賞*	粉体工学会
8	中村 謙太	生物システム応用科学	M1	熱駆動熱音響冷凍機的设计と製作	日本機械学会
9	高橋 巧一	生物システム応用科学	M1	Facial Expression Recognition Using a Simplified Head Model and RBF Networks *Student Paper Award*	NOLTA2010
10	市倉 祥太	生物システム応用科学	M1	ペリレンジイミドを含むブロック共重合体の合成と物性評価	第59回高分子学会年次大会
11	宮石 裕子	生物システム応用科学	M2	トリフェニルアミン部位を有する環状オリゴマーの合成と光電変換素子への応用	平成22年度繊維学会年次大会
12	安孫子恒樹	生物システム応用科学	M2	AIBO における顔検出	FAN シンポジウム 2010
13	中村 士	生物システム応用科学	M2	A Method of Obtaining Sense of Touch by Using EEG	IEEE Ro-Man 2010
14	鈴木 清史	生物システム応用科学	M2	遺伝子操作によるバイオマイクロマシンの機能発現と制御 -飛翔昆虫キイロショウジョウバエの筋細胞バイオアクチュエータの運動性能評価-	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2010
15	松本 拓巳	生物システム応用科学	M2	細胞内ナノロボティクスの機能創発 -磁気応答ナノデバイスの構築及び細胞内への導入-	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2010
16	金尾 美樹	生物システム応用科学	D1	パーフルオロアダマンタンを含むフッ素系共重合体の合成と評価	第59回高分子学会年次大会

17	種田 久美子	生物システム応用科学	D1	Suppression of growth and invasion of human breast cancer cells by specific inhibition of NF- κ B	14th International Congress of Immunology
18	鈴木 聡	生物システム応用科学	D1	Knowledge Simplification of Hierarchical Neural Network for Multidimensional Pattern Recognition Problems	SICE Annual Conference 2010
19	富田 洋平	生物システム応用科学	D2	EEG frequency analysis for dozing detection system	IEEE world congress on computational intelligence
20	Erween bin Abd Rahim	生物システム応用科学	D3	Effect of MQL Liquids on Surface Integrity when High Speed Drilling Titanium Alloy	APCMP2010

(後期) : 31件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	坂倉 嵩	生物システム応用科学	M1	トリフェニルアミンを有する半導体ポリマーからなるブロックコポリマーの合成と物性評価	第59回高分子討論会
2	今井 一貴	生物システム応用科学	M1	イネ2次細胞壁高次構造の形成に関わる GPI-anchored protein,CWA1/BC1 の機能解析	日本農芸化学学会2011年度大会
3	西村 圭	生物システム応用科学	M1	リグニン低分子化物からの発酵法による新規なポリマー原料の生産	日本農芸化学学会2011年度大会
4	藤井 勇樹	生物システム応用科学	M1	変異体を用いた Bt 菌 Cry 毒素のルーブ部位の受容体結合親和性における役割の解析	第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会合同大会
5	佐竹健太郎	生物システム応用科学	M1	駆動型ロータリ切削における MQL が切削点温度に与える影響 * 日本機械学会若手優秀講演フェロー賞 *	日本機化学会第8回生産加工・工作機械部門講演会
6	高田 義正	生物システム応用科学	M1	二重らせん経路での摩擦攪拌形パニシングによる高硬度・圧縮残留応力を両立する表面の創成 * ベストプレゼンテーション賞 *	2010年度精密工学会秋季大会
7	板垣 浩文	生物システム応用科学	M1	Friction Characteristics of Linear Roller Motion Guide Driven by a Linear Motor	CIRP HPC 2010
8	菊間 智子	生物システム応用科学	M1	非対称ドリルによる穴加工精度向上に関する研究	日本機化学会第8回生産加工・工作機械部門講演会
9	田島 和也	生物システム応用科学	M1	3Dプローブによる回転テーブルの振れ精度測定システムの開発 * 優秀講演論文表彰 *	日本機化学会第8回生産加工・工作機械部門講演会
10	登根慎太郎	生物システム応用科学	M1	工作物座標系を基準とした測定方法による5軸制御マシニングセンタの幾何偏差の同定	日本機化学会第8回生産加工・工作機械部門講演会
11	石原 知明	生物システム応用科学	M1	人型ロボットを用いた作業現場の見える化	電気学会産業計測制御研究会
12	高岡 慧	生物システム応用科学	M1	脳波を用いた自動車の乗り心地評価の検討	電気学会産業計測制御研究会
13	根岸 佑奈	生物システム応用科学	M1	脳波の個人差を考慮した興味関心度の推定	電気学会産業計測制御研究会
14	佐藤 雅一	生物システム応用科学	M2	吸着剤-伝熱面間の接触点増加による吸脱着性能向上の実験的解析	2010年度日本冷凍空調学会年次大会
15	戸上 拓哉	生物システム応用科学	M2	消費者嗜好を考慮した次世代自動車の普及予測および普及促進策の評価	エネルギー資源学会
16	森 伸也	生物システム応用科学	M2	溶液輸送型吸気冷凍機による排熱輸送の二重効用化	2010年度日本冷凍空調学会年次大会
17	北村 純	生物システム応用科学	M2	低アスペクト比熱音響エンジンの発振温度比	第13回スターリングサイクルシンポジウム
18	辻 康平	生物システム応用科学	M2	分岐管を有したルーブ管熱駆動熱音響冷凍機的设计	第13回スターリングサイクルシンポジウム
19	船津加央里	生物システム応用科学	M2	ポリフェニレンビニレンとポリメチルメタクリレートからなるクラフト共重合体の合成と光学特性の評価	第59回高分子討論会
20	小川 崇之	生物システム応用科学	M2	CFRPの高速エンドミル加工における切削温度と工具磨耗	2010年度精密工学会秋季大会
21	黒田 耕介	生物システム応用科学	M2	パッチ分割切削法による多重周期的凹凸表面模様形成	2010年度精密工学会秋季大会
22	齋藤日佐郎	生物システム応用科学	M2	アセトアミノフェン結晶の多形転移現象における添加物効果	化学工学会 第76年会
23	横田 清孝	生物システム応用科学	M2	蒸発晶析での変調操作を利用した結晶形態制御	化学工学会 第76年会
24	藤井 武郎	生物システム応用科学	D1	P.trichocarpa 由来細胞周期制御遺伝子 cyclin B プロモーター領域を利用した形成層細胞分裂の挙動解析	第61回日本木材学会大会
25	関谷 卓	生物システム応用科学	D1	医薬品パッケージの類似性の検出と可視化	情報処理学会グラフィクスとCAD研究会第141回研究発表会
26	中西 正樹	生物システム応用科学	D1	Separation of Mixed Audio Signals with Time Frequency Masking using Bivariate Empirical Mode Decomposition	NCSP'11
27	藤 大樹	生物システム応用科学	D1	Model-based Alignment System using Real-coded GA and Particle Filter	NCSP'11
28	富成 司	生物システム応用科学	D1	選択的エストロゲン受容体作働薬の全身投与による局所炎症性骨吸収への作用	第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会合同大会
29	富名腰 敬	生物システム応用科学	D1	マイクロ流体デバイスによる細胞サイズ分画プロセッシング * 優秀ポスター賞 *	東京農工大学・電気通信大学第7回合同シンポジウム
30	田中 敬三	生物システム応用科学	D3	溶融金属積層による3次元造形	溶接学会
31	山本 博雅	生物システム応用科学	D3	複合加工機を用いた難削材の高速高能率ロータリ切削における温度特性と工具損傷	2010年度精密工学会秋季大会

⑥技術経営研究科 (MOT) (前期) : 4件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	井内 諒	技術リスクマネジメント	M1	通電加熱触媒を使用する VOCs 濃縮燃焼システムに用いる廃木材由来吸着剤の開発	化学工学会第42回秋季大会
2	片山 文恵	技術リスクマネジメント	M1	PMMA/PVB ナノアロイの光学物性	第59回高分子学会年次大会
3	守屋 英治	技術リスクマネジメント	M2	ポリスチレン発泡体の配向領域と力学特性	第59回高分子学会年次大会
4	宮崎 巧真	技術リスクマネジメント	M2	ATRPを用いた嵩高いラクトン構造を有する(メタ)アクリル酸エステル星型ブロック共重合体の合成	平成22年度繊維学会年次大会

(後期) : 4件

	氏名	学科・専攻名	学年	発表題目	学会名
1	国井 嘉仁	技術リスクマネジメント	M1	Autonomous compensator of quadrant glitches in circular motion of machining centers	4th CIRP International Conference on High Performance Cutting
2	林 寛之	技術リスクマネジメント	M1	トランスジェニック蚕による新しい絹の生産と再生医療材料への応用	第59回高分子学会年次大会
3	樋口 雅人	技術リスクマネジメント	M1	Seat Vibrotactile Warning Interface for Forward Vehicle Collision Avoidance	SICE Annual Conference 2010
4	中山 政行	技術リスクマネジメント	M2	位置情報を活用したソーシャルメディアによる地域活性化事業 * りそな銀行賞 *	第7回キャンパスベンチャーグランプリ東京

2. コンテスト・コンクール等出場、入賞（18件）

	氏名	学科・専攻名	学年	コンクール・コンテスト名	入賞有無
1	宮原志穂璃	生物生産	2	平成22年度関東学生学生会長杯	
2	曲木 若葉	生物生産	4	第48回関東学生馬術女子競技大会	
3	郷 由梨	応用生物科	2	平成22年度関東学生学生会長杯	
4	鈴木 萌子	地域生態システム	2	平成22年度関東学生学生会長杯	
5	新川 洋平	獣 医	2	第31回キャロットステークス	
6	胡田 悠作	獣 医	4	第53回全日本学生賞典総合馬術競技大会	
7	河村 哲伸	獣 医	3	第53回全日本学生賞典総合馬術競技大会	
8	鈴木 駿	獣 医	3	第61回関東学生賞典総合馬術競技大会	
9	野澤 香織	獣 医	4	第53回全日本学生賞典総合馬術競技大会	
10	建部まどか	獣 医	4	第53回全日本学生賞典総合馬術競技大会	
11	水上 寛健	獣 医	4	第60回全日本学生賞典障害飛越競技大会	10位入賞
12	酒井 雄大 他7名	生命工	4	iGEM2010	Gold Medal
13	庄司 観	機械システム工	4	Demonstration of Power Generation by Trehalose Toward Insect Biofuel Cell -Insects Save the Earth-	Undergraduate Student Award
14	竹村 龍一	機械システム工	4	How does the living system achieve emergent functionality: Understanding of Propelling Mechanism of Jellyfish by Biomimetics Construction of Cellular Build-up by Cardiomyocyte Gel	Junior Special Referee Award
15	高見 俊介 他1名	化学システム工	4	第9回プロセスデザイン学生コンテスト「酢酸製造プロセスの設計」	審査員特別賞（プレゼンテーション賞）、ピーエスイージャパン賞、三菱化学エンジニアリング賞
16	片桐 正人 他1名	機械システム工学	M1	第14回国際工作機械技術者会議ポスターセッション	
17	寺田 篤	機械システム工学	M2	工具電極の運動制御による生成物の排出と電解加工特性の向上	準優勝、ニューテクノロジー賞
18	不破 洋平	生物システム応用科学	M2	第14回国際工作機械技術者会議ポスターセッション	優秀ポスター賞

3. 優秀卒業論文（7件）

	氏名	学科	学年	卒論題目
1	樋口 洋一 他2名	生物生産	4	樋口 洋一「水練り交雑種の実用性評価とその水溶性多糖タンパク質の電気泳動法による解析」 笹田 昌稔「丹波黒ダイズの過重連作地で生じる丹波黒ダイズ根粒への非共生土壌細菌による根粒占有機構の解明～Ds-Red 標識根粒菌と GFP 標識 Agrobacterium 属細菌を用いた観察～」 金澤 淳基「光の波長はミョウガの形、色および香りに影響する」
2	長谷川佑樹	地域生態システム	4	模擬的傾斜地の刈払機使用時における立位姿勢保持戦略について～筋電位および重心動揺からの検討
3	栢田 健吾	応用分子化	4	ロジウム触媒を用いたヘテロ原子架橋5-アルキナルのアシルホスホネートによる不斉環化反応
4	岡田 悠哉	有機材料化	4	有機色素-有機金属錯体間の熱励起による三重項エネルギー移動に関する研究
5	森 寛子	化学システム工	4	Proposal of Optimized Land use Sakura River Watershed Based on the Analysis of Water Residence Time Distribution
6	本堂 貴敏	機械システム工	4	モーターばね直列連成系を利用したロボットによる瞬発力利用動作実現法の研究
7	小城緋嘉里	物理システム工	4	フォトクロミック化合物PNI及びPNOの閉環反応における過渡吸収測定

4. 課外活動

- 学園祭 2件 農学部/工学部（第52回学園祭実行委員会）
- サークル活動 19件 ビオトップ研究会/IAESTE 同好会/ハンダグライダー部/SF 研究部/柔道部/モダンジャズ研究会/漫画研究会/
総合格闘技研究会/耕地の会/ソフトテニス部/天文部/サッカー部/茶道部/東京農工大学管弦楽団/旅と鉄道研究会/
ESS/フットサルサークル/児童文化研究会/自動車部
- サークルリーダーズトレーニング 1件
サークルリーダーズトレーニング研修会、学生OBによる講演

5. キャリアアドバイザー支援（2名）

学生の皆さんが、進路や就職について個別に指導・助言を受けられるように、豊富な経験と知識を有する相談員（キャリアアドバイザー）2名を同窓会から支援しております
櫻井 邦雄（農化 S37）/ 深水 智明（織工 S38）

同窓会役員等
体制

会 長 (平成23・24年度) 藤森 明彦 (工化S42)

副会長 (平成23・24年度)
 藤巻 宏 (農 S36) 草野 洋一 (養蚕S47)
 佐藤 令一 (植防S54) 大島誠之助 (農化S43)
 土居 修一 (林産S45) 星野 義延 (環保S53)
 松井 英輔 (林 S38) 本間 秀和 (地生H12)
 田谷 一善 (獣医S46) 羽田 有輝 (製糸S43)
 千田 武 (織高S46) 木村 雅俊 (化工S48)
 遠藤 幸一 (工化S46) 尾崎 幸信 (機械S52)
 宇野 亨 (電気S55) 伊東 浩 (応物S52)
 大島 浩太 (電情H13) 加藤 美治 (MOT H21)
 齋藤 隆 (生シ院H11)

事業部長 渡辺 元 (獣医S54)
 部長 淵野雄二郎 (農 S43) 50年史担当
 部長 鈴木 創三 (農 S47) 同窓会50周年記念事業実施補佐
 副部長 西澤 宇一 (機シスH12) 企画担当
 副部長 渡辺 直明 (林 S51) 分収林担当
 募金部長 亀山 秀雄 (化工S48)
 情報部長 夏 恒 (機シス工博H7)
 副部長 岡山 隆之 (林産S49)
 広報部長 佐藤 敬一 (林産S56)
 副部長 滝山 博志 (化工S62) HP担当
 副部長 野村 義宏 (農化S59) HP担当
 副部長 横山 正 (農 S53) 会報担当
 副部長 馬場真知子 (林学院S51) 会報担当

常務理事 (平成22・23年度)
 理事長 高橋 幸資 (農化S45)
 副理事長 渡邊 敏行 (材料S61)
 総務部長 堀 三計 (機械S52)
 副部長 大里 耕司 (農工S52) 総会担当
 副部長 大川泰一郎 (農 S62) 支部担当
 副部長 伊藤 幸弘 (機シスH14) 会務担当
 経理部長 多羅尾光徳 (環保H3)
 副部長 斎藤美佳子 (工化H1)

監 事 深水 智明 (織工S38)
 坂野 好幸 (農化S40)
 生原喜久雄 (林 S41)

事務局長 山田 昭一

同窓会支部長及び連絡員
(平成23年9月1日現在)

都道府県	支部長	連絡員
北海道	西村 弘行 (農化S42)	宇野沢正美 (農工S46)
青 森	野村 昌志 (農工S39)	大橋 統州 (農 S54)
秋 田	野村 俊悦 (農 S44)	吉田 育男 (植防H4)
岩 手	黒田 栄喜 (農 S52)	藤原 哲雄 (農 S60)
山 形	河野 誼 (獣医S45)	川崎 聡明 (生産H9)
宮 城	真木 伸治 (養蚕S48)	佐藤 大輔 (林 H4)
福 島	柳沼 泰衛 (蚕 S31)	阿部 正久 (林 H5)
茨 城	松丸 勝二 (農 S37)	佐藤 明彦 (農 S59)
栃 木	村松梅太郎 (獣医S39)	南木 好樹 (農工S58)
群 馬	小野宇三郎 (織別S33)	唐澤 道央 (生産H7)
埼 玉	善林 六朗 (農 S40)	金子 知人 (植防S60)
千 葉	中村 圭一 (林 S39)	豊田 祐輔 (蚕糸H3)
東 京	馬場 信行 (林 S35)	山本 賢 (農工S43)
神奈川	則武 宏一 (農工S41)	青木 稔 (獣医S54)
新 潟	中村 幸夫 (農 S32)	村山 康則 (農 H3)
富 山	青木 誠 (農 S37)	加門 克己 (環・資H6)
石 川	北川 康一 (農工S46)	西山 宏 (環・資H6)
福 井	島田 昭男 (林 S38)	新海 隆介 (環・資H12)
山 梨	後藤 文次 (製糸S30)	依田 健人 (製糸S57)
長 野	小池 洋男 (農 S42)	所 弘志 (農工S58)
岐 阜	武野 明義 (織高S60)	河村 尚徳 (養蚕S42)
静 岡	水口 衛 (獣医S29)	田中久美乃 (地生H16)
愛 知	上井 和彦 (農 S33)	水野銈一郎 (農 S42)
三 重	吉田 譲 (獣医S45)	古野 優 (獣医S60)

都道府県	支部長	連絡員
大 阪	暮石 裕 (林 S35)	長井 龍 (高工S61)
京 都	植村左千夫 (林 S20)	西村 寿 (農工S50)
滋 賀	勝田 謙次 (織化S34)	南井 隆 (林 H1)
奈 良	太田 道明 (農工S42)	望月 昇 (化工S57)
和歌山	山本 湧蔵 (林 S23)	中村 純子 (環・資H6)
兵 庫	橋田 勝明 (獣医S46)	安德 剛志 (林 S59)
岡 山	内藤 照章 (獣医S34)	佐々木真也 (獣医H9)
広 島	藤本 修身 (農化S44)	三宅 信行 (環保S55)
山 口	赤木 道博 (獣医S49)	岡本 賢一 (植防H4)
鳥 取	西尾 邑次 (農S17・9)	小林 壽 (製糸S24)
鳥 根	中尾 清治 (農工S34)	松浦 史瑞 (林産H1)
香 川	岡崎 進 (獣医S38)	河野 幸彦 (林 S63)
徳 島	岡田 幸助 (林 S28)	小杉純一郎 (林 S63)
高 知	松田 誠祐 (農工S39)	寺峰 孜 (養蚕S45)
愛 媛	門屋 一臣 (農 S33)	白石 郁朗 (農 S46)
福 岡	西田 晴二 (獣医S41)	白石 哲広 (林産S50)
佐 賀	貞松 光男 (農 S34)	御厨 秀樹 (植防S56)
長 崎	本多 正二 (製糸S32)	片岡 正登 (製糸S48)
熊 本	小邦 徹 (林 S41)	上野 周子 (植防S61)
大 分	大野 司朗 (農工S45)	古長 茂亜 (林産S63)
宮 崎	小崎 宏 (農 S45)	井上新三郎 (農工S54)
鹿児島		遠矢 栄久 (林産S50)
沖 縄	宮城 稔 (農化S38)	河口 哲也 (応生H6)
横浜会	児玉 満男 (製糸S34)	加藤裕二郎 (製糸S44)

部会・支部 だより

農学・生物生産学部会



日 時 平成22年11月27日
 開催場所 本学農学部大学院連合農学研究科棟
 派遣理事名 淵野雄二郎事業部長
 参加人数 約70名
 議事内容 部会事業報告及び会計報告、事業計画、50周年記念事業募金の寄附の要請・承認について
 講演・討論等 *「ワイン産地の農業思想論-産地固有の味わいの表現」-平川敦雄（生産H11）
 *「新たなカイコ産業の創設をめざして」新保博（養蚕S48）

兵庫県支部

日 時 平成22年11月13日
 開催場所 兵庫県民会館
 派遣理事名 大川泰一郎総務副部長
 参加人数 15名
 議事内容 支部活動報告、第47回通常総会の報告、50周年記念事業募金の寄附承認について、弔事のお知らせ、会計報告、役員改選
 講演・討論等 親睦・懇親会

大分県支部



日 時 平成22年9月25日
 開催場所 大分第一ホテル
 派遣理事名 渡辺元事業部長
 参加人数 16名
 議事内容 H21年度事業及び会計報告、H22年度事業計画、第47回通常総会の報告、役員改選
 講演・討論等 渡辺事業部長より母校の近況と「ミニホースの話題」について

埼玉県支部



日 時 平成22年9月25日
 開催場所 パイオランドホテル「フロンティア」
 派遣理事名 渡邊敏行副理事長
 参加人数 25名
 議事内容 H21年度事業及び決算報告、H22年度事業計画及び予算案、その他
 講演・討論等 渡邊副理事長より母校の近況報告

宮崎県支部

日 時 平成22年11月27日
 開催場所 和音
 参加人数 20名
 議事内容 H21年度事業実績及び決算報告、H22年度事業計画及び予算案の承認
 講演・討論等 新会員を迎えての近況報告

青森県支部



日 時 平成22年10月30日
 開催場所 ラ・プラス青い森
 参加人数 13名
 議事内容 役員改選、50周年記念事業に係る募金について、その他
 講演・討論等 会員の近況報告、懇親会

秋田県支部



日 時 平成22年11月20日
 開催場所 協働大町ビル
 派遣理事名 淵野雄二郎事業部長
 参加人数 22名
 議事内容 H21年度決算報告、H22年度予算案
 講演・討論等 淵野事業部長より母校の近況報告、会員の近況報告

北海道支部



日 時 平成22年12月4日
 開催場所 KKR札幌ホテル
 派遣理事名 馬場眞知子広報副部長
 参加人数 15名
 議事内容 事業報告及び会計監査報告
 講演・討論等 馬場広報副部長より母校の
 近況報告と「マングローブの
 生態やそれを取り巻く社会
 情勢」についてミニ講演、懇
 親会・近況報告

愛媛県支部



日 時 平成23年2月5日
 開催場所 えひめ共済会館
 参加人数 16名
 議事内容 支部運営報告・会計報告・監
 査報告、第47回通常総会の
 報告、役員改選、その他
 講演・討論等 「賞典禄」を囲み懇親会・近
 況報告

奈良県支部



日 時 平成23年3月26日
 開催場所 和食さと
 参加人数 9名
 議事内容 第47回通常総会の報告、母
 校の様子について
 講演・討論等 会員の近況報告

長崎県支部



日 時 平成23年2月26日
 開催場所 セントヒル長崎
 参加人数 17名
 議事内容 50周年記念事業募金への協
 力について、その他
 講演・討論等 懇親会

群馬県支部



日 時 平成23年2月2日
 開催場所 前橋テルサ
 派遣理事名 高橋幸資理事長
 参加人数 43名
 議事内容 事業報告及び会計報告、事
 業計画、役員改選、大河原
 前支部長への感謝状の贈呈
 講演・討論等 高橋理事長より50周年記念
 事業の経過報告、会員の近
 況報告

熊本県支部



日 時 平成23年6月11日
 開催場所 熊本交通センターホテル
 派遣理事名 蛭木理部会推薦理事
 参加人数 21名
 議事内容 H22年度会計報告、支部会員の
 動静報告、役員改選、その他
 講演・討論等 蛭木部会推薦理事より東日本大
 震災救援募金について、母校の
 近況報告、会員の近況報告

広島県支部



日 時 平成23年3月13日
 開催場所 鯉城会館
 派遣理事名 高橋幸資理事長
 参加人数 20名
 議事内容 会計報告、役員承認
 講演・討論等 高橋理事長より母校の現況
 報告、会員の近況報告

兵庫県支部



日 時 平成23年7月9日
 開催場所 パレス神戸
 派遣理事名 大川泰一郎総務副部長
 参加人数 18名
 議事内容 弔事のお知らせ、会計報告、東日本大震災救援募金への寄附について
 講演・討論等 懇親会

岡山県支部



日 時 平成23年7月23日
 開催場所 ピュアリティまきび
 派遣理事名 渡邊敏行副理事長
 参加人数 10名
 議事内容 総会、本部総会の報告
 講演・討論等 渡邊副理事長より同窓会・大学の近況報告、会員の近況報告、懇親会

山口県支部



日 時 平成23年7月24日
 開催場所 萩市川上「長州さくら牧場」
 派遣理事名 堀三計総務部長
 参加人数 9名
 議事内容 長州さくら牧場見学、本部総会の報告、H22年度事業・決算報告、H23年度事業計画・予算、役員体制、H24年度支部総会の持ち方について
 講演・討論等 堀総務部長より大学の近況、研究に関するミニ講演

高知県支部



日 時 平成23年7月23日
 開催場所 高知市江ノロコミュニティセンター
 参加人数 7名
 議事内容 事業及び会計・監査報告、自己紹介・近況報告、その他
 講演・討論等 「牧野博士と土佐の植物」高知県立牧野植物園研究員 田中伸幸氏より講演

横浜会



日 時 平成23年6月17日
 開催場所 華正楼本店
 参加人数 9名
 議事内容 第48回通常総会の報告、会計報告及び会計監査報告、東日本大震災救援募金について、
 講演・討論等 ラオス蚕糸業育成支援の現況について、蚕糸・絹業提携システムの進捗状況について、懇親会

埼玉県支部



日 時 平成23年7月30日
 開催場所 パイオランドホテル「フロンティア」
 派遣理事名 鈴木創三事業部長
 参加人数 32名
 議事内容 H22年度事業・決算報告、H23年度事業計画・予算案、役員改選、50周年記念事業募金及び東日本大震災救援募金の寄附の報告
 講演・討論等 鈴木事業部長より寄附のお礼、同窓会・大学の近況報告、会員の近況報告、懇親会

滋賀県支部



日 時 平成22年1月16日
 開催場所 ホテルポストプラザ草津
 派遣理事名 大谷幸利前総務副部長
 参加人数 22名
 議事内容 会計報告、役員改選
 講演・討論等 大谷前総務副部長より研究内容の講義と母校の近況、懇親会

クラス会 だより

かいこ会



日 時 平成22年 5月20日
 開催場所 東京銀座サッポロビール
 銀座7丁目店
 クラス S19.9 養蚕・栽桑・製糸
 学科卒
 参加人数 4名
 実施事項 近況報告・親睦
 幹事・報告者 井上善治郎（栽桑S19）

武蔵野38人会



日 時 平成22年 9月29日～10月1日
 開催場所 川原湯温泉「山木館」
 クラス S26 製糸学科卒
 参加人数 14名
 実施事項 親睦・ハツ場ダム見学・重要
 文化財養蚕農家群見学
 幹事・報告者 塩原 武（製糸S26）

S33年養蚕学科卒クラス会



日 時 平成22年 10月19日
 ～20日
 開催場所 熊谷市ホテル
 「ヘリテージ」
 クラス S33 養蚕学科卒
 参加人数 10名
 実施事項 親睦
 幹事・報告者 高野 稔（養蚕S33）

S31農学科・農芸化学科合同



日 時 平成22年 10月28日
 開催場所 「響」有楽町イトシア店
 クラス S31 農学科・農芸化学科卒
 参加人数 10名
 実施事項 情報・近況交換・親睦
 幹事・報告者 渋谷 成美（農S31）

水研会



日 時 平成22年 11月9日
 開催場所 同窓会館「武蔵野荘」
 クラス 水谷研関係者の集い
 参加人数 24名
 実施事項 親睦
 幹事・報告者 小島 浩（織化S35）
 杵村 義昭（織化S34）

愛知県支部 樺ゴルフ会



日 時 平成22年 11月11日
 ～12日
 開催場所 稲武の民宿・
 OGMカントリークラブ
 クラス 愛知県支部S41卒他
 参加人数 6名
 実施事項 親睦・健康のための
 ゴルフ会
 幹事・報告者 北原 敬悟（農工S31）
 瀧川 桂三（林S41）

三々五々会



日 時 平成22年11月15日～16日
 開催場所 湯西川温泉「平家本陣」
 クラス S35繊維学部4科卒
 参加人数 22名
 実施事項 親睦・近況報告
 幹事・報告者 矢野 義治（養蚕S35）

織工38会



日 時 平成22年12月1日～2日
 開催場所 修善寺温泉「ホテル宙」
 クラス S38繊維工学科卒
 参加人数 14名
 実施事項 情報交換・大学近況・親睦
 幹事・報告者 深水 智明（織工S38）

F45ペロリ会



日 時 平成23年2月4日
 開催場所 海事センタービル内「シーガル」
 クラス 林学科S41入・S45卒
 参加人数 26名
 実施事項 親睦・近況報告・大学近況報告・
 同窓会50周年記念事業案内
 幹事・報告者 一島 正三（林S45）

S18.9卒農学科クラス会



日 時 平成23年4月17日
 開催場所 駒込「思い川」
 クラス S18.9農学科卒
 参加人数 5名
 実施事項 親睦・卒業68年目平均年齢88歳、
 今回を最終級会と決定、解散
 幹事・報告者 今井 達郎（農S18.9）

ポプラ会



日 時 平成23年6月16日～17日
 開催場所 潮来「あやめ旅館」
 クラス S30獣医学科卒
 参加人数 9名・(夫人7名)
 実施事項 情報交換・懇親
 幹事・報告者 小林 茂雄（獣医S31）

S23. 織農会



日 時 平成23年6月1日～2日
 開催場所 箱根KKR宮の下
 クラス S23繊維農業卒
 参加人数 6名
 実施事項 親睦・近況報告・絹の副産物（レクチャー）
 幹事・報告者 増田 弘（織農S23） 平尾 銀蔵（織農S23）

掲 示 板

「このたびの東日本大震災におきましてお亡くなりになられた同窓生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。また、被災者の同窓生と、今なお不安な避難生活を余儀なくされている皆様と、そのご家族に対して心からお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い被災地の復興と平安をお祈りいたします。」

「先進植物工場研究施設が完成し、完成式典を挙行」

本学、府中キャンパス内に先進植物工場研究施設が完成し、6月17日（金）、府中キャンパス新2号館において、先進植物工場研究施設の完成式典が挙行されました。

本施設は、平成21年度経済産業省補助事業「先進的植物工場施設整備費補助金」に採択され、消費需要がありながら供給不足がちなブルーベリーについて、収益性の期待できる植物工場モデルを実現するため、

- ・ ライフサイクルの倍速化等による収量増大
- ・ 周年化により価格が高騰するオフシーズン時の供給
- ・ 高品質果実（大果・高糖度・高抗酸化作用）の安定供給とコスト削減
- ・ 生産性を維持しつつ樹体の繰り返し利用をおこなう樹体健康管理
- ・ 省力自動生産等による果実生産のマニュアル化

などの研究開発を行い、太陽光・人工光併用型の先進的な「果樹工場のモデル」実験研究施設として、敷地面積約950㎡、地上1階、地下1階の2階建てが整備されたものです。

研究開発成果は、ブルーベリーと同様にポット栽培できる低樹高の果樹全般への展開が可能であり、国内で栽培可能な低樹高果樹について、工場栽培による周年栽培の可能性が開けます。

式典では、普後一学術研究担当副学長の挨拶に始まり、國見裕久農学府長の挨拶、照井恵光経済産業省関東経済産業局長から来賓挨拶がありました。その後、荻原勲農学研究院教授による本研究施設の概要と将来的なヴィジョン等の説明が行われました。

式典後に行われた施設見学では、多くの報道陣を含む多数の参加があり、各界からの関心の高さがうかがえました。



「東日本大震災義援金を被災した学生と日本赤十字社に贈呈」

6月16日（木）、学長室において、東日本大震災で被災した学生に対する義援金贈呈式が行われました。

この義援金は、東日本大震災で被災された方々への支援活動として、3月18日から学内に募金箱を設置し義援金を募り、役員・教職員から総額1,446,547円が寄せられたもので、当日は実家等が全壊・半壊の被害に遭った学生に対して修学支援の一助となるよう、寄せられた義援金の一部が松永是学長から学生一人一人に手渡されました。

さらに、(財)東京農工大学教育研究振興財団の梶井功理事長（元学長）から、被災した学生への支援としてお見舞金が贈呈されました。

また、6月28日（火）には、西村直章総務・財務担当副学長が日本赤十字社東京都支部を訪問し、後藤明日本赤十字社東京都支部事務局長へ義援金を手渡ししました。後藤事務局長からは、本学における義援金活動に対する感謝の言葉があり、その後、東日本大震災への復興支援の取り組みについて意見交換が行われました。



平成24年から岩手大学・東京農工大学共同獣医学科が設置されます

平成23年8月4日（木）、東京農工大学と岩手大学は、共同獣医学科を設置に関する協定を締結しました。平成20年度に文部科学省が国際的な大学間競争に対応するために教育研究資源を結集しようと複数の大学による共同の教育課程設置を認める方針を打ち出したのを受けて両大学が検討を続けてきました。岩手大学は、日本有数の畜産物生産基地である東北に位置し、高度産業動物獣医療の実践という特色を持ち、一方、東京農工大学は首都圏に位置し、伴侶動物の高度獣医療の実践という特色を持っています。岩手大学は、「動物医学食品安全教育研究センター」を設置し、3つの使命、①. 動物性食品に関する学際的・横断的な研究拠点形成、②. 動物・食品分野横断的な動物性食品に関する卒業教育・学部教育の提供、③. 地域密着型・問題解決型の動物性食品に関する研究推進を果たすべく活動しています。東京農工大学には、伴侶動物の高度先端医療を実施・教育するための設備として「動物医療センター」が設けられ、先進獣医療機器を備えて、動物に対して最善の治療を提供するとともに、学部学生、大学院生ならびに研修医の臨床教育、近隣/近県の伴侶動物臨床獣医師のための卒業教育の場として大きな役割を果たしています。また、東京農工大学は、応用獣医学部門では、平成23年度から、「国際家畜感染症防除研究教育センター」を設置して、家畜の感染症分野に力を入れています。

こうした岩手大学と東京農工大学の獣医学科が有する特色と、モデル・コア・カリキュラムに基づく教育を基盤として、これまで一大学では成しえなかった国際的教育水準を満たす獣医学教育を編成する計画です。学生は、入学した大学に所属しますが、学位記は、両大学連名のものとなります。授業では、教員が両大学を移動したり、双方向の遠隔講義システムを活用したりし、臨床実習では学生が移動する計画です。学生定員は、両大学の定員を合計した65名（岩手大学30名プラス東京農工大学35名）、教員数は、現有数で64名（平成23年4月1日）となります。

これまで、国立大学の獣医学教育体制の充実に関する様々な取り組みが話し合われてきましたが、やっと次の発展に向けての第一歩を踏み出せると期待されます。共同獣医学教育課程の設置については、北海道大学と帯広畜産大学、山口大学と鹿児島大学が、同様に平成24年設置を目指して準備を進めています。



東京農工大学学長賞

馬術部主将を務め、全日本学生馬術大会障碍飛越競技で10位に入賞した水上寛健君（獣医学科5年生、旭川東高出身）が平成22年度の学長賞を受賞しました。平成23年4月7日の入学式で表彰される予定でしたが、東日本大震災により入学式が中止となったため表彰式も行われませんでした。水上君が騎乗した旋毛風号は、平成22年3月に日本中央競馬会の石丸睦樹氏（平成2年卒）の紹介で日本中央競馬会競馬学校から寄贈された馬（KWPN種、オランダ産、1994年生）です。3月から、主将の水上寛健君とのコンビを組み10月23日と24日に行われた全日本学生馬術大会障碍飛越競技（2回走行）で10位に入賞しました。この競技会には、全国の地区予選を勝ち抜いた強豪大学からの人馬が参加して1点を争うレベルの高い試合となりました。7位から11位までは、同点となり走行タイムで順位が決まりました。本学馬術部の選手が同競技で入賞したのは、20年久しぶりのことです。旋毛風号は、オリンピック記念馬術大会でも、水上君が騎乗して準優勝していますので、平成21年に本学の障碍飛越競技馬であった星風号が死亡した後の新しい障碍飛越競技馬として今後の活躍が期待されます。写真は、全日本学生馬術大会障碍飛越競技での水上寛健君と旋毛風号。

田谷一善（昭和46年卒、獣医生理学・教授、馬術部顧問教員）



「東京農工大学馬術部が「平成23年度生涯スポーツ優良団体」表彰」

5月8日（日）、東京体育館（渋谷区）で開催された第64回都民体育大会春季大会開会式において、本学馬術部が東京都体育協会から「平成23年度生涯スポーツ優良団体」として表彰されました。

今回の表彰は、同体育協会がスポーツの普及と発展に貢献した個人、団体の功績を讃え表彰する事業を実施しており、本学の馬術部は馬術競技大会での活躍に加え、創部以来75年間に渡り地域貢献活動等を行ってきたことが東京都馬術連盟に高く評価され、同連盟から同事業の生涯スポーツ優良団体へ推薦されていました。

当日は、本年度の表彰を受ける66団体を代表し、本学馬術部主将の胡田悠作さん（獣医学科4年生）が賞状と記念楯を受け取りました。

馬術部顧問の田谷一善農学研究院教授は、「本学の学生サークルが優良団体として表彰されることは、大学にとっても大変名誉なことです。今後も本学と地域社会との絆として更なる社会貢献活動の展開を期待しています。」と述べていました。



馬術部創立75周年記念式典と「モカ号」の贈呈式を開催

平成22年12月23日（木）に馬術部創立75周年記念式典が開催され、本学関係者、馬術関係者や地域住民約100名が出席しました。当日は、式典に合わせてアメリカンミニチュアホース「モカ号」の法政大学への贈呈式が行われました。式典では、本学から「アメリカンミニチュアホース贈呈書」が、法政大学から「感謝状」がそれぞれ贈られました。

今回法政大学へ寄贈される「モカ号」は、アップルサイダー号とシナモン号の第二子として平成22年7月に誕生した雌馬です。

父馬のアップルサイダー号は、本学獣医学科昭和24年卒の大野乾氏（本学名誉博士第1号）令夫人から、本学学生の教育・研究のために寄贈された馬で、体高85cmと乗馬用の馬よりもはるかに小さいことから、地域の子供たちとのふれあいや馬車に乗せるなどの活動を始めたところ大人気となりました。今では小学校や幼稚園での体験学習や様々なイベントに参加し、すっかり地域の方々に親しまれる存在として、本学の社会貢献に活躍しています。

このようなアップルサイダー号の活躍を見て、法政大学でも教育的視点や動物愛護涵養の視点から、一般学生や地域の方々への社会貢献活動にモカ号を有益に活用してほしいとの要望があり、本学で協議した結果、法政大学へモカ号を寄贈することが決定しました。本学生まれのモカ号が法政大学においても、大学や地域の方々に親しまれ元気に活躍してくれることを希望して送り出しました。



田谷一善（昭和46年卒、馬術部顧問教員・獣医学科教授）

慶弔

慶 事 お祝い申し上げます

☆ご当選おめでとうございます

(2011年統一地方選挙)

関谷 明生 (農 S47) 小布施町議会議員

高田 由一 (農 S61) 和歌山県議会議員

守永 信幸 (植防S61) 大分県議会議員

☆平成22年秋の叙勲

本多 正二 (製糸S32) 瑞宝双光章

服部 敦子 (農 S35) 瑞宝小綬章

☆平成22年春の叙勲

金谷 和夫 (獣医S38) 瑞宝小綬章

真柴 孝司 (林 S38) 瑞宝小綬章

訃 報 ご冥福をお祈り申し上げます

平成23年10月1日逝去

白井 邦郎 (名誉教授・元農芸化学 応用生命化学部会長・農化S35)

平成23年8月21日逝去

清水 賢 (名誉教授)

平成23年5月12日逝去

高野 稔 (元埼玉県支部長・養蚕S33)

平成23年5月11日逝去

大貫佐一郎 (名誉教授)

平成23年4月28日逝去

田内 堯 (現生産環境工学部会長・農工S35)

平成23年4月14日逝去

加藤 公朗 (現秋田県支部長・林S30)

平成23年3月17日逝去

田口 正信 (元茨城県支部長・農S12)

平成23年1月23日逝去

宮本 譲 (前獣医部会長 獣医S22)

平成22年11月18日逝去

平田 豊 (現本学農学研究院教授)

中国同窓生との交流を進めた原田 勉氏を悼む

原田 勉氏 (農甲S23) は療養の甲斐無く、去る7月20日、86歳をもって静かにこの世を去られました。氏は東京農林専門学校を卒業後、日本農業新聞記者を経て (社) 農山漁村文化協会 (農文協) に勤務し、雑誌書籍の編集、映画製作など数々の実績を残して後に製作管理部長、協会理事を務めました。その間中国農業大学など農学研究機関への農業・農学図書 の寄贈と日本図書陳列コーナーの設置などの用務で度々訪中されていました。

中国では戦前または戦時中に農工大学で学んだ先輩、後輩達に会う機会も少なくなき、また当時訪日した同窓生を囲んでの歓迎会を企画する機会も増えて、農工大同窓会中国支部を設置する必要性を強く意識するようになりました。

1994年にたって、原田氏の唱える「中国と日本の文化・科学技術交流をめざす草の根運動」を旨とした「中国同窓生と友好を深める会」、通称「農工大日中友好会」が結成されました。たまたま、1994年8月、東京を周辺とした同窓生の親睦会「けやきクラブ」が北京同窓生訪問団を企画したのに呼応して、原田氏は中国側と綿密な折衝を重ねました。そのお陰で友好裡に計画が進み、北京にて両国同窓生が一堂に会して農工大同窓会北京支部 (後に中国同窓会と改称) の発足を決議するに至りました。

1998年5月開催の農工大同窓会総会に、初めて中国同窓会の代表として総顧問の宋秉彝 (そう へいい) 氏が出席した折には、原田氏は宋氏のために10日間の日程を組み、国内各地で同窓と交流できる機会をつくり、原田氏本人が九州まで同行したことは今でも忘れられません。

以来今日までの農工大日中友好会の訪中は、訪問先を変えての年中事業として続いて実施されており、中国各地で活躍している同窓生との研究技術交流ならびに友好関係が益々進展し、今後に期待するところ大きいことを知るにつけ、永年、「農工大日中友好会」の事務局長そして顧問として一方ならぬご尽力いただいた原田 勉氏に心から感謝申し上げます。

(下田博之 (農S28))

○ 定年退職者のお知らせ

本学在職中に同窓会活動に多大なご協力を頂いた下記の先生方が、平成24年3月で定年を迎えられます。このことに伴い、それぞれの先生方の「定年退職祝賀会」が催されることと思います。祝賀会に参加希望される場合は、各先生の研究室にお問い合わせ下さい。

なお、氏名掲載はご本人の了解を得ている方のみとしております。

- | | | | | |
|------------------------|-------|---|-----------|-------|
| • 農学研究院教授 | 尾関 周二 | ⋮ | • 工学研究院教授 | 上迫 浩一 |
| • 農学研究院教授 | 神田 尚俊 | ⋮ | • 工学研究院教授 | 川島幸之助 |
| • 農学研究院教授 | 福嶋 司 | ⋮ | • 工学研究院教授 | 豊田 昭徳 |
| • 農学部附属広域都市圏 | 原 宏 | ⋮ | • 工学研究院教授 | 船倉 正憲 |
| • フィールドサイエンス教育研究センター教授 | | ⋮ | • 工学研究院教授 | 和田 俱幸 |

学校史を希望される方へ

東京農工大学は、明治時代にはじまった産業に関する教育と研究を先導し、大戦後に復興の柱となり今や時代の先端を行く科学技術の研究と教育に邁進しています。特にこの20年の間に、博士課程の設置、大学院の増強に伴う研究の高度化と学生教育の改善、大学の法人化へ大改造してきています。又下記の「校史編纂だより」は、当時その任に当たった教員による記述となっていて、学校史へ組み込む資料となっています。

ところで、次のように学校史等の残部がありますので、ご希望の方に送付することになりました。つきまして下記のように、送付する資料名と郵送先を明示して、ご連絡ください。学校史等の資料代は無料ですが、希望する資料を受け取る際に郵送料のみをお支払いください（着払い）。なお、郵送には1週間少々かかりますことをお含みおき下さい。

記

1. 配布する資料

- | | |
|------------------------|---------|
| (1) 東京高等蚕糸学校五十年史 | 昭和17年発行 |
| (2) 東京高等蚕糸学校55周年記念研究報告 | 昭和16年発行 |
| (3) 東京農工大学 工学部百年史 | 昭和61年発行 |
| (4) 小金井キャンパス120年史 | 平成17年発行 |
| (5) 校史編纂だより 1号（冊子） | 1996年発行 |
| (6) 校史編纂だより 2号（冊子） | 1998年発行 |
| (7) 校史編纂だより 3号（冊子） | 2000年発行 |
| (8) 校史編纂だより 4号（冊子） | 2007年発行 |
| (9) 校史編纂だより 5号（冊子） | 2008年発行 |

2. 申し込み方法

- (1) 郵便、又は電子メール：
 - 〒184-8588 小金井市中町2-24-16 東京農工大学工学部庶務係史料編纂小委員会宛
 - Email: sawat@cc.tuat.ac.jp 澤田孚夫（たかお）宛
- (2) 資料名：希望する資料名を明記してください。
- (3) 送付先：〒・住所・氏名・電話番号を明記してください。

3. 郵送料

「ゆうパック」の着払い 600～1,400円

但し、ゆうパックの寸法サイズと郵送区域によって料金が決まります。上記資料各1部程度では重量には関係しません。

工学府史料編纂小委員会

女性未来育成機構では、農工大卒業生の ブラッシュアップ・キャリアアップを応援します！

東京農工大学女性未来育成機構は、女性研究者の養成と支援環境の整備を目的として、女子学生、女性研究者、女性卒業生を含む、農工大に関わる全ての世代の女性の活躍支援に取り組んでいます。

本学卒業生限定
研究生・科目等履修生の
入学料・授業料優遇制度

区分	研究生	科目等履修生
検定料	9,800円 (9,800円)	9,800円 (9,800円)
入学料	0円 (84,600円)	0円 (28,200円)
授業料	月額 14,800円 (29,700円)	1単位 7,400円 (14,800円)

- ・男性も女性も利用できます
- ・（ ）内は、本学卒業生以外の方の金額です。

女性卒業生限定 ネットワークシステム **農工大SNS**

「農工大SNS」は、イベントのお知らせ、ブラッシュアップ教材、出産・育児・介護、再就職、キャリアアップに関するコミュニティを用意しており、卒業生同士の交流スペースとして利用できます。

女性未来育成機構（旧女性キャリア支援・開発センター）から郵送されたID・パスワードを使ってアクセスして下さい。ID・パスワードを忘れた場合は、農工大SNSトップページより再発行手続きが可能です。

農工大SNSのURL
<https://josei.office.tuat.ac.jp/~sns/>

お問合せ先：東京農工大学 女性未来育成機構

- ◆府中機構オフィス 042-367-5945(Tel)/5643(Fax) ◆小金井機構オフィス 042-388-7362(Tel)/7643(Fax)
- ◆e-mail joseispt@cc.tuat.ac.jp ◆HPアドレス <http://www.tuat.ac.jp/~dan-jo/center/index.html>

皆さん 楽しく集まりましょう



東京農工大学 同窓会東京支部

おしゃべりサロン 「けやきクラブ」

「けやきクラブ」は支部に関係なく、どなたも参加できます（予約なし フリー）
◆大正・昭和・平成それぞれ オークー ◆一人でも、友達連れでも

みんなの夕べ

毎月第3火曜日 6.00p.m.~8.00p.m. (時間きっちり)

「新宿ライオン会館」B1F ピアホール けやきクラブ席
住所 新宿区新宿3-28-9 電話 03-3352-6606 (案内図)

飲み物・食べ物 ワリカン制(大体 3000円~4000円)

アクセス 地下鉄丸ノ内線「新宿三丁目駅」3分
JR新宿駅 東口 三越の並び 3分



近況：2011年6月例会 参加者12名



お問い合わせ

けやきクラブ会長 渡辺 彰 090-8051-1798 東京支部長 馬場 信行 03-3641-3882
事務局 磯野 司 090-3878-5418 東京事務局長 山本 賢 090-4729-2114



東京農工大学 向友会

Tokyo University of Agriculture & Technology Alumni Association -Koyukai-

■向友会とは

私達、向友会は「農工革新」をスローガンに農工大の改善点を解決していくことで、農工大の活性化を図り、今後の農工大の発展に貢献するべく活動している会です。2010年12月に向友会の立ち上げを行い、2011年6月には大学公認サークルとなりました。現在、顧問には工学研究科 応用化学専攻の亀山秀雄先生に就いていただき、運営委員には学部生から院生まで学科・専攻を問わず幅広いメンバーが活動しています。本年度は代表・三枝遼（工学部 機械システム工学科 学部4年）のもと以下の2つのプロジェクトを立ち上げ、活動を行っています。

一つ目は学生と卒業生が関わる機会が少ないことから、学生と卒業生が出会い、交流できる「つながりの場」を提供することを目的とし、この「つながりの場」を通して、学生には幅広い視野で自身のキャリアを考える機会を、卒業生には業界そして世代の垣根を越えた新たなネットワークを提供したいと考えています。また、このような場を提供することで学生同士の他学部、他学科の横のつながりも提供しようとも考えております。

二つ目は農工大の一般的な認知度や情報発信力が弱いことから、大学やサークル、研究室のもつ情報をまとめ上げることで、より情報発信力を高め、農工大の内外へ発信、また学外の学生イベントなどの情報も学内に発信していく新規メディアの創出を行っています。

■活動内容

昨年度はインフラ業界勉強会、社会人と学生の交流会、ES対策勉強会を行い、今年度の7月9日には「[卒業生]×[現役生]=[農工革新] ～これからの農工大を考えよ!～」と題し、農工大の問題点とその解決策についてグループワークやプレゼンテーションを行いました。今後は、内定者懇親会や、工場見学会の他、様々なレクリエーションの開催を企画しています。また、ホームページにはイベント情報の他、就活を終えた先輩のアドバイスをまとめた「私の就活体験記」といったコンテンツの配信を行っています。こちらも今後は、卒業生の仕事紹介などのコンテンツの配信を考えています。

■[卒業生]×[現役生]=[農工革新] ～これからの農工大を考えよ!～ (2011年7月9日)

2011年7月9日に東京農工大学 小金井キャンパス 11号館5階多目的会議室で学生17人、卒業生10人に参加していただき、「[卒業生]×[現役生]=[農工革新] ～これからの農工大を考えよ!～」を開催しました。本企画は農工大の現役生と卒業生が農工大の変革点とその解決策と一緒に考え、両者の農工大に対する認識・問題意識を共有し、学生が主体となって解決することができる提案をすることを目的として開催されました。

まず卒業生1～2名に対し現役生4～5人程度の規模で「農工革新と提案」といったテーマのもとグループワークを行いました。今回のグループワークでは、学生に関する農工大の変革点の提起・その変革点の解決策と具体的な方法について、「学生には何が出来るか」（学校に働きかけて終わりではなく、学生が主体となって問題解決にあたる）という視点のもと行いました。その後、グループワークで作成した「農工革新と提案」について各グループの現役生が発表者となってプレゼンテーションを行いました。質疑応答では提案された解決策に対し、他グループの方々から鋭い質問や意見が出されました。イベント後には現役生と卒業生が「より深い交流ができる場」として懇親会を行いました。



7月9日イベント 代表挨拶 (左) 集合写真 (右)

■在学生の皆様へ

ー農工革新ー

活発な学生同士で新しいことに挑戦してみませんか？私たちは、向友会の活動を通じて農工大をより活動的で有意義な大学にしていきます！向友会の運営に興味のある方は向友会ホームページのお問い合わせ又はtuatkyk@gmail.comまで連絡をお願いします。向友会で自ら行動し、自ら大学を変えていきましょう！環境は与えられるものではなく、作るものです。



2011年度向友会代表
三枝 遼

■卒業生の皆様へ

向友会は設立してまだ1年と若い会ではありますが、卒業生の方には長年培われた経験やノウハウ、人脈などを、ぜひ向友会そして農工大のためにご提供していただければ幸いです。向友会ホームページ上で会員登録をいただければ、向友会からイベントのご案内や向友会の活動をお知らせするメールマガジンをお届けすることができます。詳しくは向友会ホームページの会員登録よりお願いします。

向友会ホームページ <http://tuatkyk.web.fc2.com/index.html>
向友会メールアドレス tuatkyk@gmail.com



事務局だより

東京農工大学同窓会50年史＝同窓会の軌跡＝刊行について

「東京農工大学同窓会50年史」の刊行については平成18年12月より編集委員会が設置され、内容について準備・検討を行ってきました。そして、刊行書の柱となる書名を「東京農工大学同窓会の軌跡」と決め企画刊行書を策定し、平成20年5月の第45回通常総会において承認されました。その企画書の内容に沿って執筆者を決定し、具体的な執筆を進めてきました。そうした約5年間の準備期間を経て、平成24年3月末発行予定となりました。

この間、各部会、各支部の皆さんや同窓会関係者の方々には丁重なるご指導、ご鞭撻を頂くと共に大変ご協力を賜りました。改めて厚くお礼申し上げます。

同窓会50年史は、次のような基準で会員各位に無償でお送り致します。

- ①終身会員、
- ②年会費20、21、22年度の3ヶ年分を納入頂いた会員

ご不明な点がございましたら、下記事務局までご連絡ください。

東京農工大学同窓会事務局（事務局長 山田 昭一）
〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1
TEL: 042 (364) 3328 FAX: 042 (335) 3500
E-mail: info@tuat-dousoukai.jp.org

「住所・勤務先等の変更届のお願い」

住所、勤務先等の変更があった場合には、すみやかに変更連絡票はがき、電話、メールなどで事務局までご連絡いただきたくお願い申し上げます。事務局では転居され、郵便物が返送された会員の方に現住所等のお問い合わせをしております。また、同窓会会員名簿等に「住所・勤務先・電話番号」について非掲載をご希望される方は、メール・はがき等でご連絡いただけますようお願いいたします。

「同窓会ホームページのご案内」 <http://tuat-dousoukai.jp.org/>

リニューアルしました同窓会HPでは内容を随時更新し、農工通信に先駆けて最新情報を掲載していますので是非ご利用下さい。また、部会・支部、クラス会便りも電子媒体でお送りいただければ、随時掲載いたしますので、当日参加できなかった方もHPでご覧いただくことが出来ます。

どうぞ下記アドレスまでお送り下さい。お待ちしております。

E-mail: info@tuat-dousoukai.jp.org

会費納入のお願い

★ 会費は同窓会活動の原動力です。正会員は同封の払込票にて次のいずれかの方法で会費を納入してください。

終身会費は30,000円 年会費は1,500円

- ★ 払込票が同封されていない方は納入済です。
- ★ 過去にさかのぼって納入の必要はありません。

「慶弔についてのご連絡」

同窓会正会員の慶事および弔事の際には、会員の方々からのご連絡に基づき、同窓会から祝電あるいは弔電をお送りしてきております。

このような慶弔事のご連絡の際に、次のような事項についてあわせてご連絡ください。

1. 慶事（褒賞、叙勲等）の場合
 - ・受章者、受賞者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
 - ・受章、受賞の種類（褒賞、叙勲その他の賞の種類）
 - ・受章、受賞の日時
2. 慶事（選挙の当選等）
 - ・当選者氏名
 - ・選挙の種類
 - ・就任年月日
3. 弔事の場合
 - ・逝去者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
 - ・ご遺族（喪主）の氏名（逝去者との続柄）
 - ・通夜の日時、場所
 - ・告別式の日時、場所

「寄稿分 随時募集中」

寄稿内容は自由（例：随想、近況報告、研究紹介、仕事に関すること等）です。なお、文字数はA4判1ページ1800字程度を目安にさせていただくと共に、原稿については、可能な限り電子媒体でお送り下さい。詳細は事務局にお尋ね下さい。

「会報へのご意見感想を是非お寄せ下さい。」

同窓生の方からのお便りお待ちしております。

「お詫びと訂正」

本誌81号 クラス会だよりにおいて記述の誤りがありました。以下のとおり訂正してください。

- * 項目の「監事・報告等」を「幹事・報告等」へ訂正してください。
- * 66頁 中段右「かいこ会」の「幹事・報告等 井上善治郎様」の卒業学科名（裁桑S19）の「裁」と、「クラス S19.9養蚕・裁桑・製糸学科卒」の「裁」を「裁」へ訂正してください。

関係各位および読者の皆様にお詫び申し上げます。

地元 小金井市の商社

株式会社 高岡 機 工

〒184-0001 東京都小金井市関野町 1-4-6
 TEL : 042-383-6100 FAX : 042-384-4993
 E-Mail : takaoka@basil.ocn.ne.jp

☆お気軽にお問合せ下さい。

◀ 営業内容 ▶

- ◇ 研究諸機材の製作及び販売
- ◇ 金属材料・樹脂材料・木材・試験片・衬類・配管部材
- ◇ 装置部材・装置部品 (ポンプ、シャフト、ギヤ類、モーター、機械周辺機器 etc)
- ◇ 各種工具 (切削工具・測定工具・作業工具・補用工具 etc)
- ◇ 受託加工・部品加工 (NC・MC加工・旋盤加工・ワイヤ加工・溶接加工)
- ◇ 工作機械・研究装置・測定器・理化学機器・作業台・実験台
- ◇ 修理、オーバーホール、アフターフォロー、加工相談、各メーカー情報の提供

地域の皆様に楽しんで頂ける 店舗作りを目指すオゼック・グループ

PACHINKO&SLOT **OZEC 国分寺**

東京都国分寺市東元町4-1-36
 TEL.042-325-3394

<http://11990.p-world.jp>



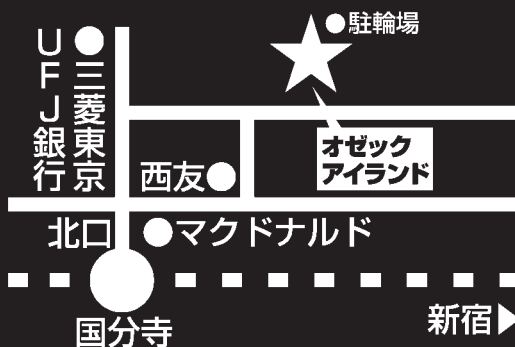
大型駐車場完備

PACHINKO&SLOT **OZEC ISLAND**

東京都国分寺市本町2-14-1
 TEL.042-326-3887

<http://73986.p-world.jp>

大型駐車場完備 タイムズ国分寺北口駐車場



試薬 理化学機器

株式会社 三友商会

代表取締役 金森 信次

〒183-0041

東京都府中市北山町2-33-58

PHONE 042(502)1200

FAX 042(502)1300

E-MAIL sanyuu@jcom.home.ne.jp

東京農工大学生協は 魅力ある大学づくりに貢献します。

学内開催のパーティーや各種イベントでのお料理・お飲物など、ご希望に合わせてプランニングいたします。
お気軽にご相談ください。



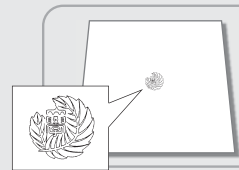
国産大豆のおからを使用したクッキー。黒糖きなこ、ごま、プレーンの3種類。ご来校の記念にぜひどうぞ。

1袋(5個入り) 170円(税込)
1箱(5袋入り) 900円(税込)



会合、お祝い、記念行事などに農工大徽章の摺り色紙、ご利用いかがですか？

1枚 150円(税込)



生協店舗では他にも色々なオリジナルグッズを取り扱っています。キャンパスにお越しになったときは、生協店舗にもお立ち寄りください

東京農工大学消費生活協同組合

農学部本部 TEL 042-366-0762
工学部本部 TEL 042-381-7213

忘年会・新年会・歓送迎会・クラス会・謝恩会
PTA会合・周年行事・結婚披露宴・御法事

CATERING Service

出張料理

パーティー・御宴会は
サンク・リアで!!

お集まりにふさわしい雰囲気演出致します。
お客様のご予算に応じたお料理お飲物を調整致します。



グラス～テーブルクロス等あらゆる備品を用意し、セッティングからサーバー後片付けまですべておまかせ下さい。

府中グリーンプラザ内
府中駅北口駅前

サンク・リア

TEL&FAX (042) 368-6368

府中グリーンプラザ 会議室・和室等を御利用下さい。10名様～250名様
府中市府中町1-1-1グリーンプラザ3F

あなたの書籍を
世界へ発信!

出版費用
10,500円より
PDF支給なら
5,250円より

BookWay

本とあなたをつなぐ道 ブックウェイ

<http://bookway.jp>

同窓会コミュニティサイト
<http://www.bikita.jp>

全国展開中!

Bikita



携帯版はコチラ→

小野高速印刷株式会社 〒870-0913 大分市松原町2丁目1-6
TEL 097(558)3444(代) FAX 097(552)2301

TOTAL PRINTING

企画・編集・デザイン・DTP・印刷・製本



明誠企画株式会社

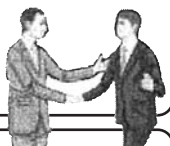
〒208-0022 東京都武蔵村山市榎 2-25-5
 ■ TEL (042) 567-6233(代)
 ■ FAX (042) 567-6230
 ■ E-Mail:meisei@fancy.ocn.ne.jp

農工大産官学連携支援 OB の会

日本橋区

特許活用・共同研究

産官学連携の共同研究などの特許・技術の有効活用や支援をおこなっています。



起業家育成

ビジネスプラン作成などのメンタリングや、ベンチャー企業の経営支援をおこないます。

インターンシップ・就活支援

学生のインターンシップ先の斡旋やキャリアパス就職活動のメンタリングをおこないます。

セミナー・講演会

セミナーや講演などの企画、開演などの支援をおこなっています。

入会お申込はこちら

年会費は
6,000円です!

<http://www.at-netz.jp>

TEL/FAX 0463-94-6744 (深水)



東京農工大学の産官学連携活動を支援するために設立された組織です。

エー・ティー・ネッツ AT-Netz

営業本部/工場 〒326-0044 栃木県足利市助戸1の26
 TEL 0284 (41) 2527 FAX 0284 (44) 2618
 本社 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2番4号柿沢ビル5階
 TEL 03 (5695) 1671
 たれとソースの総合食品 株式会社 カザミ

カザミは、
 お客様のニーズに合わせた
 たれとソースを
 作ります。



編集 後記

Editor's note

今年3月の東日本大震災の犠牲者にご冥福をお祈り申し上げるとともに、被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。同窓会として被災同窓生救援募金約300万円が集まり、現役学生も含め被災同窓生に送ることができました。ご協力ありがとうございました。

さて、「農工通信82号」をお届けします。表紙は、毎回好評を得ています佐藤勝昭先生の水彩画で、小金井キャンパス新1号館です。同窓会創立50周年記念事業として小金井キャンパスの小金井記念ホール（140周年記念会館内）の完成と、府中本部内の大学50周年記念ホールの増改修は平成23年度末には終了する予定です。

同窓会では名簿の発行を取りやめています。卒業生の皆様に大学の近況をお伝えする手段としての「農工通信」を重視し、年2回発行することにしました。

「農工通信」の内容等にご意見やご提案等がありましたら、お気軽に同窓会事務局までご連絡ください。また投稿原稿（題目欄を除く文字数は1ページで1800字）や「部会・支部・クラス会だより」、「掲示板」の記事も募集しています。

（広報部長 佐藤敬一（林産S56）記）

農工通信 第82号

発行日 平成23年（2011年）11月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学同窓会事務局

TEL 042 (364) 3328 FAX 042 (335) 3500

e-mail info@tuat-dousoukai.jp <http://tuat-dousoukai.jp>/

振替口座 00120-9-93147番（加入者負担）

加入者名 東京農工大学同窓会

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

お中元、お歳暮、贈り物に最適
部会、支部会、同窓会でも是非ご賞味下さい。

本学では、農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センターで栽培した原料(米・芋・麦)をもとに製造した農工大ブランド焼酎「賞典禄(しょうてんろく)」を販売しています。

ご好評いただいております「賞典禄(しょうてんろく)米・芋・麦のレギュラー焼酎に加えて、米・芋・麦の原酒もそろい踏みとなり、ますます品揃えが豊富となりました。

この原酒は、焼酎の個性そのものが凝縮されていてレギュラー焼酎とはまた一味違う深い味わいを楽しめますので是非ご賞味下さい。



ネット販売も好評!!



左から、原酒(米)、原酒(芋)、原酒(麦)

左から、米焼酎、芋焼酎、麦焼酎

【ネット販売対応商品】

商品種類	度数	容量	販売価格	商品種類	度数	容量	販売価格
原酒 米焼酎(つぼ入り)	43度	720ml	2,700円	米焼酎	25度	720ml	1,700円
原酒 芋焼酎(つぼ入り)	38度	720ml	2,700円	芋焼酎	25度	720ml	1,700円
原酒 麦焼酎(つぼ入り)	43度	720ml	2,700円	麦焼酎	25度	720ml	1,700円
				米・芋・麦 3種セット (専用の箱に入れて配送します)	25度	720ml×3	5,100円

ただいまインターネット販売により、多くの卒業生の皆様方にご愛顧を賜っておりますが、**配送先1ヶ所に
つき5,000円以上のご注文の場合には送料を無料**とさせていただきますので、是非ご利用ください。
代金の支払方法は、代金引換かクレジットカードになります。詳しくは下記URLをご覧ください。

ネットショップサイト：**FSセンター農工夢市場ネットショップ**

<http://www2.enekoshop.jp/shop/noukoudai/>

農工夢市場 で **検索** すると便利です。

同窓会のホームページ(トップページにリンクあり)からも本サイトに入れます。

※電話、FAXでのご注文はできませんので、予めご了承願います。

問い合わせ先 農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター事務局 TEL 042-367-5812